第五巻

鬼一法眼三畧巻（きいちほふげんさんりやくのまき）

盛綱陣屋（もりつなぢんや）

阿古屋琴責（あこやのことぜめ）

袖萩祭文（そではぎさいもん）

伊賀越道中双六（いがごえだうちうすごろく）

河竹繁俊
濱村米藏
渥美清太郎
共編

時代狂言傑作集

第五卷

東京
春陽堂發行

新十八番之内
虎之巻
香蝶楼豊国画
一陽斎豊国画

解説

『鬼一法眼三略巻』は文耕堂長谷川千四兩人の合作で、享保十六年九月、大阪竹本座に初めて上場されたもの。竹本座の全盛期——即ち義太夫節の全盛時代、先驅時代を飾つた名作の一である。

鬼一法眼が牛若に虎の巻を傳へる事については、「異本義經記」に詳しい。「一條堀川に陰陽師鬼一法眼といふ者あり。希代の軍書を持つ。是れ醍醐帝延長元年大江維時遣唐使に大宋國へ遣されし時、龍取將軍に逢ひて傳來の書なり。黄石公張良に傳はる所の兵書と云ふ。後鞍馬寺へ奉納ありし祕書なり。鬼一夢想を請け、奏問を經下し預る。義經之を聞き給ひ、甚だ執心し、安元二年二月平和泉を出で給ひ、都一條大藏卿長成朝臣方へ下着あつて、後鬼一法眼方へ來たり給ふ。法眼衣の下に葛の袴、銀にて柄鞘巻きたる刀を指し、女二人に介錯せられ座に居り、御曹子を招き詞細なりといへども、兵書を深く祕して出さず。是によつて義經法眼の娘と密通して、かの祕書を娘に盜み出させ、寫取悉く納得す、云々」とある。

「鬼一法眼三略巻」はこれを原材として書かれたものらしい。但し五段目の五條橋は、謠曲の「橋辨

慶」に由來し近松門左衞門の「孕常盤」（正德三年七月、竹本座）に書かれたものを補筆したものであらう。

この曲は五段物で、その中二段目の鬼若元服の場は時折上場されるが、この分の臺本は遂に手に入れる事が出來なかつたから、序、二段だけの梗概は特に詳しく記しておく。

序段の口は、平清盛熊野參籠の砌、使者が來て都に內亂起つた由を注進する。清盛平然として萬事は子息重盛に任せて置いたから安心だといふ所へ、又注進が來て都が平穩になつたと云ふ。清盛は萬事思つた通りといふ折、巨口細鱗の鱸が船中へ躍り込む。清盛は平家繁昌のしるしだとて、同乘した性慶坊のとめるをも聞かず食する。中は性慶坊と辨眞の召使飛鳥との出會。切は辨眞の件り。別當辨眞の北の方は懷胎の身を、家來の坂上文藤次に介抱されてゐるが、十月はをろか妊娠後七ヶ年を經ても、まだ子が產れぬ。辨眞の娘梛の葉は、吉岡鬼次郞の許嫁で卽ち後のお京である。所が鬼次郞は義朝の家來であり辨眞も源氏方とて都で切腹した程なので平家の詮議嚴しく所の郡代下司の平太諸賢が、毎日々々來て北の方に、まだ子が產れぬか〳〵と責めたてる。今日も來て遂に北の方を切殺すと、その傷口から男の子供が產れる。これが後の辨慶である。

二段目の口は、道行故鄉の順禮唄。梛の葉改めお京と乳母飛鳥、鬼三太等三人の道行。この次に鬼

次郎に逢つてお京と鬼次郎とは祝言する。切は播州書寫山性慶の寺。辨眞の子は生れ附き猛々しい所から名も鬼若とつけて、この寺で修業する。播磨大掾廣盛の子岩千代も入門してゐる。所へ鬼次郎夫婦飛鳥が訪ねて來て、お京は久し振りで弟に逢ふ。乳母は鬼若の學問嫌ひを散々に諫めると、鬼若は出家になるのが厭さにわざと馬鹿になつてゐるのだと、お經を讀んで見せるので乳母は喜ぶ。が、母親の胎内に七年も居て親を苦しめた罪滅しにどうでも出家になれといふ。所へ岩千代の家來市原團平が來て鬼若の暴れるを取鎭めるとて、乳母を切殺す。鬼若は乳母の敵と團平を石で殺してしまふ。その後出家を勸めた乳母の志を無にすまいとて、頭だけは法體に剃りこぼち、「形を變ゆるは老女の手向、心を變へぬは親のため、法師と見せて武をかくす文字をすぐに武藏坊、父辨眞の字と、性慶阿闍梨の慶の字を、一つに寄せて辨慶と」名乘るのである。この作りは、近松門左衛門の「信州川中島合戰」の山本勘助の作りを模倣したものに疑ひない。

第三段目の口は、鬼一の娘皆鶴姫が、父の代りに淸盛の面前へ出る場。中は菊畑で、切は奥庭になる。共に本卷に收めたものである。

四段目は、口が檜垣の茶屋、中が曲舞、切が大藏卿の本心明しになる。もつとも曲舞で大藏卿の踊る長唄の猿舞は原作には勿論ない。これは原作では、狂言の二千石で三行ばかりの短い振になつてゐ

るだけである。

五段目の五條橋は、皆鶴姫が出て、牛若の千人切の荒々しい所業を諫める。牛若は源氏の兵を集めるためだと云つて、その後辨慶との出會になるのである。

この狂言を演じて大當りを取つたのは、初代嵐雛助で、天明三年七月大阪角の芝居藤川菊松座で、鬼若丸と鬼一法眼と大藏卿との三役を演じてゐる。「眠獅選」には鬼一の役を上々吉と位付けしてある。四世市川團藏、三世中村歌右衛門もこの役を得意にしたといふ。

江戸に於て、大藏卿を初演したのは、文化十四年五月桐座で、二世助高屋高助（二世宗十郎の悴）の大藏卿、七世片岡仁左衛門の鬼若丸と鬼一、牛若丸と常盤は岩井粂三郎（六世半四郎）が演じてゐる。次いで文政十年五月に三世坂東三津五郎が鬼一と大藏卿とを演じた以來中絶してゐたが、明治十二年頃、四世助高屋高助「現代宗十郎の父」が演じてから、折々上演される事になつたのである。

菊畑の方は引續いて江戸でも、三世及び四世の歌右衛門が演じてゐた。ごく近世では、鬼一は九世團十郎、虎藏は五世菊五郎の當り役であつた。

大藏卿の曲舞に用ゐられる長唄の『猿舞』は、『三升猿曲舞』といふ名題で、文政二年十一月河原崎座で演ぜられたもの。七世團十郎が此下兵吉の役名で踊り、唄は芳村孝次郎、芳村伊四郎等、三絃

は杵屋六三郎で、六三郎の作曲になつたものである。

この作の價値は、菊畑の絢爛な舞臺面と、はなやかな虎藏智惠內の振りの傑出してゐる點にある。大藏卿の作りも、要阿呆で後に本心を明す所に作者の趣向があつたのだらうが、院本作者一流の手段であつて、目新らしいとは言へない。

『近江源氏先陣館』は、近松半二、八民平七、松田才二、三好松洛、竹田新松、近松東南、竹本三郎兵衛等七名の合作といふ大掛りのものであるが、主として書いたのは半二、松洛、三郎兵衛の三人で、その中立作者が近松半二である事は云ふまでもない。明和六年の十二月、竹本座へ上場された。

近江源氏佐々木高綱盛綱の狂言は、古くから三都で行はれ、元祿時代に『佐々木箱傳授』、『傾城佐々木問答』享保の頃に『福壽海近江源氏』、『波屋形近江源氏』などがある。

この作は世界は佐々木でも、實際は大阪陣に關する俗書によつて趣向を立てたもので、和田兵衛は後藤又兵衛、高綱は眞田幸村、盛綱はその兄信幸、三浦之助は木村長門守、片岡造酒頭は片桐市正且元、源賴家は秀賴、宇治の方は淀君、時姬は千姬、大江入道は大野道犬、北條時政は德川家康にそれ〳〵當るわけである。盛綱陣屋で「一陽の春をまつ平の時政」とあるのは、松平をあて込んで暗に

家康に擬したもの。忠臣藏で「淺きたくみの鹽谷殿」と書いて淺野内匠頭を暗示したのと同樣である。徳川幕府を憚つたので、かうした趣向は他にも隨分ある。

『先陣館』は全部で九段物である。現今演ぜられるのは俗に「近八(きんぱち)」と稱せられる、八段目盛綱陣屋及び九段目の高綱隱家位なものだが、古くは通して演ぜられた。全曲の梗概を次に書いて見る。

初段は時政の面前で、佐々木盛綱が江州一國を時政から賜るの件。といふのは阪本城にゐる賴家の今謀叛に對するためである。そこへ阪本から使者として片岡造酒頭と三浦之助が來る。時政は賴家の今寵愛してゐる妓若狹を追拂へば、娘時姫を室として送つてもよいと云ふ。

二段目は東大寺の場。鎌倉方の政子御前と阪本の宇治の方との花見。その折三浦之助にかねて思ひを寄せてゐる時姫は、片岡の娘住の江を介して夫婦の固めをする。政子と宇治の方と爭論になる所を、片岡と住職榮西和尚が仲に入り仲直りさせるが、宇治の方は鎌倉の仕方を憎んで、雌雄の名劍を出し雄劍は自分で持ち雌劍は三浦に渡して、この刀を帶すべき大將を夫々に搜さうと誓ひをたてる。

三段目。賴家は若狹に目がない。若狹は大江入道の娘で大江は之に入智惠して、賴家を暗愚に仕立てるのである。宇治の方は佐々木高綱を召し寄せたが、高綱と名乘る者が幾人も來た。その中花賣に化けた眞實の佐々木を宇治の方は色仕掛で正體をあらはさせる。その放埒を諫めた片岡は、時姫の事

から鎌倉阪本両方の板挟みになつて、阪本城を退去する。雄劍を帶する人は高綱と極る。
四段目は道行旅路の濡衣。時姫と佐の江道行。
五段目は江州高宮の街道。駕籠舁の四斗兵衛と鹽賣長藏との出逢ひ。
六段目は醒ケ井四斗兵衛の家。四斗兵衛は酒好きで酒といへば目がない。その女房は片岡造酒頭の娘である。片岡が來て時姫を暫くかくまつてくれといふ。女房は夫が酒を飲めば心が變るからと斷るが、四斗兵衛は大丈夫と承知するので片岡は立歸る。そこへ鹽賣長藏が來て黄金作りの太刀を出し、この太刀魚を肴として飲んでくれとて酒を出し、その代りに時姫の首を討てといふ。酒のために變心した四斗兵衛は、承知して首を討つので長藏は駈出す。後に片岡が來て地團太ふんで口惜しがり、四斗兵衛を捕へるといふ所へ、表の方から「江州醒ケ井の住人和田兵衛秀盛殿、御用意よくば阪本の城へ御入城」三浦之助義村御迎へに伺候せり」と呼ばゝつて長藏が來る。悠然として大將の出立をした和田兵衛は、片岡に向ひ先程の時姫は佐の江ならんと圖星をさす。三浦は片岡に二心ありとて切附ける。片岡は自害し、かゝる大將を得る上は阪本城は大丈夫と、兩人に後事を頼み、且つ佐の江にしてた時姫を、戀焦れた三浦の嫁にしてくれと言ひのこして死ぬ。三浦和田はその忠心に感じて、彼の望み通りにしてやる。かくて三浦の預かつた雌劍の主は和田兵衛と極る。

七段目の口は夜中に盛綱が高綱の陣所へ來て、關東に味方せよといふが、高綱は散々に兄を罵つて云ふ事を聞かない。切は戰ひの場で、小三郎と小四郎との組打。

八段目が卽ち盛綱陣屋。

九段目の口は高綱隱れ家。漁師三郎作に化けた高綱は、老武者を救つてくる。女房は死んだ小四郎の回向をしてゐる。そこへ阪本から使者が來て三浦も和田も大江の奸計によつて死んだと注進する。先程の老武者を時政と知つた女房は、早く討てと高綱にすゝめるが高綱は見透し、女房にあの時政は贋者だと敎へ、三浦和田の死んだ注進も僞り、わざとそれを聞かして時政を阪本城へおびき出す計略だといふ。女房は天晴妙計とほめる。切は阪本城中、宇治の方は早や切腹といふ所へ、時政がうかうかとやつて來る。佐々木、和田、三浦が三方から詰寄つて、兩軍和議を結ぶといふに終る。

この淨瑠璃が歌舞伎劇に演ぜられたのは、稿下の翌年、明和七年大阪中の芝居でゞあつた。所が江戶では幕府のお膝許だけに、容易に演ぜられず、寬政五年の秋市村座に上場されたのが始めであるが、それも首實驗は出さなかつた。高綱の作りだけを、二世市川門之助が出し、篝火は三世瀨川菊之丞が演じた。その次には文化六年の八月に、やうやく中村座で盛綱陣屋迄出した。その時の役割。

片岡造酒頭、微妙、高綱（助高屋高助）。篝火（瀨川路考）。四斗兵衞女房、宇治の方（瀨川仙女）。盛

綱、谷村小藤次（三世中村歌右衛門）。三浦之助（二世關三十郎）。和田兵衛、四宮六郎（市川男女藏）等であつた。この内助高屋高助は三世宗十郎の實兒である三世市川八百藏の事、瀬川仙女は三世菊之丞、路考は四世菊之丞の事である。

その後江戸では暫く絶えてゐたが、明治六年守田座で五代目坂東彦三郎が守田勘彌に勸められ、中村宗十郎の教へを受けて演じたと云はれる。

現今演ぜられる時代物の大物の中でも、この盛綱位ひのものは少ないと言つてよい。第一に「思案の扇」から「問分けてたべ」の性根場、注進受、首實驗、となか／＼「しどころ」が多いのである。しかも複雜な割に動きが少なく、腹と貫目とを見せるだけで、派手な所は和田兵衛にとられ、それでゐてあく迄シテなのであるから、むつかしいわけである。先代團藏も「あれほど堪能する役はありません」と云つたといふ。九世團十郎は活歴に夢中であつた時分に、前の戻りを鐙で勤め、又烏帽子大紋にして馬上で歸つて來た事もあるといふ。又團十郎はこの役と實盛とは二股武士だといふので厭つたさうで、同じ二股武士でも腹を切るからと云つて、鬼一を好んだと傳へられる。

「檀浦兜軍記」は、文耕堂、長谷川千四の合作で、享保十七年九月竹本座に上場のものである。この

作は近松門左衛門の「出世景清」による所が多く、阿古屋の琴責はその「小野姫拷問」の換骨奪胎だと云はれてゐる。

全段は五段物である。その荒筋を記すと、叔父の大日坊を殺した平家の侍、悪七兵衛景清は、その縁仲の阿古屋にも別れて行方知れずになる。阿古屋の兄伊庭の十蔵は顏が景清と瓜二つなので、種々の事件がもち上る。本卷に收めた琴責は三段目の口で、中から切へかけて伊庭十藏は景清の身代りに死なうとする所を、箕尾谷四郎のために救はれる。四段目になつて賴朝上洛の途中、根の井の館に逗留中を、景清は大工に姿をやつして入込み、賴朝を狙ふが、同じく左官となつて入込んだ箕尾谷のために捕へられ鎌倉へ下る。五段目で牢へ入れられた景清は牢破りをして逃げる。箕尾谷の難儀となる所へ兩眼を抉り取つた景清が、阿古屋に手を引かれて死罪にしてくれといふのを、賴朝はその忠心を感じて日向勾當の官を與へ日向へ送る。

江戸の舞臺でこの琴責のかゝつたのは、寛政八年五月桐座で、琴責一幕。三世瀨川菊之丞の阿古屋で三世宗十郎の重忠で演じた。三曲の件りが大當りであつたといふ。

この作は手の不自由な人形が、所謂三曲をよくするといふ、そこに見物の興味があつたのであらうと思はれる。手の自由に利く人間が演じては、餘程興味がそがれるわけである。

「奥州安達原」は近松半二、北窓後一、竹本三郎兵衞の三人合作にかゝるもので、寶暦十二年九月竹本座にかゝつた作である。

前九年の役、貞任宗任と八幡太郎との戰爭を骨子とし、之に謠曲「黒塚」の趣向をつけ加へたもので、全部は五段物。

初段の口は禁庭の場。先年流罪にされた桂中納言敎氏を召返しの評定あつて後、小林の郷民が献上した十番の鶴に義家が金の札をつけて放す。中は吉田神社。生駒之助と戀絹との色模樣がある。同の内侍と環宮との二人は何人とも知れずさらはれる。切は義家の館。生駒之助に金がなくて戀絹の身請けが出來ないのを、義家の妹八重幡が用立てゝやり、その代り戀絹に未來の契りを自分に讓つてくれといふ。戀絹は承知する。敎氏が來て義家と對面する。その後戀絹は貞任宗任の妹と分るので義家は生駒を勘當する。といふのは貞任宗任の行方を探索させる爲であつた。

二段目の口は本卷に收めた序幕に當る。切は善知鳥安方の家。こゝへ外ケ濱南兵衞實は宗任が來て、主從久し振の對面をする。貞任の一子清童を安方が預かつてゐるが、病氣が重り死ぬ。所へ捕人が鶴殺しの罪人として安方を捕へて來る。安方に代つて南兵衞が義家に對面して、父の仇を報じたいばかりに都へ引かれる。

三段目の口は朱雀堤。こゝで傘杖が乞食姿の袖萩に逢ひ、知らぬ顔で別れる。袖萩は析柄來かゝつた八重幡の話から、傘杖の命にかゝはる一大事を知り後を追ふ。切は環の宮明御殿即ち本冊の第二幕目。

四段目の口は「道行千里の岩田帶」で、戀絹生駒之助が藥賣に化けて、奥州へ行く道行。切は安達ヶ原一つ家。この家の老母は旅人を殺して金を取る。戀絹生駒之助はこゝ迄來て、戀絹が急病になる。生駒之助は藥を買ひに出て行つた後で、老母は戀絹を「たぶさつかんで肝のたばね、差通されて七轉八倒、苦しむ體はくる〳〵〳〵、輪乘の如く打踏り乳の下より十文字に、腹たち破る有様は、目もあてられぬむごらしさ」といふ有様に殺してしまふ。後へ生駒が來て老母に切付けると、老母は自分は安倍太夫賴時の妻、貞任宗任の母なる事をあかし、謀叛の旗上のために捕虜にした環の宮は啞の病で、その難病を直すには、孕み子の血を用ゆれば、平癒すると聞き、我が娘と知りながら、天子のために殺したといふ。いよ〳〵その藥を環の宮にすゝめる時になると、匣の内侍は義家の弟新羅三郎義光、宮は義家の一子八若と分かり老母は自害する。一足おくれて貞任義家が來て、母を悔み、十束の寶劍を義家に渡し、一討ちにと勇む味方の勢を制して、義家を陣屋へ送らせる。

五段目になつて、義家の前で貞任は切腹し、宗任を家來にしてやつてくれと賴むに終る。

この芝居が始めて江戸の舞臺にかゝつたのは、この作の出來た翌寶曆十三年二月森田座であつた。外ヶ濱南兵衛、貞任の母（中村助五郎）。善知鳥安方（嵐三八）。安倍貞任（澤村喜十郎）。袖萩（小佐川常世）。八幡太郎義家（初代中村仲藏）。濱夕（六世森田勘彌）等といふ役割であつた。

その後この作は屢々上演されて今日に至つた。今日では殆んど、貞任と袖萩との二役は同一俳優が早變りで演ずる型が行はれてゐる。

この作で注意すべき事は、貞任は太功記の光秀などゝ同じ實惡でありながら、作者は同情の筆をもつて臨んでゐる事である。作者の企圖としては義家と匹敵する位の立役として書いたものであらうと思ふ。

大剛の貞任が可憐な一子お君に袖を引かれてたぢ〳〵として戻り、宗任に支へられて氣を取直すあたりは、作者の筆もよく書けてゐるが、今日のやうな型を案出した俳優もえらいものである。この作などは時代物中でも、傑作として指を屈すべきものである。

「伊賀越道中双六」は近松半二、近松加作の合作淨瑠璃で、天明三年四月竹本座にかゝつたもの。近松半二の絶筆で、彼の死後上演されたものである。

この淨曲の原材になつたのは、云ふ迄もなく天下三大敵討の一、荒木又右衛門伊賀越の敵討である。因州池田の家中渡邊靱負は、同家中河合又五郎のために寛永九年正月殺害せられ、その子數馬は姉婿である劍道の達人荒木又右衛門により助太刀され、諸國を尋ね廻つた後、遂に伊賀の上野で廻り逢ひ、首尾よく本望を達したのが、寛永十一年十一月の事であつた。

この敵討は長く劇に仕組まれなかつた。が百四十三年を經た安永六年の正月に、大阪中の芝居で、奈川龜助の手によつて脚色されて上演された。その時の名題を「伊賀越乘掛合羽」といふ。役割は、

唐木政右衛門（中山文七）。譽田大内記、佐々木丹右衛門（中山來助）。澤井城五郎（中村歌右衛門）。澤井股五郎、母鳴海（初世淺尾爲十郎）等で、大好評をもつて迎へられた。

京都でも同時に早雲座で「けいせい宿直櫻」なる名題の下に、政右衛門は山下儀右衛門、志津馬は中村七三郎によつて演ぜられた。

江戸では翌安永七年春市村座で、志津馬（三世坂東彦三郎）。澤井股五郎、鳴海、大内記「初代中村仲藏）。政右衛門（坂田半五郎）等の役割で演じてゐる。

「乘掛合羽」が大評判なので、すぐ同年の三月廿六日からこれを操りに脚色して、名題もその儘「伊賀越乘掛合羽」と置いて豐竹座で上場した。脚色者は近松東南であつた。

近松半二はこれに依據して「道中双六」を書いたのである。全部で十段物。現今演ぜられるのはこれである。本卷に收めたものはその通しで、殆んどその儘であるが、參考迄に原曲の場割を列擧して見よう。

初段は鶴ヶ岡の場。二段目は行家屋敷。三段目は圓覺寺。四段目は郡山宮居の場で、これは五右衞門屋敷に相當する。五段目は口が郡山政右衞門宅。切が傳授場。六段目は沼津。七段目は藤川の新關。八段目が岡崎。

九段目は伏見の場であるが、本卷には是れを缺く。志津馬はこゝで眼病にかゝり、瀨川と孫八とが介抱してゐる。櫻井も同じい宿屋に泊り合せ、藪醫者竹中贊宅と言合せ、志津馬に毒を盛る。志津馬突然起上る。贊宅とは假りの名、實は孫八の兄の孫六で股五郎の在所を聞きたいため、一狂言書いたのであつた。櫻井は逃げ出す。志津馬は追ふ。次の間から重兵衞が出て來て支へるのを、血氣の志津馬は一太刀切付ける。そこへ政右衞門が來て、重兵衞の一旦頼まれた男を見せるため、わざと見逃してやる。重兵衞は政右衞門の俠氣を喜び、妹の瀨川を志津馬に添はせてくれと、くれ〴〵も政右衞門に頼んで死ぬ。政右衞門は刀にかけて引受ける。十段目は敵討。

この長い作の中、現今に於てもよく演ぜられるのは、岡崎と沼津である。岡崎は政右衞門の子を殺

す動機や何やで、とやかくと批難される場であるが、芝居としては實によく出來てゐると言はねばならない。沼津は平作の子に對する愛から、命をすてゝ兩方の義理をたてさせるあたり、至情に無理がなく、無條件に傑作の部に入れるべきものである。

この卷には近松半二の作が三つ迄はひつて居るから、半二に就いて少しく述べる。半二は浪花の儒者穗積以貫の子である。從つて相當に學問はあつた筈である。若年の折は甚だ放蕩者であつたが、淨瑠璃を好み文才もあつた所から、竹田出雲の門に入つて作者になつたのである。その近松姓を名乘る所以は、門左衛門遺愛の硯を持傳へたのと、門左衛門に私淑する所深かつたのである。半二が立作者として竹本座にあつた時、義太夫節は不況のどん底にあつて、どの興行も當らなかつた。明和三年正月の『本朝廿四孝』は少し當つたが、これも四段目十種香の場の大道具によつて得た人氣で、長續きはなく、翌明和四年には、さしも全盛の竹本座も廢座し、その後再起したが、この時も亦不況で、いよ〳〵永久に廢座と極つた時、半二は一生の智慧をしぼつて『妹脊山婦女庭訓』を新作し、明和八年正月上場した。これは半二一生の名作であると共に興行的にも成功した作で、大入りを取り、四九

年の不入りを一擧に取返し、衰滅せんとした義太夫節が、半二の歿する天明三年迄、約十二年間の命脈を延ばし得たのも、この名作あつたがためだといつていゝ。

半二の義太夫節には、義太夫節の詞章としての味よりも、歌舞伎の臺本としての味が濃い。即ち彼の作が今日歌舞伎に演ぜられる所以であらう。舞臺をよく知つてゐた點、音樂を多量に作の中に盛つた點、色彩の美を作中に組入れた點など、おそらくは彼の右に出づる者は少ないであらう。

とにかく半二は、事實上の最後の義太夫節の作者であつた。大近松をもつて最初の者とすれば、半二はその最後を花々しく飾つた人であつた。天明三年二月彼が歿して以來、又見るべき作者もなかつた。菅專助、福内鬼外などは到底彼の敵ではない。彼の作で今日迄演續さるゝ名作には、本卷に收めたものの外に『妹脊山婦女庭訓』、『本朝廿四孝』、『太平記忠臣講釋』、『新版歌祭文』、『三日太平記』、『關取千兩幟』、『蘭奢待新田系圖』、『傾城阿波の鳴門』などである。

例により、本卷の校訂、解説に關しては、文學士間民夫氏の研究援助に俟つ所多き事を附記して謝意を表する。(大正十五年六月初旬、河竹繁俊記す。)

目次

挿繪の目次と説明

鬼一法眼三略巻
きいちはふげんさんりやくのまき

市川團十郎
演藝百番
鬼一法眼

鬼一法眼三略卷（菊畑と大藏卿―四幕）

序幕

菊畑の場
吉岡奧庭の場

役名　吉岡鬼一法眼、下部智惠內實は御厩鬼三太、笠原湛海、下部虎藏實は源牛若丸、下部陸助、同三平。吉岡娘皆鶴姬、腰元等。

本舞臺一面の菊の花壇、折廻し上の方出入口まで奧深に飾り付け、上寄りに枝折門。花道中程に枝折木戸。舞臺所々に菊の植込み、後ろ一面に網代塀。この道具すべて綺麗に飾り付け、眞中に竹床几を直し、幕の內より智惠內繻子奴のこしらへにて床几に腰を掛け、傍に竹箒を置き草履にて腰を掛け、髭を拔いて居る。この見得琴唄にて幕あく。

〽今出川に名にし負ふ、吉岡鬼一法眼が一構、非番の下部はさき掃除、打水玉をおく露に擬へて虫やすだくらん、玄關前の掃除役陸助三平のさばり出で。

ト調べになり、下手より陸助三平仲間のなりにて出て來り。

陸助　どうだ智惠内、奥の掃除はしまつたか。

三平　コレ髭ばかり抜いてをつて肝心の掃除は所まだら、がいに油を賣る奴ではあるわい。

陸助　追付け湛海様がお出でなすつて、この體を御覧じたらさぞお叱りなさるゝは定の事。

三平　さうだ〳〵、お慈悲深い湛海様に叱られぬやう、奥の掃除をし直せ〳〵。

智惠　ハヽア、玄關の掃除役はわいらが役、湛海様でもたんこぶ様でも叱らるゝはうぬらが不調法といふものだ、奥庭の掃除はおら次第、旦那といふは鬼一法眼様より外にはない、よい加減な馬鹿だわえ。

陸助　イヤさういふうぬが馬鹿だわえ、湛海様はお旦那の一の弟子。

三平　殊に家督を取る婿殿はなし、さしづめ皆鶴様と祝言して、こゝの跡式をお取りなさるゝとの噂だわえ。

陸助　それ故にこそ一家も同然、イヤモウお情深い湛海様、うぬも追従の一つも云ひ習ひ、お金でも貰ふのが當世といふものだ。

三平　ヲヽ、さうだ、うぬも今日からは、

兩人　思案せい〳〵。

智惠　ハヽアやりをつたわ、あの湛海樣をばお旦那の跡取りとはコリヤをかしい、臍が西國すべい、イヤモウ物にたとへて云はうなら、提灯に釣鐘といはうか、イヤ〳〵コリヤまたどうぞしたら釣合ふ事もあらうが、鬼の跡目をたんこぶの笠原が取らうとは、間違つた話だ、ハヽヽヽヽ。

陸助　ヤイ〳〵うぬ、をかしな事を長笑するからは、さては兵法軍術拔け切つてゐる湛海樣を蹴つぶすからは、大方うぬも兵法の心掛けがあるな。

智惠　イヤないわえ、俺は知らねえが、餘り釣合はぬ故にそれがをかしいわえ、ハヽヽヽヽ。

三平　イヤ、うぬさうぬかすからは心掛けがあらう、又ないと云うてみろ、軍術指南のお家に奉公しながら、劍術の心掛けがなくば、そりや扶持盜人といふもの、ナウ陸助。

陸助　ヲヽさうだ〳〵、モシ心掛けがなくばおいらが敎へて、

兩人　くれるわえ。

智惠　コリヤ何をするのだ。

三平　イヤサ、兵法軍術を敎へて、

兩人　やるのだ。

〽むしやぶりかゝるを突き廻し、しめに來る腕ねぢ上げて。

トちよつと立廻り、兩人の腕をねぢあげる。

陸助　アイタヽヽヽ、コリヤ息がはずむわえ。

三平　ちつとゆるめてくれ、アイタヽヽヽ。

智惠　ハヽヽヽヽ、どうだ敎へぬかい、軍法指南のお家に奉公しながら、心掛けのないは扶持盜人だぞよ、サア敎へぬか、どうだ、ハヽヽヽヽ。（ト兩人を投げる。兩人起上つて）

兩人　所を。

〽陸助三平むしやぶりつくを振り拂ひ、てんがうすなと手先のあしらひ、とゞむる隙の中庭より腰元共が走り出で。（ト後ろの枝折門の内より腰元二人出て來り）

腰一　コレ／＼智惠内殿、お姫樣のお歸りの遲いをお待兼ね遊ばして、氣がつきた故花壇を御覽なさるゝと仰せあつて、

腰二　お居間の庭から殿樣が、唯今これへお出でなさるゝ程に、花壇の傍へ床几を直し、お煙草盆に此の褥をいつものやうに敷いておきや。

智恵　なに、旦那樣がこれへござるとな。

腰一　二人の衆はお次へ立つて休息しませうぞ。

陸助
三平　ネイ〳〵。

ヘ云ひちらしてぞ駈け入れば。

ト引返してはひる。仲間兩人捨ゼリフにて下手へはひる。

智恵　口程にもない奴等ではあるわい、ハヽヽヽ。イヤそれはさうとよい時分に掃除をしまうた事だわえ。時に今にもお旦那がお出でなされて床几へおかけなさるゝが、アヽおらが一寸。（ト腰をかけようとして）イヤ〳〵罰があたらう。ヲヽよい事がある。（ト懐中より紙を出し褥の上へ敷きその上へ腰をかけ）アヽよい案配だ、不斷この上へ座つて冷えぬやうにしてござつても、起る病は起るぢやナア、それを思へばいつそおらがやうに寒晒しの力がましかえ、ハヽヽヽ。ドレ床几を直して。イヤ〳〵これでは遠すぎる、こゝでは餘り近すぎる。（トあちこちへ床几を直して見てトヾ上の方へ横に置き見て）ムヽ、これでよし〳〵。

ヘ見やる內、駒下駄の音聞ゆれば。

南無三、お旦那のお出でぢやさうな。

〽と逃げ出づるを、切戸の内より女中の聲々。

腰二　コレ〳〵智惠内殿、何時御用があらうも知れぬ、それに居さつしやれや。

智惠　ネイ。（ト下の方柴垣の蔭へ隠れる。）

〽小蔭に隠れ畏る、吉岡鬼一法眼は病苦を忘るゝ氣晴しと、女小姓に介抱せられ、花壇の菊の品々は主殿司と御垣守、二つ一つの大内山、天が下には隠れなき花の笑顔に打着せて、名はけおされぬ京小袖、たとへば花の物狂ひ、羅生門に住む鬼なりとも紐解きそむる大般若、御法の菊を見る時は、心やはらぐ敷島や、されば彭祖が七百歳姿を變へぬ若やかも、この德なりと菊の酒、我も齡を延さんとしばしは眺め佇めり。

ト鬼一羽織衣裳にて誂への駒下駄杖を突き、腰元大勢附き添ひて枝折門より出で、舞臺の菊をあちこちと眺むる事あつて、床几に腰を掛け。

鬼一　ホヽオ咲いたわ〳〵、この花開いて後更に花なしと思へば、とり分け色香も身にぞしむ。コレ

この菊は打水に露を含みて濡鷺や、か程やさしき花の名を誰が石割と。

〽名づけゝん、心勇みの駒下駄に石踏み分けて花畠、見廻し〳〵機嫌よく、床儿に腰うちかけ。

ヤイ女ども、花壇の掃除は智恵内めか。

皆々　ハイ左様にござります る。

鬼一　ソレ智恵内を呼べ〳〵。

腰一　ハツ、智恵内殿、御前様がお召し遊ばす。

皆々　智恵内殿々々〳〵々々。

智恵　ネイ〳〵。

〽ハツと答へて立出づる。

ハツ、智恵内め、これに居ります る。

鬼一　コリヤ智恵内、見れば花壇に塵一本も置かず目の前の掃除は丁寧なれども、松楓白膠木などのあたりは落葉も搔かず捨置きしは、心あつてか、但し又目通りでないといふ不奉公か、惣別奉

公に陰日向があつては後暗い、以來きつとたしなみ、大切に奉公せよ。

〽とありければ。

智惠　これは殿樣の御意とも覺えませぬ、拙者めも熊野の奥山家にて人となり、不肖には育ちましたれども、御奉公に陰日向は仕らぬ、惣じて塵埃と申すものは一つ二つ落ち散れば、その座を穢して見苦しくは候へども、又塵塚に山の如く積る時は、多くして見苦しからずとやら、それ故に花壇の塵はとりましたれども、松楓白膠木などの落葉はその儘に御覽なさるゝが御一興かと、わざと箒は入れませぬやうにござりまする。

〽申し上ぐれば流石の鬼一。

鬼一　フムコリヤ尤も、花壇は花壇の位によつて掃除をなし、落葉の庭は落葉を愛して落葉を掻かずとは、名將は士卒を愛して賢愚得失をよくわきまへ、その器量に應じて隨ふといふ軍法の奥儀その理に同じ、ナニ智惠内近う寄れ、か程まで小分別のある奴を、なぜ。

〽智惠ないとは名付しぞ。

殊更熊野育とな。

智惠　へイ。

鬼一　熊野育ちとあればなつかしい、我も熊野の山家には鬼次郎鬼三太といふ二人の弟があるわい。

智惠　さては殿樣のお產れは、熊野でござりまするかな。

鬼一　イヤ〳〵、弟めも我も產れは都なれども、熊野にて育ちしといふわけは、我が親もかくいふ鬼一も元は源氏譜代の侍なれども、六條の判官爲義左馬の頭義朝御親子の仲よからず、弓矢の道に背き給へば、源氏の滅亡遠かるまじと見極め、末の奉公させんものと、三歳五歳の小兒を母に預け我を殘し、熊野の山深く忍ばせおく、その小兒が今いふ鬼次郎鬼三太、又某を近く召され汝はともかくも長らへて、源氏の成行く末を見屆け、大將の器に備り給ふ人あらば傳來の虎の卷を傳へよと、その身は御親子の御身持を憤り、病の床にうち臥せしが。ア、淚がこぼれる。ア、一服呑んで見ようかえ。

ト腰元煙管煙草盆を差し出し、よろしく呑む事。

〽雲を吹き散る忘れ草、煙に憂を晴しける、われらその鬼三太清澄と、云はんとせしが心を靜め手をつかへ。

智惠　お家に奉公致しながら初めて承る、御兄弟の御別れさこそ便なくおぼすらん、したが唯今に

てもあれ、かの鬼次郎鬼三太殿、それと名乘つて來給はゞ、殿樣には如何遊ばされまする。恐れながら承りたう存じまする。

へとうら問へば。

鬼一　それは兄弟の心にあるべし、なま中父が遺言などゝ源氏へ心を傾け、平家に敵たう心ならば、ひつくゝつて淸盛公へさし上げる、何故といへ、鬼一が今の主君といふは淸盛公より外にはない、平家に忠義の我なれば、弟なりとも容赦はならず、コリヤ云はずとも知れた事、ア、モウ〳〵云ふまい語るまい、汝もモウ根問ひ葉問ひせずとも、こゝへ來て花を見よ。

へと花に餘念はなかりける、こゝに源氏左馬の頭義朝の八男牛若丸、御母常磐の懷をはなれ、鞍馬山東光坊の御許に忍びて人となり給ひ、十六年の春もすぎ、蔦の錦は着つれども、いつ會稽にひるがへさん、袂もせばき下司奉公、心は天下をとりひしぐ、鬼一を主と田面の雁、翼にかけし文ならで、切戶の口につくばへば。

ト花道より虎藏の牛若丸好みのなり一本差し、狀箱を持ち出て來る。

虎藏　虎藏唯今歸りましてござりまする。

腰二　虎藏殿が歸られましてござりまする。

鬼一　なに虎藏が歸りしとな、シテ娘は未だ歸らずや、その方一人歸りしとは氣遣ひ、何用だ、サ、近う寄れ、云へ、聞かん。

〽と氣をせけば。

虎藏　さん候姫君樣、淸盛公の御前をお立ちなされ私を召され、これよりすぐに重盛公の御館へ行かねばならず、父上のさぞお待兼ね、その方先に歸り淸盛公の仰せには、鬼一が病氣にかゝはらず、虎の卷を明日中に差し上げよと、もつての外の御樣子にて、鬼次郎鬼三太と申すお尋ね者、これは殿に御緣のあるお方故、湛海を追付け遣はされ、嚴しく御詮議ある筈、この旨直〻に申上げよとの御仰せでござりまする。

〽聞きもあへず。

鬼一　なに、鬼次郎鬼三太の御詮議とな。

〽はつと驚く面色にて、と胸ついてぞ見えにける、智惠內も我が身の上とびつ

くりせしが。

智恵　コリヤ／＼虎藏、その鬼次郎鬼三太といふは殿樣の御兄弟、何故の御詮議、ア、聞えた、今都に金賣吉次吉内と云ふ者あり、もしやそれが名を間違へて鬼次郎鬼三太と申し誤り、その詮議であらう、さうか／＼。

〽念を入るれば。

鬼一　ア、イヤ／＼、虎藏が誤りにあらず、思ひあたる事こそあれ、かの兄弟の者兼ねて源氏へ心をよすると聞きたりしが、必定その詮議ならん、それは知らぬ事なれば知らぬで濟まうが、濟まされぬは虎藏め、ヤイ智恵内、虎藏めを是でぶて。

智恵　エ、。

鬼一　イヤサ、ぶつて／＼ぶちすゑい。

智恵　アイヤ虎藏めを何故に。

鬼一　何故とはこれ程の不奉公に心がつかぬか、惣じて富みたるも貧しきも奉公する身はそれ／＼に勤むる役あつて、その一色にうとからねば不調法とは叱られまい、まづ虎藏めが今日の役目、

娘が始めての出仕草履つかむが役ならずや、このお使は先拂の衆か押への衆に仰付けらるべし、重盛公へ御參あらば猶もつて御草履仕らんと、サなぜ云はぬ、六波羅の玄關前、御一門の御所の案内とつくと見覺え、すはといはゞまさかの時、晴の草履はつかまれまいがや、虎藏めが今日の役目捨歸りしは不忠ではあるまいか、なりや打てといふが誤りか。

智惠　イヤ重々御尤もにはござりますれど、その氣のつかぬは若年者にござりますれば、何卒御勘辨遊ばされ下さりませう。コリヤ虎藏、それへ出てちやつと御詫申せ。イヤこの儀は虎藏になり代りお詫仕りませう程に、幾重にも御了簡遊ばされ下さりませうなれば、有難う存じまする。

鬼一　イヤ〳〵詫はきかぬ、誤りでなくば早くぶて。

智惠　ハツ。

ヘハツと杖は取りながら打ち兼ぬる。

鬼一　サア打たぬか。

智惠　ネイ。

鬼一　なぜ打たぬ。

智恵　イヤサ。

鬼一　おのれも主の言葉を背くか。

智恵　イヤまつたくもつて。

鬼一　さやうでなくば早くぶて。

智恵　サア。

鬼一　サア。

智恵　サア。

鬼一　サア早くぶて。

智恵　ハツ。

　　へ立ッつ居つ、とかく得打たず身をもがく。

鬼一　エヽ、その杖これへおこせ。

智恵　ネイ。（ト杖をそつと出す。）

鬼一　智恵内、それへ出い。（ト杖を取つて）虎藏めが不忠の百倍、おのれをぶつて。

〽杖振り上げ給ふその處へ、皆鶴姫は立ち歸り。

ト花道より皆鶴姫出て來りこの體を見て。

皆鶴　マア〳〵待つて下さりませ。

〽すがりとめ給へば。（ト鬼一にすがる）

鬼一　ヤアはなせ〳〵。

〽あせり給ふを抱きとめ。

皆鶴　虎藏を先へ戻せし不調法の起りは、私から起りし事、お叱りなさる程身も世もあられず、あの虎藏もあやまつて居りまする程に、どうぞ御堪忍なされて下さりませ。

鬼一　イヤ〳〵、われが存じた事ではない、はなせ〳〵。

皆鶴　イエ〳〵是非とも御堪忍を。

鬼一　イヤ了簡ならぬ、そこのけ〳〵。

皆鶴　そこをどうぞ。

〽詫びる所へ取次の腰元走り出で。（ト花道より腰元一人出て來り）

腰元　ハツ、申上ます。

鬼一　何事ぢや。

腰元　ハツ、笠原湛海樣清盛公の御用につき、御直談なされたき事ござりまするとて御越しでござりまする、これへ御通し申しませうや、如何計らひませう。

鬼一　清盛公の御用とあれば、これへと申せ。

腰元　かしこまりました。

〽玄關さして走り行く。（ト引返してはひる）

〽案内につれて笠原湛海、袴のひだも荒くれ武士、つか／＼と入り來り。

ト序の舞になり、湛海出て來り直ぐに舞臺へ來て。

湛海　これは／＼先生には、御病氣と承はつたが思つたよりはよささうで、まづは重疊々々、見ますれば庭へ下りて何事でござるな。

鬼一　されば／＼、家來め等が不屆故、折檻の致しくれうと思うて。

湛海　それ御覽なされ、先生は御病氣皆鶴殿は女儀の事、しつかとした跡取りがない故、家來までがの

はうづを働きまする、弟子は子も同然とやら、兼ねて申すはこゝの事、なぜ一々首を並べさつしやれぬ。イヤそれは内證事、今日某參りしは清盛公の御内意、ひそかに御意得たく存じまする。

鬼一　師弟の儀は内證、御用とあれば上使も同然、こゝは端近奥にて委細承らん。女共案内申せ。

女皆　かしこまりました。

〽二足三足歩みしが。

鬼一　ヤイ、おのれ等は邸の中を奉公構ひ、暇をくれるぞ。

皆鶴　エヽ、そんなら二人を。

鬼一　ハテその方は構はずと、サア兩人ながら出てうせう。

湛海　左樣々々、ほうづを致したなら、とつとゝおひやつておしまひなされ。

〽主命重き駒下駄に飛石づたひ。

じたい又あの小わつぱめが、なま白い顏をしてのほうづ千萬、いつそ某がぶつ離しませうか。

鬼一　ハテさて、暇つかはしたれば、構ふ儀はござらぬて。

湛海　ぢやと申して。

鬼一　ハテ、こなたの御家來ではござらぬてや。

湛海　デモ。

鬼一　ハテお世話やかれな。

湛海　ムウ。

鬼一　サ、娘も來い。（ト湛海皆鶴思入あつて行きかける。）

〽奥に入りにける。（ト鬼一皆鶴を連れ、後に湛海腰元附き添ひ、枝折門へはひる。）

〽後見送つて牛若丸。

虎藏　ヤイ鬼三太、汝も我もかく身をやつしあらぬ名をつけ、この家へ入り込みしは何の爲、六韜三略の卷を傳へ受け亡父の敵平家を滅し、再び源氏の世にひるがへさんと、思ひ込みしより外はなし、なりや今鬼一が我を打てたゝけとぬかせし時、なぜ我を打ち据えざりしぞ、たとひ打ちたゝかるゝとも、こゝに足を留めてこそ虎の卷をも手に入れる期もあるべけれ、此の家を追出されて、いつの世にかは本懐を達すべきぞ。

〽無念至極と拳を握り、心いらつて見え給へば、鬼三太大きに恐れ入り。

智惠　ハヽア御尤もなる御恨、最前その心附かぬにはあらねども、勿體なや譜代相恩の御主君を、打ち奉るはこれ天を打つも同じ事、なんとて杖があてられませうぞ、得打ちたゝかぬ不調法の段、眞平御免下さりませう。

〽地にひれ伏して詫びければ。

虎藏　これも尤も。

智惠　君も尤も、ともかくに、

虎藏　主も家來もか程まで、

智惠　源氏の運のつたなきを。

虎藏　思ひ廻せば廻す程。

智惠　我が君。

虎藏　鬼三太。

兩人　口惜しい。

〽主從目と目を見合せて、しばし歎かせ給ひしが。

智惠　成程御道理でござりまする、然らば今日清盛が館の仔細、明日中に虎の卷を差し上げよ、まつた鬼次郎鬼三太の詮議に湛海をやらんとの事、アレ〳〵奥に湛海が密談、定めて我々が身の上ならん、うか〳〵泣いて居る所ではござりませぬ、我も分別、君にも御思案遊ばしませ。

虎藏　ヤアこの期に及び思案とは手ぬるし〳〵、虎の卷を納めたる寶藏の案内我よく知つたり、忍び入つて奪取らん。

〽汝は八方に眼をくばり、もしもとがむる者あらば、一々に切り伏せよ。

鬼一とて容赦すな。

〽心得たるかとのたまへば。

智惠　イヤ〳〵、鬼一を討つ事御免あれ。

虎藏　ヤア御免とはおくれたか。

智惠　いツかなおくれは致さねども、鬼一はわれらが兄なれば、この儀ばかりは御容赦を。

〽と云はせもはてず。

虎藏　ヤア義によつては親兄の、首を取るのも勇者の習ひ、それ知らぬそちでなし、さては鬼一と心を合はせこの牛若を、

ヘ追出さん手段よな。

智惠　コハ勿體なき御仰せ、名乗り合せし兄ならば、討つに心も臆すまじ、この鬼三太を弟と知らぬ兄を討つ事に、兄弟の道にあらず。

ヘ恐れながら鬼一は君に振りむけ奉り、われら寶藏へ忍び入り、虎の卷を奪ひ取つて奉らん。

虎藏　フム。

智惠　フム。

兩人　ウフハヽヽヽ。

ヘ實に尤もとうなづき囁き身を固め、心を定むるその中に、いつの間にやら後に立つて細々と、聞いて驚く皆鶴姫。（トこの以前より皆鶴姫出かゝり居て）

皆鶴　二人の衆、まだこゝに居やつたかいなう。

ヘとありければ、二人は大いに敗亡し、言葉しどろに胸さわぐ。

ト琴入りの合方になり

コレ虎藏。

虎藏　ヘイ。

皆鶴　コレ智惠內。

智惠　ネイ。

皆鶴　アノ、そなたはいよ／＼こゝを出やるかや。

智惠　イヤモウ出たい事はござりませねど、お旦那の御機嫌を損ねました虎藏め、私も共々お暇の出た事なれば、出たうなうても出にやなりませぬが、どうぞあなたの御取りなしで。ナウ虎藏、このお家に奉公して足さへとめたなら、ソレ虎の卷の。イヤサ虎藏、あの望みも叶ふ程に、皆鶴樣の御取りなしで、お詫なされて下さりませうならば。ナ、ソレちやつと、お詫申せ／＼。

虎藏　成程、お詫なされて下さりませうならば、

兩人　有難う存じまする。

皆鶴　そりや何より易い事ぢやが、アノわしに詫言さしてたもるかや。

智惠　ネイ、どうぞ私めもお詫なされて下さりませうならば。

皆鶴　イヽヤイなう、そなたはどうなとしやいなう。コレ虎藏、いよ〳〵詫言さしてたもるのか。但しはいやか。

智惠　コレ虎藏、ソレお詫をしてやらうと仰しやる程に、さすとも　いやとも御返事を申上げ　たがよい。コレ虎藏。

虎藏　ハイ左樣なら、お詫なされて下さりませ。

智惠　ソレ、なされてくれいと申しまする程に、どうぞさうしておやり下されませ。

皆鶴　サア、そんなら詫言する程に、ナ、ソレ今の。

智惠　ソレ今の、とは。

皆鶴　ソレ。

智惠　ソレ。

皆鶴　それいなう。

智惠　それいなうとは、なんの事でござりまする。

皆鶴　ソレ、賴んでおいた事を。

智惠　頼んでおいた事、今のでござりまするか。

者助　おいなう。

智惠　そりやようござりまする、唯今お目通りで御返事を云はしてお目にかけませう。コリヤ虎蔵、

コリヤ虎蔵。

虎蔵　エ、何でござい。

智惠　エ、これはしたり虎蔵、そちや何と心得てゐる、今皆様がおつしやるには、お旦那へ諫言をしてやらうとおつしやる所に、この家に居さへすればかの虎の巻、イヤサ虎蔵、そなたとこの智惠内も一緒に居る理に、さうさへなつたら、手に入るまい物でもないによつて、ヤア皆オウと云へ〳〵。

虎蔵　エ、、そこ迄ぢやないわいの。

者助　コレ智惠内ゝゝ〳〵。

智惠　御用でござりまするか。

者助　どうぢや、よいかや。

智惠　ハテさて忙しない、唯今云ひかゝつて居る所でござりまする。

皆鶴　エヽなんの阿呆らしい、そんならどうでもわしの詫言はいやぢやなう。

智恵　イヤ／＼めつさうな、さやうでは。

皆鶴　イヤ／＼いやならや、いやならバ、いやぢやといふ顔付ぢやや。

智恵　イヤ／＼、いやさうな顔付をいたしてござりませぬ、随分満足な顔付でござりまする。

皆鶴　そんならなぜ物を云やらぬぞいなう。

智恵　イヤ／＼寄つて居りまするが、コリヤ虎蔵、それでは聞えぬ、もそつと大きな声をして物を云へ。

皆鶴　但しは女子に言はれるは嫌ひかや。

智恵　イヤ私めは大好きでござりまする。

皆鶴　エヽそなたではないわいなう。

智恵　ネイ。

虎蔵　イヤ／＼、嬉しうて／＼。

智恵　イヤ喜んで居りまする。

皆鶴　イヤ／＼、いやな事は。ソレ。（ト菊の一枝を取つて）コリヤ何ぢやえ。（トさし出す）

用人　ソリヤ菊の花でござりまする。

皆鶴　サア、この花の色變る秋の菊をば一年といふ、歌の下の句。

智恵　ソレ〳〵、下の句〳〵。

皆鶴　そなたぢやないわいなう。

虎藏　再び匂ふ花とこそ見れ。

皆鶴　サア、その花の心はどういふ心ぢや、判斷してたもいなう。

智恵　ハテナア。

皆鶴　サア、色變るとは今父樣の不機嫌、暇をやるから出て行けとおつしやつても、この皆鶴が命にかけて詫言して、再び匂ふ花とこそ見れ、サアこの歌の心をくみ分けて嬉しい返事を菊の一枝、コレ虎藏、なぜにそなたはそのやうに。

〽姫御前の好くなりふりに、生れつかぬがよいわいなう。

人目[illegible]る胸の中、疑やるなら今こゝで、コレ。

〽見てたもと、もつれ寄り添ふ蔦かづら、おぼこ育ちも戀路には菊のませ垣しめからむ、涙ぞ戀の誠なる。（トよろしく皆鶴姫虎藏にこなしある）

虎藏　アヽモウシ、あなたはお主樣私めは家來、數ならぬ身をそれ程に。
皆鶴　數ならぬとはお僞り、誠は源の牛若樣、智惠内といふは叔父の鬼三太樣。
智惠　アヽコレ。

〽ちやつと押へて動かせず。

皆鶴　スリヤ最前からの樣子をば。
殘らず聞きましたわいなあ。
智惠　叔父姪始めての對面に不便とは思へども、君の大事にやかへられぬ、今この場にて我が手にかける、覺悟極めてそれへ出よ。
皆鶴　サア、私を手にかけるのは厭ひませぬが牛若樣、未來で添うて下さりませ。
智惠　ヲヽ出かした、戀慕ひし君の爲捨つる命は惜しかるまじ、未來の契りを樂しみに相待てよ、南無阿彌陀佛。

〽取つてひき寄せさし殺さんとせし所へ、湛海すかさず飛んで出で。

ト湛海後ろより出て、

湛海　ヤア湛海が思ひ者、むざ〳〵うぬらに殺さゝうか、牛若鬼三太と己と名乘る業さらし、この通り清盛公へ注進する、覺悟ひろげ。

〽皆鶴ひつ立て驅け出すを、やり過して牛若君、後より拔打ちにばらりずんと切り給へば、二つになつて倒れ伏す。

ト湛海皆鶴姫をひつたて行きかゝる。虎藏拔打ちに湛海を切り倒す。

虎藏　ヤア〳〵鬼三太。（トノリになり）皆鶴姫を殺害するに及ばず、牛若丸直々に鬼一に逢うて仔細を語り、虎の卷を渡さばよし、いなと云はゞ百年目。

〽たとひ鬼一兵術の秘密を盡すとも、我亦鞍馬の山上にて、僧生坊に習ひ授かりし奧儀をもつて、討取るは案の中。

シテ又鬼一が夜の居間は。

皆鶴　この庭續きの奧の方、家内の者まで通路をさけしむら立つ杉の林の中が、夜半過る迄の御座所。

虎藏　スリヤその所に、鬼三太は後より密かに。

智惠　心得ました。

虎藏　皆鶴、案內。

皆鶴　アイ。

〽と互に身繕ひ、奥庭さして。

ト送りになり虎藏先に皆鶴姫智惠內奥へはひる。誂への鳴物にて前の道具を引いて取る。淺黄幕切つて落す。

本舞臺三間一面に折廻してある黒幕。所々に杉の立木同じく釣枝。眞中に九尺中足の二重。四隅松の丸物の柱、後ろ凄き張付け。左右は杉の林、內に緞子の幕を三方に張り、右の鳴物にてよき所まで押し出す、この道具よろしく納まる。

トカケリになり、下手より虎藏の牛若丸出て來り。

〽こゝに王城の鎭護たる天臺止觀の高山あり、岸につらなる老杉の森々として物凄き梢に霧の立ち覆ふ日の目洩らさぬ深山の、有樣寫せし庭の物好き、吉岡鬼一法眼が心を盡せし樹木の植込み、皆鶴姫が手引きにて、牛若丸は忍び入り。

牛若　ヤア、鬼一法眼は何處にある、源の牛若丸對面々々。

〽對面ぞうと呼ばはつたり。

謠〽月は鞍馬の僧正ヶ谷にみち〴〵、岸を動かし嵐凩瀧の音、天狗倒しはおびたゞし。

ト太皷地になり、これへ風の音をかぶせ、緞帳を切つて落す。內に鬼一白髮鬘、兜巾、篠懸け、水干、大口をはき、團扇を持ち貝桶にかゝり居る。牛若これを見てきつと思入。

牛若　こは思ひもうけぬ師の御坊、何故來臨し給ふぞ。

鬼一　善哉〳〵沙那王殿、姿形は荒天狗を師匠と敬ひ尊みて、かの一大事を相傳へ、平家を討たん思し立ち。

〽頭を地上につけ給ふ。（ト平伏する。鬼一こなしあつて）

謠〽やさしの心やさしやな、抑〳〵武略の譽れの道。

源平藤橘四家の孫、奢る平家を討滅し會稽を雪ぎ給ふ御身を守るべし。こ」れ迄なりや僧正坊。

〽鬢釣髭もかなぐり捨つれば、誠は鬼一法眼なり、人々ぎよつと肝を消し、これも天狗の障碍かと、あきれはてたるばかりなり。

ト この以前上の方へ皆鶴姫、下の方へ智恵内の鬼三太窺ひ出でこの體を見てゐる。鬼一靈鈞匙を取り見せる。皆々びつくりして上下へ住ふ。

へ鬼一住居を改めて。

鬼一 君に軍術兵法の太刀筋、傳へ教へし僧正坊、誠の姿見給へや。

へいますが如き神靈の、一心凝つたる印は目前眞寫の筆力、墨色の一軸さつと押し開き、敬ひ申すぞ尊けれ。(ト風の音はげしく祝詞になり)

この一軸の不可思議神變、まつた君の未生以前吉岡鬼一が家の預り、審に語らん御聞きあれ。

へと座をしめて。(小鼓の合方になり)

御先祖八幡義家公後三年の功あつて、鎭守府將軍にならせ給ひ、奥州をしろしめされし時御供に加はりし天野某、故あつて大江匡房卿より義家に傳へられし六韜三略の兵書、我が先祖預り奉り源氏代々兵法の師範たるべしとの御諚、家の面目、本吉長岡の二郡を賜り下の文字を取つて吉岡と姓を改め、鬼一が家に傳へし虎の卷とは六韜三略の一卷、その奥儀は傳はれどもその實の至る事能はず、如何はせんと心を碎きこの神靈へ祈誓を立て、あらゆる天行を起し切

礎琢磨の功なつてその實に至る事、天なる哉この時に當つて、源家一度に衰微の變を生ず、ハ、ア是非もなや。

〽されば平治の戰に、左馬頭義朝公清盛に打負け給ひ、野間の内海で御腹のめされ、御公達もちり〴〵に、或ひは討たれ或ひは流され、これぞ源氏の大將軍と面を出だす人もなく。

それにひきかへ平家は日本半國を領し、高位高官におしなり勅命を頭に戴き、一門の師範せよと我を招く、多病なり參るまじといなめば違勅の罪、心ならずも平家へ隨へば、案に違はず虎の卷を傳へよと、清盛が權威をもつて日毎の所望。

〽とかくすりぬけ期を延ばし。

源氏方の公達に器量ある人もがなと、心を碎く折しもあれ、年頃念誦し奉る御影の僧正坊が枕べに立たせ給ひ、汝多年心を苦しむるその術を傳へんは、義朝が八男御曹子牛若なりと微妙の御聲、膽に銘じて夢中に寫し奉る僧正坊の御影像。

〽折も幸ひ、君は鞍馬の奥深く、東光坊の御許にて。

成長し給ひ、毘沙門堂のほとりにて、立木を相手に兵法修業と聞く嬉しさ、我も登山し秘密を殘らず傳へ申さんと思ひしが、一門の師範と仰がれ、平家の祿を食む鬼一が、源氏へ大事を傳へんは。

〽二心とや笑はれん、八萬四千の軍神、天地の照覧恐ろしく。

何卒鬼一といふ名を包み傳へんものと、肺肝をくだき娘にも宿願ありと僞り、毎夜々々鞍馬山に分け入つて、勿體なくもこの神靈のお姿をうつし、月は木の間、かゞりの炎に形をあやしめ、その頃は君にも稚兒髷のいとけなさ。

〽御眼をくらます鞍馬山、大天狗僧正坊と名乘りかけ〳〵、僅かの練磨備はる早業、木太刀の音ヤアハッと兵術を授け教へしを、眞實の天狗と思ひ給ひしか。

君天下をしろしめしての記錄にも、牛若に兵術を傳へしは。

〽僧正坊といふ天狗に習ひ給ひしと。

末世末代鬼一といふ名を、深く。

〽つゝみ下さるべし。
〽人にもらすな大事ぞと、始めてあかす物語、誠の武士の本意なり。
かくいふ話はあなかしこ。

牛若　ハヽア有難し忝し、禮に對する言葉なし鬼一殿。
〽大地に額をすり付け給へば。

鬼一　ヤア紛らはしい、鬼一は平家、源氏の禮を受くべきか、虎藏を牛若とはとく知つたれど、智惠内を鬼三太とは知らざりし、最前それと見極めて打てたゝけと叱りしは、眞實を知らん爲、都の中の奉公構ひ、殿を呉れんと云ひし心、思ひ知つたか。

鬼三　ハヽア、我も兄とは存じながら、その心を疑うて餘所になしたるこの年月、無禮の段は眞平御免下さるべし。

鬼一　アヽそれとても主君の御爲なり、母諸共別れし時はいまだ三歳、面ざしも見違へたり、母の御事も傳へ聞く。
〽深山の奥に育てども、心の花香失せずして。

よく成長してくれたなあ。

鬼三　父上の御遺言を守り給ひ、日陰の主君を餘所ながら守りたて給ひし眞心は、流石は都の花の兄、深山育ちの鬼三太が、なに及び申すべき。

鬼一　ア、イヤ／＼、兄には生れまさりし鬼三太、二君に仕へし鬼一を手本に不忠な心持つなよ。

鬼三　仰せまでも候はず、この身を粉骨碎身なし君に附き添ひ奉り、眞先かけて源氏の再興、ア、さはさりながら世の義理に。

鬼一　兄は平家の幕下にて。

鬼三　任せぬ仲の敵味方。

鬼一　弓矢とる身は。

鬼三　兄者人。

鬼一　過ぎゆき給ふ父母に面ざし似たる弟鬼三太、よう顔見せてくれいやい。

〽兄弟手に手を取りかはし、流石骨肉同胞の血筋の涙はら／＼／＼、小山颪に樹々の實の落ちて碎くる如くなり。

ト知らせに付き月を後ろへ出す。これと共に向う黒幕を切つて落す。正面鬼一のいつもの奥座敷、花

壇造見の打抜きになる。

皆鶴　それ程のお心なら、とてもの事に虎の卷を牛若樣へ。

〽皆鶴姫は折よしと。

鬼一　ヤア大切なる虎の卷、源氏の公達に讓るべきか。コリヤヤイ娘、これはおのれに讓るぞよ、若いやつの事なれば心をかける方もある筈、これを土産に思ふ方へ嫁入り。トヽア俺は敎へぬ、エヽ勝手にせい。

〽と手に渡せば、嬉しさ親の前をも恥ぢず、兼ねて心をつなぎおく、牛若君に傳へ、合點かやいのと目で知らす、牛若君は押戴き。

牛若　この年月僧正坊となつて劍術を敎へ、今また息女に虎の卷を與へ給ふ、牛若めとりて夫婦となり奥儀を授かる上からは、平家を滅し世を源にかへす事、我が方寸の中にあり。

〽この身を百千に碎くともこの大恩、いつの世にかは報ずべきと、涙と共にのたまへば、鬼一はたと膝を打ち。

鬼一　かの黄石公が沓を取つて兵法の大事を傳へて高祖に仕へ、漢家四百年の基を開きし例、それは

張良。

〽これは牛若、草履取りとなり給ひしも。

虎の卷を手に入れん爲。サア二人の者、娘も共に君の御供なし、早く落ちよ。

〽云ふより早く差添ひん拔き、太腹にがばとつき立つる、血潮の穢神靈は杉の梢に飛び去つたり、人々驚き。

ト鬼一少刀を拔いて腹へつき立てる。薄ドロ〳〵になり大悪靈おのれと卷上り下の杉の枝へかゝる。

皆々鬼一にすがり。

三人　コハ何故の御生害。

鬼一　愚か〳〵、平家の旗下たるこの鬼一、源氏方の介抱受くべきか。寄るな〳〵、娘もほへるな、唯いつまでも牛若君に兵法を讓りしは。

〽天狗々々というてたべ。

ア、世に便りなき天狗の娘、不便がつてやらつしやれ。平家の祿を食ひ込んだるこの腹も、切つてかへせば五臓六腑は恩も殘らず、魂は元の源氏方。

〽魂は冥土へ赴くとも。
魄は殘つて魔道に入り。
〽かりに天狗となつたる鬼一、再び誠の天狗となり。
絶所難所の戰にも、遠波蒼波の浮雲に飛行自在を受け傳へ、よろしく御身を守るべし、娘も共に落ちよ〳〵。

皆鶴　落ちよと仰せ遊ばしても、父上の御最期を見捨て、どうまあ去なれませう。
〽悲歎の涙にくれけるが、かくては果てじと鬼三太は兄の心を察しやり。

鬼三　歎くは道理さりながら、君の御手に三略の得がたき兵書を授かり給へば。
〽たとひ項羽が力を賴み、鐵壁城にこもればとて、君の軍慮に及ぶべき、やがて源氏の白旗をかしこの山手こなたの峯、風に任せて飜し。
奢る平家を西海へおッ下し。
〽逆まく浪におしよせ〳〵おッ下し、陸に上れば備を立て、君の寄手に隨ひて

手柄を顯し熊野に生立つ力をもち。

牛若　まつ先がけの盛を見せん。

出かす〳〵、榮華につのる平家の輩。

〽詩歌管絃は得たるとも、虎の卷の力をかつて、風に吹き散る木の葉武士、一門殘らず皆殺し。

會稽の時來るも、皆これ師の坊のお蔭なり。

〽自然と備はる智仁勇、その源の義經とは、この御方の事なるべし。

鬼一　ハ、勇まし〳〵、現世の對面これまで〳〵、影身に添うて弓矢の力守るべし。

牛若　やがてぞ開く源氏の社稷。

鬼三　牛若君の御代となさん。

皆鶴　さはさりながら父上樣。

鬼一　ヱ、未練な事を。

皆々　おさらば。

鬼一　さらば。

〽と夕日影、鞍馬の梢に失せにけり。

ト白鞘を抜き持ち倒るゝ。皆鶴姫ハ、アと泣落す。鬼三太松の木の懸物を取り守護する。牛若合掌する。

〽あやしおそろし。

ト大ドロ〳〵カケリにてよろしく。

幕

二幕目　檜垣茶屋の場

役名　一條大藏長成卿、吉岡鬼次郎、茶屋亭主與市、鬼次郎女房お京、鳴瀬、腰元、仕丁等。

本舞臺向う一面に筋塀。上手に破風附きの白木門、前へ敷石を引き、下手に葭簀張りの茶屋、床几二

脚、塀の内より紅葉の立木、同じく釣枝。こゝに仕丁○□△╳の四人床几へ腰をかけてゐる。與市釜の下を焚きつけてゐる。しらべにて幕あく。

〽千早振る、神のひこさの昔より傳へそめにし歌舞の道、よきといふ字を能とよぶ、この日の本のもてあそび、絶えぬ例も長月の、菊の壽うちはやす花の色香の院の御所、築地はるかにもれ聞ゆる太鼓の音色横笛の、ひゞきはひいや檜垣の茶屋、與市が茶屋ぞ賑はしき。

ト與市は銘々に茶を汲み出す事あつて。

與市　サアお茶を一つお上りなされませ、今日は皆さん御苦勞でござります。

仕○　イヤモウくろうの十郎のと、俺も方々奉公をしたが俺の主人の大藏樣のやうに、今日は能、明日は紅葉を見に行く、あつちこつちへ行くので、我々は足も棒になりまする。

仕□　その隙にはお庭の掃除、落葉をかけの、ヤレどこへ行けこゝへ行けと、その度々の供で實にこつぱいさ。

仕△　それに又この頃は、清盛樣から下さつたといふ常盤御前の色香に迷ひ、いつもうつそりだが猶

〵うつそその上塗りだ。

仕☒　これ〳〵そんな事は云はねえものだ、そんな事が勘解由樣の耳へはひつたら、お目玉だぞよ。

トこれを與市聞いて。

與市　モシ〳〵、それぢやこの頃は常盤樣とやらを、奥樣になされたのでござりまするか。

仕○　したが清盛公がくれたとか何とかで、今日は御祝言の祝の能を。

與市　この事は町中の噂で聞いて居りましたが、大藏樣も女のない國から來はしまいし、清盛公のお餘りを貰うたやうな物でござりますなあ。

仕☒　お餘りもお餘りも、義朝の內儀を彌平兵衛宗清が助けて、清盛公へ妾にあげたとの事。

仕□　それを貰つたのだから、猶々大藏樣はうつそりだ〳〵といふが、俺の女房も今頃は誰ぞ引上げて、妾にでもしやアしねえか。

仕△　手前の女房を誰が妾にするものか。

仕□　なにねえ事があるものか、妾ばやりの世の中だからどんな太夫が引上げめえものでもねえ。

與市　引上げるといへば私の隣りのおかめといふのも、妾とやらに行かしやつて今では大そうなものでござりまする、なんでも今時は女子でなければ夜があけませぬ、私も少し子柄がよければ男

仕○　妾に出ようかと思ひますする。

支市　イヱ〳〵、與市、男妾は流行おくれだ、それよりはいゝ娘を貰つて藝者にでもするがいゝ。

仕□　お前、そんなに男妾に出たいものでございます。

與市　ハテ、藝者どんでもおさつの芋でも。（ト一寸踊る。四人つき倒し）

四人　何を云ふのだ。（ト顏見合つて）ハヽヽヽ。

仕○　又こんな事を云つてゐて、どんな御用が出ようも知れねえ、少しも早くお臺所へ行からぢやねえか。

仕△　その事どてらで、二分と百だ。

仕□　そんなら與市さん。

與市　皆の衆。

四人　サア行きませう。

トやはりしらべにて門の内へはひる。與市あとを片附けてゐる。

〽廣き都も心からせましとばかり世を忍ぶ、吉岡鬼次郎幸胤は、源氏の胤の埋

木に心を盡す忠義の花、菊のお能の折柄に、心がけたる夫婦づれ。

ト花道より吉岡鬼次郎黒の着附け、淺黄手甲脚絆、大小菅笠を持ち、お京上ばり草履をはき菅笠を持ち出て來り。

お京　モシ鬼次郎さん、今お前の云はしやんした檜垣とやらは、まだ餘程ござんすか。

鬼次　イヤ／＼、唯今あれにて承はれば向うの筋塀の屋敷ときく、見れば茶屋もある樣子、あれへ參つて尋ねみん。

お京　そんならその御殿に大藏卿も。

鬼次　コレ今日お能とあるからは、お出でなされたに相違はあるまい、なにはともあれ向うの茶店へ、サア來やれ。（ト是にて舞臺へ來り鬼次郎邊りを見廻し思入あつて）

鬼次　チト物が尋ねたい、檜垣茶屋と申すはいづれでござるな。

與市　ヘイ、檜垣茶屋は手前の店でござります。

鬼次　左樣でござるか、成程聞き及びし檜垣茶屋、お京これが檜垣茶屋とあれば、サ、これへかけやれ。

お京　そんならモウこれが檜垣とやらでござりましたか、嬉しや／＼、まだ餘程あるかと思うたがこ

れと聞いたで、草臥が出たやうでござります。

鬼次　御亭主、この床几を暫時借用申す。

與市　御ゆるりと御休息なされませ、これが即ち檜垣茶屋、又私めが名をすぐに與市が茶屋とも申します。常に店は出さねどもお能さへござれば私の承はり、住宅の白河より水を汲んで運ぶ故、檜垣と御名をつけられし、由緒ある茶の入花、まづ一服めし上りませ。

ヘ　とさし出だす。（ト思入あつて煙草盆を出し、茶を出して控へる）

鬼次　いかさま花の都とて何から何まで華奢風流、手前ははるか遠國者、この度初めてまかり上り何事も不案内、京地の話を聞くが國元への家土産、まづこの所のお能といふは、一年に二度とやら聞き及びしが左様かな。

與市　さればでござります、春は櫻のお能、秋は菊のお能とて兩御所の御叡覽、我々風情が言葉にかけ申しまするも勿體ない事ながら、唯今ではおいたはしや王様を鳥羽の里へ押こめて、平家の大將淸盛様が我儘の榮耀榮華、菊の能に限らずイヤ紅葉の能で候の、イヤ松茸の能で候のと種々の名をつけて、月の中には五度七度、檜垣の茶屋もホツと秋風、店を出さねば何故出さぬ、せんじ茶を背くかと煮え返るには困りきります。

へ商賣柄のちやは〳〵口。

鬼次　いかさま平家の繁昌は國元までも隱れなし、それにつけても常磐御前といふ女性、一條大藏卿とやらへ送られしと承はるが、下々の雜說か、但しは誠の事かな。

與市　イヤモウ誠も誠、なんぼ氣強い淸盛樣でも小松樣の御異見にはほと〳〵鉢卷、我が子の手前の口ふさぎに一條大藏長成といふお公卿へ進上の奧樣、この十日ばかり以前に御祝言も相すみ、しかも今日のお能がその大藏樣、常磐樣御夫婦のおもてなしの御馳走、所で又この大藏樣といふ人が京一番の見事仁、つけようにも藥のない、いかに平家の權威ぢやとて十年餘りも淸盛樣が箸にかけた上り膳を、應と云うて座らるゝ、これが卽ちうまい正銘、ヱ、今朝ならば見せましよもの、能見物にわせられたその勿體やら、衣紋附きなら人體なら天晴な公卿なれど、十日蛭子の笹につける五百目包みで見かけばかり、この大藏殿に智惠のないと狐が誂へた茶碗にいとぞこのないのは、この廣い日本に隱れがござりませぬ、まづあらかじめこんな物でござりまする。

へ聞いてお京もうち笑ひ。

お京　その常磐御前とやらも御一緒にお出でとな、音に聞いたる御器量、どんなお顏やら拜みたいものでござりまする。

へしらぬ顏にてうら問へば。

與市　イエ〱、常磐御前は俄かの御病氣でお出でなされず、その御名代に、ア、何とやら云ふお人、ヲ、それ〱大藏卿の御家老八劍勘解由左衞門の御内儀、鳴瀨殿といふ發明な女中が、かのぬるま殿の介添にわせられました。（ト數へて茶碗を見て）イヤこれはしたり、ぬるま殿の話にかゝつて、あつたら茶までぬるまどのに致しました、汲み直してあげませう。

鬼次　イヤ〱最早茶はほしうござらぬ、チトこの方に話す事もござれば暫しの間、遠慮致してくれまいか。

與市　成程そりやうまい時分から、鯊の針、よう釣り申す釣られ申す、私は水を一杯汲んで參りませう。後でしつぽり。

兩人　エ。

與一　店を頼み升する。（ト手桶を提げて下手へはひる。）

〽吞みこみ顔に走り行く、後見送つて鬼次郎は、お京に向ひ小聲になり。

ト鬼次郎お京あたりを見て思入あつて。

鬼次　そちも唯今聞いたであらうが大藏卿の院參、亭主の噂に落付いたり、お能もおッつけはてぬらん、その歸るさに心をつけ隨分首尾よう目見得をすまし、直ぐに館へ入りこむが肝要なるぞ、云ふまではなけれども辨慶が弟鬼次郎に、由縁ある者と知られぬこれ第一、二つには常磐御前の御身持に心をつけ、源氏を忘れぬ志と見るならば、折を見合せ仔細を語り、主從の名乘りせよ、その上の便次第某が迎ひに參り館をそつと連れ出し奉らん、後の工夫は我が胸にあり、首尾の善惡一寸一筆、知らせの便りを待つてゐるぞよ。

お京　そりや氣遣ひなされまするな、常磐御前の樣子を窺ひ、便りを致しまする。

鬼次　萬事ぬかりのなきやうに。

お京　そりや心得て居りまする。（ト下手にて）

謠〽瀧つ水、萬歳の道に歸りなん。（ト下手にて太鼓しらべ。兩人きつと思入）

鬼次　ヤアアノ物音は最早お能果てたりと覺えたり、下參を待ち受け萬事首尾よう。

お京　お目見得のその時にお前が居ては何かの邪魔、どこぞゝこゝらへ。

鬼次　幸ひこれなる茶屋の内、葭簀の蔭に身をひそめ、事の様子を。

お京　氣遣ひせずと、少しも早く。

鬼次　そちもぬかるな。

お京　合點でござんす。

〽小蔭へ忍び待ち居たり。

ト兩人よろしく思入あつて、お京は上ばりをとり、兩人茶店の内へはひる。

〽地下の見物押し合ひへし合ひ、袴の町人醫者禪門、樂屋の人數は一群に戴き申す臺粽、同氣同性相もとめ、己が道へと立ち歸る。

〽しばらく後よりさも温々と立ち出で給ふ一條大藏長成と、名に負ふ勿體物々しく、八劍勘解由が女房にかしづかれたるうづ高さ、その身の位は備はれども、心はうつそり空蟬や、猶人柄によらざりし、生れつきこそ是非なけれ。

ト音樂にかぶせ、一條大藏長成卿烏帽子裝束、笏を持ち沓をはき公卿のこしらへ、後より鳴瀨打掛け

衣裳草履にて扇を持ち出て來り、後より仕丁朱の長柄傘をさしかけ、沓の臺を持ち出る。この内鬼次郎お京に囁く事よろしくあつて。

〽鬼次郎はそれを見るよりも、お京に衣紋をつくらせ、その身はかしこに立ち忍べば、かねて手筈をきはめおく、勘解由が女房立どまり。

ト鳴瀬お京は一寸思入あつて立ちどまり。

鳴瀬　ム、それなるはお京殿か、上にも御機嫌よい折柄サコレへ〳〵。

〽と招き寄せ。

殿様へ申上げまする、これなるはお京と申しまして女藝者の狂言師、先だつて夫勘解由召し抱へます約束は致せども、表向きより御奉公と申すは禁裏表の聞えもあれば、今日の歸るさ直ぐにお供に召し連れられ然るべう存じまする、夫の指圖承はり待たせおいたる途中のお目見得、御言葉を下されなば有難う存じまする。

〽とりつくろへば大藏卿。

大藏　内々聞いた女藝者はそな者か、はてな、イヤ鳴瀬、あれが狂言を勤めるか、アノ今日も御所で

見たやうな、八幡大名太郎冠者をやるぢやまで。」

鳴瀬　さやうでござります。

大藏　さうして、そちが誕生日はどこぢや。

お京　ハイ。

大藏　誕生日はどこぢや。

鳴瀬　ヲ、それ〱、あのやうに御意遊ばすは、そなたの生れ故郷をお尋ね遊ばすのぢや、サア早う申上げたがよい。

お京　ハイ、私の故郷は熊野の郷でござります。」

大藏　何ぢや熊野子ぢや。

お京　熊野郷でござります。

大藏　熊野子とあれば定めし毛深からう。（ト思入あつて）どれ顔を見よう、ヲ、顔もよいわ、今から麿が抱へたぞよ。

お京　これは〱有難い、不調法な女藝者、勘解由樣鳴瀬樣のお見出しにあづかり、御奉公に參るやうにとのお言葉、辭退申さず唯今のお目見得、ほんに冥加にかなひし仕合せ、この上ながら幾

久しうお目にかけられて下さりませ。

大藏　何ぢや、目にかけてくれ、ハテかはつた事を願ふな、屋敷へ歸つたら下々に云ひ付けちぎを取りよせ目にかけてくれう、むつちりと肥えてゐる程に十二三貫はたしかにあらう、マア年かつこうが氣に入つた、廿四五は女房の油ののる最中と何とやらの書物にあつたが、なんと鳴瀨、女房の油といふ油をこの大藏はつひ見ぬが、どのやうな油ぢや、さぞよいかざであらうな。

鳴瀨　これは久殿様のあやない事を御意遊ばす。なにお京女郎、あのやうな事仰せある愚かしい生れ付き、夫故そもじをお傍に置いて狂言をお目にかける私が心は、萩大名の粟田口のとすべて上く々のお心の足らはぬ事を作つたもの、それを御覽に入れたらばおのづと心にお恥ぢなされ、物のわきまへもある道理、よそながらの御異見になるまいものでもないものと、夫勘解由にも云ひ聞かせ自らが思ひ付き。憚りながらお前様にも隨分狂言を御覽なされ、お心をおつけ遊ばせ、なんぼお依様でものつとりではすみませぬ世の中、早う御合點遊ばしませ。

へ虫にさはらぬ諫めの挨拶。

大藏　コウのつとりには狂言を見るが療治か、はてよい物が藥ぢやな。ソナお京とやら、何ぞ一曲所

望〳〵。

〽と茶屋が床几に座し給へば、途中ながらも主命は、いやとも云はれず立ち上り。

鴨瀬　お京殿、御前様の御意。少しも早う。

お京　ハツ。（ト下座へとり）

〽なまめくや、今を昔の男舞、かへすや袖の折りもよく、さす手ひく手の拍子さへ花の袖の冬なれや、雲もおさまり風もなし、松も緑の常磐山君を守りの神国に、曇らぬ御代は久方の月の桂の男山。

トよろしく舞になりて、大蔵卿面白きこなしにて床几のはしに掛り、色々をかしみあつて見惚れ、トド床几より落ちる。鴨瀬皆々介抱する鬼次郎は心を付けるこなし。これにてお京よろしく舞納め。

大蔵　ヤア〳〵面白い〳〵。一段と気に入つた、扶持をくわつとくれう、喜べ〳〵。

〽はやお心も狂言に。

太郎冠者のお京あるかやい。

お京　ハツ、御前に候。

大藏　次郎冠者の鳴瀬、あるかやい。

鳴瀬　ハツ、御前に候。

大藏　ム丶ハ丶丶丶丶丶　コリヤ二人とも出かしをつたなあ。

兩人　ハツ。

〽と答へる地狂言、大藏卿にかしづきて、館を。

ト大藏卿先に皆々よろしく花道へ行く。鬼次郎茶店より出て顔見合せ笠にて顔を隱す。大藏卿檜扇にて顔をかくすを木の頭。

〽さして急ぎ行く。

ト三重にてよろしく。

ト幕引付け、鳴物にて悠々と大藏卿先に鳴瀬はひる。お京も花道へはひる、留めの木にてシヤギリ。

幕

大藏卿館の場
同　庭外の場
同　奥殿の場

三幕目

役名　一條大藏長成卿、八劍勘解由、播摩大掾廣盛、吉岡鬼次郎、常磐御前、鬼次郎女房お京、勘解由女房鳴瀬、腰元松ヶ枝、同若菜、同呉竹、同葉末、其他。

本舞臺三間の間常足の通し二重、上下書割の杉戸。向う正面金襖、後に引抜きうしろ雛段になる事。上下塗骨障子。上上菊燈臺、上下とも緞帳を張り、すべて大藏卿書院の體。こゝに腰元松ヶ枝、若菜、呉竹、葉末の四人居並び琴唄にて幕あく。

松枝　なんとマア皆さん、いかにお好きとは云ふものゝ、いつ〳〵とても狂言の事ばかり、熱のお强い事ではないかいなア。

若菜　さればいなア、この間お抱へ遊ばした女藝者のお京殿を相手に、明けても暮れても狂言舞。

呉竹　鳴瀬樣も相手におなり遊ばし、御前樣へのお慰み。

葉末　然しなんぼう御傳授なされても日頃の御氣質、たとへて見ようなら籠へ水汲むやうなものぢやわいなあ。
皆々　そりや又何でいなあ。
葉末　サア、汲む間に下へぬけるわいなあ。
皆々　ほんにさうぢやわいなあ。
松枝　聞かしやんせ、この間も御前樣が私をお召しなされ、コリヤ松ケ枝、麿を見ると皆の者が阿房阿房と云ひ居るが、一體阿房とは何の事ぢやとお尋ねなされた故、返答に困つたわいなあ。
皆々　さうして何と云はしやんしたえ。
松枝　私も萬更阿房ともいはれず、それは御前樣かやうでござりまする、その阿房と申しまするはさる上々の御女中樣が、貴方樣にお惚れ遊ばしたのを、ツイ短かに貴方のあの字と惚れたのほの字と、それをよせてあほうと申しましたものでござりませうと申しあげ、やう〳〵逃げて來たわいなあ。
皆々　コリヤよかつたわいなあ、ホヽヽヽ。（トこの時揚幕にて）
呼ビ　八劍勘解由出仕。

松枝　御家老の毛虫様がお越しなされた、それお迎ひ。

ト序の舞にて、勘解由衣裳上下大小にて出て来り。

若菜　御家老勘解由様、唯今御出仕にござりまするか。

皆々　まづ〳〵これへお通りなされませ。

勘解　シテ御主人大蔵卿には、御居間でござるか。

呉竹　イエ〳〵、相も変らずお能場にて。

勘解　又狂言か。

葉末　左様でござりまする。

勘解　今日ならば狂言の相手は知れた事、コリヤ困つたものぢや。

松枝　貴方様を先程よりお待兼ね。

皆々　早う御前へお越し遊ばしませ。

勘解　オヽ、然らば参らう、われ達は部屋へ行き、暫く休息致せ。

皆々　かしこまりました。

勘解　ドリヤ御前へまからうか。（と皆々上手へはひる。）

〽行く秋を、蝶や我、我や蝶かと夢の世を、悟り極めし人ならで、うつら〳〵と世の中を夢に暮して現なき、一條大藏卿の館には今宵も始まる狂言盡し、舞臺は常の御居間先廊下をすぐに橋懸り、書院を樂屋鏡の間、かゞやく錦の上幕に菊燈臺も照りそいて、奥にはどつとほむる聲、狂言果てゝ幕上げさせ、ずつと樂屋へ入間川、大名烏帽子に打掛けの、姿なまめくお京が役。

ト合方になり、上手より鳴瀨着附、狩衣金烏帽子、中啓を持ち、後よりお京大名烏帽子附け太刀、狩衣を羽織り出て來り、あたりを見て下手に住ひ。

お京　これは鳴瀨樣、これにおいで遊ばしましたか。ー

鳴瀨　ヲ、どなたかと思うたらお京殿、今日は御苦勞でござりまする。

お京　そのお言葉で痛み入りまする。いかに狂言なればとて誰あらうぞ、八劍勘解由樣の奥方鳴瀨樣とも云はるゝお方を、私風情が太郎冠者に使ふと思へば、どうやら氣の毒、これがほんの逆事、とりも直さぬ入間川、御許されて下さりませ。

鳴瀨　これは改まつた御挨拶、わしのやうな拙ない者が相手になりて間に合はすも、こなたの皆お

お京　蔭、お師匠様にさう云はるゝがやつぱり入間言葉、稽古をさせて下されもなされずば、狂言も覺えもせず、御前で勤めも致さねば御褒美にもあづからいで、おほめもござりませぬ。

お京　イヱナア申し、さう仰しやつても下されねば、返つて迷惑にも存じませぬ。

兩人　ホヽヽヽ。

〽狂言ぜりふに會釋して、互ひに笑ふ折柄に。

ト兩人辭儀をして顏見合せ笑ふ。花道揚幕にて、

呼ビ　播磨の大掾廣盛公御出で。

鳴瀨　なに廣盛公御入りとあれば、この由を御前様へ申上げて下さりませ、私は夫勘解由へ取次ませう。

お京　さやうなれば鳴瀨様。

鳴瀨　お京殿、少しも御前へ早く〳〵。

お京　かしこまりました。

〽鳴瀨お京も四番目の祝儀を急ぐ二千石、揚幕切らして奥へ行く、後へ入り来

る播摩の大掾

ト舞になり花道より播摩の大掾廣盛立烏帽子、素袍大紋にて中啓を持ち出て來り。

廣盛　播摩の大掾廣盛參つたと、誰ぞ案內めされ。

〽八劍勘解由刀ひつさげ出で迎ひ。

勘解　これは〳〵廣盛公、よくこそ御入來、まづ〳〵これへ。

廣盛　然らばゆるしめされ。

〽會釋ながらにうち通る、廣盛あたり見廻して。

コリヤ勘解由には、異なる事を致してをるな。

勘解　御覽下され、馬鹿殿が例の狂言、それ故唯今太郎冠者を勤めてゐる所でござる。

廣盛　又しても〳〵大藏が例の阿呆、いやはや困つた者め。（ト思入あつて　勘解由近う。

〽うち招き。（トあたりへ氣を附け思入あつて）

兼ねて申し談ずる如く唯呑み込めぬは常磐が心底、いかに淸盛公の御意なればとて日本一の大だはけと、異名を取つた大藏を夫に持つとは、どうでも深い計略あつての事であらう、義朝が

勘解　倅を招き、源氏の敵平家を討たん企も知れず、不審がましき事はなきか。
仰せまでも候はず、常磐が身の上萬事に心を付くれども、さして變りし品もなく、然しこゝに一つの不審と申すは夜々の楊弓、昔は物事さわがしとて夜半すぎより弓三昧、これをきつと推量申すに、主人大藏の白痴を嫌ひ性を変すまいその爲に、夜をふかして楊弓かと、拙者は存ずる。

廣盛　イヤ／＼左樣な事はあるまじ、いかさまそれには仔細あらん、心を配り氣をつけて何によらず注進めされ。

勘解　その儀は拙者承知仕る、必ずお案じめさるゝな。

廣盛　まづそれまでは。

兩人　隱密々々。

〽互ひの心しめし合ふ言葉の中に奥の間は、早くも納まる二千石、二人の女にかしづかれ、大藏卿立ち出で給ひ。

廣盛　これは／＼大藏樣には、御機嫌のよい體を拜し恐悦至極に存ずる。

大藏　ヤア廣盛〳〵、ようお出で、この間はうち絶え六波羅へも參らぬが、變つた事もおりないか。

廣盛　今日御殿に於てそこ元のお噂、チト六波羅へもお越しなされい。

大藏　折節には參りたけれど小松殿がむづかしい顏附き、難波瀬尾が顏見るとめいようその儘痺が切れる、いつちまだ見掛けと逢ひ附合ひのよいは能登殿、某さへ見るとめでたい人、旨い仁と嬉しがつて機嫌がよいな、この間も清盛の御前で稻荷山から取つて來た、大きな松茸を出したれば、コリヤ大きな松茸ぢやと皆が褒めをつた、イヤ〳〵この松茸より俺の方が餘程大きいと云うたれば、流石の清盛もぐつとまゐつた、それで俺は裏門よりそつと歸つたぢや。

廣盛　それは仲々御手柄々々々、この廣い日本に清盛公に言葉を返す者もなきに、その清盛の頭を押へるは御貴殿ならで外になし、イヤおでかしなされた〳〵。

大藏　褒めても何にもやりやせんぜ。

廣盛　何を馬鹿な。（ト思入あつて）それはさうと大藏卿には、この程より狂言をお好み稽古の由、一段のお慰みであらうな、拙者もいつぞや所望申し、見物致さうと存じをつた。

大藏　もそつと早うお出であらば、この二人の者が今二千石をやりをつたに。

廣盛　それは殘念千萬な。

大藏　殘念とあらば今一遍、やつて見せうか。

廣盛　イヤそれには及ばぬ。

大藏　こゝで惡くばそなたの屋敷へ行て見せうか。

廣盛　これは又迷惑な。（ト迷惑の思入にて云ふ、勘解由こなしあつて）

勘解　イヤなに廣盛公、左樣に仰せなされずと、これ唯今のナ、劒の舞、ナ、劒の舞を見物めさるがよくござらう。

ト勘解由舞に事よせ切つてしまへといふ仕方をする。廣盛呑み込み。

廣盛　成程劒の舞、よくござる、その劒の舞を拜見仕らう。

大藏　劒の舞ぢやないぞえ、今樣の靱猿、今の後は何とやら、それ〳〵猿が參りてそなたの御知行。

ト思入にて、うしろの襖を引きぬく。こゝに長唄囃子連中居並び居てすぐにかゝる。

長唄〽ま猿目出度き能仕る踊りの手元及びなき、水の月取る猿澤の池のさゞ波悠悠たり、指手引手の末廣や、月にたとへし止觀の舞、こなたのお庭を見上ぐれば片割れ月は宵のほど、可愛〳〵とさよえだましておいて、松の葉越しの

月見ればしばし曇りて又さゆる、明日は上手物船が上手物、重たげもなくおよる君よの、船の中には何とおよるぞ、苫を敷寝の梶枕、晩の泊りは御油赤坂に、吉田通ればナア二階から招く、しかも鹿の子の振袖が、奴島田に丈長や、粋な目元にころりとせ仇ものめ、とめてとまらぬ戀の道馬場先のきやれ、色めく飾りの伊達道具、昔模様の派手奴これかまはぬの始なり、まりの庭にも猿の神厩の猿の馬櫪神、猿と獅子とは文殊の侍宿時しも開く冬牡丹、花の富貴の色見えて、榮うる御代とぞ舞ひをさむ。

ト振りよろしく、この中勘解由靱の中より太刀を出し切らうとするを、大藏見る故控へ振りに紛らせ、廣盛も抜きかけ切らうとする事よろしく、この中廣盛上手を向きあくびをする故大藏高杯の菓子を廣盛の口へ入れて、又振りにかゝる。トど切りかねてよろしく納まる。廣盛は上手をむきあくびをしてゐてくさめをする。

廣盛　面白い事でござつた、チト手前屋敷へもお越しなされい。

大藏　行かうとも／＼、近くに狂言をして見せう、俺が行たとて何も構ふ事はないぞえ、昆布に山椒

茶ばかり〳〵。

廣盛　最前より餘程の間、拙者は最早お暇仕らう。

大藏　モウいぬか、ドレ麿が送つてやらう。

ト立ち出るを勘解由とめて、この內大藏鼻を指にてほじりゐる。

勘解　その御見送りは拙者めが仕ります。

大藏　そんなら麿が代りにそちが行くの、

勘解　ハヽア。

大藏　か。

勘解　ハア。

大藏　カヽヽヽ。

勘解　ハヽヽヽ。

廣盛　長成公、後日面會仕りませう。

勘解　サアお越しなされい。（ト花道へ思入あつて行くを）

大藏　廣盛〳〵。

廣盛　何ぞ御用でござるか。
大藏　お前の丸じがこぼれてゐる。
廣盛　左樣でござるか。（ト舞臺へ來て）
大藏　それ、丸じぢや。
廣盛　それは勿體ない。（ト手へ取り口へ入れて思入あつて）エヽいまいましい。（花道へ行く、勘解由早く行とけ云ふ）　お暇申さう。（ト唄になり花道へはひる。後を見て）
大藏　ヲ、廣盛はもういなれたか、丸じと云うて余が鼻糞を呑みをつた、俺から見ると餘程阿呆ぢやナ、アハヽヽヽ。（トこの時九ツの時計なる）　あのやうな氣の短かいわろはない、このやうな面白い事を見ずにいなれた、鳴瀨もう何時ぢや。
鳴瀨　最早九ツでござりませう。
お京　最早お寢間へ御入りあつて、然るべう存じまする。
大藏　そんならいつも常磐が楊弓をやらるゝ時分、身共は寢間へぐずとはひらう、果報は寢て待て、旨い物は宵に食へ、云ひたい事は明日云へ。
〽立つにも居るにも狂言に、魂奪はれ大藏卿、皆引き連れて奥へ行く。

トよろしく踊り、三人奥へはひる。送りにてこの道具ぶん廻す。
本舞臺一面建仁寺垣、上下大和葺きの屋根附き網代門、所々に紅葉の立木、日覆より同じく鈎枝、風の音にて道具納る。トどんを打上げ、淺黄幕を切つて落す。

〽行く空の、やゝ更け渡る鐘の聲、人も子の刻はやすぎて次第に上る月代も、足元遲き丑滿頃晴間も見えぬ霧空に、館の仲面を窺ひ足、腰にぼつこむ黒鞘の色も名に負ふ吉岡鬼次郎。

ト本釣鐘、風の音にて鬼次郎大小頬かむりをして出て來り、あたりを見て枝折戸を開けようとする。開かぬ思入。

〽礫は忍びの案内者と、拾ひ集めて一握り。〽打込む小石ばら〳〵、寢られぬ儘にお京が耳へ戀しと入つたる知らせの小石、庭の飛石さし足に。

トこの内鬼次郎石を拾ひ礫を打つ。お京手燭を持ち庭下駄にて出て來り、鬼次郎思入あつて小扉にて。

鬼次　そこへ來たりしはお京ではないか。

お京　さう云はしやんすは鬼次郎殿か。

鬼次　いかにも鬼次郎、サ、こゝを早く開けてくりやれ。

お京　アイ〳〵。

鬼次　常磐御前の心底、一向大藏に身を任せ源氏の事は思ひも出さずと知らせの文、いよ〳〵それに相違はないか。

お京　さればいなあ、この中より立居そぶりに心をつけるに、いつかな微塵悲しさうな氣色もなく、髮形つくらうて大藏卿に猫なで聲、何が又大藏卿は音に聞えたぬるま殿、涎たらして甘やかし、それ故にあの如く夜すがらの楊弓、源氏の事思ひ出す色もなければ、このお京は鬼次郎が女房と名乘らうにも折もなし、うかつに名乘るは返つて鞍馬にござる若君の御爲にも如何ぞと、思ひし故に細々書きし知らせの文、大概それをよめたでござりませう。

鬼次　ヲ、でかしたり女房、云ひ甲斐なきは常磐御前、さういふお心とは露知らず結構仁と名に高き、大藏卿の館に入り込み給ふ天晴發明、源氏の味方を狩り集め運の開くる常盤御前とたもしう思ひしに、見下げはてたる徒ら女、その性根を知るからは、そちをうか〳〵この屋敷へ長居さゝうか、これよりつれ歸らん。

お京　サ、そのお腹立は御道理なれど、これには何ぞ樣子があらうもしれず、事の實否を正した上い

鬼次　よく〳〵不義に極まらば、御諫言なと申上げ、何卒源氏の再興を。

お京　たとひ御諫言申すとも性根の亂れた常磐御前、主でない、家來と思へば穢れしこの屋敷、長居は無益、女房來やれ。

鬼次　お前が常々云はしやんした、短慮功をなさずとは、この事でござりませうぞえ、心を落付け思案かへ、常磐御前に御目にかゝり、とつくりお諫め申して下さんせ。

お京　そちが言葉は尤もなれど、うかつに諫言致されぬ、モシお聞きなく平家へこの事聞えなば事の破れ、憎さも憎き常磐御前、寢間へ參つて樣子を見屆け、誠不義に極まらば討ち果すが義朝公へ忠臣が忠義。

鬼次　スリヤ常磐樣をそれまでに。

お京　御家の大事にや變へられぬわえ。

鬼次　そんならどうでも。

お京　性根の腐つた上からは、存分にして立ち歸るが義朝公へ御追善、常磐御前が寢所へ案内しやれ。

鬼次　アイ合點でござんす。（トうぢ〳〵行きかける。）

お京　コレひそかに〳〵。

へしめし合はして兩人は、寢所をさしてしのび行く。

ト兩人思入あつてお京先に鬼次郎上手の門の内へはひる。この道具ぶん廻す。

本舞臺四間通し塗緣欄間、一面に御簾をおろしあり。高欄附きの塗手摺、高二重緣附き。塗段、上手一間障子屋體、下手紅葉の立木、所々に菊の下草紅葉の釣枝、奧座敷の體よろしく道具納る。

へ常磐御前のおはします一間の内は燈火も、晝かと照す的の星、影はこなたに腰障子、うつるくり矢の君しらず、忍びよつたる鬼次郎夫婦、片づを吞んで窺ひ居る。

ト鬼次郎お京下手より出て身構へして二重へ上り御簾を卷上げる。向う一面金襖、瓦燈口常磐御前は十二一重にて揚弓箱弓を持ち揚弓をしてゐる。上手太鼓を置き、この太鼓仕かけにて清盛の繪姿しこみある矢をつけてある。この脇に銀雪洞附きの燭臺てらしある。

へ常磐御前は一心不亂、脇目もふらず固める手前、いとゆう／＼と引きつめて狙ひ程よく放せる矢は、かつしと響きて錐穴に、はぶくらこめて止まれば。

ト常磐よろしく矢を放し弦にて的を通る。これを常磐嬉しきこなしあつて。

常磐　嬉しや願は通り矢。

〽としたり顏なる御氣色、鬼次郎さしも怺へかね、つゝとよつて弓ひつたくり。

ト鬼次郎常磐の弓を取り。

鬼次　ヤア見下げ果てた恥知らず、吉岡鬼次郎幸胤よも見忘れはあるまい、お京といふも卽ち女房、夫婦の者が心をくだく、その甲斐もなき人非人。

〽と怒れる聲に顏振り上げ。

常磐　ヲヽ珍らしや鬼次郎、揚弓に心をうつしてゐていつの間に見えたやら、そなたの參りしを知らざりしぞ。

〽云はせもはてず怺へぬお京。

お京　モシおつしやるな常磐樣、そんなおまツこい減らず口聞いてゐる主ではないぞえ、エヽほんにお前樣はナア。(トよろしく思入。本調子の合方になる)この楊弓をなさるゝ手間で、なぜに誠の弓を張り心の尖り矢引きつめて、源氏の恨みを晴らさうと思ふ心はなぜつかぬ、大事〳〵義朝樣のお情を忘れ、二度三度の嫁入りなさるゝお心ではその筈ながら、天道樣は恐うはないか恐ろしいとは思はぬか、人の報は遠からぬ七間ま半の楊弓より當りは近い天の罰、神や佛に惡ま

れても、お前は何ともないかいなあ。

〽泪交りに云ひ並べる心の直矢ぞ誠なる、常磐御前は打ちうなづき。

常磐　尤もなる恨み事、悪うは聞かぬさりながら、世の中の人の心の竹ならば、割りてや君に見せましと云ひけんも外ならず、主を大事と思ひつめし誠の道は道ながら、家來は家來の程々にて深きに至らぬ小篠の茂り、主人は主人の心にて千尋の竹の大藪は、外から知れぬ理りなり。

鬼次　ムウ面白い心の竹、この鬼次郎が今こゝでぶつて〳〵ぶちくだき、ゆがんだ竹を灰吹竹にしてくれう。

〽たゝみかけて打つ腕、腹立つ息をつぎ弓の弭もくだけ飛散つたり、常磐御前は起上り髮かきなでゝ襟つくろひ。（ト文句の通りよろしくあつて）

常磐　ヲ、出かした頼もしゝ、時世につるゝ人心、裏の裏なる恐ろしさ、木にも萱にも心おかれ、深き疑ひ許してたべ、我を悪しと思ふよりなぐり情もあら弓に、たゝき伏せたる主思ひ、誠があらはれ。

〽嬉しいぞや。

今までつゝむ常磐が胸、語り明す恥かしさ。

へ一通り聞いてたべ、取分きて悲しきは、二度三度の嫁入りと、姫御前が姫御前にさげしまるゝ面目なさ。

武士の身の上に臆病者よ腰ぬけよと、指さゝるゝにもよも劣らじ、辛さは忘れぬ昔語り、義朝公に別れしより忘れがたみの三人の若、兄は六ツ中は四ツ、弟は未だ乳呑兒の泣音を忍ぶ伏見の里。

へ雪の下折消えやらで、清盛に追立てられ、大和の宇田まで逃げ退きしを。

遂には探し出だされて、うとましや清盛が。

へ我にむたいの戀慕の闇、我は子故のやみ〳〵と、くどき落され女の道を、捨てゝ拾ひし子供の命。

ア、歎くまじとは思へども、夫の敵の清盛に枕並ぶる私語、虎狼の叫ぶより耳にこたへてものすごく、錦の褥も悪魚毒蛇の鱗に寝伏しする心、君傾城の勤めさへ厭なと思ふ男には振るとや

ら、それに劣りし我が身の因果、これも我が子の命助かりし代りぞと心で心取直し、辛さながらも、添寝の床、泣きたい涙笑うて見せる胸の苦しさやるせなさ、いかなる地獄の責なりともこの辛さには勝るまじと、思ひ暮せし年月も隠しつゝむ心の底、それさへせつなかりつるに、今といふ今夫婦の衆に心のありたけ打ちあけて、今まで胸にこたへたる自が心の内、どのやうにあらうぞいなう。

〽くるしいわいのとうさ辛さ、語るにもなほ涙なり、鬼次郎も哀れに服し、しほるゝ心をとり直し。

鬼次　御物語はさる事ながら、清盛の手を遁れこの館にましますは時節の至ると申すもの、それになんぞやうか／＼とあかし暮して遊興業、朱に交はれば赤しとやら、長袖の家に馴れ武家の育ちを忘れ給ふ、あさましい御所存やなあ。

〽あさましさよと恨むにぞ。

常磐　女でこそあれ義朝公の、御胤をも産み落したる自、平家に恨みの一念は心に籠めしこの楊弓、慰み事にこそよせて誠は平家を調伏の弓矢ぞよ、弭を白き絹に巻きしは源氏の白旗押立てゝ本

はずうらはず鳩頭、正八幡を頭に戴き。

〽敵に向ふ心ばせ。

弓矢の尺は二尺八寸、二十八宿の星と敬ひ、九曜をかたどる九寸の矢尺、矢竹心を張りつめて一矢は今若、乙矢は乙若、牛若の名によせて丑の常磐が時詣、三つのかなわはあらねども念力通つて我が願。

〽思ひの儘に金貝の矢數は一百五十一、女に二挺の弓を引かせしは、名は清盛の清からで、身體を汚せる泥書の、百四十九の骨々もくだけよ折れよと怒りの炎、赤き朱書の九十一、九十くげんを見せしめ給へと、狙ひの矢先は雛穴に丁と射つけし。

調伏の證據を見せん。

〽的の釣糸かなぐり捨て、堋のくろかは取り給へば、生けるが如き清盛の姿を畫きし胸板に、矢疵は通りし女の一念、健氣にも亦勇まし〻、鬼次郎夫婦は

ツと伏し。

ト太鼓の黒皮を取り、これに清盛の綸旨へ矢當りゐる。兩人びつくりして平伏して。

鬼次 このお心とは知らずして。

お京 出るまゝの惡口雜言。

鬼次 それのみならず勿體なくも、打擲せしは某が一生の不覺、この上は御足下にかけられ踏みにじつて給はるが、この上のお主の御慈悲、御高免下さりませう。

〽お主の御慈悲と詫びいるにぞ。（ト手をつき詫びる故常磐思入あつて）

常磐 誤つて改むるに憚る事なし、忠義を思ふ諫めの枝、折れたるこの弓は正八幡の御手を出だし、我の心を勵まし給ふと思へば猶更有難し、とは云ひながらあさましや、敵にもせよ仇にもせよ、後の夫の名はのがれず、夫は天にたとへし物、敬ひまつる心もなく女のざいに恐ろしき、人を呪ひの楊弓は積るこの身の未來の罰、我が身は覺悟の上ながら子供の身にや報はんかと、思ひ案ずる苦しさを推量してたもいなう。

〽かきくどき〳〵聲も涙の忍び泣き、鬼次郎夫婦も御道理と涙のまき矢ばら

ばらと、的に亂るゝばかりなり、歎きの聲のもれけるにや、ねらひ窺ふ八劒勘解由、つか〳〵と走り出で件の繪姿ひん抱へ。

トこの内下手に勘解由居て以前の繪姿を手早く取り

勘解 ヤア聞いた〳〵、常磐御前が計略にて清盛公を調伏の下心、この通り注進する、待つておれ。

ト云ひ捨てゝ駈け出だす、こなたの一間さらりと開け、どつこいやらぬと立ちふさがり、かせに鳴瀬が甲斐々々しく。

ト件の繪姿を持ち駈け出すを上手より鳴瀬出てゝ解解由をとめ。

鳴瀬 コレ〳〵勘解由殿、うろたへてか、常磐樣が科人なら、大藏樣も同じ科、善にもせよ惡にもせよ主人の難儀を訴うとは、武士の道はどこで立ちますえ。

ト云はせもはてず。

勘解 ヤア默れ、アノ大藏がなんの主人、かねて廣盛と心を合はせ常磐はじめ大藏もろともからめ取り、この一條の家は勘解由が治むる、妨げ致さば女房とてゆるしはせぬぞ。

〽つきのけ〳〵駈け出だすを、どつこいさうはと立ちふさがる、鬼次郎つゝ立ち。

鬼次　ヤア吉岡鬼次郎これになくばイザしらず、行かるゝものなら行つて見ろ。

〽大手をひろげつッ立つたり。

勘解　何をこしやくな。

〽互ひに刀抜き合はせ、火花を散らして上段下段。

ト兩人きつと見得、これより大小の鳴物になりよろしく立廻りあつて、勘解由たち〳〵と後の御簾によりそふ。

〽後の方の障子越し、勘解由が髻しつかと取り、づつとつらぬく氷の刄、うんとのつけにそりかへる。

トこれにて御簾の中より長刀出て勘解由をつらぬく、鬼次郎これはとびつくり。皆々思入勘解由たちたちと倒るゝ。

皆々　これは。

〽常磐主從顏見合せ、しばし言葉もなかりけり、一間の內に聲あつて。

大藏　ヤレ方々驚くな、一條大藏長成が不忠の家來を誅伐なるわ。

〽簾をさつと卷き上ぐれば、さも優々と大藏卿、日頃にかはる御よそほひ血潮したるゝ長刀かいこみ、すつくと立つたる有樣は、勇しくも亦たくまし、長成かさねて鬼次郎にうちむかひ。

ト御簾を卷き上げる。內に大藏卿織物の鎧下、大口にて長刀を持ち高床几にかゝり居る。これを見て皆々思入あつて。

事辨へぬ長成が、勘解由を討つたるかと、鳴瀨が驚き二つには、我が心底を語り聞かさん。

〽その一大事をうけたまはれと座し給ひ。（笛入の合方になり）

元來某は源氏の累葉、仔細あつて長袖に交り一條大藏長成と呼ばれ、人なみ〳〵の身なれども、文武の道を表に出ださず、若年よりの作り阿呆。

〽うつけとなりて世を暮らせば、源氏にも愛せられず又平家にも憎まれず、世

に諂はぬ我儘暮し。

それを知らざる八劍勘解由、主人を白痴と見限りて廣盛と心を合せ非道の企み、につくい奴とは思へどもこれしきにア、せわと、知らぬ顏に捨ておきしが見遁しならぬ今夜の仕儀、二十年來長成が作りこんだるこしらへ馬鹿、あらはしたるは源氏の爲、鬼次郎夫婦我が言葉をよく守り、牛若とやらに傳へてくれ。

〽人間の盛衰は、唯天運のなす所。

六條判官爲義は、己が智謀にからまされ。

〽秋の木の葉と散りて行く、又もや嫡子左馬之頭、待賢門の夜戰に源氏の勇士もみなちり〳〵、清盛に追ひかけられ東國さしておちこちに、遂にその身も尾張の國長田が館で落命し。

親と云ひ子といひ智恵自慢武勇自慢に、あつたらその身を惜むにも甲斐ぞなき、この人々とは事かはりでかされたるは常磐御前、唐土を尋ぬるに操を立てゝ名を殘す、女は類多けれども、夫の爲、子の爲に不義者の名をとつて、女の道を背きしは卽ち背かぬ貞女の鑑、異國の人も傳

へ聞かばなどかこれを賞せざらん、かゝる稀代な女房を宿の妻とは身が果報、阿呆に繪のつく長成が、命にかけて預つたり、心安かれ鬼次郎夫婦、なほ牛若に心を合せ再び源氏の恥を雪げ、何事も大藏は知らぬ顔なり、白旗の榮を見せよ方々。

へ殘る方なき御言葉、世にたのもしく有難し、手負ひの勘解由起き上り。

勘解　はかる／＼と思ひの外、かへつて馬鹿にはかられしか、たとひ死んでも褒美の金がほしい。

へ己が名前の八劍に身をはたすこそあさましき、言葉の内に勘解由が妻、夫の差添へ引き拔いて咽喉にがばとつき立てる、苦しき息をほつとつき。

ト勘解由口惜しきこなし、鳴瀬思入あつて差添へを引ぬき、咽喉へつきたて苦しき思入あつて。

鳴瀬　あさましや勿體なや、心愚かな御主人と年月あなどり暮せしさへ、大方の罪なるに惡事に組せし我が夫、お手討にあひたるはまだも冥加にかなひし最期、御手にかゝり死したればこそ一大事の御物語。

へ聞いて嬉しきこの鳴瀬。

心はそれに組せねどこの御大事を聞く上は、一日でも長らへて外へやもれんと人々の、御疑ひ

の悲しさと。

〽一つは二世と契りたる、夫の後追ふ死出の旅。

冥途にて巡り逢ひ、異見を加へ善心にひるがへさせ。

〽せめて草葉の蔭よりも、御恩を報ずる御奉公。

それ故にこの自害、唯何事もお許されて下さりませ。

〽と云ふがこの世の名殘りにて、夫の死骸を枕にて眠るが如く息絶えたり。

ト鳴瀬こなしあつて落ち入る。

大藏　强慾非道の勘解由にひきかへ、鳴瀬が最期いさましゝ〳〵。鬼次郎近う。

鬼次　ハツ。ト大藏卿袱より袋入の太刀と短冊とを出して

大藏　これこそに源氏の重寶友切丸、蛭ケ小島におはする頼朝へ送り物、まつたこの短冊には鞍馬に身を忍ばれし牛若へ傳へてくりやれ。

鬼次　ハヽア、有難きこの賜物。子の日さす野邊に小松のなかりせば、千代の榮をいかに問はまし。これなる古歌を送り物とは。

大藏　今平家に威を振ふ清盛のなき後に、小松の内府重盛情をもつて人をなづけ、中々もつて容易に滅ぶ平家にあらず、それも小松の枯れし後時節を待つて旗擧げせよ。源氏の爲には平家は怨敵、汝が爲にも主君の仇。

鬼次　やがて本望。

大藏　コレ。ナ。

鬼次　ハツ。

大藏　コレ。

〽かの唐土の會稽山、旗擧げありし呉のたとへ、世に傳はりしもかくやらん。

鬼次　重々あつき御仰せ、これより鞍馬へたち越し旗擧げなさん、御心安かれ大藏卿。

〽さも勇ましく云ひのぶる。

大藏　天晴々々、廛とても元の阿呆にたちもどり、鼻の下の長成と笑はゞ笑へ云はゞ云へ、命長成氣も長成、たゞ樂しみは狂言舞。

〽曉の明星が西へちらり東へちらり、ちらり〳〵とする時は。

ト本釣鐘を打つ。鬼次郎思入あつて。

アリヤモウ夜明け、夜明けぬ内に早う去ね。

〽去のとも戻ろとも何ともそなたの御はからひ、と言ては小腰に抱きついて。

常磐　名残が惜しい。（ト鬼次郎夫婦の思入にて云ふ。お京つか〳〵と出て）

お京　モシ。（トかけよるを大藏さゝへて）

〽きりゝんない、きりゝん〳〵限りない、と小舞に事よせ暇の御諚。

トよろしくあつて

常磐　ハヽ、有難きその御言葉。

鬼次　何とお禮を申さうやら、

お京　有難う、

三人　存じまする。（ト三人辭儀をする）

大藏　禮には及ばぬ。とつとゝ去なしやませ。」

鬼次　はやおさらば。

〽さらば〳〵と立ち上れば、手負ひの勘解由むしやぶりつき。

ト勘解由起上り鬼次郎が持つたる袋入りへ思入。鬼次郎これをつきやる。大藏勘解由を引き廻して。

大藏　ヤレ待て兩人、はなむけせん。

〽水もたまらず打ち落し。（と勘解由の首を打落し刀の先へつき通して）

平相國淸盛が首を、まツこの通りつらぬけよ。

鬼次　ヘツ。（ト思入。大藏兩人を見送りながら）

大藏　ム、ハ、、、、。

〽勇み勇んで。

ト三重カケリにて、よろしく。

幕

大詰　五條橋の場

役名　源牛若丸、武藏坊辨慶、九條次郎、金子八郎、赤井藤太、黑井次郎、吉岡鬼次郎、同鬼三太。

本舞臺眞中一杯に五條橋の丸物、上手柳の立木、橋の所々にしかけの誂へあり、後ろ東山を見たる夜の遠見、灯入り、滿月　切出し、波の音、一聲にて幕あく。
トしらせにつき床の出語りとなる。

語へ　夕ほどなく暮方の〳〵、雲のけしきも引きかへて、風すさまじく更くる夜の。

竹本へ　さても源の牛若丸、父の修羅の魂魄を慰めんと、川風添ふる夜嵐の、夕ほどなき秋の空、面白や心浮立つ御出立、肌には光素の御給、紅下濃の御着背長、糸萌縅の大口に薄綠の御佩刀五條の橋をさして來る、傘のしぶきも高足駄、橋板とゞろにふみならし、往來の人を待ち給ふ、御有樣ぞ不敵なる。

トこの内花道より牛若丸好みのなり、高足駄紅菜傘をさし出來り、よろしくあつて舞臺へ來り、橋の上より向うを見やりきつと見得。

へ西塔の武藏坊辨慶は、その頃都にありけるが、五條の橋には人をなやます曲者ありと聞きしかば、それを隨へ召使はんと、心も空も晴るゝ夜の月も音羽の山の端に、出立つ鎧は黑革縅、好む所の道具には、熊手ない鎌鐵の棒、木槌鋸鉞刺扠さす儘に、權現より賜つたる大長刀、眞中とつて打ちかづき、ゆらり〱と出でたる有樣は、いかなる天魔鬼神なりとも、面をむくべきやうあらじと、我が身ながらも物たのもしく、手に立つ者のあらほしやと、獨言して打ち渡り、向うをきつと見てあれば。

トこの文句の内花道より辨慶好みのなり、脊中に六つ道具をさし大長刀を持ち出て來り、花道にて舞臺を見やり。

へ橋のほとりに青柳の、糸より細き腰つきにて、すつくと立ちたる女姿、傘かたむけて面はゆ振り、辨慶もとより法師の身、女子に何と云ひかけん、詞もな

まめく氣色に恥ぢ、橋のかたへを過ぎゆけば、若君彼をなぶつて見んと右へよくれば右へ立つ、左へ行けば左へ行き、違ひざまに長刀の、柄をはつしと蹴上ぐれば、スハしれ者よ目にもの見せんと、長刀の柄長くおつ取りのべ、切つてかゝれば若君も薄衣取り除け打ちよする、劍をあざむく傘の、六十間の橋の上、ひらり〳〵くる〳〵〳〵、車にもまるゝ牛若丸、辨慶苛つてさそくをふみ、のがさじものと切り込むを、てうと受けたる勢は、雨を起せる蛇の目の傘、風吹き拂へば飛びしさり、ひらりと拔いたる小太刀の影、星の光とみづ車、所は名に負ふ加茂川の、流れに立浪どう〳〵〳〵、どうと寄すれば白鷺の、芦邊にあさる片足立、姿はつくばね羽子板の、拍子は砧の音、むさうがへしうつゝの太刀、二つの鍔音から〳〵〳〵、欄干つたふさゝがにの、蜘蛛の振舞木傳ふ猿、水の月かや手にたまらぬ、姿を慕ふ長刀の得たりや應としつかと取る、エイヤと引けばエイと引く、橋の擬寶珠の玉のあせ、鎬をけ

ずりて戰ひける、辨慶秘術をつくせども、終には長刀打落され、組まんとすれば切り拂ひ、すがらんとするもたよりなく、詮方なくて橋桁を、二三間飛びしさり、あきれはてたるばかりなり。

トこの内立廻りよろしくあつて、トヾ辨慶叶はぬこなしにてあきれたる思入。

へかゝる所へ若君を、遠見に守護なす源家の郎黨、皆いかめしき物の具に、闇夜を照らす出立に、辨慶目がけておつ取り卷く。

トこれにて下手より源家の郎黨、九條次郎國行、金子八郎忠俊、赤井藤太、黒井次郎、いづれもりゝしきなり、この外大勢水汲軍兵附き添ひ出來り、

辨慶　ヤア恐らくこの辨慶が、力につゞく者なきに、大汗かゝすのみならず皆々守護なすこのわつぱ、コリヤ何處の何者なるぞ。

牛若　ホヽオ、我こそは九條の雜仕常磐が胎内に產れ、鞍馬山にて人となりし源の牛若丸。

辨慶　なに、牛若とな。

國行　若君守護は源家の郎黨、九條の次郎國行。

忠俊　我も名乘らば譜代の臣、金子八郎忠俊。
赤井　赤井の藤太元次。
黑井　黑井の次郎晴行。
國行　君を守護なす。
皆々　我々共。
　　へ聞いてびつくり辨慶は、はツとばかりに飛びしさり。
辨慶　ム丶、すりや牛若君でありしよな、拙者ことは熊野の辨眞が倅にて、武藏坊辨慶と申し、父より源家に由緣の者、御家來となし下さらば有難うござりまする。
牛若　ヲ丶、その詞喜ばし丶、今より三世の主從なるぞ。
辨慶　なに御家來とや、チヱ、忝い。コレ皆の衆、新參者だ、可愛がつて下され。
　　へ頭を土につけにける、約束長き五條の橋、橋辨慶と後の世に、語りつたへて畫にもかき、祇園祭の山鉾にも、祝ひ飾るはこれとかや。
國行　目出たし〱、辨慶御味方なす上は。

忠俊　龍に翼を得たるが如し。

赤井　これより一先づ若君を。

黒井　九條へ伴ひ。

皆々　奉らん。

へ勇みたつたるその折柄、鬼次郎鬼三太兄弟が、御あと慕ひ走せ來り。

トバタ〳〵になり、吉岡鬼次郎同鬼三太出來り。

鬼次　若君、これにお渡り。

兩人　遊ばしましたか。

牛若　ヲヽ鬼次郎鬼三太の兩人には。

國行　あわたゞしい。

皆々　何事なるぞ。

鬼次　ハヽ、かねて若君御舍兄たる、頼朝公の嚴命にて平家を亡ぼす義兵の旗擧げ。

鬼三　味方を集めるそのために、姿をやつして徘徊なせしに。

鬼次　待賢門の戰より、行衞知れざる源氏の白旗。

鬼三　まつた御家の重寶鳩丸の短刀手に入つたるはお家の吉瑞。」

鬼次　イザお受取り、

兩人　下さりませ。

ト白旗と短刀とを出し牛若に渡す。

牛若　ホヽヲ出かした／＼、白旗鳩丸手に入る上は、伊豆の國へ立ち越えて兄頼朝と旗擧げなさん、なほも兩人手柄をいたせ。

鬼次　ハツ、仰せにや及ぶべき。

〽榮華にほこる平家の一門、管絃亂舞に心をゆだね、武におとろへし虚をはかり六波羅御所へ攻めいらば、不意の戰に度を失ひ、太刀よ鎗よと夕つげの、鳥の塒に迷ふが如く、むらむらぱつと逃げ散りて。

鬼三　その時こそは我も亦。

〽魚鱗鶴翼雁行長蛇、君の軍慮に從ひて、こゝにあらはれかしこに隠れ、千變萬化に戰はゞ、魔利支天の精靈たりとも、いかでこれには敵すべき、高名手

柄は手裏にあり。

兩人　御心安かれ若君樣。

〽勇氣はげしき若者に、辨慶ぞく〳〵小躍りし。

辨慶　ホヽヲ勇まし〳〵、この上は片時も早く伊豆の國へ御下向。

牛若　方々來れ。

皆々　まづお立ちあられませう。

〽勇み進んでたつか弓、旅立つ道や東路の、黃金花咲く返り咲、源氏の榮幾千歲、千人切の千の字を、千に重ねし國津民、萬々歲とぞ。

トこの內軍兵一人窺ひかゝるを、牛若見事に投げのける、又かゝらうとするを辨慶突き廻して軍兵の首を長刀にて打落す。

皆々　門出の血祭り、

辨慶　勝鬨々々。

皆々　エイ〳〵オウ。

へ祝しける。

ト皆々引張りよろしく、段切にて。

幕

菊畑と大藏卿（終り）

盛綱陣屋（もりつなぢんや）

近江源氏先陣館（盛綱陣屋一幕）

盛綱陣屋の場

役名　佐々木盛綱、和田兵衛秀盛、北條時政、信樂太郎、伊吹藤太、榛谷十郎高綱一子小四郎、盛綱一子小三郎。母微妙、高綱妻篝火、盛綱妻早瀬、腰元一二、三、四等。

本舞臺三間の間中足の屋體、向う金襖、上手塗骨障子屋體、よき所へ紅葉の立木。欄間通し、四つ目の紋付の陣幕を張り、下の方柵矢來垣根松の蹇みき。いつもの所陣門、こゝに早瀬裲襠衣裳にて長刀を持ち、腰元一二三四襷をかけ長刀を持ち、ぢやん／＼にて幕あく。

へ其源は近江路の、比叡山颪隔てられ、便り堅田の雁絶えて、武士の義は石山や、月の弓張矢叫びの、矢走の歸帆陣幕もひらめく比良の陣館、小三郎が初陣に、手柄初めと父の悦び、妻の早瀬軍の安否聞くまでは、心弛さぬ持刀

腰元共も鉢巻締め、暫しも油斷なかりける。

腰一　イヤ申し奥樣。もう御注進がありさうなものでござりまするな。

腰二　ソレ〳〵、お目出たい和子樣の御初陣、早う軍の吉左右を。

腰三　ソリヤもう大殿樣も御一緒なれば、定めて勝は知れてはあれど。

腰四　どのやうなお手柄遊ばしたやら。

腰一　少しも早う、

皆々　承りたう存じまする。

早瀬　オヽ、皆の者の言やる通り悴小三郎が初陣、どうぞ怪我過ちなく天晴の手柄しやるやう、神々樣へお願ひ申せば、早う注進が聞きたいわいの。思へば年端も行かぬ身で、我夫と同じやうに戰場へ赴くとは、アヽ持つべきものは男子御ぢやなア。

腰一　左樣でござりまする、幾何彌猛に思ひましても、

腰二　表役には立たぬが女子。

腰三　それに引替へ和子樣は、

腰四　大人勝りの御初陣に、

皆々　ござりまする。

早瀬　ほんに出陣しやる時手柄を見すると言やつたが、首尾よう手柄しやつた事か、早う聞きたい軍の様子、ア、待たるゝ身より待つ身とやらぢやわいなう。

皆々　モウ御注進がござりませう。

へ道半ばへ慌しく、遠見の軍卒馳せ來り。

トバタ〳〵になり、軍兵一人出て來り、

軍兵　ハツ、申上げまする。

早瀬　何事ぢや。

軍兵　ハツ、今日の軍味方充分の勝利、取分け小三郎樣には初陣の手柄始めに、高綱が悴小四郎を生捕り、はな〴〵しき軍功、さるに依つて御大將も、殊の外なる御滿悅にござりまする。

早瀬　シテ我夫には。

軍兵　ハツ、御雨所ながら御具足をお上下に召替へられ、道より直に石山の御陣所へ御出仕。追付御歸陣にござりまする。

〽云捨てゝこそ急ぎ行く、早瀬は心いそ〳〵と。

ト軍兵引返してはひる。早瀬こなしあつて、

早瀬　ア、忝い〳〵、お願申せし神々のお惠みゆゑに手柄して、恙なう歸りやるとは、このやうな嬉しい事はないわいなう。

腰一　さぞお嬉しうござりませう、御無事な上に今日の御手柄。

腰二　同じ初陣同じ歳の、高綱が子の小四郎を、

腰三　生捕に遊ばしたは、大の男子を仕止めしより、

腰四　遥かに増る和子樣のお手柄、

四人　お目出たう存じまする。

早瀬　小三郎が手柄話、母樣へお知らせ申しや。

四人　畏りました。

〽折柄一間に母の聲。（ト奥にて）

微妙　小三郎が初陣の功名、それへ往て聞きませう。

〽しづ〳〵と立出づる、早瀬は嬉しさ手を仕へ。

ト老母微妙、白髪髷切髪、裲襠衣裳にて立出でよき所へ住ふ。早瀬思入あつて、

早瀬　あの孫の小三郎、これからは猶祖母様の甘やかし思ひ遣らるゝ、さりながらひよんな事は、其手柄の相手が他人なればよけれど、矢張お前の孫の小四郎、嬉しいと悲しいと片身替りのお心を、思ひ遣つてをりますわいなア。

微妙　嫁女、そりや母へ當事か、尤も孫の名はあれど不所存な倅佐々木高綱、音信不通の中に出來た小四郎とやら、ついに顔見た事もなし、よし又不便に思へばとてから敵味方と別れた上、我も源藏義秀といふ弓取を夫に持ち、盛綱を產んだ母、涙かけてよいものか、そんな事言ひ出しても下さるな。シテ兵衛盛綱孫の小三郎は、まだ歸館召されぬか。

早瀬　ハイ、お二人ながらお具足を召替へられ、途より直に石山の御陣所へ御出仕遊ばしたとの注進、定めてきつい御褒美でがなござりませう。

腰一　奥様の御意の通り、

腰二　和子様お手柄始め。

腰三　大抵や大方の、

四人　御褒美ではござりますまい。

〽さゞめき渡る折こそあれ。（ト花道の揚幕にて、）

呼ビ　殿樣のお歸り。

早瀬　最早我夫のお歸り。皆の者お出迎ひ申しや。

四人　畏りました。（ト皆出迎ふ）

呼ビ　お歸り。

〽立歸る、佐々木兵衞小三郎盛淸、諸人の尊敬身の面目上下衣服も華やかに、

ト此内時の太鼓になり、花道より盛綱上下衣裳大小、小三郎同じこしらへ、後より小四郎陣立のなりにて繩にかゝり、軍卒繩取にて、後より家來一、二、三、四衣裳上下大小、軍卒附添ひ出て來り、直ぐ本舞臺へ來り。

軍兵　下にをらう。

ト盛綱小三郎二重へ上る。

〽顔見始めの孫かとも、言ふに言はれず面差の、別れし我子高綱に、似たと思へば不便さを、嫁の手前に紛らせど胸つぼらしな形容、見まいと思へど目にかゝる、血筋の因果ぞ詮方なき、兵衛盛綱謹んで。

トこの内微妙小四郎を見て思入。盛綱思入あつて

盛綱　忰小三郎初陣の手初め、是なる縄付生捕りし事。誰々よりも目差す大敵佐々木四郎左衛門が忰と、せしは、味方の強み抜群の功名と、時政御感斜ならず、御悦びの杯を下され、手づからの感状を下し賜はる、御前に居並ぶ諸大名すべて子を持つ程の人羨まぬ者なく、子息の武勇にあやかる爲、其處へも杯、此處へも頂戴と、持囃さるゝ親の面目。それゆゑに退出も遅なはる、残る方もなし、お悦び下さりませう。

〽語ふ内より早瀬がうき〳〵。

早瀬　ナント御覧じませ、軍の供したがる者を足手纏ひぢや留守してをれと、叱り付けて鎌倉に残してお出なされたれど、今度の軍に外れたら生きてはゐぬと、強請みに強請まれせう事なし、いつそ祖母様と三人連、後追うて來た時にも散々に叱られたが、今日の手柄を見た時は。よう連

れて來たと私が自慢。オヽ出來しやつた〳〵。産んだ母まで俄かに肩が勃つて來たわいなう。

腰一　和子様。

四人　お手柄〳〵。

〽褒めそやしたる姦しさ、微妙もともに。

微妙　出來した。

〽と勇んで見ても何やらに、濟まぬは胸の汐ざかひ、分兼ぬるこそ道理なり、

小三郎手を仕へ。

小三　別けて君の仰せには、囚人の小四郎首討つ事必らず無用、何時までも助け置いてこそ味方の計略、縛めは其儘にて隨分大切にしやれとの御事なり。ナウ小四郎殿、こなたとは從兄同士。初陣の軍に打負け、嘸無念にござらうな。

〽言はれて小四郎顔振り上げ。

小四　父様の豫ての敎へ、勝つも負くるも軍の習ひ、眞逆の時に逃げるのが侍の恥辱ぢやげな、生捕

られても恥とは思はぬ、早首斬つて下されよ。

〽眼を塞いだる立派さは、誠に父が子なりけり、物見の侍罷り出で。

ト水汲の軍兵〇出て來り、花道にて、

〇　ハツ、申上げまする。和田兵衛秀盛と名乘り、盛綱公に見參致さんと、供廻りも僅か兩三人にて見えられましてござりまする。

〽訴ふれば。

家一　スリヤ敵陣より秀盛が、

家二　唯一人にて此陣屋へ、

家三　見參なせしは心得ず、

家四　イデ我々が、

四人　追返さん。（ト家來四人立ちかゝるを、）

盛綱　イヤ何れも待たれよ。ハテ心得ぬ。敵方の侍大將輕々しく來たるは一物。（ト思入あつて）ソレ、秀盛殿を是へ通せ。

○ハツ。（ト軍兵引共返してはひる）

盛綱　囚人奥に取逃さぬやう、心を附けい。母人には暫時此場を。

微妙　心得ました。そんなら盛綱。

盛綱　先づ〳〵。

〽勸むる詞に是非なくも、悄るゝ孫と勇む孫、心は二つ奥の間へ、伴ひてこそ入りにけり。

ト微妙先に、早瀬小三郎小四郎士卒四人、腰元附いて奥へはひる。此時花道揚幕にて、

呼ビ　秀盛殿お入り。

〽甲冑の姿引替へて、長上下踏みしだき、伊達ごしらへの大小も、さしも無骨の荒くれ男、目禮式禮悠々と。

トこの内花道より秀盛、長上下大小にて出て來り、花道に留る。

盛綱　珍しや秀盛殿、まづ〳〵是へ。

秀盛　許し召され。

〽いかつがましく打通り、上座へどつかと押直り。

ト秀盛二重上手に住ひ、

扨々此度の合戰、佐々木三浦斯く申す和田兵衛、火水の勝負決せんと牙を嚙んで相待つ所に、鎌倉の悠揚武士、一日寄つては二日見合ひ、睨み合うて日を送る、此方はほつと退屈。それゆゑ今日は具足も取置き泰平の姿、坂本城より使者に參つた。

盛綱　ハア、、これは〱名にし負ふ和田兵衛殿、よく〱大切な儀なればこそ、御使者の趣逐一に仰せ聞けられ下さりませう。

秀盛　イヤ別儀でござらぬ。今日高綱構にて其許の手へ生捕られし小四郎高重、チト此方に入用なれば、唯今お返し下されとの使者なり。

〽事もなげに述べければ。

盛綱　ハ、、、、コハ存じの外なる御事、何ぞや一人の童づれに、侍大將の自身馬を向けられしは珍說々々、あの小倅一人がなければ合戰もえいなされぬか、何故に左程の懇望、事可笑しう存ずる。

嘲笑へば。

秀綱　實に尤、併し此方に不審なるは、其童小四郎を貴殿の子息が生捕りしを、一城をも乘取りしが如く悅び勇み、鎌倉方勝軍の基なりと、籏を叩き勝鬨作つて引かれしは是如何に、左程鎌倉方懇望せらるゝ小四郎ゆゑ、此方にも惜しく存じ是非所望に參つた、其代りには少分ながら此和田兵衞が髭首進上申す。お望ならば手柄次第、隨分取つて御覽なされ。

むづと坐したる不敵の顏色、盛綱打笑み。

盛綱　扨々弟ながら高綱は、大功の勇士と思ひしに、忰に迷ふ未練の性根。

秀盛　其處を察して朋輩の誼。

盛綱　命を救ふ情の使者か、あれしきの小兒、如何やうともと申したけれど、生捕の帳にも記せし上は、時政公より預りの囚人、盛綱私には渡されず、ならば踏込み奪ひ取つて歸られよ、其座一寸も立たせはせぬ。

反りうつて詰めかくれば。

秀盛　ア、お急きなされな、貴殿と拙者唯今こゝで刺違へては、敵味方によき大將二人を失はゞ、是

則ち兩損、此位な事はお手前で事が分らうと存じたに、時政公へ伺はんとは主思ひ、御邊の儘にならぬ虜の小四郎、よし〳〵此上は石山の陣へ參り時政公に直談して、自他とも所望して罷り歸る、さりながら敵地といひ、大將へ直談に帶劍も失禮至極。イヤ盛綱殿、御近習の衆一兩人、刀掛の代り案內がてら借用申す。

盛綱 オ、そりや兎も角も勝手次第、左あらば石山へ御案內申させん。ヤア〳〵近習士卒の者共、秀盛殿を案內致せ。

六人 ハ、ア。

へ詞の下より具足固めし覺えの力者、ばら〳〵と取卷いたり。

ト六人袴股立のなり、軍卒四人槍を持ち出て、

帶劍是へ。

秀盛 ハテ仰山な案內者。敵の陣所へのう〳〵と一人參る和田兵衞、不知案內の無骨者、萬事よろしう。（ト秀盛皆々へ大小を渡す。皆々重さうに持ち、）お賴み申す。

盛綱 氣遣ひあるな。コレ必ず大將の御座近く、な、（ト思入あって）お引合せ申すならば大事な珍客、

隨分御酒を、合點か。

六人　ハツ、心得ました。

秀盛　イヤ御酒とは忝い、我等別して大好物、御馳走ならば湖もかへ干してお目に懸けう、又お肴の飛道具、槍長刀の串肴、何本なりとも賞翫致す。盛綱殿。

盛綱　和田殿、御苦勞。

秀盛　案内大儀。

〽案内大儀と長袴、虎を放して遣る勇氣、火焔の中へ行く大膽、心の具足鐵石の石山指して出で丶行く。

トよき程より時の太皷になり、秀盛下手へ行くを皆々槍襖にて圍ひ、よろしく附添ひはひる。ト床出語りになり。

〽盛綱は唯茫然と軍慮を帷幕に打碎き、思案の扇からりと捨て。

盛綱　母人それに在するや。

〽音なふ聲に。（ト上手障子屋體の內にて）

微妙　母は是にをりまする。

ヘ母微妙一間より立ち出で、、

ト上手障子屋體より以前の微妙出て來り、

此母を呼びやつたは、何ぞ用ばしあつての事か。

盛綱　チト折入つてお頼み申す儀がござつて。

微妙　そりやアノ姿に。

盛綱　先づ〱。

ヘ陣屋の隈々後先見廻し、母の傍にすり寄つて。

親の役目を子が勤むるは順なれども、御老體の母人に御苦勞お頼み申さねば叶はぬ事、申さね先から心得たとある、御誓言承りたう存じまする。

ヘ事あり氣なる願ひの品、聞かねどさすが佐々木の後室打うなづき。

微妙　親子の仲で改めて、頼むとあるはよく〱の事ならめ、仔細は知らねど心得ました。

盛綱　ハ、早速の御承知忝し、お頼みの仔細と申すは、最前の四人拙者が爲には甥、母人の爲には孫の小四郎を、今宵の内に母の御手にかけられて。

〽聞きもあへず。

微妙　コレ〳〵盛綱、最前我君よりの仰せ渡され、必ず小四郎に過さすな、殺すなとの御諚ならずや。

盛綱　サ、其殺すなとの御諚ゆゑに、猶以て殺さにやならぬ。

微妙　何と言やる。（ト合方になり）

盛綱　辯舌を以て人を懐くる北條殿、小四郎を殺すなとの上意は、生け置いて人質となし、子を餌に飼うて、佐々木四郎高綱を味方に付けん謀、鏡にかけてあらはれたり、なか〳〵心を變ずべき弟高綱とは思はねども、如何なる大丈夫も我が子の愛には迷ふ習ひ。萬が一此謀に陥入つて、降參などの心付かば、子ゆゑに不忠の名を流さん事の殘念至極、よしさはなくとも、小四郎が虜となつて息ある内は、恩愛といふ大敵に高綱が弓勢も弱り、刃金も自然と鈍る道理、迷ひの種の小四郎、一時も早く殺してしまへば弟が義心猶々鐵石、これが兄弟弓矢の情、とあ

つて我が手にかくる時は、主君北條の命に背く、幼心に此の理を辨へ自身に切腹するならば、我は油斷の誤りばかり、兄が義も立ち弟が忠も立つ、双方全き此役目は御苦勞ながら母人、密に小四郎に切腹させ下されかし、現在の甥の命、申し宥めて助けるこそ情とも言ふべけれ、殺すを却つて情とは。

〽情なの武士の有樣や。

如何なれば兄弟敵味方と引別れ、今朝の矢合せに敵は甥なり味方は我が子、肉身と肉身の劒を合はす血汐の瀧。

〽修羅の巷の攻め太鼓、胸に磐石こたゆる辛さ。

弓馬の家に生れし不肖、コレ。

〽聞分けてたべ母人と、事を分けたる物語、母は手を打ち。

微妙　尤々。兄の其方も弟の高綱も我子に依怙はなけれども、隔てゝゐる程不便も増り、ありやうは其方にも心を置いてゐましたが、弟に不忠の惡名を付けますまいと、左程まで心遣ひの

親切。オ、忝いぞや。

ヘ嬉しいぞや。

世の譬へにも、小の蟲を殺して大功を立てる事、眞實眞身は子よりも可愛い孫なれども、思切つて切腹させう。

盛綱　オ、お出來しなされた。健氣者とは見ゆれども、幼き小四郎、若し小腕に仕損じなば、母人よろしう御介錯を。

微妙　オ、承知しましたわいの。

ト此時本釣鐘。盛綱思入あつて、

盛綱　はや短日の暮近し。

微妙　ア、思へば佐々木兄弟が、苗字を穢すか名を揚ぐるか。

盛綱　二つの境、涙ばしかけ給ふな。

微妙　氣遣ひ召さんな、後れはせぬ。

盛綱　必ず氣强う。（ト差添を抜き）遊ばされませう。（ト母へ渡す。）

へ渡す一腰受取る腰の張弓に、詞つがうて別れ入る。

ト盛綱微妙思入あつて奥へはひる。風の音、時の鐘になり、

へ峯吹通す凩に園城寺の鐘もろとも、誘れ來る白羽の矢、紅葉の茂みに射込みしは、主は誰共人目せく陣笠目深に篝火が、男出立の半弓にやわか仇には歸らじと、陣屋間近く慕ひ寄り。

ト此内上手の紅葉の立木へ差金の矢文立つ。よき程に花道より篝火着流し、上へ陣羽織を着、半弓を持ち陣笠をかざして出て來り、舞臺へ來り思入あつて、

篝火　和田殿の供廻りに紛れ込み、こゝまでは忍び入つたれど。

へ用心固き陣屋の木戸口。

心を通はす矢文の謎、小四郎が目に懸れかし、祝ひ祝うた初陣に忌はしい纏目の恥、外の手でもある事か從弟同士の小三郎、憎らしい手柄顏。甥を縛らせ伯父の身で、それが本意か恨めしい、どうしてゐやるか唯一目、逢ひたいものぢやなア。

へ見たい逢ひたい間の戸に、我が身を菱と楯板も、通るは涙の矢數なり、洩れ

てや奥に聲高く。

早瀨　侍中々々。夜廻り怠り巾されな。

〽女の聲も敵の中、胸驚かす篝火は、差足ながら忍び行く。

トこれにて篝火下手の柴垣へ忍ぶ。

〽障子をさつと目早の早瀨、矢文拔きとりつく〴〵詠め。

扨こそ〳〵、羽響もなき忍びの矢文は、女業と推量に違はぬ手跡、狀の文體にもあらず。「名にし負はゞ逢坂山のさねかづら人に知られて來るよしもがな。」と古歌を書きしは、ム、（ト思入あつて）手は見知らねど相嫁の篝火、囚れの小四郞に此陣屋を拔け出でて、人知れずこそ來るよしもがな、こゝは所も近江路や、逢坂山の關の戶をあけて逢はんと知らせの謎。エ、侍の母のやうにもない、未練なさもしい、軍に立たば討死は覺悟の前と、立派な小四郞に惡氣をつけ、もし取逃がしなどしたら其不調法は誰にかゝる、一家の誼、生捕つても命に別條ない樣子、知らせて安堵さす程に必ずこゝらにうろたへて、親子一緖に繩目を受け、夫の名まで汚しやんな。

〽恨みの裏の反古文、打返したる返事の古歌、矢立の硯さら〳〵と、書認めて括りつけ内にも人目重藤の弓打つがひ、小松にひやうと手答へと、共に閉切る障子の內。

ト この內早瀨有合ふ硯箱を取り、件の文の裏へ返事を書き、矢に括り付け、長押の弓を取り下の方の松を目當に射る、差金にて矢文立つ。早瀨思入あつて奧へはひる。

〽稚心に油斷せぬ、繩付ながら小四郞が、そつと一間を忍び出で。

ト 障子屋體より小四郞、繩付のまゝ忍び足に窺ひ出で、

小四　今伯母樣の讀まつしやつた矢文の手は母樣、こゝを拔けて戾れとの、知らせは聞いても敵の中。

〽見咎められては恥の恥。

とは言へ母樣何處にござる。死ぬとも一寸顏が見たい。

〽そろ〳〵と拔足の、危き毒蛇の陣の口、あはや後より窺ふ微妙。

ト 小四郞表の方へ行かうとする。此時奧より母微妙、廣蓋へ水上下九寸五分を載せ、これを持ち窺ひ出て、

微妙　小四郎待ちや。
　〽聲にびつくり。
小四　アイ、どつこへも行きや致しませぬ、お許しなされて下さりませ。
　〽わな〳〵震ふ有様を、つく〴〵見れば見るにつけ。
微妙　同じ佐々木の血筋でも、扨も果報の拙い子や、囚人の身となつたれば子心にも氣遅れして、見窄らしい顔容。
　〽今宵限りの命とは、言はねど蟲が知らすかと、思へばそゞろ先立つ涙、胸に押下げ撫下し。
　コレ孫よ、爰へおぢや。コレ、※は其方の婆ぢやわいなう、器量骨柄揃つた子に痛々しい此縄目、解いて其方に此婆が、言聞かす事があるわいなう。
小四　アイ〳〵。
　〽立寄り解く血筋の縄、子ゆゑに惹かれ篝火が、又立戻る陣屋の前。

ト柴垣の陰より篝火出て、矢文を拔取り開き見て、

篝火　矢文の返事は早瀨の手蹟。「これやこの行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の關。」（ト思入あつて）とは、時節を待てとの事かいなう。

〽いかにと見やる戶の隙間、微妙は孫の手を取つて。

微妙　なう小四郎、高綱に別れてから十三年、孫ありとは聞いたばかり、懷かしさ逢ひたさは膝元で育つた小三郎より、其方の不便さは百倍、片時も忘るゝ隙はなけれども、思ふに任せぬ敵味方、此上下は婆が其方へ引出物、着て給ひなう。（ト廣蓋の上下を出す）

〽何心なく押戴き、取上げて不審顏。

小四　申し婆樣、此上下には何故紋がござりませぬ、九寸五分が添へてあるは、功名手柄せよとある首搔き出でもあるまい、こりや私に腹切れとの、死裝束でござりますかえ。

〽悟る悧發に驚く篝火、微妙はかばと泣倒れ、暫し詞もなかりしが、

微妙　オヽ遉がは親の子程ある、人に勝れてそのやうに聞分けよい程助けたさ、膝一杯に迫れども殺

さにやどうもならぬといふは、父親の高綱が武勇智勇が勝れたが、其方の身の仇敵、助けよとする北條殿は、子を人質に高綱を降參さする謀、それまでは殺しもせず、まして助けて歸しもせず、何時までも陣中に捉へて置くとの主命、生きてゐる程高綱が武勇の妨げ、ナコ、の道理を聞分けて、サア潔く腹切つてたも。エヽ、見れば見る程目付なら鼻筋なら、眉に一つの黒子まで、父親とこのやうに智惠才覺まで違はぬもの、老先も見ずむざ〳〵と、蕾の花を散らすかいなう。

〽老の繰言涙の齒莖、洩れて外面に聞く嫁の。

篝火　イエ〳〵、何と仰言つても我子は殺さぬ、殺しやせぬ。

〽延びあがれども芦垣の、隔てる中ぞ是非もなき、母の心の通じてや。小四郎おとなしく手をつかへ、

小四　私が命一つで、父樣や伯父樣の手柄になる事なら、何の惜しみは致しませぬ、もつとも腹の切りやうも稽古して置いたれば、切損ひもせまいけれど、私が一つの願ひは昨日軍の初陣に、直に敵に生捕られ、此儘死ぬるは弓矢神の冥加にも盡きたりと。

〽なんぼう悲しい口惜しい。

どうぞま一度お歸しなされ、父樣母樣に唯た一日逢うた上、せめて雜兵の首一つ取つて、立派に死んで見せませう。このお願ひを。

微妙　ア、これなう、賢いやうでもさすがは子供、預りの囚人敵へ歸して盛綱が武士が立つものか。父や母に逢はされる程ならば、此憂目はないわいの、とは言ふものゝ逢ひたいは道理ぢやわいの、オヽ、尤ぢや。世が世の時なら二人の孫。

〽右と左に月花と。

並べて置いて老の樂しみ、此上もあるまいに、生捕るも孫生捕らるゝも孫、小三郎が手柄したと仰ぎ立つる眞中へ、縛られて引出され、顏見た時の婆が胸は。

〽張り裂くやうにありしぞよ。

迚も甲斐ない其方の命、最期が未練にあつたなどゝ口の端にかけられては、親高綱が弓矢の名折れ、尋常に死んでたもや。介錯はこの婆、可愛い孫を先立てゝ、何時まで因果の恥曝さうぞ、婆も直に自害して三途の川を手を引いて。

〽渡るわいのと抱きしめ、泣く〳〵劒差付くれば。

小四　コレ婆様、父様や母様に逢ふまでは、どうぞ許して下されや。

〽未練も親子の恩愛に、道理といとゞ目もうろ〳〵、孫もうろ〳〵隙あらば、
逃げんと見やる木戸口に、

篝火　母はこゝにゐるわいの。

〽こゝにと母の呼子鳥。

小四　ヤア母様か。

〽飛立つばかり駈出す孫を引留めて、急立つ老母は聲あらゝげ。

微妙　エヽ未練者卑怯者、扨は母親と内通してこゝを拔け出る心ぢやな、それなれば猶助けられぬ、
望の通り親にも一目逢はした上は、サア〳〵切腹ぢや。

小四　サア。

微妙　但し婆が手にかけようか。

小四　サアそれは。

兩人　サア〳〵。

微妙　ナ、何と。

〽何と〻嚇しに拔いて振上ぐる、劒の下に手を合はせ。

小四　母樣の聲聞いてから一體命が惜しうなつた。どうぞ助けて、お情ぢや。堪忍して下さりませ、アレイ〳〵。

〽と逃廻り、おくれる孫に猶氣おくれ。

トこの内小四郎手を合せ、逃廻りになり、

微妙　エヽコレ最前の健氣の覺悟忘れしか、伯父が見ぬ先自害して立派な最期と褒められて呉れ、コレ孫よ、婆が方から手を合せ。

〽頼むと言へど逃げまどふ、外には酷やつれなやと、恨みも三方三惡道。

前生の敵同志が現在の、愛し可愛の孫や子に、生れて憂目を見するかいたろ。

〽老母が親身の血の涙、時雨の中の枯れ紅葉、露より先に散りぬらん、折柄颯と山風の遙かに陣鐘攻め太鼓。

ト この内よろしくあつて、ドンヂヤン竹法螺になり、

ヤ、あの物音は、サ、孫おぢや。

〽事こそあれと早足の早瀨、長刀搔込み走り出で。

ト 早瀨奥より長刀搔込み出て來り、

〽木戶口開けば駈入る篝火。

ト 陣門をあける。篝火ツカ〳〵と内へはひるを早瀨附廻し、

早瀨　待つた〳〵。高綱がおかもじ、コリヤ何處へ。

篝火　ハテ知れた事。我子の小四郎取返す。

早瀨　ならぬ〳〵。相嫁の初見參。此長刀に乘りたいか。

篝火　イヤ推參な。

〽いや推參なと軋み合ふ、眞中に三郎兵衞、小四郎小脇にひん抱へ。

ト此内奥より盛綱出て來り、兩人を隔て小四郎を抱き、

盛綱　石山の御陣所に事あると覺ゆるぞ。ヤア〳〵小三郎、何處にある。

小三　ハア、。（ト奥より小三郎陣立兜を持ち出て來り、）唯今御加勢仕らん。

へ用意の小具足兜の緒、締める間遲しと駈け出す。

トドンチヤンにて小三郎逸散に花道へはひる。

へ引違へて知らせの軍卒駈け來り。

トドンチヤン花道より、信樂太郎好みのこしらへにて出て來り、

信樂　御注進々々々。

盛綱　信樂太郎氣遣はしい。何事なるぞ。

信樂　ハツ、されば候、時政公の御計略の如く、佐々木四郎左衛門高綱、我子を取られし憤り。

へ今宵自身に馬を乘出し、手勢やう〳〵二千餘騎、鎌倉の總大將時政公に、直に見參仕らんと。

死物狂ひのその有樣。

ヘ薙立て斬り伏せ、縱橫無盡の働きにて、鬼神の如くに見え候。

併し味方は豫ての用意、大將の陣は數萬の警固、盛綱殿には氣遣ひなく、虜の悴を守護あるべしとの御事なり、猶追々の御注進。

ヘ申し捨てゝぞ駈り行く、三郎兵衞大息吐き。

ト信樂太郎花道へはひる。盛綱思入あつて、

盛綱　南無三寶しなしたり、さしも拔からぬ弟高綱、子ゆゑの闇に心くらみ、謀に陷入つたるな摩利支天なればとて數萬騎のその中へ、一騎がけの死軍、討死せん事眼前たり。此上は親の御慈悲。佛間で御回向なされかし。

微妙　盛綱。

盛綱　母人。

微妙　アヽ是非もなき。

盛綱　武運の末。

へ殘念さよとばかりにて、眼を閉ぢて奥に入る。

ト盛綱微妙小四郎をつれ、思入あつて奥へはひる。

へ篝火猶も氣はそゞろ、我子も氣遣ひ夫も如何、千々に碎くる軍の破れ、えいえいおゝと勝鬨は、敵か味方か二人の妻、胸の陣鐘足も空、二度の注進勇みの大音。

トドンヂャンになり、花道より伊吹藤太甲斐々々しきなりにて出て來り、

藤太　御注進々々々。

早瀬　軍の様子は何と〳〵。

藤太　ハツ。(ト肥前節になり、)御悦び候へ、軍は充分味方の勝利、大軍に取圍まれ集り勢の高綱方、度を失うて逃げ去るを。

へ或は搔首或は射取り、殘る兵散々に追ひ捲り。

諸葛孔明と呼ばれたる、佐々木四郎左衛門高綱を、十郎が榛谷討留めて候、猶追々の御注進おさらば。

〽戦場指して急ぎ行く。（トジャン〳〵にて花道へはひる。）

〽聞くより妻はハアはつと、心散亂燃え立つ篝火、夫の首級を敵方へ渡すべきぞ、行くをやらじと留むる早瀬、互に爭ふ折柄に。

呼ビ　大將軍時政公御入。

早瀬　ナニ時政公の御入とな。我夫へ告げ知らせん。

〽はッと早瀬は大將の、御座の設けに走り入る。

トこゝへ腰元出て燈臺の芯を切り、敷物を敷く事あつて、早瀬みな〳〵奥へはひる。篝火は下の柴垣へ忍ぶ。

〽龍の雲にひいるが如く、一陽の春を待つ平の時政、近習の武士古郡新左衛門佐々木小三郎盛清御供に扈從して、御召替の鎧櫃御座の次に飾らせて、寛然と入り給へば。

ト花道より時政、唐の兜鎧狩衣陣立美々しきこしらへ。これに古郡新左衞門、陣立首桶を持ち、小三郎後に、從者△□陣笠の軍兵大勢、誂への鎧櫃を擔ぎ出て來る。

〽三郎兵衛母微妙等敬ひ招じ奉る。

ト奥より盛綱出て來り、同じく老母微妙附添ひ出迎ふ。時政二重上手床几にかける。みな〳〵左右に附添ひゐる。

〽竹の下の孫八慌しく罷出で。

ト花道より竹下孫八、好みのなりにて走り出て、

孫八　最前和田兵衛秀盛御陣所へ參りし所、日頃好める酒を強ひて醉伏させ、居間の四方に金網をかけたれば、籠の鳥と思ひの外のしれもの、隱し火矢を以て屋根を打拔き、御座の間の白旗を奪ひ取つて、立退きましてござりまする。

〽言上すれば時政公。

時政　ハ、、、、、敵の陣中へ鎧も着せず唯一人、踏込む程の不敵者、汝等が手にあふべきか。第一の大敵此佐々木、古の將門に習ひ、一人ならず二人三人影武者あつて、何れをそれと見分け難し、此佐々木が僞首か、弟が首よも見損ずまじ、兄盛綱、實檢せよ。ソレ。

〽仰せの下に新左衞門、首桶御前に直し置く。

新左　盛綱殿。

皆々　イザ實檢召され。

〽三郎兵衛承り御大將に一禮し、無慘の弟が死首に是非もなき對面やと、呑込む淚後より、父の死顏拜まんと、窺ふ小四郎、盛綱が引あくる首桶の、一目とも見も分かず。

トこの內小四郎奧より出て後に窺ひゐて、盛綱首桶をあける、小四郎これを見て、

小四　ヤア父樣、嘸口惜しかろ、わしも後から追付きまする。

〽氷の刄雪の肌、腹へぐつと突立てる。

小四郎差添を拔き腹へ突込む。

盛綱　何故の切腹、仔細を巾せ、いかに〳〵。

〽人々慌て介抱に、小四郎きつと目を見開き。

小四　何故死ぬとは、伯父樣とも覺えませぬ。卑怯未練も、父樣に逢ひたさ。

〽父を先立て、何まざ〳〵と生恥を曝さんや。
親子一緒に討死して、武士の自害の手本を見せる。
〽きり〳〵と引廻す、其手に縋り母微妙。

微妙　なう、其立派な心を知らず、叱つた婆が面目ない、怺へてたもれ。
〽と右左、目をしばたゝく三郎兵衛。

時政　三郎兵衛、猶豫は如何に、早や實檢致せ。
〽御上意に、疵口拭ひ耳際まで、とつくと改め古實を守り、謹んで兩手をさげ。

盛綱　矢疵に面體損じたれど、弟佐々木高綱が首に相違御座なく候。
〽御前に直し押下れば。

時政　ホヽウ、骨肉の兄が實檢といひ、首に向つて小四郎が恩愛の涙切腹の有樣、誠の首の證據明白、思へば昨日は此首に背後を見せし時政が、今手の下に誅罰する武運の强さ。ハヽア心地よや嬉しやなア、今といふ今時政が枕を安く寢るは盛綱が働き、出來す〳〵、我が着替の鎧一

領、當座の褒美に殘し置く、小三郎其外には　陣中にて勝軍の恩賞せん、皆萬歳を唱へよ。

從○　普天の下率土の濱。

從△　君の威德に切り從ひ、

從☒　今は刃向ふ敵もあらず、

從□　御代萬歳の御壽、

孫八　唯々お目出たう、

皆々　存じ奉る。

時政　盛綱、返す〳〵も過分なるぞ。

〽凡人ならぬ其裝ひ、霞棚引く御着長、これや東の旭の光、邊りを排ひ勇み立ち數多の士卒附從ひ、本陣指して歸らるゝ。

ト時の太鼓になり、皆々附從ひ花道へはひる。

〽盛綱あたりをとつくと見廻し。

盛綱　佐々木高綱の妻篝火、計略の僞首仕果せたれば、小四郎に最後の暇乞許す、これへ〳〵。

〽と一言を、聞く間遲しと轉び出で、我子に犇と抱きつき、わつと泣くより外ぞなき、涙ながらに母微妙。

微妙　僞首と知つて大將へ渡した其方は、京方へ味方する心底か。

盛綱　イヽヤ、いつかな心は變ぜねど、高綱夫婦が是程に仕込んだ計略、父が爲に命を捨つる幼少の小四郎が僞り神妙健氣さ、不忠と知つて大將を欺きしは弟への志、彼が心を察する所　高綱生きてある内は、鎌倉方に油斷せず、一旦討死せしと僞つて山奥にも姿を隱し、不意を討たんず謀、然れども底深き北條殿、一應の身替りはなか〳〵喰はぬ大將、そこを謀つて一子小四郎をうま〳〵と此方へ生捕せしが手段の根組、最前の首實檢に僞首を見て父上よと、誠しやかな欺瞞の有樣に、大地も見ぬく時政の眼を晦ませしは、敎へも敎へたり覺えも覺えし親子が才智、見す〳〵僞首とは思へども、か程思込んだ小四郎に、何と、

〽犬死がさせられう。

主人を欺く不調法。申譯は腹一つと極めた覺悟も。

〽負うた子に敎へられ、淺瀬を渡る此佐々木。

甥が忠義に比べては、伯父が此腹。

〽百千切つてもかけあひがたき最後の大功。

其方が命はナ、京鎌倉の運定め、出來いたなア。

〽出かしたと手負ひの顔打守り〳〵、悲歎の涙に暮れければ、篝火はいとゞ搔暮れて。

篝火　子を褒めらるゝ親の身の悦ぶは常なれど、生きて功名手柄して今の仰せに預からば、なんぼ嬉しかるべきに、年相應より悧潑なが産れついた此子の因果。如何に武士の習ひぢやとて、斯う斯う自害せいと教へる親の胴慾さ、可愛や初陣の初めから死に行く事合點して、おりや侍の子ぢやによつて討死するは嬉しいけれど、死んだら父様や母様につひ逢ふ事が出來まいかと。

〽そればつかりがと言ひさして、泣顔見せず勇んで行きし其立派さ。

天晴れ弓矢打物まで、誰に劣らぬ物覺え。腹切事までこれ程に。

〽器用になくば何事ぞと、手負の耳に口差寄せ。

此深傷ぢやもの、耳も遠かろ目も見えまい。今伯父樣の仰言つた事聞き取りやつたか、其方の命捨てたので、高綱殿の忠義も立つと褒美のお詞、それを未來の引導に迷はず佛になつてたもいなう。

〽言聞かすれば嬉しげに。

小四　そんならわしが死ぬるので、父樣の軍が勝になりまするか、エヽ忝い。婆樣は何處にぞ、わしや縛られても卑怯ぢやないぞえ、伯父樣伯母樣婆樣にも母樣にも、逢うて死ぬるは嬉しいが、唯た一つの悲しいは、父樣に〳〵。

〽後は言ひ得ず舌硬はり、次第々々に弱り果て、惜しや實生の初花も、無常の風に散りて行く。

トよろしく小四郎落入る。

微妙　コレナウ小四郎、孫やい、臨終の際に父親を尋ねて死ぬる子の心、思遣つて唯一目何故顏見せに來て呉れぬ、千騎萬騎の大將にも、

早瀨　なるべきものを栴檀の、

篝火　二葉で枯らせし胴慾は、
微妙　神も、
篝火　佛も、
三人　なき事か。
　　〽と歎く微妙の聲限り、涙の早瀬篝火も、消ゆるばかりの思ひなり、三郎兵衛
　　泣く目を拂ひ。
盛綱　ハア、歎きに紛れ遲れたり。實檢を仕損じたる鎌倉への申譯、母人さらば。
　　〽差添に手をかくれば。
　　　ト此時奥にて、
秀盛　ヤア〳〵盛綱、和田兵衛秀盛これにあり、敵を見かけ自害とは後れたるか。
　　〽聲かけて立出づる。（ト秀盛奥より出る。盛綱見て、）
盛綱　ム、幸ひのよき敵、歸らば其儘歸さんに、運盡きたる秀盛遁しはせじ、其處一寸も動くまいぞ

〽柄に手をかけ突立つたり。

秀盛　オ、和田兵衛秀盛が、南蠻流の懐鐵砲受けて見よ。

〽どうと打つ、覘ひは外れて鎧櫃、内に忍びし榛谷十郎、太股射抜かれのたうつたり。

見よや盛綱、底の底まで疑深き北條の隠し目附、汝が手にかけざれば不忠に非ず、今又御邊が自害せば鎌倉への義は立つべきが、佐々木の首は僞物なりと忽ち露顯し、是までも碎きし心は水の泡、時を待つて佐々木高綱、誠はこゝにと切つて出る其時に、潔く切腹せば忠も立つ義も全し。腹の切りやう早い〱。

盛綱　ハ、ア、實に誤つたり我命、暫く生きるも弟へこれも情の一つには、甥への寸志追善供養。

秀盛　野送り萬事も一家の内證。

盛綱　諸事何事も此座限り。

秀盛　表は京方。

盛綱　鎌倉方。

〽右大臣實朝の、御座の白旗奪ひ取りしは。

秀盛　軍の吉左右、留めて見よ。

〽留めて見ぬかと出でゝ行く。

盛綱　ヤア、盛綱が陣中にて、味方の武士を討つたる曲者、返せ。

〽戻せは弓矢の儀式。

微妙　孫よ、甥子の亡骸に、

早瀬　憂き事三井の暮の鐘、

篝火　消え行く子より親心、

秀盛　我から崎の夜の雨、

盛綱　父には一目。

〽粟津の嵐、木の實の紅葉搔寄て、夕を照す瀬田の橋、門火は狼煙敵味方。

トこの内早瀨篝火机へ香華を供へ門火を焚く。

早瀬　重ねて再會。

篝火　おさらば。

秀盛　さらば。

盛綱　ヘ別れゆく。

トよろしく段切にて。

幕

盛綱陣屋（終り）

阿古屋琴責
あこやのことぜめ

檀浦兜軍記（阿古屋琴責＝一幕）

阿古屋琴責の場

竹本連中

長唄連中

役名　畠山重忠、榛澤六郎、岩永左衛門、遊君阿古屋、竹田奴大ぜい。近習、捕手等。

本舞臺高二重三間の間、紗綾形大襖田緣附、白の幔幕、笹りんどうの紋附。上下白壁腰板の袖。既附。前に三つ道具建てあり。すべて鎌倉問注所の模樣。所作舞臺敷詰め、出語り。時の太鼓にて幕あく。

へ鵰の脛短しといへども、是を繼がば憂ひなん、鶴の脛長しといへども、是を断たば悲しみなん、民を制すること此理にひとし、されば治る九重に、猶も

非常のいましめの、水上清き堀河御所、當時鎌倉の嚴命にしたがひ、秩父庄司次郎重忠、私のはからひなく、道に曇らぬ十寸鏡、智仁勇士とかゞやけり。

ト正面より重忠長上下にて出て來り、眞中に住ふ。上手寄り後ろに金火鉢、衝立置いてあり。

淨へ 同席に相並ぶ岩永左衞門致連、南都東大寺の建立より、直樣都に押止まり、重忠の助役と號し、惡七兵衞景清が所在をさがす邪智佞奸、表は忠義に見せかけて己が遺恨をさしはさむ、心の底の二股竹、虎の威を藉る狐とは、きよろつく面にあらはれたり。

ト岩永左衞門上手より上下にて出て來る。

淨へ かゝる折柄秩父の郎等、榛澤六郎成清御前に出で。

ト花道より榛澤六郎上下大小にて出て來り、手をつかへ、

六郎 ハア仰せにまかせ繩をゆるし、さま〳〵宥め不便を加へ尋ね問ひ候へども、何分景清が行衞存ぜぬとばかり、外に出す口も是なき故、召連れて候。

淨へ 披露なせば。

重忠　是へ呼出せ。

六郎　ハツ。お次に控へし遊君阿古屋、これへ召連れい。

捕手　ハア。

淨へ　簾を上げて引出す、姿は伊達の補襠や、縛の繩引かへて、縫の模様の糸結び、小褄取る手も儘なれど胸はほどけぬ思ひの色、形は派手に氣は萎れ、筒に活けたる牡丹花の、水上げかねる風情なり。

ト花道より阿古屋補襠姿にて、捕手四人附添ひ出て來り、本舞臺へ來り、よき所に住ふ。

岩永　ヤア不念なり榛澤、科人に繩も懸けず、其上見れば拷問に疲れたる氣色も見えぬが、エ、聞えた／＼、扨は御邊が今日の拷問生温くやられしな、よい／＼明日は拙者が受取り、さう／＼家來任せにもなるまじ、自身の手並見せつけ、景清が所在ほざかし見せう。侍共、やい、あの女めを、岩永が屋敷へ引取れえ。

淨へ　例の麁忽と重忠押とめ、いや先づ待たれよ岩永殿。

重忠　繩をゆるめしも榛澤が私ならず、某が了簡其上に今日の暮までは此方の計ひ、その許のお構

ひない筈、入らぬ世話御無用々々々。コリヤ阿古屋、今日もまだ白狀せぬ由、ハテサテしぶとい、何故言はぬ、さりながら無理とは思はぬ、義理と情を表に立つるが遊君の習ひ、いかに責めらるゝが辛いとて馴染を重ねた夫の行衛、つい應とも明されまい、さなきだに流れを立つる女は、誠なき者と一むきに心得し輩もあれば、それらが譏もうたてく思ひ、又は同じ憂き節を勤める友朋輩の顏汚し、などと思うての事ならんが、此處をとくと合點せよ、景清が行衛存すべき者なればこそ、搦め取つて詮議もする、有りやうに白狀すれば、忝くも鎌倉殿の御意を安じ奉り、天晴の御奉公、萬人の譏を受けても君一人の心に叶はゞ、其身の冥加惡しかるまじ。こゝをよく辨へて、サアさつぱりと景清が所在、この重忠に聞かせよや。

淨へ物柔かに理をせめて、しかもこたゆる詮議の詞、阿古屋は聞いて。

阿古　さつても嚴しい殿樣、四相を悟る御方とは常々噂に聞いたれど、何の仔細らしい、四相の五相のと小袖にとめる伽羅ぢやまでと、仇口に言ひ流せしが、今日の仰せに我が折れた、勤めの身の心を汲んで忝いおつしやりやう、何んの〱誓文で、景清殿の行衛知つてさへゐるならば、お心にほだされつい ぽんと言うて退けうが、何をいうても知らぬが眞實、それとても疑ひ晴れ

すば、ハテ何時までも。

淨へ 責められうわいな、責めらるゝが勤めのかはり、お前方も精出してお責めなさるが身のお勤め、勤めといふ字に二つはない、ア、浮世であるぞいなと、言ふに側から怺へぬ岩永。

岩永 ヤア、べり〱とはつしやいだ頤骨、是非白狀せぬに於ては、此間の拷問に品をかへて憂目を見する、聞けばうぬは懷胎とな、よい〱、屹度思ひ付いた、腹に子のあるかざみの格、鹽入責めにして吳れう。

淨へ おどしかくれば。

阿古 オホヽヽヽヽヽ、そんな事怖がつて、苦界が片時ならうかいなア、同じやうに座に並んで、殿樣顏してござれども、行きかたは雪と墨、重忠樣の計らひとて、榛澤樣の今日の詮議、繩も縣けず責めもなく、六波羅の松原にて物ひそやかに義理づくめ、さま〲と劬りて、サア景淸が行衞はと。

淨へ 問はれし時の其苦しさ、水責火責は怺へうが、情と義理に拉がれては、この

骨々を碎くる思ひ、それ程切ない事ながら、知らぬ事は是非もなし、此上のお情には、いつそ殺して下さんせと、とんと投出す身の覺悟、持餘してぞ見えにける。

重忠　かほど心を盡せども、誠を明かさぬ上からは、目通りで拷問せん、ソレ。

浄へ　と仰せある、詞の尾に付く岩永左衛門。

岩永　ヤア〳〵者共、阿古屋めに水くらはせ。

浄へ　あつと答へて白洲の内、直す梯子を見るにさへ、心は上る枕の横槌、庭のかたへの井戸屋形、深くも軋る絞車の、胸に響きて氣を冷やす、阿古屋が心の濁り水、今しも呑むやと覺悟の體。

トこの内花道より竹田奴大勢梯子横槌いろ〳〵の物道具持ち出て來り、本舞臺東西へ分れる。

浄へ　重忠はすゝみいで。（ト一寸前へ出て）

重忠　仰々しい、靜まれ〳〵、阿古屋を拷問の責道具は、某かねて拵へ置きたり。誰かある、持參い

たせ。（ト下手にて）

近習　ハ、ア。

浄へ　仰せに隨ひ持出づるは、いともやさしき玉琴に、三絃胡弓取添へて、音締も嘸と白洲なる、阿古屋が前へ並べ置く。

ト近習琴三絃胡弓を持ち出て來り、よき所へ置く。

浄へ　岩永もぎよつとせしが、様子如何と打まもれば。

重忠　コレサ女、其琴彈け。重忠これにて聞かん。

浄へ　刀を杖に頤持たせ。

岩永殿もお聞きあれ。

浄へ　と打解けて見えければ。

岩永　こりや何ぢや、責道具々々々と興がるは、何ぞ嚴しい事かと思へば、ア、聞えた、拷問に事よせ自身の慰み氣晴しをやらるゝな、天下の政道を取捌く決斷所での琴三絃、神武以來無い圖のほだへ。げに誠世界の有様、天に口なし人を以て言はしむとは今思ひ當つた、阿古屋めが

懷胎、もしや此子が女の子なら、琴でぐわん〳〵、三絃でア、何とやら。

淨へ京中が諷ひしは此前表、この上のばれ序に、ちよ〳〵げなんどもよござんしよかの、ハヽヽヽと嘲弄す、重忠耳にも入れ給はず。

重忠　ヤレ阿古屋、なぜ始めぬ、琴を彈かねば景清が、所在を言ひ明す所存なるか。

淨へ詞もしげき重忠の、底の心は知らねども、是非なく對ふつま琴の、行衛を何といはこすに、絲も心も亂るゝばかり、聲も枯野の船ならで、かひなき調べかき鳴らし。

ト琴を彈じる。

唄へ影といふも月の縁、淸しといふも月の縁、かげきよき名のみにて、映せど袖に宿らず。

淨へ重忠耳を欹立て給ひ。

今彈ぜしは蕗組の唱歌をわが身の上に取り、景淸が行衛知らぬとな、マヽ知らずんば知らぬにせ

よ、シテ其方と景清と馴染めしは何時のころ、如何なる縁により、深き契りの仲とはなりしぞ。

阿古　これは又思ひ寄らぬ變つたことのお尋ね、何事も昔となる恥しい物語。

淨へ　平家の御代と時めく春、馴れにし人は山鳥の、尾張の國より永々しき、野山を越えて清水へ、日毎々々の徒歩詣で、下向にも參りにも、道は替らぬ五條坂、互に面を見知り合ひ、何時近づきになるともなく、羽織の袖の綻びちよつと、時雨の傘を、易い御用、雪の朝の煙草の火、寒いにせめてお茶一服、それが嵩じて酒一つ、此方が思へば彼方からも、功徳は深い觀音經、普門品の第二十五日の夜さ必ずとたはぶれの詞を結ぶ名古屋帶、をはりなければ初めもない、味な戀路と樂しみしに、壽永の秋の風立ちて須磨や明石の浦船に、漕ぎはなれ行く縁のきれめ、思ひ出すも瘡の毒、あゝ疎ましと語りけり。

重忠　さもありなん情の道、聞き屆けしが詮議は濟まぬ、この上は三絃を彈けい。

阿古　エヽイ。

重忠　イヤサ、此方の尋ぬる仔細を聞かぬ内は、何時までも。

淨へと、猶望まるゝ三絃の、どうなる事か知らねども、思ひ込んだる操の糸、今更何んとたがやさん、心の天柱引締めて。

唄へ翠帳紅閨に枕ならぶる床の内、馴れし衾の夜すがらも、四門の跡夢もなし、さるにてもわが夫の秋より先に必らずと、あだし詞の人心、そなたの空よと眺むれど、それぞと問ひし人もなし。（ト三絃彈くことあり）

重忠　オヽもうよいわ。三絃止めい、班女が閨のかこちぐさ、絕えし契りの一節、時にとつての一興ながら言譯は暗い〳〵。西海の合戰に命を遁れ、都に折々紛れ入る景淸に度々逢はうがナ。

淨へ〈いけ〉平家御盛の時だにも、人に知られた景淸が、五條坂の浮れ女に心を寄するといはれては、弓矢の恥と遠慮がち。

唄へ殊更今は日蔭の身、妾はもとより川竹のあるが中にもつれない親方、目顏を忍ぶ格子先、編笠越にまめであつたか、アイお前も無事にとたつた一口。

淨へいふが互ひの比翼連理、さればと言ふ間もない程に、忙しない別れ路は、昔

のきぬ〳〵引かへて、もめん〳〵と零落れし身の果哀れな物語、ア、おは

もじと差俯向く。

重忠　いかさまこれはさこそあらん、景清程の勇士なれども、實に色は思案の外、どう思案仕直して

も此通りでは濟まされぬ、此上は胡弓をすれ〳〵。

淨へあいと答へて氣は張弓、歌は哀れに催せる、時の調子も相の山。

唄へ吉野龍田の花紅葉、更科越路の月雪も、夢と覺めては跡もなし、あだし野の

露鳥邊野の煙は絶ゆる時しなき、これが浮世の誠なる。（ト胡弓をする事ある）

淨へ誠をあらはす一曲に、重忠ほとんど感に堪へ。

重忠　阿古屋が拷問唯今限り、景清が行衞知らぬといふに、僞なき事見屆けだり、この上には疑ひな

し。

淨へ仰せに阿古屋忝け涙、盡きぬお禮を伏拜めば。

岩永　ヤア〳〵重忠、白いとも黒いとも片着かぬ詮議を、阿古屋めに僞なしとは、何を以て申さる

る。この岩永は呑込まぬ、不埒々々。

淨へ　といひほぐす。

重忠　オヽ其仔細いうて聞けん、鼓は五聲に通ぜずといへども、絲竹の調は五音四聲によく通じ、直きを以て調子とす、曲り僞る心を以てこの曲をなせる時はその音色亂れ狂ふ、就中この琴、是ある物の司として人の心を正しうし、邪を禁しむると、白虎通にも賞じ置きたり、こゝを以て重忠が、女の心を引き見る拷問、十三の絃筋に縛り絡めて琴柱にくゞめ、科の品々一より十まで、とゐぎんずるを僻事とは申されまじ、琴の形を竪に見れば、漲り落つる瀧の水、その水をくれる心の水責、三絃の二上りに氣を釣上げる天秤責、胡弓の弓の矢殼責と品を換へ責むれども、いつかな亂るゝ音締もなく、調子も時も相の手の秘曲をつくす一節に、彼が誠はあらはれて、知らぬ事は知らぬに立つ、調べを糾して聞取つたる詮議の落着、この上にも不審あるや。

淨へ　道理に叶ひし詞のしらべ、ぴんともしやんとも岩永は、撥鬢頭掻くばかり、

眞面目になるぞ心地よき、重忠重ねて。

重忠　阿古屋が詮議落着といへども、猶この上に某が尋ね問ふ仔細あり、隨分劬り屋敷へ引け。

浄へ仰せを蒙る榛澤六郎。

六郎　イザ阿古屋、立ちませい。

浄へ伴ふ情かず〳〵の、恵を思ふ悦び涙、岩永は拍子もなく、調子に入らぬ三絃の天柱かへたる蕗組も、冥加にあまる御情、つど〳〵お禮ものべ棹の、長居は恐れ此儘に直に御前を三下り、秩父は正しく本調子、ばち利生ある糸さばき直なる道ぞありがたき。

トこの模様にて

幕

阿古屋琴責（終り）

袖萩祭文
そではぎさいもん

奥州安達原（袖萩祭文＝二幕）

序幕

外ヶ濱鶴殺しの場

役名　外ヶ濱の漁師南兵衛實は安部三郎宗任、獵師文治實は善知鳥安方、代官鵜目鷹右衛門、志賀崎生駒之助、庄屋庄右衛門、漁師茂三郎、同四郎藏、同長太、鎌倉權の頭景成、新羅三郎義光。文治女房お谷、四郎藏女房おかき、茂三郎女房おもよ、長太女房おいそ等。

本舞臺一面の淺黄幕。こゝに漁師茂三郎四郎藏の兩人と蛋のおかきおもよおいその三人立かゝり、浪の音、濱唄にて幕あく。

かき　コレ長太のお嬶、今日はお代官様がこの外ヶ濱を通らつしやると、浦中はもや〳〵、すつきりと仕事も手につかぬ。

もと　聞きや此中は長太も潜に出やるげナ、女夫しての稼ぎ、いから延びたと、浦邊の噂が高いぞよ。

いそ　あの茂三の嬶のいやる事わいの、銀は延びいで、こちのあの性惡が鼻先の延びるには困りものだが。

茂三　オツト、さうは惡うはいはぬもの、聞けば一昨年の月見の夜さり、膃肭臍取りに行た時に、海の中で出來合つた女夫仲。

四郎　並々ならぬ二人が仲だに、なぜに子がないか、あまり仲の好過ぎるも、口說が多うて當にはならぬぞ。

かき　ホンニヨ、その子といへば、文治殿女夫の衆ほど、世に珍しい子煩惱な人も又とあるまい。

もよ　此中からの大病に、その身に代へての看病に、我子となればあゝも可愛さの增すものか、子を持たぬ親には知れぬ事ぢや。

いそ　そのやうに仲の好い女夫の衆や、愛らしい子の噂を聞いても、なぜにあゝも邪慳なかと、馴染めの昔を思ひ出すと、引裂いてもやりたいほど。

　トおいそは腹の立つ思入。この時上手海の岸より海士の長太、鮑を四五はい持ち出て來り、この話を立聞き、思入あつて。

長太　ヤイ〱、あんまり汝らが譏るゆゑ、海の中で嚔ばかり、漁が利かいでやう〱と四五はい、

これでは鹽も飲めるものぢやないぞよ。

茂三　マア〳〵、なんぼ鮑取りぢやというて、さう榮螺のやうに角目立てゝは果しがない。

四郎　モウかれこれ暮合ぢや、仲好う話しあうて歸らうか。

長太　デモあんまりの憎體ぢやによつて。

かき　ハテ、海商賣とて、どこの男も磯ぜゝりはある習ひ。

いそ　修羅の絶えぬも無理はあるまい。

長太　何時どこで逢つたか、それ聞かう。

いそ　オヽいはいでかい。

ト兩人聲高になつて爭ふ。みな〳〵是れを留める。浪の音になり、花道より文治女房お谷結び髮やつしなりにて藥を持ち出て來り、行き過ぎるを、長太目早く見付けて、

長太　オヽ〳〵、文治の嬶どこへぢや。

お谷　オヽ、誰ぢやと思うたら長太さん、皆さん御精が出ます、マア聞いて下さんせ、清童が長の患ひ、苧みの上へ大熱、けふは取分け樣子が惡く、それで近所の衆に頼んで置いて、濱手の醫者樣へ、藥を貰ひに行た戻りでござんす。

かき　ほんに〳〵、今もその噂の出た所、なんぼ可愛いゝ我子とはいひながら、身にも振にも構はずに、よう心して夜の目も寢ず、その疳病が出來まするな。

長太　こんな美しい女を、なぜにから燻らせて置く事か、聞けば女夫仲もきつう睦じいといふ事だが、おいらならば着飾らせて、荒い風にもあてないに、さりとては文治の奴め、女冥利に盡きようものを。

ト長太はお谷の顔を差覗く。おいそムツとして、

いそ　アレ、油斷も隙もなることではない。

ト長太の胸倉を取つて引摺る。ちよつと立廻りあるを、皆々引分ける。こゝへバタ〳〵にて花道より、庄屋庄右衛門、着附、羽織にて走り出る。

庄右　コレ〳〵皆の衆や、今こゝへお代官様がお通りなさる。そこで嚴しいお觸があるから、皆神妙にして承つたがよいぞや。

茂三　ナニ、お代官様がお出でとか、コレ〳〵靜かにさつしやれ〳〵。

ト長太おいそを取鎮める事あつて、みな〳〵庄右衛門の後に控へ、お谷も同じく下にゐる。これを浪の音合方になり、花道より代官鵜目鷹右衛門、着附、袴ぶつさき羽織大小のこしらへ、後より槍持挾箱

持の仲間、紋看板なりにて附添ひ出て、舞臺へ來る。みな〳〵平伏する。

庄右　ハイ、から並びましたが、この濱の組の若共でござりまする、この浦邊は漁り漁師、男海士、潜の海士、その外山を稼ぐ獵師の入り込み、外商賣は僅かゆゑ、總名を獵師町と申しまする。

鷹右　ム、、然らば山獵師もあるとナ、浦方はいふに及ばず、山獵師には別してキツと申付ける、法度の趣よく承れ。

皆々　ヘイ〳〵。

鷹右　先達ても聞きつらん、鎌倉鶴ケ岡の神前にて、千羽の鶴をお放しある、則ち氏神のおつかはしめと世に知らさんために、黄金の札を附け置かる、さすれば右の神鳥、何國の浦山に降りたりとも、必らず麁略いたさぬやうとの御上意たり、此段キツと申渡したぞ。

皆々　ヘイ〳〵、心得ましてござりまする。

庄右　心得たとあれば、こなた衆からも近所隣りへよう觸れて、お咎め受けぬやう心付けてやらつしやるがよいぞや。

長太　イヤモウ鶴は愚か、こんな時にはうつかり鳶でも打たれる事ぢやない。

四郎　銘々御法を背かぬやう。

長太　心を付けるで、
皆々　ござりまする。
鷹右　よし〳〵、然らば庄屋、次村へ案内いたせ。
庄右　畏りましてござりまする。お代官樣、かうお越し下さりませ。」

ト庄屋庄右衛門先に代官鷹右衛門と猟漁師皆々上手へはひる。浪の音打上げ、淺黄幕切つて落す。本舞臺一面の平舞臺。向う奥深に海原より岩木山の麓を下手に見せ、上手に岩組、大分の芦の茂み三段に置き、この間に笘船、振りよき松の立木。すべて奥州外ケ濱海邊暮合の體。浪の音にて道具納まる。

ト時の鐘、下座の唄になり、

〽荒海の、身は夜もすがら浪枕、夢安らかに結ぶ間も、啼く音哀れな小夜千鳥。

ト文句へ千鳥笛をあしらひ、花道より善知鳥文治安方、蓑附、かるさん、山刀を差し、半弓を腰につけ出て來り、花道にとまり、

文治　今日は風が高うて猟も利かず、家では女房も待つてゐように、夫婦の物は衣類まで、賣代なし

た上なれば、大事々々と思ふ淸童、この上どうして醫藥の手當を。オヽ今こゝへ戻る道で、代官殿に云付けられたと、お宿老から鶴のお觸れ、黄金の札とあるからは、ムヽ。

〽子故に迷ふ漁り火の、消えては闇の仇浪に、誠の科のよし芦も、葉風に胸や騷ぐらん。

ト文治よろしく思入あつて、舞臺へ來る。唄の切、空にてトヒヨの聲する。文治これにてキツと空を見上げ、下手芦原の蔭へ身を忍ぶ。この時日覆より黄金の札をつけし鶴舞下る。と下手芦原の蔭にて文治の聲にてエイと射る。と鶴は矢にあたりバツタリ舞臺眞中へ射落される。と文治ツカ〳〵と出て黄金の札を捻ぢ切り押戴き、上手へ行きかゝる。とこの時、上手芦原を押分け、南兵衞、廣袖三尺烟冠りのこしらへにてヌツと窺ひ出て、文治を突き戻す。文治よろめき下手へ寄ると、松の蔭芦原より鎌倉權の頭景成、羽織野袴なりにて、苫船よりは新羅三郎義光縫ひものゝ着流しにて、これと一緒に上手よりは着流し合羽なりの志賀崎生駒之助笠をかざし、下手よりは文治女房お谷、世話なりにて出て來り、双方キツと見得。これより鳴物替つて、文治の持つたる黄金の札をかせに、だんまりの立廻り。トヾこれを權の頭に打落され、トヾこの札は南兵衞の手にはひり、文治の留める手を振拂ひ、南兵衞花道へのがれて、手拭を取るを、

景成　正しく曲者。

義光　イデ引捕(ひつとら)へて。

南兵　エイ。

ト南兵衛礫を打つて下にゐる。權の頭崇成、三郎義光これを除けるを見合つて木の頭。文治は女房お谷を引据え、顏を見すかし思入。生駒之助これを見送る。南兵衛黃金の札を懷中へ入れ。逸散に揚幕へはひる。この見得、浪の音に千鳥笛をあしらひ、カケリやうの鳴物にて。

ひやうし　幕

二幕目

環宮明御殿袖萩祭文の場

役名　桂中納言敎氏卿實は安部次郎貞任、外ケ濱漁師南兵衛、實は安部三郎宗任、宮の傅傔杖直方、八幡太郞義家。貞任妻袖萩、義家の御臺敷妙、謙杖奥方濱夕、袖萩娘お君、腰元小冬、同眞砂路、同こずゑ、同松ケ枝等。

本舞臺四間通しの高二重、見附金張付瓦燈口、上手御簾屋體、竹のふしの欄間、上手竹の植込手水鉢、本緣前づら高欄付、下手折曲げ廊下、一面に雪布を敷きつめ、舞臺前眞中に丸もの土手一面に雪の積りたる體、環の宮御殿の模樣。

幕の内より、腰元小冬、眞砂路、梢、松ケ枝の四人庭へ下り雪を拂ひ居る。琴唄にて幕あく。トあと合方になり、

小冬　イヤなう眞砂路どの、この御殿の宮さまは匣の内侍殿がつれまして、何處へやらお行衛がしれぬゆゑ、宮さま附きの謙杖さまがこの御殿をおあづかり、このやうにお庭の掃除も、仕丁がはりに妾等が役、しんきなことではないかいの。

眞砂　さいなう、この明御殿のお守り役お年のよつた謙杖さま御夫婦、毎日あゝしてお出なさるもさぞ窮屈なことでござりませう。

こずゑ　お庭の雪を拂うたら奧庭はあとでの掃除、アレ〳〵拂ふそばからツイつもる冬の雪、ホンにやるせがないほどにの。

松枝　それ〳〵とてものことに、もそつと、もそつとたんとつもつたら、雪の達磨やみゝづくやら、犬と一所にさわがうもの、ホンニしんきなことぢやなあ。

小冬　ホンニ氣さくな松ケ枝どの、奥庭の掃除はおまへ一人に、

三人　たのんだぞえ。

松枝　ヲヽしんき、お前方もござんせいなあ。

三人　そんなら一所に行きませう。（ト床の淨瑠璃になる）

〽みな〳〵奥にぞ入りにける。（ト腰元四人上手へはひる）

〽月もる雪より心にも、積るは老の傔杖直方、妻の濱夕たゞ二人、夫婦の人なんいまぞかりける、縁先に立ち出でゝ。

ト雪おろしにて日覆より雪ちら〳〵ふる。瓦燈口より傔杖さんぎり鬘長絹袴大小のなり、濱夕裲襠いせうのなりにて出てこなし。

傔杖　雪は鵞毛に似て飛んで散亂すと、彼の詩に賦したるは世にある人のもてあそび、我はそれにはひきかへて、身にふり積つたるうきことの、いつかはとけん日かげの身、ハテうつ〳〵しき空合ぢやなあ。

濱夕　春の雪より寒さもひとしほ、お年よりの端近く寒氣が入らう、マア〳〵お火鉢へ。

〽ちとお火鉢に御よりと、切炭のぜうになるまで女夫仲こそむつまじく。

ト靜かなる合方になる。傔杖褥の上に住ふ。濱夕置火鉢をよき所へ出す。

傔杖　ふりつむ雪を見るにつけ、さいつ頃より見えさせ給はぬ宮の御行衛、この御所は明御殿、我々夫婦がかやうに御番はいたせども、肝心の主人なければ玉殿もさながら鳥の塒同然、天地の中にさへましまさば、奪ひ返してこの恥辱をすゝがんものと思へども、都の内を身動きならねば空しく腕をいためるばかり、不便なるは娘敷妙、日本の智者と呼るゝ八幡殿につれ添ひながら不覺をとつたこの親ゆゑ、夫の手前も恥かしくさぞ肩身がすぼらうと、思ふも老の愚痴ながら、この春より一夜も實に寢た夜はおじやらぬわいの。

〽奥歯もれ來るまばら聲。

濱夕　ア、そのおあんじはお道理なれど、弓取の不覺といふは軍の内の臆病、こりやホンの災難、敷妙がことおつしやるにつけ思ひ出すは姉娘の袖萩、親にも知らさず忍び男をこしらへての家出、憎いやつと思うたもはや一昔、其時は十六の後先見ず、年もいたればさぞ今頃はくやんで居るであらう、どこにどうして居ることぞ。

傑枝　ア、これはしたり、又してもくど／＼と思ひ出すもけがらはしい、不孝者の姉めがこと、武士の家の不義放埓、再び面も見まいと思へど、まだ業がみてぬやら、朱雀野堤の上で。

濱夕　エ、堤の上で何といたしましたえ。

傑枝　サア何ともせぬが、たとひ橋の上でのたれ死しようとも、おりや不便なとも何とも思はぬが、お身また何とぞ思ふ氣か。

濱夕　イ、エ何とも存じませぬ。

傑枝　ヲ、さうであらう、もしのたれ死でもいたしたら、身共はけつく心地よう思ふわい。

〽口には憎てい身をそむけ、物事つゝまぬ夫婦仲涙一つはかくしあふ、取次の侍走り出で。

ト袴侍下の廊下手より出て、兩人にこなしあつて、

侍　ハツ、只今これへ敷妙さまがお出でござりまする。

傑枝　ナニ、娘敷妙が參りしとか。

濱夕　これへ通しまししや。（ト侍引返してはひる）

〽案内につれて衣の香も、娘ながらも義家の奥とは武家の表門、さすが親子の中ざしき、行儀正しく入り來れば、

ト敷妙、花ぐし下げ髮補、補いせうにて、廊下より出て來る。

敷妙　これは〳〵お二方ともそれにお出あそばしましたか、いつにかはらぬうるはしきお顏を拜しまして、お嬉しうぞんじまする。

〽慇懃に手をつかへ。

濱夕　ヲヽ、娘此頃は便りもなし、心惡うでもあることかと傔仗どのも案じておや、サアこれへ〳〵。

敷妙　しからば御免下さりませう。ト敷妙よき所へ住ひ　今日参りしはお見舞ではござりませぬ、傔仗さまへ夫八幡太郎義家が使者でござりまする。

濱夕　ム、ハテかはつた、表向の用事とあらば、家來は越さいで、こなたを使者とは。

傔仗　コレ〳〵奥待たれ、何にもせよ使者とあれば親子は内證。イザ御口上の趣き承らん、まづまづこれへ〳〵。

〽とありければ。

敷妙　御免なされて下さりませ。（ト三味線入り中の舞）　義家申し越されし仔細餘の儀にあらず、環の宮のお行衛たき事、御傳の傔杖どのゝ誤りよんどころなし、日延の日數も今日限り、もしも言譯なきにおいては罪を糺す義家が役、聟舅の容赦いたされず、勅諚をもつて取圍み、敵味方となり申さん、其時に遺恨にばし思されな、使者の口上あら〳〵かくの通りでござります。

へ語るうちより傔杖直方、一間にかざりし柳箱、旗ともろとも押出し。

ト上の屋體の内より三方の上の蒔畫箱を取出し、是をば旗竿へつけ能き所へかざりたて、矢張り中の舞、合方

傔杖　アさて〳〵八幡どのは天晴仁義の大將かな、元來某は平家の侍、八幡殿は源家の統領、聟舅の因をむすぶは稀なることゝ、そちを嫁がす其みぎり、聟引手に此方より赤旗を遣はし、八幡どのよりは此白旗、たがひに取りかへ所持いたすも兩家合體の其しるし、しかるに此度の我あやまり、闊達の大將ゆゑ言ひ甲斐なしと心にうとみ、定めて聟舅の緣を切り此旗を取戻しに來るであらう、我恥辱はいとはねど、若し去られたら其方がなげきのほどはいかばかり、どうぞして此白旗の止まるやうにと此如く、神前にかざりおき朝夕祈りし甲斐あつて、今日娘を表向きの使者となしてさし越されし八幡どのゝ心底は、たとひ敵味方となるとても敷妙は去らぬとあ

る情の誰、老人に安堵させんと心づかひの親切、ヱ、忝い、とサア逢うては禮さへいはれぬ義理、イヤ何お使者、歸つて申されうは、仰せ越るゝ趣一々承知仕る、チト密々に面談いたしたき儀もござれば、お出を待つと傳へられよ。

へとことばの表、裏門口。（ト此時下手にて）

義家　八幡太郎義家、舅直方殿に對面なさん。

へ白衣ながらに入來る八幡太郎。

ト鳴物音強になり、下手の廊下より義家、をみごろも丸ぐけにて出て來る。三人これを見て、

敷妙　ヤ、我つまにはいつの間に。

傔杖　思ひよらざる裏口より、御入來ありしは。

濱夕　此頃たえし一家の參會、マアく　これへ。

義家　ゆるしめされ。

へしづくと座に直り。

ト義家上座に住ふ。本調子の合方になる。

傔杖　先刻敗妙を越されしに、又ぞろ自身に來られしは。

義家　アイヤ、義家これへ參りしも環の宮の御行衞詮議に、心を碎かるゝ直方殿の心勞安堵ならずと存ずるゆゑ、隨身仕丁も相殘し、裏門口より白衣の參上、宥免あられよ。

傔杖　今にはじめぬ御こんせい、老の大慶この上なし、只今あれにてお聞きの通り、密に面談いたし度きは、見せ申すべき一品あり。

〽直方あたりに眼を配り。

他聞を憚り使をもさし遣さず、心に秘してお出を待ちしが、宮の御行衞尋ぬべき手がゝりを取り得申した。

〽懷中より一通取出し。

契約の通り環の宮を密かにぬすみ出しくれよとある賴みの文體、名宛は誰ともなけれども、必定安部の賴時が伜ども、貞任宗任兄弟のやから、味方をあつむる杜にせんため奪ひ取りしに相違なし、さあれば命に別條なしと心の安堵しながらも、言譯たゝぬ此身の越度、御推量下されい。

義家　ホヽウさこそ〳〵、我推察もその如く、此程奥州より捕へ來る鶴殺しの科人が、面魂世の常ならず、其上かねて聞及ぶ眉間に一つの黑子ある目印し、疑ひもなき安部の宗任、一人は手に入りしが今一人の兄貞任、この兩人さへ捕へなば宮の行方明白ならんと、則ちかの宗任をこの館へ引かせ來るも、禁庭の御沙汰なき內詮議あるこそ肝要ならん。

へ力を附ける折しもあれ、（ト此間揚幕にて）

呼ビ　桂中納言教氏卿御入り。（ト皆々こなしあつて）

傔杖　教氏卿の御入來とは心得ぬ。

義家　私の內意か、たゞし勅諚か、何にもせよ女儀は叶はぬ、其方館へ歸り、かねて申付置く彼の科人、油斷なきやうはからへよ。

敷妙　いさい承知いたしてござりまする。

傔杖　雪中の歩行心をつけて。

濱夕　サ用事も濟めば、サヽ早う。

敷妙　さやうなれば父上母さま、お暇申すでござりまする。

〽座敷に心は殘れども、母は次へと敷妙は、館へこそは歸らるゝ。

ト濱夕は奥へ、敷妙は廊下へ入る。

呼び　教氏卿御入り。

〽衣冠の袂に薫り來る、桂中納言教氏卿。

ト下り葉になり、花道より教氏卿裝は直任、束帶のこしらへ、仕丁長柄をさしかけ、次に半素袍股立の者三方に白梅の枝をのせ、この外半素袍にて仕丁三人附添ひ出て、花道に立ち住ふ。

義家　教氏卿には雪中をもおいとひなく、

傔杖　先觸れもなき不時の御入來。

教氏　傔杖には此頃公の御不審蒙り、いかゞなりしと此教氏、わざ／＼これまで伺候せり。

傔杖　こは冥加なき御懇請、祝着至極に存じまする。

義家　何はしかれ、

兩人　まづ／＼これへ。

教氏　まかり通る、ゆるしめされ。

〽雪より白き白梅一枝、小四方に取のせて、直に座席に上座ある。

トこれにて敎氏二重の上へ通りかつら桶にかゝる。侍は敎氏の前に件の三方に白梅を置き、上手の下に控へる。外の半素袍は下手に控へ居る、仕丁は香を取り殘らず下手へはひる。

〽それと敬ふ直方に、義家公も威儀を正し。

義家　かく申すは源の義家、折よくも貴卿に參會、此上や候はず。

傔杖　ぞんじがけなき御入りゆゑ、無禮の至り御容免下さるべし。

〽禮儀正しく。

敎氏　此程蟄居の其許、さぞかし心を痛めつらん、鬱氣をはらす此梅ケ枝、まだ冬籠りの枝ながら、進上申す、此花ともろともに、喜悦の眉を開かれよ。

〽持せし白梅さし出し。

ト敎氏上手の侍にこなし、是にて侍三方の梅を傔杖の前へ持行く、是にて下の半素袍と一所に控へ居る。

義家朝臣のおはするも彼の詮議の一條ならん、殊さら親しき一家の仲、御心底察し入る。

義家　コハ教氏卿のお言葉とも覺えず、一家は一家、政道に依怙なき義家が、詮議の手がゝりになるべき科人、先達て捕へ置きましてござる。

教氏　スリヤ詮議の手筋となるべき者を。

義家　かねて召し捕り置きたれば、只今これへ召し出し申さん。（ト揚幕の方へ向ひ）ヤア〳〵義家が家來共、鶴殺しの科人を、早や〳〵これへ引出せ。

軍兵四人　ハア。

〽呼はり給ふ一聲に、鶴の科人出をらうと、權威の下部は蠅虫と見下し、破れ布子の細附ながら、眼中威勢備はつて、實に大將と大將の見參とこそ見えにけれ。

ト時の太鼓になり、花道より宗任廣袖どてら、繩にかゝり軍兵四人これを引立て出て、

軍兵四人　下にをらう。（ト見にて宗任軍兵、花道に控へる）

〽義家はるかに御らんじて。

義家　岩城山の麓において鶴を射留し科人南兵衞、八幡太郎義家が直々の拷問滿足ならん、アレ御ら

んありしか教氏卿、匹夫にそぐはぬ彼が人相、何とたくましき曲者ではござらぬか。

〽詞に教氏うち見やり、こなたに南兵衛顔を上げ互ひにびつくり、さては弟か兄なるかと、いふにいはれぬ同胞の、そしらぬ風情に教氏卿。

教氏　鳥類を殺すは匹夫の常、いかめしき義家の計らひ、しかし詮議の手筋とあらば、教氏これにて檢分なさん。

義家　いかにも詮議の其一條、匹夫にあらざる彼が俗性外ヶ濱の南兵衛とは假の名、實は奥州安部頼時が次男同苗宗任、イヤサ天晴勇士がそれほどのしばり繩、引切るは易かるべきに、わざと下部に引出さるゝは、此義家に面會なし鬱憤言はんずためなるか、聞いて得させん、サヽ何と。

〽語れいかにとのたまへど、南兵衛はさあらぬ顔。

宗任　是は又思ひがけもない、そんなむづかしい名は生れてから聞いたこともござりませぬ、外ヶ濱の南兵衛に相違なければ、元よりお前さまに勿體ない、鬱憤とやら一分とやら、きなかもかけ値は申しませぬ、兎角命が惜いばつかり、どうぞお慈悲に繩解いてお助けなされて下さりませ。

〽泣ぬばかりのしら／＼しさ。

傔杖　ハテしら〲しき其一言、たとひ宗任にあらずとも、一くせあるべき面だましひ、イデ直方が一詮議。

義家　アイヤしばらく直方殿、まづ義家が問ふべき事あり。イヤ何南兵衛、しからば汝うぶの匹夫下郎、いよいよそれに相違ないか。

宗任　さやうでござりまする。

義家　ムウ匹夫とあらば匹夫にして、今此義家が汝に見すべき一品あり。

〽いぜんの白旗押出し。（ト後に立てし旗を押出し）

コリヤ此旗を見知つてをるか、是こそは我父伊豫守頼義、奥州追伐の折から押立給ひし此白旗、その時宗任が親安部の太夫頼時、大將目がけ放ちし矢先き、射損じて此旗に受けとめ、即時に踏み折り捨られし其矢の根は、コレこゝに。

ト懐中より帛紗包みの鏃矢の根を出して見せる。

宗任　ドレ。

ト宗任ツカ〲と舞臺へ來る。軍兵四人もこれに引かれ來り見事に返る。教氏、宗仕、義家、矢の根にこなし、管絃になる。

義家　安部の太夫賴時とゐり附し此の矢、ウハヽヽヽ、小ぶしも未熟の惣敵たる賴時づれが、拙き運で源家に敵對、いつかな〳〵及ばぬことぢや、叶はぬことぢや、今にもあれ其餘類あらば、却つて敵の此矢をもつて、まツ此通り。

〽鏃は庭の手水鉢、じろりと見やつて。

宗任　これはまたあぶない事。

〽あぶないこと〻そらさぬ顏、教氏卿は進み出で。

教氏　ア、小ざかしき彼が振舞、たとひ誠の宗任なりとも匹夫下郎にひとしき男子、大望の企て思ひもよらず、奥州のはてに生れ草木の名も知らぬ猪猿同然のやから、斯く言ふが無念ならば、コリヤ。

〽いぜんの白梅取りあげ給ひ。

コレ此花を知りつるや、東夷の目にはよも知るまじ、サ存じてをらば。」

〽いうて見よやと嘲弄ある、宗任ぐつとせきあげ。

宗任　何をおつしやりますやら、其やうな花の名はいかにも存ぜぬ、しかしさうおつしやる敎氏樣も、いぜんは流しものに逢はしやつて配所の島守、やう／＼此頃召し歸され冠裝束かけたればとて正眞の山猿の冠、相手になる口はもたぬ、南兵衛が返答は、コレ。

へ傍に立てたる件の矢の根、口にくはへて我と我が肩口つんざく血汐の紅、何かはあやも白旗に、鏃の筆のさら／＼と、文字あざやかに染めなすは、東夷の名にも似ぬ、三十一文字の言の葉に座も白梅の枝折れて、冠傾き見えけるが。

ト此内宗任矢の根を口にくはへ疵のある肩口を突きさき、白旗に歌を書く。傔杖、義家こなし、敎氏これを見て。

敎氏　ム、詞あらそひむやくしと和歌をもつての返答は。（ト旗を見てこなし、横笛の入りし合方になり）我國の梅の花とは見つれども、大宮人はいかゞいふらん。面白し／＼、我に歌をよみかけしは返歌せよとのことならん、たゞ今そちが申す如く此敎氏は父の卿もろとも、幼少より島へ赴き鄙に育ちし恥かしさ、雲の上につらなれど我さへ得よまざる歌を、かく即座に詠み叶へし器量

骨柄。

傔仗　匹夫に似合ぬ當意即妙。

敎氏　問ふに及ばず安部の宗任、いはれぬ歌で蛙は口から、ム、ハ、、、、淺はかな所存ぢやなあ。

〽勝色見する梅花の頓智、術にのりし無念の宗任、口にくはへし鏃も手裏劍、大將目がけ打ちかへす、ちやうど留めたる源氏の白梅。

ト宗任口にくはへし矢の根を義家に打ちかへす。これを三方にて受けとめ。

義家　ホヽウ斯くこそあるべけれ、生捕るも生捕らるゝも時の運命、必らず恥辱とばし思はれな、猶此上に義家が、尋ね問ふべき仔細あり。

宗任　山家育ちのむくつけに、ちんばんかんは牛に經文。

傔仗　知らぬでもつた人心。

義家　もしや二人は。（ト兩人こなし、ぎつくりして）

敎氏
宗任　ヤ。

義家　ソレ者ども引立てい。

軍兵　立たう。

宗任　おれが方から行かうわい。

〽よそめにそれといましめの、しがらむ血筋の縁者どし、引立てゝこそ入りにける。

ト時の太鼓になり、義家奥へはひる。宗任は敎氏にこなしあつて、軍兵四人これを警固して上手へはひる。

〽敎氏あたりをうちながめ、傔杖が傍近く。（ト草笛になる）

敎氏　さて〳〵心づかひ察し申す、いまだ言譯もあらざるや。

傔杖　ハヽアそれゆゑにこそ心を痛めまかりある。

敎氏　ホヽオさこそあらん、それにつけ今日貴殿に心ざしたる此梅は、まだ寒中に室にてあたゝめ咲せし一もと。

傔杖　天の自然にあらねども、春を待ち得て咲く花より、早きながめを人の賞翫。

敎氏　また散る時も共通り、つぼみかぢけて見苦しうならざる先に此如く、切れば却つて香も深し。

傔杖　花に限らず人の身も。

教氏　切り時が大事なと、左樣には思されずや。

へとありければ。

傔杖　ム、御心深き此一品、散りかゝつたる老の枝、切れと給はる白梅の、花ものいはねど腹切刀、

ハ、ア有難く頂戴仕るでござりまする。

教氏　天晴明察、大江の維時なんどゝ言ひし讒者の嵐の吹かざる先に、

傔杖　此身に老木と白梅の、

教氏　花は三芳野、

傔杖　人は武士、

教氏　名を後の世に散らさぬやう、

傔杖　思案は奥にて、

教氏　傔杖直方。

祝杖　教氏卿。

教氏　案内めされ。

傔杖　まづ〳〵奥へ。

〽梅に詞を匂はせて、しづ〳〵。

ト下り葉になり、像杖梅の枝を持ちこなしある。よきほどに御簾をおろし兩人を隱す。これにて半素袍四人は上手へはひる。知らせに附き此道具上へ引く。本舞臺ずつと上にいぜんの御簾屋體を見せ此角に切戸口、是につゞき高き柴垣、向う打拔きの庭の遠見、一面に雪積りし體、雪布を敷きつめる。好みの通り入相の鐘、雪おろしにて道具納る。

〽立つて入りにける、たゞさへ曇る雪空に、心の闇の暮近く、一間に直す白梅も無常を急ぐ冬の風身にこたゆるは血筋の緣、ふびんやお袖はとぼ〳〵と、親の大事と聞くつらさ、娘お君に手を引かれ、親は子を杖子は親を、走らんとすれど雪道に、力なく〳〵たどり來て、垣の外面に。

トやはり雪ちら〳〵降る。花道より袖萩切つぎやつしにて盲目にて、袋入りの三味線を抱へ走り出て雪にすべりへたる。直にお君小娘島田かづらにてやつしなり、杖を抱へ走り出て袖萩を介抱する。囃きて。

袖萩　ア、嬉しや、誰も見咎めはせなんだかの。

お君　イヽエ、門口に侍衆がゐねむつて居やしやつた間に。

袖萩　ヲ、かしこい子ぢや、謙杖様は此春から、主のお屋敷にはござらず此宮さまの御所にと聞いて、どうやらかうやらこゝまでは。

ヘ來たことは來たけれど。

御勘當の父上母さま、殊に淺間しい此なりで誰が取次いでくれる者もあるまい、お目にかゝつて御難儀の。

ヘ様子がどうぞ聞きたやと、さぐればさはる小柴垣。

トこれにてお君にすがり袖萩舞臺へ來る。此うち時の知らせにて道具を引く。本舞臺元の御殿の道具に戻る。御簾は卷上げある。ト両人舞臺へ來り柴垣てさはり、

袖萩　ム、こゝはお庭先の枝折門、扉をたゝかうにもたゝかれぬ不孝のむくい、此垣一重が鐵の。

ヘ門より高う心から、泣く聲さへも憚かりて、簀戸に喰附き泣居たり、傔杖はかくとも知らず、一間を立出で。（ト奥にて）

傔杖　垣の外に誰やら人聲、アレ女共は居らぬか、腰元ども。

ヘ言ひつゝ自身庭の面、外にはそれとなつかしさ、恥かしさもまたさきだつて

おほふ袖萩知らぬ父あくればびつくり戸をぴつしやり、何の御用と腰元共、
濱夕も庭に立出でゝ。

ト傔杖奥より出て切戸の外の袖萩を見、びつくりして戸をさし二重へ上る。濱夕奥より、腰元四人庭上手より出て來る。

濱夕　傔杖どの何ぞいの。

腰元四人　お呼びなされましたは、御用でござりまするか。

傔杖　アイヤ何でもない、見苦るしいやつがうせをつて、腰元ども追出せ、お婆あんなもの見るものでない、奥こちへ來やれ。

〽夫の詞に氣もつかず。

濱夕　何をマアそのやうに、犬でもはひりましたのか。

〽何心なく戸をあけて、よく／＼すかせば娘の袖萩、はつとあきれてまたばつたり、娘は聲を聞知れど母さまかとも得いはれず、母はかはりしなりを見て、胸一ぱいにふさがる思ひ、押さげ／＼。

定めない世と云ひながら、テモさても／＼、マア思ひがけもない。

像枝　これ／＼、奥そりや何いやる。

濱夕　イヤ、サアやつぱり犬でござりました、ヱ、ほんに憎い犬め、親にそむいた天罰で目もつぶれたな、神佛にも見はなされ、さだめて世に落ちはてゝをらうとは思うたれど、これはまたあんまりきつい落ちはてやう、今思ひ知りをつたか。

〽よそにしらすも涙聲、様子しらねば腰元ども。

小冬　ほんにまあ、見れば若い女子の身で此雪の中をもの貰ひ、さうして子供もあるさうな、なう眞砂路どの。

眞砂　さいなう、どこのいづくの袖乞か、こゝは宮さまの明御殿、こちらは格別侍衆が、見付けたら叱られることであらうぞいの。

こず　御使さまも奥に御入り、御庭先にゐやつたら今に咎めらるゝであらう、さうない内に早ういんだがよいぞや。

松枝　見れば見るほどあたきたないお貰ひどの、誰がゆるしてこゝへおちやつた、ぐづ／＼せすとち

やつといにや、いなねば箒で追ひ出すぞや。ヱ、きり／＼いなぬかいなう。

〽せき立つれば。

袖萩　ハイ／＼、どうぞ御了簡なされて、マちつとの間。

腰元四人　ハテさて、ちやつと出やいなう。

〽女中の口々。

濱夕　ヤレ待つてたも腰元ども。ヤイ物貰ひ、お錢がほしくばなぜに歌をうたはぬぞ、願ひの筋もなんなりと、ナ、うたうて聞かしや、なう腰元ども。

腰元四人　奥さまのお氣なぐさめ。

濱夕　ちやつとうたうて聞かしやいの。

〽夫の手まへちつとの間なとひまいれたさ。

袖萩　アイ。

〽あいとはいへど袖萩が、久しぶりの母の手まへ、琴の組とはひきかへて、露

命をつなぐ古糸の皮も破れし三味線の。

罰も慮外もかへりみず、お願ひ申し奉る、今のうき身の恥かしさ。

〽父上や母さまの、お氣にそむきし報いにて、二世の夫にも引別れ。

泣きつぶしたる目なし鳥。

〽ふたりが中の。

コレこの。

〽お君とて。

あけてやう〳〵十一の。

〽子を持つて知る親の恩、知らぬおいさま祖母さまを。

慕ふこの子がいぢらしさ。

〽ふびんと思し給はれと、あと謳ひさしせき入る娘、孫と聞くより濱夕が飛び立ばかり戸のすき間、抱き入れたさすがりたさ、祖父もかはらぬ逢ひたさを

かくしてわざととがり聲。

傔杖　ヤアかしましい小唄聞きたうない、女どもゝ奥へ行け、お客人にもてなしいたせ、皆行け〱。

腰元四人　サア御用もすゝめばまゐりませう。

へ皆引つれて奥に入る。（ト腰元上手へはひる）

傔杖　コレサ奥、何をうぢ〱、早く畜生めをたゝき出してしまやれさ。

濱夕　ア、コレ、そのお腹立は道理なれど、これはあんまり。

傔杖　ハテサテ、ひま入るほどためにならぬ、武士の家で不義した女郎、たゝき出すとはまだしも親の慈悲、長居したらぶちはなさうか、親の恥を思うて名をつゝむはまだしもと思ひの外、今となつて身の置所がなさの詫言、恥つらもかまはずよくうせた、たゞしは親へのつらあてにわざと其なりを見せにうせたか、憎いやつ。

へ憎いやつと怒りの顔、袖萩悲しさやるかたなく。

袖萩　なんの〱誓文勿體ない、さりながらさう思し召すも御道理、大恩を忘れたいたづら、我身ながら愛想のつきた此からだ、おわび申したとてお聞入れがなんのあらう、そりやよう思ひ切つ

てをりまする、お屋敷の軒までも。

〽來られる身ではなけれども。

お命にかゝる一大事と聞いて心も心ならず、顏おしぬぐうてまゐりました、不孝の罰で眼がつぶれる、此子を連れてこゝの軒では追立てられ、かしこの橋では打擲かるゝうきめに逢うても、此身の罪にくらぶれば、まだ〳〵業のはたしやうが足らぬと。

〽未來がなほしも恐ろしい。

此上のお願ひには、こゝに居ります娘のお君、お目見得と申すは慮外、たゞの非人の子と思し召し、たつた一言お詞をば、おかけなされてくださりませ。

〽歎けばお君も手を合はせ。

お君　申し旦那さん奥さん、外に願ひはござりませぬ、お慈悲に一言ものおつしやつて。

〽下さりませ、どうぞお慈悲でござりますとばかり、言ひなれし袖乞詞に濱夕が。

濱夕　ヲ、可愛や、子心にさへ身をはぢて祖父さまとも祖母さまとも、得いはぬやうにしをつたはみんなおのれがいたづらゆゑ、畜生のやうな腹から見事犬猫も産みをらず、生れ落ちると乞食さす子をあのやうに、おとなしう産みつけざまは何事ぞ、あんまり憎うて、おりやものがいはれぬわいの。

〽むごういふのは可愛さの裏の濱夕幾重にも、お慈悲々々々と泣くばかり、傔杖なほも聲あらゝげ。

傔杖　親が難儀に逢ふが逢ふまいが、女めがいらざる世話、同じ姉妹でも妹の敷妙は八幡殿の北の方と呼ばるゝ手から、姉めは下素下郎を夫に持てば、根性までが下素女め。

〽恥しめられてわつとせきあげ。

袖萩　エ、下素下郎とはお情ない、夫も元は筋目ある侍、黒澤左仲とは浪人の假の名、別れた時の夫の文に氏も素性も本名も、委しう書いてござりまする、これ御覽じて下さりませ。

ト懷中の守袋の内より證手紙を出し。

〽これ見てたべとさし出すを、取次ぐ紙のはしくれも、詫の種にもなれかしと

思ふは母より直方が、讀む文言の奥の名に。

と濱夕置手紙を取つて傔杖へ渡す。これにて開き見て。

傔杖　奥州の住人安部。さては。

〽南無三寶貞任に、縁組みしかと心もそゞろに懷中の、一通取出し引合はせば。

トいぜんの寄書と同筆ゆゑ思入あつて。

さてこそ同筆、ホイ。

〽はつとばかり當惑の、色目を見せじとずんと立ち。

穢らはしい此状、いよ〳〵もつて逢ふことならぬ。

袖萩　エヽ。

傔杖　サア奥こちへ、ハテぐづ〳〵せずと早おじやれ、ハテサテ來やれといふに。

〽するどい詞にせがまれて、母もぜひなく立つて行く。

トこれにて傔杖、濱夕をつきやり〳〵兩人奥へはひる。

袖萩　アヽコレ申し、モウ逢はうとは申しませぬ、お身の難儀の其譯をどうぞきかして下さりませ、

拜みますわいなあ。

へ申し〳〵とのびあがり、見れど盲目の垣のぞき、早暮過る風につれ。

トこれにて杖をつきお君の手を取り歩む。引道具になる。

本舞臺御簾屋體の前へ一面に柴垣を引出す。ト日覆よりはげしく雪ふる。

へ折からしきりに降る雪に、身は濡鷺の蘆垣や、中を隔つる白妙も天道樣のお憎しみ、受けし此身はいとはねど、樣子聞かねばなんぼでも。

袖萩　いぬることではござりませぬ、いなぬ〳〵。

へいなぬ〳〵と泣く聲も、嵐と雪に埋もれて聞えぬ父と恨み泣、次第々々に降りつもる、寒氣に肌も冷え切れば、持病の癪のさしこんで、かつぱと轉べばお君はうろ〳〵。

お君　かゝさまいなう〳〵。（ト此うち介抱し腹帶をしめる）

へさする脊中も釘氷、涙片手に我着物一重をぬいで母親に、着せてしよんぼり

白雪を掬うて口に呑ますれば、やう／＼に若をあげ。

かゝさまいなう／＼。

袖萩　ヲヽお君、モウようござる、此また冷えることわいの、そなたは寒うはないかや。

お君　イヱ／＼妾はあたゝかうござりまする。

袖萩　よう着てゐやるか、ドレ／＼、ヤアそなたはこりや裸身、着物はどうしやつた。

お君　アイ、あんまりお前が寒からうと思うて。

袖萩　ヱヱ、、。

〽親なればこそ子なればこそ。

妾がやうな不孝者が何として、そなたのやうな、マア孝行な子をもつた。

〽これも因果の内かいのと、抱しめ／＼泣く涙、堪えかねて垣越しに、襠ひらりと濱夕が。

ト濱夕ツカ／＼と出て、襠を切戸の外へふわりと投げ、袖萩にかけてやる。

濱夕　さつきから皆聞いてゐる。アヽまゝならぬ世ぢやなあ、町人の身の上なれば、若いものぢやも

の、いたづらもせいぢや、そんな能い孫産んだ娘ヤレ出かしたと呼入れて、聟よ舅といはうものゝ、抱きたてならぬ初孫の顔もろくに得見ぬは、武士に連ふ添ふ淺間しさと、コレあきらめていんでたも。

〽ふびんなものやとくひしばる、涙も心奥の間に。

傔杖　濱夕々々。

〽と呼ぶ聲に。

濱夕　ハイ〳〵そこへまゐりまする。娘よ、孫よ、モウさらば。

〽思ひはあとに老の足、見返り〳〵奥へ行く。（ト濱夕奥へはひる）

〽折しも庭の飛石傳ひ、雪の明りも小柴垣、うかゞひ出る安部の宗任。

ト雪おろし時の鐘になり、上の藪よりさしがねの雀飛びたつ。藪を押分けいぜんの宗任うかがひ出て切戸をあける。お君びつくりして、

お君　アレイ、こはいわいなあ。（ト お君逃げるを宗任押へて）

〽戸を引明れば安部の宗任。

袖萩　誰ぢや〳〵、何者ぢや、

宗任　コリヤこはいことはない、叔父ぢや〳〵。

袖萩　さういふお前は。

宗任　コリヤ娘、そちがためには叔父の宗任ぢやわ。

袖萩　ヤ、宗任殿とは、夫貞任どのゝ弟御。

宗任　ヲヽついに逢はねど、兄嫁の袖萩殿。

袖萩　宗任殿なら尋ねたいことがある、夫に別るゝ其折から貞任殿に預けてやつた、此子が弟の清童息災でをりますか。

宗任　その清童は家來善知鳥安方が預り、養育させしが煩うて死んだわやい。

袖萩　エヽ、アノ清童は煩うて死にやつたか、ハア、、。

宗任　歎きはことわり、何かにつけて一家の敵は八幡太郎、こなたも兄の貞任が妻ならば、たとひ眼は見えずとも今宵の内に近よつて、傔杖が首打たれよ。

袖萩　スリヤ父上さまを。

宗任　生け置いては我々兄弟が大望の妨げ、たとひ親でも敵味方、女は夫につくが世の大法。

袖萩　ちやというて現在の。
宗任　親をかばうて夫の大望、女房が妨げるか。
袖萩　サアそれは。
宗任　直方を討つ所存か。
袖萩　サア。
宗任　サア。
兩人　サア〳〵。
宗任　二つに一つの返事が聞きたい、ナ、何と。
　　〽難題なんと心を定め。
袖萩　いかにも父上討ちませう。
宗任　ヲ、出かされた、此短刀で。
　　〽手に渡せば、（ト懐中より白鞘の匕首を渡す）
袖萩　そんなら是で。

宗任　かならずともに。

袖萩　心得ました。

宗任　ひそかに〳〵。

〽忍ぶ袖萩宗任が、のか〳〵歩む縁先に、立ち出で給ふ義家公。

トよろしくあつて、下の柴垣へ袖萩を忍ばす。

本舞臺元の御簾屋體になる。柴垣は下へ引いて取る。ト宗任行きかゝる。上の屋體にて、

義家　曲者待つた。(ト義家いぜんのなりにて出る)

〽聲かけられて、性根をすゑてどつかと座し。

トこれにて宗任ツカ〳〵と戻り二重へどつかと腰をかける。

宗任　繩引切つて逃げのびんと存ぜしに、見付けられたは運の極め、サアいかやうとも行はれよ。

〽腕さしまはす不敵の魂。

義家　ホヽウ神妙なるその一言、イデ義家が。

〽繩にはあらで眞紅の絲、結びし金札宗任が、首にさつくとうちかけ給ひ。

ト これにて眞紅の紐に附けし金札を宗任の肩にかける。

宗任 これは。

義家 網にもれたるうろくづを助けるは天の道、鳥類の命さへ重んずる我心、いはんやあつたらしき勇士、一命を助けソレ其札に、康平五年 源 の頼義これを放つと書しるせば、此上もなき關所の切手、肩口の疵は切りさいても武將の息のかゝりし汝、いはゞつなぎし犬同然、日本國中放し飼。

宗任 スリヤこのまゝに私をば。

義家 何國へなりと勝手に行きやれ。

〽仁者の詞に。

宗任 ハア、。

〽雪に頭を下げながら、底の善惡閉ぢかくす、氷を踏んで別れ行く。

ト 義家思入あつて奥へはひる。宗任はツカ／＼と花道へ行つて金札を取り、是を懐中し、思入あつて花道へはひる。

へ夫の最期を濱夕が、白梅の腹切刀三方にのせ露涙。　へ外にも同じ袖萩が、
思ひがけなき難題に、死ぬより他はなく／＼も歸る戸口に父傔杖、鎹に錠し
かとおろし座に直り、三方取つて頂戴し肌押ぬいで覺悟の矢の根、取るとは
しらぬ袖萩が、娘に見せじと突込む懷劒、はつと驚き取付くお君、聲たてさ
せじと抱しむれば、母は夫が片手に押へ。

トこのうち傔杖木上下のなりにて出て、直ぐに下へおり切戸を立切りかきがねをおろし、二重へ上り
住ひ居る。濱夕裲襠衣裳なり、三方に白梅と密書をのせて二重に住ふ。是にて傔杖上下をぬぎ腹切る
仕支度する。切戸の外にても袖萩いぜんの懷劒にて自害する。お君すがりつく。傔杖も腹切る、濱夕
取付くを引付けて、双方とも苦しきこなし。

お君　ヤ、かゝさまが。

傔杖　まだ女めはいにをらぬか、氣づよくはいふものゝ年よつた身體、いつ何時の病死もしれぬせ、
めて聲なりとも聞いておけ。

濱夕　そのお詞が親子一世の。

傔杖　こりや。

〽夫とはいはぬ暇乞、とは露ほども袖萩が、さてはお心和ぎしか。

袖萩　かうなりはてた身の因果、どうで追付けのたれ死、是がお聲の聞き納めで。〽障子押明け立ちよる敎氏、母はかけおり。

〽ござりませうと親と子が、一緒に死すとは神ならぬ。

ト上の御簾を卷上げる。敎氏かつら桶にかゝりゐる。濱夕は下へおり切戸の傍へ來り袖萩を見て、

濱夕　ヤア、そなたは自害しやつたか、傔杖どのも御切腹。

袖萩　エヽ父さまも。

傔杖　ヲヽ、娘。

〽と一度におどろき轉び下り、垣押破り張りさく胸、詞涙にわかちなし、手負を見屆け中納言、しづ〳〵と立ち出で給ひ。

ト屋體より敎氏出て來る。橫笛になり。

敎氏　貞任に緣を組まれし御邊、婿の詮議もよもなるまじ、所詮死なでかなはぬ命、袖萩とやらん

も死なずばなるまい、後の詮議は敎氏がよきやうに計らはん、心置きなく成佛あれ。

傔杖　義によつて命を捨つるは武士の常、蟄居のうちも油斷なく、心をつくせし宮の御行衞、知るべき便りの此一通、手に入りながら本意も遂げず、空しく朽ちる老木の白梅、最前賜はる謎の一本、解けたる雪に消え行く身體、御心にかなひなば死後に汚名の晴るゝやう、宜しく貴卿のおとりなし、偏に願ひ奉る。（トいぜんの密書をさし出す。敎氏取つてこなし）

敎氏　流石の傔杖健氣の最期、此趣きを逐一に。

〽天聽に達すべしと、冠氣高くしづ〳〵と心殘して立出づる、衣紋に薫る風ならで怪しや聞ゆる鐘の聲。

ト此内敎氏二重より下り、袖萩にちよつと愁ひのこなしあつて、しづ〳〵花道の方へかゝる。揚幕の内にて遠寄せ。

〽こはいぶかしと立戻り、あたりに心目を配る、一二の對の屋隅々に、太鼓の音のかまびすしく。

ト又行きかゝる、東の揚幕にて遠寄せ、また行きかゝると舞臺にても遠寄せ。

敎氏　ヘテ心得ぬ、此明御殿にかまびすしく、陣鐘を打ちたつるは。

〽何者なるぞとふりかへる、一間の内に高らかに。

義家　ヤア〳〵、奥州の東安部の次郎貞任に、八幡太郎義家見參〳〵。

〽立ち出で給ふ御大將、敎氏はことともせず。

トどん〳〵大小入りになる。正面の襖引ぬき奥庭雪の積りし遠見になる。上手屋體より義家、烏帽子直垂、鎧下を着込み、毛太刀毛沓にて出る。敎氏これを見て。

敎氏　ヤア柱中納言敎氏を、貞任とは何をもつて。

義家　ホヽウこの義家は天眼通は得ざれども、おことが計略疾く知つたり、ソレ者共。

ト此いぜんより出でたる二人の仕丁にこなし。是にて二人の仕丁ゑぼし白張を取り、肌をぬぎ、四天に引きぬく。鳴物ツツカケになり花道の敎氏にかゝり、ちよつと立廻つて舞臺眞中へ來り、立廻り後ろ向きの見得、大小の合方になる。

サ過ぎつる大赦のみぎり、柱中納言なりと名のり來たる其時より、島育ちと云立に歌詠ます筆取らず、何條しれものござんなれと、つく〴〵面體をうかがふに我稚き時見覺えし安部の賴時

にさも似たりさ、てこそ宮の御行衛十握の寶劍をも取かくせしにきはまつたり、姿をかへて禁庭へ入りこみしは、猶二色の御寶を奪ひ、父が根ざしの大望を遂せんとのたくみよな、あらがはれぬ證據は、コレ此の白旗最前汝が弟宗任に別れてほど得し兄弟の對面、梅の花によそへて我顏を見覺えたるかとかけたる謎、早くも悟つてコレ此歌の、我國の梅の花とは見つれども、とつらねし上の句梅の花は花の兄、我が國とは我が本國奥州の兄ならんとの詞の割符、兄弟一致の此血判に白旗を穢せしは、源氏調伏の下心、此上にも返答あるや。

敎氏　サアそれは。

義家　サア〳〵、何と〳〵。

ト兩人の紐子を投げのけ、裝束をぬぎ、きつと見得。

〽何と〳〵とさしつけられ、貞任無念の牙をかみ、逆だつ髮は冠をつらぬき、怒りの大息ほつとつき。

貞任　ヤア殘念や口惜しや、我一旦世を忍び都の樣子をうかゞひしが、官位なくては大内へ入りこまれずと、流人赦免の折を幸ひ、桂中納言が歸路を待ち伏せ。

〽我手の者に殺害させ。

勅免の綸旨を奪ひ教氏と僞つて、ついに逢はざる舅傔杖、けふ始めての對面に情を見せかけ腹切らせしも詮議の種の一通を取らんため。かく計略むなしくなれば、親の敵の八幡太郎、サア尋常に勝負なせ。

〽太刀に手をかけつめよれば。

義家　ハヽア、せいたりな貞任、汝獅子王の勢ありとも八方に敵をうけ、一人の力に及ばんや、其方が一命は環の宮と寶劍の在所、責むるともよも白狀せじ、手立をもつて搜し出すそれまでは、いつまでも助け置く、命長らへ時節を待つて戰場の勝負はなぜせぬぞ、今犬死して親賴時が大望は無駄になすか、弓矢の情は相たがひ、夫婦の操も節義は一つ、貞心あつき袖萩が最期の際に一言は、妻子に詞もかけよかし。

〽暇乞をと仁愛に、なうなつかしの貞任殿。

袖萩　最前からよう似た聲とは聞きながら、あんまり思ひがけもない、六歳ぶりで廻り逢ひ顏見ることもかなはぬか、死ぬる今際にちよつとなと、此目があきたい、コレお君。

お君　とゝさまいなう。

〽と稚子を見るにさすがの貞任も、ともに血を吐く親々が、恩愛の涙はらはらはら、思ひにへだつ八重垣に、落つる涙は雪とけて、水かさまさる如くなり、大将哀れと思し召し。

ト大おとし宜しくあつて、

義家　てゝ親の縁切れたるお君、義家が子に養ひ得させん。

〽仰せに傔仗ありがた涙。

傔仗　いかなれば某は敵と味方を聟に持つ、因果も思ひめぐらせば代々不和なる源平を、先祖にそむいて縁組んだ我誤りを白梅の、この一枝を血に染めて元の平家の寒紅梅。

袖萩　父上さま。

傔仗　娘よ一所に。

濱夕　謙杖殿。

傔仗　孫よ、聟殿。

袖萩　我夫さらば。
傔杖　さらば。
〽さらば〳〵とばかりにて、一度に息は絶えにけり。
ト傔杖袖萩落ち入る。遠寄せをあしらふ。
〽御大將の直垂の袖射けづつて餘りの矢先。（ト揚幕にて）
宗任　エイ。（上の藪へさしがねの矢立つ。義家眼をつけ
義家　我を目がけて射かけし此矢は、何者なるぞ。
宗任　八幡太郎義家に、安部の宗任見參〳〵。
〽竹にたちまちすつくと宗任。
トツヽカケばた〳〵にて花道より、宗任四天丸ぐけ凛々しきこしらへ、弓矢を持ち逸散に出て花道に止り、
いかに義家。（トツカ〳〵舞臺へ來る）
〽さいぜん此場を立退きしは、兄弟本意を遂げんため。

宗任　優曇華まさりの敵義家、サ、、、、尋常に勝負〳〵。

〽勝負〳〵とつめかくれば。

貞任　ヤレ待て宗任。晋の豫讓は衣をさく、八幡とは八つ幡の、此白幡をまツ此如く手に取れば。（ト立てし白旗を取り）

〽八幡が首取りしも同然。

敷妙が身に大切な、夫婦の縁をつぎめの旗、ソレ大事に召され。

〽濱夕殿、渡すは舅のはた天蓋、ひるがへしたる梅花の赤旗。

我家の旗もろともに。（ト懐中より赤旗を出し）

〽奥州に押立て〳〵。

父頼時が弔ひ軍、一まづ此場は宗任來たれ。

宗任　ハツ、實にもつとも兄者人。雪持笹は源氏の旗竿。

〽一矢射たるは當座の腹癒せ。

首を洗つて義家お待ちやれ。

義家　ホヽウ實にもゆゝしき二人の弓取り、勝負のほどは天運次第。

貞任　まづそれまでは此まゝに。

義家　桂中納言教氏卿、御役目御苦勞。

〽式禮に。（トよろしく會釋して義家冠を出す。貞任取つて）

義家　おさらば。

貞任　さらば。（ト貞任冠を太刀の柄へ結び付け行きかゝる、お君すがること）

〽と敵味方、着する冠装束も、古郷へ歸る袖袂、雁のつばさの雲の上、母に別れて稚子が、父よと呼べばふりかへり、見やる目元に一時雨、ぱつと枯葉のちり〳〵嵐、心よわれど兄弟が、また取り直す勇み聲。

トこのうちを君貞任の裾を引留め、宜しくあつてトヾ遠寄せになる。宗任貞任入れかはり、

〽胸はをがせと入亂す、鎧の楯や信夫山。

宗任　またひるがへす衣川、

義家　絲の亂れや敵味方。

濱夕　雪と消え行く夫娘。

貞任　まづそれまでは。

義家　互ひに戰場。

貞任
宗任　八幡太郎。

義家　貞任、宗任。

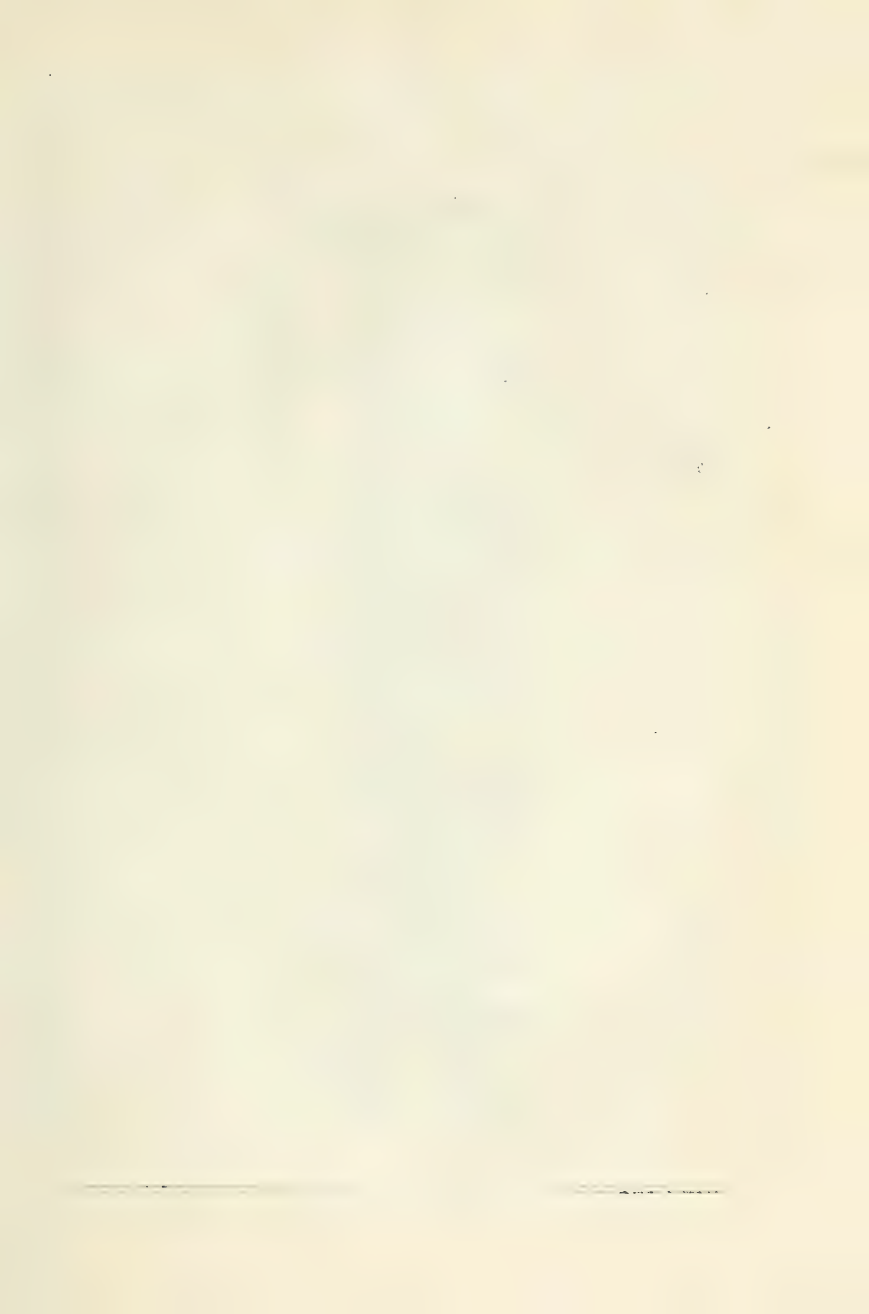
皆々　さらば。

へなびく源氏の御大將、安部の貞任宗任が、武勇は今にかくれなし。

ト双方引張りの見得、遠寄せを打込み、段切にてよろしく。

幕

袖萩祭文（終り）

伊賀越道中双六
いがごえだうちうすごろく

伊賀越道中雙六（伊賀越通し＝十幕）

序幕　荏柄天神社の場

役名　澤井股五郎。和田志津馬、池添孫八、荒卷伴作、輕業師浮世與之介、本庄屋定七、奴實内、村瀬新藏、伊木傳吾、上杉春太郎、輕業師小きん、新造濱芝、禿()、△等。

本舞臺三間の間、荏柄天神鳥居前。向う高き朱の玉垣。是に幕を張り廻し、下手張番所、これにも幕を張り、突棒刺股の飾り付よろしく、こゝに若殿春太郎、羽織狂言袴を着し鉢卷をして、上下に柱を打ち、是へ仕掛の綱を張り、此上を渡り、番傘をさし扇を開き、輕業綱渡りの見得。傍に新造濱芝これを控へてゐる。荒卷伴作桃色の大扇をもつて口上を言ふ見得。小きん桃色の肩をかけ、三味線彈きにて控へてゐる、輕業の鳴物にて賑かに幕あく。

伴作　東西々々。いよ〱太夫支度に掛りますれば、綱元へ差懸らせます。（ト此口上にて春太郎綱の

上にてしやんと立つ）モシ若殿様、そこでお掛聲〳〵〳〵。

春太　ハツトウ。（ト歩からとしてグラ〳〵する。）

小き　オツト腰の固めが肝心々々。

春太　合點ぢや〳〵。

伴作　唯今お目に懸けまするは、則ち牛若丸五條の橋にて辨慶と出會ひ、千人斬りの所でございまする。

春太　ハツトウ。（トよろしくあつて留る。）サテ〳〵〳〵扨又次の輕業は、その軀綱を放れまする、是れを名付けて獅子の洞入り洞返り。ずつと立つたは則ち野中の一本杉。アリヤ〳〵どつと褒めたり〳〵。（ト春太郎綱の上にてよろしくあるべし。）扨々々々また次の輕業は、足を放してしやんと留りまする。是れを名付けて達磨大師坐禪の形。後は東々々。

ト始終下座の合方にて、春太郎よろしくあつて、トヾ綱より落ちる。皆々立上つて、

皆々　オヽお危うございまする〳〵。

女形みな　お怪我なされはしませぬか〳〵。

春太　イヤ何ともない〳〵。

女形
皆々　殿様、お白湯ぢや。

ト銀の茶碗に湯を出す。春太郎取つて呑む事。

春太　足も腰もめり〳〵する。撫つて呉れ〳〵。

ト是にて綱を取除け、皆々床几へ掛ける、かすめし大拍子。

小き　左様なら私が、鞠の曲をお目に懸けませう。

ト是より山本小きん、手鞠の曲に掛る事よろしくあつて、

おれも咽がひツつくやうだ。

新蔵　そんならおれが替つてやらう。（ト村瀬新蔵そこへ替りに直り。）最初御覧に入れますは、お染久松は相生の鞠、サアこれより天上より片落しに下りまするが、裡門の瀧。下より登るのが鯉の瀧登り〳〵。

ト口上を言つてゐる、花道より和田志津馬、上下衣裳にてツカ〳〵と出て来る。伊木傳吾麻上下にて是れを留めながら、花道にてちよつと立廻りあつて留り、

志津　コリヤ何故あつて、志津馬が出仕を留めさつしやる。

傳吾　イヤ、誰であらうと御前へは叶はぬとの仰せゆゑ。

志津　何と致したお身持でござります。

春太　何を痴けた。（ト傳吾を振拂ひ、志津馬舞臺へ來り。）コリヤ若殿春太郎樣には、コリヤ志津馬、目に角立てゝ何を言ふのぢや。

志津　モシこれを何處へと思召す。エヽあなた樣はなア。（ト合方になり。）お舘でのお遊びさへ、あのやうな事をお好き遊ばさるゝと、不斷御異見を申上げるぢやアござりませぬか、今日勅使御下向とあつて、大殿樣の御名代、御勅使警衛のお役目ぢやござりませぬか、それに場所のお辨へなく、人も込む在柄の天神の鳥居先で、輕業の學びをしての御遊興とは、マアどうしたものでござりまする。伴作殿、いづれもお供してござりながら、飛んだり跳ねたり、何故お留めは申さつしやらぬ、誰あらう山内の執權上杉家の若殿が綱渡り、呆れて物が言はれませぬわいの。

伴作　イヤモウ志津馬殿にさう言れては、伴作穴へも這入りたい心持でござる、新藏傳吾もとも〳〵お留め申せど、お聞入れなき春太郎樣の御意ゆゑに。

新藏　是非なうお相手になつてゐる所を、貴殿に見付けられ、

傳吾　面目を失ひましてござる。

與之　若殿樣それ御覽遊ばせ、爰は場所が惡うござりまする、お歸り遊ばしてから遊ばしませと、小

小き　殊に私があれ程お留め申したぢやござりませぬか。私共の商賣が商賣ぢやによつて、人に積らるゝ所も恥しうござりますわいなア。

ト兩人こなし。

志津　イヤ兩人共に、何も其方達が存じた事ではない、心遣ひには決して及ばぬ。

春太　いつもは氣に入りの志津馬ぢやが、今日は大分野暮うなつたのゝ、あれらが氣鬱に思ふわいなア。

ト小きんこなし。

小き　モシ志津馬様。兼々あなたも御存じの通り、伴作様のお引附にて先達ふとお屋敷へ召されましてより、あられもないひよんな藝が御意に叶ひまして、毎日々々お屋敷へ入込んでをりまする。

與之　御忠臣のお方々様は、定めて用ない事をお勸め申上げまするやうにも思召さうと、召さるゝ度度二人して其事ばかり。

小き
與之　申し兼ねしてをりまする。

春太　氣に入りの志津馬が、爰で騷いでは惡いといふ事なら止めう／＼。然し勅使のわせらるゝまで安閑としてゐるも退屈、小きんも與之介も是から何をして遊ばう、思付はないか／＼。

小き　されば何がよろしうござりませうやら。

伴作　モシ、よい事がございます、昨日小きんが差上げた、浮世繪合せを寫してお遊びなされませぬか、
新藏伴作　是はよろしうございませう。
春太　サア〱料紙硯、繪の入つた文庫を持て〱。（ト傳吾新藏料紙硯、繪の入りし文庫を持ち出て來り、文庫を開き、）
傳吾新藏　ハ、ア。
春太　小きん與之介、其繪を一枚づゝ取つて見せい〱。
ト與之介小きん文庫の内より錦繪を取出し、傳吾新藏紙を出し墨を磨る。三味線入りしやでんになる。
與之　是が扇屋の花紫といふ太夫が、外八文字道中の所でございます。（ト春太郎繪を取つて見る。）
小き　是が歌舞伎役者の阪東三津五郎が、源太になりました所の錦繪、此振りを御覽じませ。
與之　とんと生きて動いてゐるやうでございます。（ト春太郎其繪を取つて見る。）
春太　フウ、源太とは梶原源太の事か。
新藏　左樣でございます、淨瑠璃にも語る通り、坂東一の若武者と皆人毎にいうてから、
傳吾　通ひ詰めたは神崎の梅ケ枝。
小き　仲の町へ客をお送りして出た時の姿、是は松葉屋の瀨川。
與之　是が鶴屋の菅原。

ト段々言立て並べるを、春太郎一々手に取つて見る事あつて、

春太　フウ、そんなら寸分違はず此通りぢやの。

小き　皆さん御覧じませ、豊國といふ繪師は似顔を、よう書きましたぢやアござりませぬか。

春太　コレ〳〵志津馬、見い〳〵。(ト春太郎錦繪を志津馬に見せる。)

志津　成程よう書きました、なか〳〵名人でござる。

伴作　イヤ又繪そら事とは言へど、吉原の花魁ばかりは、繪に書いたよりは正のもの丶方が遙かに増つて美しう見えまするて。(ト春太郎は此話に乘つて思入あつて。)

春太　コレ〳〵伴作、スリヤ吉原の花魁とやらは、此繪に書いた姿形より、遙かに増つて美しいと申すか。

伴作　ア丶此松葉屋の瀬川を御前にお目に懸けたいなア、假令楊貴妃小町でも及びませぬ美人々々。

春太　取分け予が氣に入つたは、松葉屋の瀬川とやら。(ト錦繪を取つてぢつとこなし、志津馬思入。) 志津馬、氣に入りの其方ぢやが、ナント此瀬川を妾に抱へては呉れまいか。

志津　スリヤ浮世繪の此瀬川を。

小き　殿樣の御意に入つたも尤も。

傳吾
新吾　志津馬殿、身請けして上げさつしやれ。

志津　各々そりや何を言はつしやる、假令御意に叶へばとて、傾城遊女が上杉家の、妾にせらるゝものか。

春太　ぢやと言つて、氣に入つた女郎ぢやもの。

志津　ハテ廣い世界、此料をもつて尋ねなば、瀬川に増つた女は、いくらも尋ね求めて差上げまする、

春太　傾城遊女は妾にならぬゆゑ、彼に優つた女を尋ねて呉れようとは尤も、道理で志津馬は孔明ぢやく／＼。

志津　然らば勅使のお入りまで。

伴作　神職方に御休息。

春太　是から酒ぢや、みんな來い／＼。

皆々　先づお入りあられませう。

ト三味線大拍子になり、春太郎先に小きん與之介伴作新藏傳吾、いづれも志津馬に思入あつて鳥居の内へはひる。後に志津馬殘りこなしあつて、

志津　よく／＼思ひ廻すれば、若殿春太郎樣のお身の上、御學問ばかりにお心を凝らされ、當春より

ら〳〵との御頼ひを、大殿樣御夫婦にて御案じ遊ばし、お心の晴るゝやうにと御遊興をお許し申し、唄三味線でもある事か荒々しき輕業の學び、朝暮入り込む小きん與之介、今更それをお諫め申せば浮世繪の師匠瀨川にお目が留り、妻に抱へ吳れとの御頼み、當座の間に合ひ、似寄りの女を尋ね求めんと申し求めて置いたれども、何かにつけて愚かしきお生れ、是をお留め申すには一應では參るまい、ハテ、よい思案がありさうなものぢやなア。

ト思案のこなし。しやでん三味線入りになり、花道より池添孫八菖蒲革袴大小にて出て來り、志津馬を見てツカ〳〵と來り、

孫八　オヽ、若旦那志津馬樣、是にお出なされましたか。

志津　オヽ孫八、其方は供をして參るかと存ぜしが、何として遲れをつたぞ。

孫八　左樣でござります、先程お屋敷を出ます時分から、何とも以て實內めが素振、合點行かずと存じまする折から、途中にて小路隱れを致しましたゆゑ、後追驅けて尋ねましたが、到頭姿を見失ひまする內、あなた樣にははや此社へお入と承り、何處が何うやら急いで參じました。遲刻の段は眞平御免なされて下さりませ。

志津　わしや又何をしてをつたと思うた、大儀〳〵。

孫八　イヤ、それに就きまして申上げまするは、私事誠に幼少より召使はれ成長致したにつき、唯今にては御門弟の數に差加へられたる大恩は山よりも高ければ、その若旦那のあなた樣ゆゑ、日頃から齒に衣着せず申上げますが、必ず〲お心に障へられますな。あなたの疵は御酒さへ上ると萬事をお忘れなさるゝ御性分で、大旦那が前々より御懇意とて御世話遊ばす、お心の知れぬ股五郎樣などゝ餘りお心易うなさらぬがよろしうございます、色と酒とは敵にせよとは賢者の戒め、常に此儀を必ずお忘れ遊ばされまするな。

ト志津馬こなしあつて、

志津　心深なる孫八の異見、仇には思はぬ忝い、取分け今日は勅使お入りとありてきつと愼しみをれば、必ずともに案じぬがよいぞや。

孫八　左樣仰言つて下さりますれば、御異見を申し上げた私めも大慶、勅使のお入りにはまだ暫く間もございませう、御膳所の樣子、何かの事は私が、先へ參つて見廻り致しまするでございませう。

志津　それは大儀、勅使御入りの樣子が知れたら、早速に知らしてくりやれ。

孫八　畏つてございます、左樣ならば若旦那樣。

志津　そんなら孫八。
孫八　後程お目に懸りませう。（ト大拍子にて孫八思入あつて、鳥居の内へはひる。直に花道にて。）
足輕　下れ〳〵、下りをらう。
定七　ヘイ〳〵、どうぞお通しなされて下さりませ。
　トやはり右鳴物にて、羽織着流し町人のこしらへの本庄屋定七出來り。これを足輕の△○二人六尺棒を突き、下れ〳〵と捨ゼリフにて直に舞臺の下手へ來る。かすめし大拍子。
足○　ヤイ〳〵勅使御下向の此境内。
足△　おのれノカ〳〵何處へ行くのだ、推參千萬。
兩人　下りをらう。
定七　イヤ私は切通しの町人本庄屋定七と申して、和田樣へお出入の者でござりますが、志津馬樣のお目に懸らうと存じて參じました者でござります。（ト此樣子を志津馬聞付け。）
志津　コリヤ〳〵下郎共、留めるは尤なれど、苦しうない者ぢや、許せ〳〵、イヤ定七、大儀であつた、近う〳〵。
定七　イヤ是は志津馬樣、よい所でお目に懸りました。左樣なら御免なされて下さりませ。

ト志津馬の傍なる床几へかける。

志津　今日は勅使お入りの境内ゆゑ、一々人の出入を改める折柄、其方が參りしは何事ぢや。

定七　イヤ別の儀でもござりませぬ、彼の金子の儀につきまして。

志津　アヽコリヤ〳〵。（ト言つては惡いとこなし、下郎に思入あつて、）イヤ下郎共、其方達は南の門へ參つて、必ず人を通すまいぞ。

足輕兩人　畏つてござりまする。（トこれにて足輕兩人下手へはひる。）

定七　いかさま金銀は內證事、爰で申すは不調法、御免なされて下さりませ。

志津　イヤ〳〵契約の日限が延引致したれば無理とは存ぜぬが、此事は股五郎殿を賴み置いたが、いまだ逢はつしやらぬか。

定七　ヘイ、まだお目には懸りませぬ。

志津　いづれ一兩日は、猶豫致して貰はずばなりますまい。

定七　アイ、待つてくれいと仰言るのでござりますかな。

志津　いかにも。

ト定七こなし、三味線入りしやでんになり、花道より股五郎ぶつさきの羽織袴にて、後より新造濱芝

禿の女浪男浪兩人附添ひ、此後に奴實内笹の葉に鍵を通し、これを提げて出て來る。

濱芝　これいなア澤さんえ、花魁の言はつしやるには、此文を志津馬さんに逢うてお渡し申せと、言ひんしてござんすわいなア。

股五　ハテせはしない、志津馬に逢はしてやらうと思へばこそ、實内に言付けて此社内まで連れて參つたのぢやわい。

禿兩人　モシ濱芝さん、志津馬さんは彼處にござんすわいなア。

濱芝　ほんに彼處にござんした、そんなら彼處へ。（ト行かうとする。）

股五　イヤ〳〵待ちやれ、氣惱な定七がをれば。（ト股五郎新道に囁く。是にて濱芝呑込み袖頭巾を冠せ、禿も兩人下手へ忍ばせる。股五郎實内は本舞臺へ來る。）オ、誰かと思へば、本庄屋定七か。

ト是にて定七揉手して下手より。

定七　イヤ股五郎樣でござりまするか。

股五　お手前のござつた筋は此股五郎が呑込んで、部屋住みの志津馬殿吉原通ひの内證金、他聞憚る密に〳〵。今御用立てゝ置けば、豫々お手前の願うてをる、お國許の掛屋の御用が足さるゝわサ。

定七　さう聞きましては惡僻性は出來ませぬ、今の願ひが何より第一。

志津　これは股五郎殿には、いつに變らぬ拙者をお世話下さる段、有難う存じます、シテ今日は何れへお越しなされましたな。

股五　イヤ身共游漁が熱心ゆゑ、滑川の邊から境川邊りを網を打たせました所、御覽なされ、あの如く、鯉を三本を打當てました。鯉は出世魚と申しまするゆゑ、則ち携へましてござる。

志津　それはよいお樂しみでござりました。

股五　時に志津馬殿、貴殿に拙者が折入つて賴みがござるが、ナントお聞き下されうや。

志津　斯ほど懇意の仲にて、是は又改つたお言葉、何なりとも。

股五　サア外の儀でもござらぬ、拙者懇意に致す女、今日勅使のお入りと聞き、都人の裝束姿拜ませて吳れと、據所なく願ふにつき、こつそりと最前社内へ入れ置いた、こゝらは粹な貴殿、ナント大目に見てはお吳りやるまいか。

志津　ア、イヤ〳〵股五郎殿、町人たる者殊に女、左樣の儀を制たう致すが拙者共が今日の役目、外の者の存ぜぬ內、一時も早くお歸しなされい〳〵。

股五　ハテそこが賴みぢや。さう堅う言ふものぢやござらぬ、好きな女、何であらうと廓から寄越し

た便り蒲吏知らぬ者でもござるまい。

ト言ひながら股五郎以前の新造禿を志津馬の前へ突出す。矢張りしやでんにて、

濱芝　志津さんえ、私でござんすわいなア。

ト濱芝袖頭巾を取る。

志津　ヤア、そなたは瀬川の新造。（ト志津馬びつくりこなし。）

濱芝　もしえ、花魁からのお文で、早うあなたをお連れ申せと、お迎ひに参じました。

股五　ナント股五郎は粋か〳〵、御互が一日逢はねば百日も逢はぬやうに吸付き合つてをる仲、身共とは違うて親持の身分、此間より御前勤めに間がなうて、廓へ行かぬのを女氣で、若しや心替りでもしたかと案じ煩うて、それで禿を附けて迎ひに寄越したと實内に言附けて、そつと爰まで連れて來たは、ナントきついものか〳〵。

實内　然し私も御門を通す思案に困り、股五郎樣と御相談申して、勅使設けの御膳道具を運ぶを幸ひ、長持の中に禿と一緒に打込んで、御膳所の荷物に紛れ、難なく社内へ入込ませ、最前から松蔭に待たせて置いたも、志津馬樣のお笑ひ顏を見たいばかり、ナント結ぶの神でござりませうがな。

志津　エヽ非常を亂す此境内おのれ實内め、憎い奴とはいふものゝ、おれも便りが聞きたかつたわい。
股五　ハヽヽヽヽ、さう解けて見れば廓の座敷も同然、身共が持參の、ソレ實内。
實内　ドレ、お持たせを開きませうか。
　　ト提重の内より德利杯を出して前へ並べる。矢張り右しやでんにて股五郎一杯飮んで志津馬に差す。
股五　サヽ、一つ慮外ながら。
志津　イヤ今日は、まことに禁酒でござる。
股五　ぢやと申して斯うなつた所で、殊に瀨川が新造の顏を見ては、どう飮まずにゐられうぞ、サヽ一つ〳〵。
實内　一つ二つは御心配を休めまする、御保養に相成りませうテ。
志津　そんなら實内、一つぢやぞ。（ト志津馬一つ受けて飮む。）
股五　オヽ其杯は餘り見事、あれにゐる本庄屋定七に遣はされい。
定七　ヘイ〳〵、是は有難うござりまする。
志津　慮外申さう、一つ飮みやれ。（トこれより杯事いろ〳〵あつて）
股五　扨杯は差置いて、お手前へ賴む事餘の儀でない、知らるゝ通り志津馬と太夫が仲、所にさる

御大盡から身請の御相談が懸つたぢや、向うは千兩二千兩の金子に差支なき由、そこは慾に食ひつく親方がそれやりたいといふも尤ぢやが、先約なれば是非志津馬が方へ五百兩で請けさすると、此股五郎がつくばつては置いたれど、今日明日に迫つた日限の金、是まで取替もある上なれど、今度のは格別の入用なれば、只管立てゝ呉りやるまいか。

定七　そりやはやあなた樣のお頼み、いかやうとも致して上げませうと申したけれど、お部屋住みの志津馬樣といひ、大枚五百枚と申す金、何で慥かなお引當がなければ。

股五　オ、其思案もして置いた、サヽ、も一つ重ねて飲みやれ。（ト本庄屋定七杯を受け飲む。股五郎も飲む。）イヤ／＼これぢや餘り小杯、コップに致さう。

濱之　サア／＼、これでお上りなさんせいなア。（トコップを取って股五郎へやる。）

股五　オ、此事々々。（ト股五郎コップにて一つ飲んで思入。）こりやおあひを頼まずばなるまい。

ト志津馬へ杯を差す。志津馬飲む事。

和田家には重代の一口正宗の名作がござるが、貴所御存じか。

定七　成程承り及んでをりまする。

股五　其正宗を質物にさせう、ナント是程慥かな引當はござるまいが。

ト志津馬コップを股五郎の前へ戻し、

志津　サおあひ致しませう。(ト股五郎引受け呑む事。)股五郎殿、其正宗は先祖より傳はり常の差料にも致さぬ重寶、なか／＼質物などには。

股五　ハテ一つ鍋の物喰うてゐる拙者、その大切の刀なればこそ、五百兩に質に預からうと申すのぢやござらぬか、ほんの當座の間を合す金さへ濟ませば事は濟むと申すもの、今度武將の若君御元服の御祝儀、諸大名より銘作の劍獻上あるべき折柄、正宗多き其中にも和田行家が正宗は勝れて無双の名作、殿より御所望あるは必定、其時なければならぬ大切の刀、暫く用立て其内には、股五郎が親類は歴々、才覺して取戻して進ぜますわ。

賓內　左様とも／＼、股五郎様の御親類は城五郎様といつて、足利家の昵近にござれば、御案じなさるゝ暇さへあれば、五百兩や千兩は、つい此奴がお使ひに參つても出來る金。

股五　氣遣ひせずと、サア志津馬殿、其趣一札書いて渡さつしやれ。

志津　いかにも。(ト鼻紙へサラ／＼と書いて渡す。)

股五　「覺。一、五百兩の金子御持參下されは候はば、重代の正宗と引換に相渡し申すべく候。以上。月日。本庄屋定七殿へ。和田志津馬」

ト本庄屋此一札を受取り懷中して、

定七　左樣ならば早々金子調達致し、股五郎樣まで持參致すでございませう、其時必ず正宗とお引換へを。

股五　氣遣ひ致すな、身が金鐵ぢや。

定七　モシ、言はぬ事は聞えませぬが、利息は二割二月限りでござりますぞ。

股五　オ、それも承知々々。ナント和田氏、よい手筈であらうが、目出たい／＼。

實内　目出た序に打つて置け。

皆々　ア、ヨイ／＼ヨイ。（ト皆々手を打つ、）

股五　祝ひにも一つ。（ト大杯にてグツと飮み、）サア志津馬殿、是から大びらに飮んだり／＼。

ト言つても志津馬そろ／＼醉ひが廻りしこなし。眠むたき思入。

濱芝　これはしたり志津馬さん、きつう酒が過ぎたさうな。オ、それ／＼、此間花魁がきつう酒に醉はしやんした時、藥の入つた印籠を預けて戻らしやんしたを、今日持て來たを幸ひ。（ト濱芝懷中より印籠を出して、）此内にある紫金錠、醉醒ましに。（ト印籠より藥を出して志津馬へ呑ませ、）此印籠は股五郎さんの、（ト股五郎印籠を取つて腰へ下げる、）きつとお前に戻しますぞえ。

股五　オヽ印籠[いんろう]たしかに受取[うけと]つた。

定七　ドリヤ私[わたくし]はもうお暇[いとま]申しませう。

股五　定七[さだ]、とくと合點[がつてん]か。

定七　委細[ゐさい]畏[かしこ]まりました。

股五　實内[じつない]、來[き]やれ。

實内　サアござりませ。（ト唄になり、股五郎實内を連れて鳥居の内へはひる。定七は花道へはひる。）

濱芝　モシ志津馬[しづま]さん、花魁[おいらん]のお待兼[まちかね]。

禿 兩人　早[はや]う廓[くるわ]へござんせいなア。

ト三味線入り大拍子になり、鳥居の内より春太郎伴作傳吾新藏小きん與之介いづれも出て來る。

春太　志津馬[しづま]はどれへ參[まゐ]つた。

小きん 與之　志津馬樣[しづまさま]〳〵々々々々。（ト志津馬こなしあつて、）

伴作　ヤア志津馬殿[しづまどの]、勅使[ちよくし]お入[い]りの此境内[このけいだい]、それにゐる女[をんな]は。

傳吾 新藏　そりや何者[なにもの]でござる。

志津　サア此者[このもの]は。（ト邊りの文を新藏見付け、）

新藏　ヤア伴作殿、見さつしやい。「志津馬樣參る、川より」といふ文が爰にあるからは。
伴作　扨は瀨川が所から、使ひにうせた女だな
春太　ソウ、そんなら志津馬は瀨川に。
新藏　志津馬殿、最前春太郞樣へ御異見申上げられた、舌の根も乾かぬ其内に。
傳吾　廓の女を引込んで身持放埒。
春太　フウ、スリヤ此文は瀨川が方より志津馬が所へ寄越した文か。（ト思入あつて）コリヤヤイ、おのれ傾城遊女を妾にさす事はならぬとわしを遣込めて、瀨川をわが情婦にしをつたな、おりや腹が立つて〳〵ならぬわいなア。
志津　イヤ春太郞樣、全く左樣な儀では。
伴作　ヤア言はつしやるな、豫々貴殿と瀨川が事は一家中誰知らぬ者はござらぬ、その女の所から來た使ひを、勅使お入りの境內へ入込ませて、事が濟まうと思はつしやるか。
新藏　御親父行家樣の耳へ入つたら、
新藏傳吾　濟みますまいぞ。
志津　イヤ伴作殿始め何れもに、見咎められしは此身の不運ではござれど、此者共を私が呼寄せたと

申す儀でもございませぬ。是には樣子が。

春太　默れ〳〵、主に僞りを言ひかける不屆者め。コリヤ志津馬、向後目通り叶はぬぞ。

志津　ナニ、お咎めゆゑにお目通りを。ム丶。（トこなし。）

伴作　お目通りとは、まだ〳〵若殿樣のお慈悲、大殿樣上聞に達せば直に、

傳吾 新藏　縛り繩は知れた事。（ト小きん思入あって、）

小き　憚りながら、御意に叶ひ御奉公に私なき志津馬樣なれば、決して御前の御意をお背き遊ばさるゝと申す事ではござりますまい、此女中の此場へ見えたは、定めて深い樣子もござりませうが皆樣が口々に仰言つては、かういふ譯ぢやと言ふ事も、明白には仰言られませぬ事もござりますれば、先づ〳〵お靜かに、譯をお聞き遊ばしませいなア。

與之　左樣でござりまするとも。唯今小きんが申し上げる通り、是には譯がなければ叶はぬ、それに伴作樣のやうに荒々しう仰言つた時には、假令若殿樣へ差上げらるゝお心でも、是非なら御自分の不義になつて、御難儀を引受けておしまひ遊ばす事も世間にある習ひ、春太郎樣。

小き　伴作樣。

兩人　ナント左樣ぢやアござりませぬか。（ト花道より足輕出て來り、）

足輕　ハツ申上げます。唯今勅使千草の少將樣、櫻の馬場まで御着でござります る。

春太　ナニ、お勅使馬場先までとな。

伴作　馬場先までお出迎ひ。

春太　伴作は御膳所、萬事志津馬になり替り。

志津　スリヤ役目の儀は叶ひませぬか。

傳吾新藏　目通り叶はぬ、立たつしやい。

志津　ハヽア。

春太　皆は一緒にお出迎ひ。

皆々　先づあられませう。

ト三味線入りの大拍子になり、春太郎傳吾新藏花道へはひる。伴作は鳥居の内へはひる。

與之小き濱芝　こりやひよんな事になりましたなア。

志津　ナニ小きん與之介、一旦若殿の御不興蒙るとも、お詫の仕樣は思案もあらん、必ず〳〵案じぬがよい、差當つて皆を爰にかうしても置かれまい、何卒廓へ。

濱芝　畏まりました。御恩になつた志津馬樣のお賴み、少しも早う。
與之　裏口から三人して、廓へ送り屆けませう。
志津　よいやうに賴んだぞ。
濱芝　左樣ならば志津馬樣。
與之 小き　サア參りませう。

ト大拍子はやり唄になり、濱芝秀爾人與之介小きん附いて下手へはひる。志津馬こなしあつて、

志津　柔和溫和の春太郞樣、傍から寄つて色々な惡い事をお勸め申し、結局は此身にかゝる難儀、お目通り叶はぬとの御意なれども、お後を追うて今一應、身のお詫を、さうぢや。

ト三重にて志津馬花道へはひる。ト伴作實內鳥居の內より出て來る。

伴作　其手紙を見るに及ばぬ。持て行け〱。
實內　是は怪しからぬお腹立、何は兎もあれ、股五郞樣の遣はされました此手紙、御覽遊ばされましたら、事は分りませうでござります。（ト手紙を伴作に差出す。）
伴作　イヤ〱股五郞が辯舌に言廻され、格別の金子まで用立て遣はした此伴作、役を變じられては、身共武士が立たぬわい。（ト手紙を取つて捨てる。）

實内　モシ、これは大切なお手紙、投棄てゝよいものでござりませうか。

ト手紙を拾ふ。此以前より股五郎出て窺ひゐて、

股五　武士が立つの立たぬのと伴作殿、そりや何を御意なさるゝ。

伴作　ヤ、股五郎か、おのれ其分には置かれぬ、眞二つに。

ト刀に反を打つて掛るを、股五郎留めて、

股五　待たつしやれ、何もお手前に斬らるゝ覺えはござらぬぞ。

伴作　覺えないとはお谷が事、男を拵へ駈落をされて、身共が恥辱であるまいか。

股五　サ、それぢやによつて、拙者が心腹の程詳しく認め遣はした此書面、何故讀んで御覽になされぬ。

伴作　フウ、スリヤあの手紙に。

股五　貴殿の武士の立つやうに、工夫致して置きましたテ。

伴作　ドレ。（ト大拍子。伴作手紙を取つて開き見て。）ナニ〳〵。「御手紙で申上候。行家娘お谷事、貴殿かね〴〵の御執心にてお頼みにつき、拙者もいろ〳〵骨を折り口説き候へども、一向に聞入なく、不義徒らにて家出致し候上は、今更力に及び申さず候。此上は貴殿の恥辱を雪ぎ候に

は、老ぼれの行家を毒殺なし、相果て候後にて、かね〴〵行家工夫を凝らし置き候新田開發の儀、薩埵の山の諸木を切拂ひ、材木となし候へば、格別御悦喜に相成り候儀、其後へ直に田畑を作らせ候へば、凡そ十萬石餘の地面出來申候。是を貴殿の御工夫と仰せ立られ候はゞ、格別の御奉公にも相成り候儀、千石や二千石の御加增は目の邊りに候。其節は御約束の通り拙者へも五百石以上の御加增下され候やう、御取計らひ下さるべく候。まつた行家毒殺の儀は、實内に渡し置き候別紙の藥種を買ひ集め、明日の茶の湯の節相用ひ申候間、お谷が事は是にて御了簡下さるべく候。以上。月日、荒卷伴作殿へ、澤井股五郎。」

股五　ナント拙者が心底に隔なき所、是にて御安堵下されい。

伴作　ハ、股五郎殿、貴所を疑ひしは全く伴作が足らぬ所、御免下されい〳〵。

ト兩手を突いて辭儀をする。

股五　實内に言附け置いた通り、買ひ集めしか。

實内　それを忘れてよいものでござりませうか。

ト懷中より小風呂敷の包を出し、こなし。

股五　ドレ〳〵。ヒソウ石、ハンメウは賣買を許しませぬゆゑ、殿中に用ゆる毒藥は我家に先祖より

傳へありし秘法、五木八草を細抹にして服ますれば、立所に命を落すの妙藥、幸ひ明日茶の湯の節釜へ仕込んで呑ませんと、買ひ集めし此藥種、實内、五木八草はあれども、今一味不足してをるは。

ト股五郎藥を改め見て思入。

實内　左樣でござります。とんとそれを失念仕りました、早速調へ仕込みまするでござりまする。

股五　こりや一色でも不足しては、效能が薄いぞ。

伴作　實内、拔からぬやうに圍の釜へ。

實内　かういふ事にかけては、五分でもやるものぢやアござりませぬ。

股五　ハテ小氣味のよい奴ぢやなア。

トバタ〳〵大拍子になる。股五郎伴作上下へ小隱れする。孫八ツカ〳〵と出て、實内が持つてゐる手紙を取つて行かうとするを、實内やらじと手を押へて。

實内　コリヤ孫八、物も言はずおれが持つたる此手紙を、引奪つてどうするのだ。

孫八　今朝からうぬが怪しい處置振、大事の場所へ飛んだ奴を引き入、大方汝が皆んな絲引、怪しい手紙と見たからは、引奪つたが何とした。

實內　それを見られて堪るものか。(ト手紙へ手をかける。)

孫八　汝に渡してなるものか。

ト太鼓入りの鳴物になり、手拭をかせに摑み合ひの立廻りよろしくある。此時揚幕にて。

呼ビ　御勅使のお入り。

孫八　ナニ、お勅使のお入りとや。

實內　何を。

ト又立廻りて振りほどき、實內手紙を取つてツカ〳〵と花道へ行き、草履を取つて孫八を目懸けて打ちつける。是を孫八除ける。此間に實內逃れて逸散に揚幕へはひる。

孫八　南無三、彼奴を。

ト行からとする。上下より以前の股五郎伴作出て孫八を突廻して支へる。又揚幕にて

呼ビ　勅使のお入り。

三人　ハツ。

ト是非なく三人ハツとこなし。孫八は無念のこなし。下り端になり、この仕組よろしく。

幕

二幕目　　行家屋敷の場

役名　和田行家、澤井股五郎、佐々木丹右衛門、池添孫八、若徒柘榴武助、荒卷伴作、村瀨新藏、伊木傳吾、奴實内、行家娘お谷、同奥方芝垣、同腰元楓、同小萩等。

本舞臺三間の間常足の二重、大形の唐紙。壁に竹刀木刀懸けてあり。上手九尺の圍ひ、枝折門いつもより餘程大振りにて門の戸に太布を張り、是に鐵物の書落し、しやんと貫抜締めるやうにして、門の外見越の松、水門の入口。高塀すべて行家屋敷のかゝり。こゝに芝垣老けたる妻女のこしらへ、紋付の着附帶附のなりにて、圍ひの風爐に炭をさしてゐる。此傍に腰元楓小萩の兩人箱より茶の湯の道具を一つ一つ出してゐる。平舞臺に侍村瀨新藏伊木傳吾の兩人、袴股立のこしらへにて、兩小手木刀を傍へ置き控へてゐる。下手に若徒孫八袴大小のこしらへにて控へゐる。

新藏　今日は先生の御不快は、少しはお快い方でござるかな。

傳吾　兩人の者がお見舞旁々、稽古に參つたと、

兩人　申して吳りやれ。
腰元兩人　畏りました。（ト腰元手を突きこなしあつて、）
楓　村瀨新藏樣。
小荻　伊木傳吾樣。
兩人　お見舞でござりまする。（ト上手の芝垣こなしあつて、）
芝垣　これは〳〵新藏樣傳吾樣、ようこそお見舞下されました、用事に取りかゝつてをりますれば、お心易いに任せ、是より御挨拶申上げまする、お許しなされて下さりませ。
新藏　見ますればお風爐の炭をなされてぢやが、お客でもござりまするか。
芝垣　左樣でござりまする、夫行家も一兩日はチト快い方にござりますゆゑ、保養がてら茶を立てゝ樂しみたいと申されまするゆゑ、唯今圍ひの飾りを致してをりまするやうにござりまする。
傳吾　それは重疊、茶でも立つて御覽なされようとあるは、餘程おひらきがつきましたと見えまする。
新藏　然らば稽古場へまゐつて、二人していがみ合ひまするでござる。
芝垣　隨分とも御精をお出し遊ばしませ。
兩人　左樣なら御免下されい。

と合方にて傳吾新藏の兩人奥へはひる。孫八は兩人の腰元に取次いで吳れろとしかたで頼む。腰元呑込んで。

楓　申し奥樣、最前から孫八殿が、何やらあなたにお願ひ申上げたい事がござりますとて、控へてゐられまする。

小萩　ちやつとお逢ひなされて遣はされませいなあ。

芝垣　ナニ孫八がわしに逢ひたいとて待つてゐるとか。（トいひながら、此内圍ひの飾り附を仕舞ひ、圍ひより出て、）オヽ孫八か、何の用ぢや、爰へおちや〳〵。

孫八　ヘイ〳〵。（ト孫八二重の下の前へ進み出て、）奥樣、大變な儀に相成りました、あなた樣の御心中お察し申上げまする。

芝垣　サア昨日は勅使設けの場所にて、言はうやうもない志津馬が放埒、若殿樣を始め一家中の目に懸つた上は、打放しても慊ぬ奴なれど、部屋住ながらも御知行戴いてをれば、なか〳〵我子ながらも手前の自由に計られぬとあつて、今朝も夜明けぬ内から、丹右衛門樣を頼み申して伺ひ立てられたからは、よもや命には及ぶまいが、所詮家へとては思ひも寄らず、お谷が家出しやつた上に、又志津馬まで勘當せにやアならぬ仕儀になつたわいの。

孫八　スリヤ丹右衛門様をもつて伺ひを立てられましたとな、エヽ情ない事になりました、そりや是がお身に障り、大旦那の御病氣が重らねばよいが、これが又一倍苦勞に相成りますテ。

芝垣　サアわしもそれを案じ過したが、聞いて下され、又男は男だけの了簡、旦那殿には一向苦にもさつしやらぬ様子、晩には茶をするというて、その支度をなされてぢやわいの。

孫八　そりやア我慢にも仰言りませうが、お心の内が思遣られまする。

ト兩人しみ〴〵言ふ。合方になり花道より、股五郎馬乘り袴大小にて、後より奴實内、紺看板木刀を差し出て來り。

實内　モシ股五郎様チョット申さにやならぬ事がございます、マア〳〵お待ちなされて下さりませ。

股五　言はねばならぬ事とはそりや何事だ、言合せた手都合は如何ぢや。

實内　サアその事でござります、藥種は殘らず揃ひましたが、昨日孫八が何やら書付けた様子ゆゑ、彼奴に出會はぬやう、今朝からほつき歩いてをりますから、どうも仕込む間がございませぬ。

股五　ナニ孫八が書いた様子ぢや。（ト股五郎考へる事あつて、）そんならかうせい、汝は外に待つてゐて身が内へはひつて、何か孫八に用事を言附けて脇へ追ひやるわ、其後へ入込んだら、十分に計られようがの。

實内　彼奴さへをられば、どんな事でも出來まする。

股五　そんたら外に待つてをれ。（ト舞臺へ來り、股五郎ずつと内へ通る。）

實内　心得ました。

股五　扨々志津馬殿、何とも申上げます詞もござらぬ、志津馬殿のお身の上承つて、誠に驚入りましてござる。

芝垣　御推量なされて下さりませ。親の顔へ泥を塗りました志津馬が放埒、喰裂いても飽足らぬ奴でござりまする。

股五　イヤそれも若氣の至り、世間にない習ひでもござらぬ、ハヽヽヽヽ、それについて孫八、今日は稽古も休み日かと心得をつた所、門弟中追々罷り越したと承つて立歸つてござる。

孫八　御意の通り旦那のお心は、親子とは申せど別々に御知行下し置かれあれば、悴の放埒をもつて、一家中の稽古怠つては、猶々もつて申譯立ち難しと、お稽古は矢張り平日の通りでござります。

股五　それはイヤ御氣丈な儀、と申すは表向き御病後の事、定めてお疲れもござらう、殊に彼の幼少の時分より格別のお世話、居候になる御恩送り、拙者先生に代つて代稽古致すでござらう。

芝垣　それは近頃御親切、左樣なら稽古場の儀は、よろしうお賴み申しまする。

股五　委細承知仕つてござりまする。

芝垣　左樣ならお出での趣、行家へ申聞かせますでござりませう。

股五　イヤ孫八、それについてチト貴所に竊に相談を致したい儀もあれば、稽古場へ同道致して吳れまいか。

孫八　畏りました、私も亦あなた樣へ。

股五　それは幸ひ、サア來やれ。

芝垣　そんなら御一緒。

孫八　まづお出でなされませ。

ト合方になり、芝垣股五郎孫八奥へはひる。ト以前の實內內の樣子を窺ひ思入あつて、そつと戶を開き內へはひり思入。

實內　昨日孫八めに見付かつて、すんでの事卷上げられようとした大切な此手紙も、首尾よく此方へ納つた。(ト手紙を見物に見せて懷中し藥包を出して、)これからは此方の手段。まんまと行きやア、此實內も知行取り、うまい〳〵。(ト圍ひへ行つて釜の中へ毒を仕込み出て來り、)孫八めに逢

はぬ内、これから爰を梵天國。

ト外へ出ようとする所へ、孫八奥よりツカ〱出て、門口をしやんと〆切り、

孫八　奥で御用を聞く内に、頻りにして來た胸騷ぎ、心ならず來て見れば、昨日別れた朋輩の實内、よく立戻つて失せたなア、持つてゐる其一通、キリ〱おれに渡してしまへ。

實内　イ、ヤ、宵越の錢は使つた事のない奴だア、今迄持つてゐるものか。

孫八　怪しい懷。

實内　何を此奴が。

ト兩人立廻りある。此内調べになり、花道より佐々木丹右衛門、繼上下大小にて草履取りを連れ出て來り、此體を見て思入。此内孫八手紙をひつたくるを丹右衛門外より此手紙を取り、内へはひる。

實内ハツと思入。

丹右　孫八、一通は丹右衛門が受取つた。

實内　南無三寶。ト實内振切つて、逸散に花道揚幕へ逃げてはひる。）

丹右　其奴逃すな。

孫八　畏りました。（ト孫八實内を追ひかけて花道揚幕へはひる。丹右衛門その一通を開き見て、

丹右　ヤ、、、、こりやこれ今日の茶の湯に仕掛ける毒薬、ハテ危い事であつたよなア。

ト思入あつて手紙を懐中する。合方にて奥より腰元楓小萩出で、

楓　これは丹右衛門様、ようこそお出で遊ばしました。

丹右　シテ行家殿は、

楓小萩　まづ〳〵こちらへ。

丹右　御免下されい。（ト調べにて丹右衛門二重に住ひ）

楓小萩　畏りました。（ト腰元立上らんとする。此時奥にて）

行家　知らせに及ばぬ、聞いた〳〵。

ト調べ合方になり、奥より袴羽織大小の行家、以前の芝垣附添ひて出て、よろしく住ふ。

行家　これは〳〵丹右衛門殿、昨夜からのお世話、女房ようお禮申上げい。

丹右　イヤ行家殿、師弟の間柄かやうな時にお世話仕るが御懇意と申すもの、そのやうに御丁寧な御挨拶には及びませぬ。芝垣殿、決してお介意ひ下さるな。

芝垣　モウこのやうな事を申しますれば、愚痴な者やと思召しませうが、志津馬が此度の越度、元の起りはあの股五郎が唆かして傾城を勧め込んだばかり、到頭親の家にゐられぬやうにさして置い

て、自分は何處を風が吹くかといふやうに、素知らぬ顔してゐる水臭い根性、常からあの衆との交際が氣に入りませぬ、何でも友によつたものでござりまする。

行家　そりや何と申す、假令人が勸めうとも、手前が實體にさへ致しをれば仕落のあらう謂れがない、必ず人を恨むな、志津馬が一生の疵といふは、一口でも酒さへ飲めば前後を忘却する莫迦者、股五郎が知つた事であるまいわ。

芝垣　サそんならあなたは股五郎を、よい人ぢやと思召しておいでなされまするか。

行家　サア悪い人とも善い人とも思うてをらねど、折々の廓通ひは若い者の習ひ、大目に見てやらねばならぬ。

芝垣　丹右衛門様、お聞きなされませ、股五郎殿の事さへ言出せば、我子に替へても兎角贔屓に致されます、ほんに合縁奇縁というて、不思議なものでござりまする。

丹右　そりやはや彼が親又左衛門が、臨終に呉々お頼み申して相果てしより、股五郎を我子も同然にお世話なされて遣はさるれど、却つて其者は迷惑に存じ、左程には存ぜぬ事でござれば、此上は大概寄らず觸らずなされて、お置きなさるゝがようござらうテ。

行家　成程言はれるば左様なもの、誠に様々の事にかゝつて風雅の道さへ忘却致した、女共、湯は滿

つてゐるか、圍ひの炭を見てまゐれ。

楓　畏りました。（ト腰元立上らんとする。丹右衛門思入。）

丹右　アイヤ女中、待たつしやれ。（ト腰元控へる。）先生、折角のお約束ではござれど、チト仔細あればご今日のお茶はお断り申しまする、止めになされて下されい。

行家　そりや何ぞ御用でも。

丹右　イヤ左様ではござらねど、定めて先生にもお疲れと存ずるゆゑ。

行家　アヽ流石は丹右衛門殿、お言葉にも任せませう、侍の表を飾りをれども、有りやうは昨夜よりほつと致した、アヽこのやうによい年をして恥を掻きまするも子故の闇、成人の子もありながら、谷と申し志津馬と申し、親の貌へ泥を塗る不屆者、アヽこれを存ずれば、子のない者が遙かましと申すもの。

〽それと言はねど心には、泣入る父が胸の内、お谷は始終喰ひしばり、涙押へるばかなり。

ト行家鼻をかんで思入。此時門の外にお谷絹物屋敷風の娘のこしらへにて窺ひゐてハアヽと泣く。芝垣これを制する。行家聞耳を立てゝこなし。

芝垣　表に誰やら人聲が。

イエ、ありや何でもござんせぬ。

丹右　イエナニ先生、唯今のお言葉を聞き申しますではござらねど、志津馬殿は世間へぱつと、殿様のお耳にまで入つた事ゆゑ、内聞では濟まされねど、お谷殿の儀は外に言ひ約束のござつたと申すお身分ではなし、お手前様の御了簡一つで相濟む事なれば、此丹右衛門もとも〴〵お詫び仕る、お逢ひなされて遣はさるまいか。

行家　イヤ人は知らぬと存ずるは不覺、政右衛門程の天晴の達人を、浪人させて置くも惜しい事と存じ、お上へ推擧致さんと思ふ内、娘谷を連れての出奔、女の身で親の許さぬ不義淫奔、言語に絕せし二人の者、恩を知らぬは畜生同然、犬に劣つた不屆者め。

〽叱る娘が不憫さに、恩愛かくす親の慈悲。

お谷　なんぼ親がひぢやというて、あのやうに言うて下さんす事はない、そりやあんまりぢや〳〵あんまりぢや。

武助　お前様の腹を立なさるも御尤もぢやが、人も知らぬあなたとの譯合は内聞で濟む事を、むづかしう仰言つたゆゑ起つた事、何も政右衛門様を畜生に譬へて仰言つて下さるには及びさうもな

い、今のを聞いては此武助さへ、腹が立つて〱、なるこつちやアござりませぬ。

お谷　親ぢやといふても理窟は理窟、いつそ内へ踏込んで、譯を聞いて貰はにやならぬ。

ト内へ行かうとするを武助留める。芝垣は門口へ來り、

芝垣　コレ、必ず短氣を出すまいぞ、一徹な親御の氣風知らぬものか何ぞのやうに、家へ踏込み手討にしようと仰言つた時、そなたはそれがよからうが、それぢや生さぬ仲のわしが濟まぬ、母が身に替つて詫び事するほどに、マアわしに委して置きやいなう。

武助　ほんに申すぢやござらぬが、股五郎がやうな奴をば可愛がり、實のお子達に當りの惡いといふは、成程餘程旦那は茶人でござりますわいの。

芝垣　密に〱。

行家　芝垣、そこにゐるは、そりや犬か。

芝垣　アイ。

行家　犬ならば早う追ひて去なせ〱。イヤナニ丹右衛門殿、貴殿なども股五郎を手前が世話致すを腑甲斐なくも思召されうが、先年正宗を試さんと拔放せし折、家の棟を渡る蛇自然と二つに切れて落ちたる所、刀の徳なりと賞美致せしが、其頭蓋子の釜に入りしを存ぜず、その湯を呑

まんとせしを、股五郎が父又左衞門、これを見たるとあつて我を留めしゆゑ、其時一命を助かつたる此行家、又左衞門を命の親と存ずる所、相果てしゆゑ、股五郎の世話するも全く其時の恩を謝するわが心底、それをも知らずに雀のちや〳〵くちやと耳にさからふ、追ひ去なせ〳〵。

ト武助無念のこなし、

芝垣　イエモシ行家殿、お前はそれで濟みませうが、それではどうも此母が濟みませぬ、志津馬が事は家にもかゝる程の事ぢやによつて、何とも言出しはしませぬが、お谷の事はこなさんの了簡で濟ませば濟みまする身の詫び、どうぞ赦すと一言言うて、悦ばして去なして下さりませいなア。

丹右　芝垣殿の仰せらるゝ通り、政右衞門は天晴劍術の達人、それに連添ふお谷殿、少しの儀は御不承あつて勘當はお許しなされい、二人が二人ながら家にござらいでは、成程芝垣殿が相立ちますやうに、御了簡なされい〳〵。

行家　丹右衞門始め芝垣が言葉なれど、劍術の達人と不義せしを許せば、不義も不義にならねば、天下の掟無きも同然、たゞ許せでは許されぬ、コリヤ。（ト思入れあつて、）篤と思案をして見やれ。

丹右　サア四季に咲く草木だに、その時々の時はあると、兎角時が到らねば花が咲かぬ、芝垣殿、御合點が參りしか。（ト芝垣こなしあつて、）

芝垣　父上の御心底、丹右衞門殿のお詞、よう聞分けて戻つてたも。

お谷　サア聞けば無理とも言はれぬお詞。

武助　兎角あなたが賴みの綱。

お谷　嘸何事もよいやうに。

芝垣　そんなら其方は。

お谷　戻りませずばなりますまい。

芝垣　可愛やまちつと、無事に時節を待つてゐや。

ト戸をあけようとする。行家咳をせきこなし。

お谷　段々厚きお情に、

芝垣　必ず時節を。

お谷　エ。

芝垣　待つてゐや

お谷　アイ。（ト唄になり、お谷武助附添ひ、思入あつて花道揚幕へはひる。）

丹右　イヤナニ行家殿。貴殿は又左衛門の恩を謝すとやらの仰せでござれど、それに引替へ恩を恩とも存ぜぬと申すは、股五郎が事でござる。

行家　フム股五郎が恩を知らぬとは。

丹右　御不審あらば此手紙、讀んで御覽なされい。

ト丹右衛門以前の手紙を出し行家に渡す、行家開き見て、

行家　ナニ〳〵、「御手紙にて申上候。かね〴〵貴殿行家娘お谷へ御執心にてお頼みに付き、拙者もいろ〳〵骨折り口說き候へども、一向聞入申さず、剩へ不義淫奔にて家出致し候上は、今更力に及び申さず候。此上は貴殿の恥辱を雪ぎ候は老ぼれの行家を毒殺なし。」（ト思入。）

丹右　此後が大切な文言。（ト丹右衛門手紙を取つて、）「毒殺なし相果て候後にて、年來行家工夫を凝らし置候新田開發の儀、薩陀山の諸木を伐り拂ひ、材木となし候へば格別の御益に相成候儀、その後へ田畑を作らせ候はゞ、十萬石餘の地面出來申候。是を貴殿御工夫と仰せ立てられなば格別の御奉公にも相成り候儀、千石二千石の御加增は目の邊りに候、其節は御約束通り、拙者へも五百石以上の御加增下し置かれ候やう御執成下さるべし、先づ行家毒殺の儀は藥種

を買ひ集め、明日の茶の湯の節相用ひ候間、お谷が事は是にて御了簡下さるべく候。以上。月日。荒巻作作殿へ。澤井股五郎。」

芝垣　エヽ。(トびつくりこなし。)

丹右　先刻茶の湯をお止め申せしも、此一通が手に入りしゆゑ。

行家　おのれ股五郎、言語に絶せし憎い奴め、是へ呼出せ。

腰元兩人　ハツ、股五郎殿々々々々。

ト呼びながら兩人奥へはひる。奥にて、

股五　ハツ〳〵。拙者をお呼びなされしは(ト奥より股五郎稽古のなり、以前の傳吾新藏附いて出る。)先刻より代稽古仕りをつたる所、唯今お呼びなさるゝ由、何御用でござりまするな。

ト行家こなし、丹右衞門思入あつて合方になり、

丹右　イヤ股五郎殿、唯今先生お呼びなされしは別の儀でござらぬ、志津馬殿儀は拙者伺ひを立てました所追ての御沙汰ある事ゆゑ、先づ當分は此丹右衞門が預りましてござる、それにつき志津馬殿と一樣に申すではござらねど、貴殿とても母御鳴海殿の勘氣を受け、若年の時分より行家殿のお世話になつて、追付親御又左衞門殿の格式をも蹈まるゝやうにならつしやる御身分、隨

分とも恩を忘却せぬやうに召され、えて忘れ易いものでござる。

股五　イヤモウ御親切た共お詞、忝う存じまする、誠に幼年より行家様のお世話になつた恩義を忘れてよいものでござりませうか、それゆゑ志津馬殿の傾城狂ひも度々御異見を加へましたれども、つい溺り易きは色の道、かやうな事になつた上は、拙者などがお勸め申したやうに思召すかと存ずれば、甚だ以て氣の毒千萬に存じまする。

芝垣　イヤそりや仰言んな股五郎様、度々お前と連立ち吉原通ひ致した事も、よう存じてをりまする。ようも〱志津馬を、放埒者に勸め込んで下されたの。

股五　モシ芝垣様、そりや何とも迷惑千萬、何しに拙者志津馬殿を唆かして吉原通ひを致さうぞ、全く覺えはござらねど、(ト思入あつて、)ア、さう仰言れば春の事でもござつたか、雨の降るのに夜九つ時分から、志津馬殿たつた一人で行かつしやるに付け、一人やつては心許ないと、後からお送りがてら附いて参つて、早う〱歸らうと存じたなれど、雨は強う降るし八つの鐘をも承つたゆゑ、もう一時ぢや夜を明かして呉れと、皆がたかつて止めまするゆゑ、據所なく夜を明かして歸りましたより外に、一晩でも御同道致した覺えはござらぬ、定めてかやうな節には、ない事もあるやうに申しまするは人の口、決して何と申さうとも、お取上げなされぬが

ようござりまする。

新藏　左樣々々、股五郎殿の申さるゝ通り、人の口には戶がたてられぬと申す譬の通り。

傳吾　各自の身にかゝらぬ事をば、兎角申したがるもの。

兩人　お取上げなされぬがようござります。

行家　イヤ股五郎、忰志津馬が事は兎も角も、所詮勘當致す奴、今更申したとて何の役に立たぬ事サ、それは格別、薩陀山の諸木伐り拂ひ、新田十萬石餘開發致さんとの一封、お手前は如何して知つてゐやる。

股五　イヤ其儀は、オヽそれ〳〵、折節はお草臥休めと、お肩をひねつたりお腰を撫つたり致したる度々、お硯箱の抽出にはひつてあつた御工夫の書附を拜見致し、成程先生は劍術ばかりでもなく、諸事に行亘つて工夫者智慧者と褒めました儀もござれど、それより他に他言致した覺え決してござらぬが、誰ぞ話しましたといふ噂でも、お聞きなされましたか。

ト丹右衞門一通を出し、

股五　ナニ其手紙は。

丹右　荒卷作作殿へ、澤井股五郎。」

股五　ヤ。

丹右　文言一々讀むに及ばぬ、お谷殿を取持たんとの事まで一々認めあるからは、動きは取れぬ股五郎。

股五　ムヽ。（ト詰りし思入。）

行家　其方が親、又左衛門より預る正宗を返し吳れよと、度々の懇望なれど、まだ魂を見定めぬ汝ゆゑ渡し得させぬ、それを遺恨に思うてか。

丹右　幼少より大恩を受けた、實に親なり師匠なり。

芝垣　その夫を毒害せうとは何故しやつた。

股五　サアそれは。

皆々　サア／＼／＼。

股五　もう是には。

ト逃出す澤井が襟髮捉へ、片手に一通持つたるまゝ、膝に引敷き行家が大音。

行家　此文言を一々讀めば大罪人、逃げるとて逃がさうか。

ト丹右衛門股五郎が襟髮取つて蹴返はし、

丹右　狐狸のおのれに申聞かすは無駄なれども、過ぎ逝かれし又左衛門殿、故あつて澤井正宗と名付けしあの刀、行家殿へ譲られし由緒をもつて、幼少よりお世話なされし高恩を忘れ、種々無量の悪工み、御子息志津馬殿に切腹させうとまでひろいだなア、爰な股五郎の極悪人め。

ト キツト突放す、股五郎を行家引提へて、

行家　眞人間になつたなら譲り得させんと思ふに待兼ね、本庄屋定七を語らひ、うま〳〵と正宗を引上げんと致したな、ア、何かにつけ某に仇なす汝が性根、まだ〳〵年は寄つても、おのれが手に合ふ行家ぢやない、今でも噛んでくたばりをらう。

ト 手強く突放す、股五郎無念のこなしにて、

股五　モウ堪忍が。

へ 斬つてかゝるを身をかはし、すかさぬ行家が腕先に、澤井が刀打落せば、うんと仰向に眞の當。

ト いら立ちて一腰を拔き、行家にかゝり立廻りあつて、トヾ行家に當てられてウンと悶絶する。

行家　丹右衛門殿見さつしやれ、見事に手前に刃向ふ所存。ア、不便な事でござる。

丹右　向後の懲らしめ、御門弟中、股五郎が面體へ犬といふ字を書いて。

傳吾
新藏　いかさま。（ト兩人硯箱を持ち出し、）

行家　股五郎が額へは。（ト行家筆を取つて犬といふ字を書く事。）いづれも御覽なされい。飼ひから犬に手を喰まれし譬、相弟子の誼、とてもの事に駕へ此奴を載せ、門前へ捨て下されい。

傳吾
新藏　承知致してござる、此上の恥辱はござらぬ。

丹右　誠にいづれも、股五郎が顏を御覽なされい、家來共これへ參れ。

供廻　ハ、ア。（ト此時侍一人仲間二人出て下手に控へゐる。）

丹右　然らば某もこれより此趣を、大殿樣へ申上げるでござらう。

芝垣　何から何まで丹右衞門樣。

行家　御苦勞ながら。

丹右　サア、いづれも參りませう。

行家　恥面掻きし澤井があの態。

芝垣　モシマア、笑止な顏わいの。

丹右　然らば是より殿へ言上。

行家　ハテ人外もあるものぢやなア。

ト唄になり、丹右衛門の先へ立ち、後傳吾新藏は股五郎を丸腰にして籠へ乘せ、丹右衛門の供も手傳ひ、是を皆々して擔ぎ門口へ出る。行家芝垣の門を締切り思入あつて奥へはひる。丹右衛門はしづしづと花道揚幕へはひる。股五郎籠より落ちるゆゑ、其儘門弟も打捨て丶、下手へはひる。股五郎花道に捨てられゐる。バタ／＼にて揚幕より以前の實内走り出て花道にて思入あつて、舞臺へ來りて股五郎に躓き、これにて股五郎フツと心付き、兩人は是にて互ひに顏見合つて、

實内　ヤ、股五郎様ぢやございませねか。

股五　オ、其方は實内。

實内　シテ様子は。

股五　エ、汝が一通を卷上げられたばかりで、とんだ目にあつた、もう股五郎が武士は廢つたわえ。

ト股五郎の顏を實内見て、

實内　ヤ、あなたの額に犬といふ字が。

股五　アノおれが額へ。（ト手拭にて拭き取り墨の附きしを見て、）おのれ行家め、もう生けては置かれぬわえ。來い。

ト兩人門の傍へ來り、戸をあけんとすれどもあかぬゆゑ、

股五　實內、門內へ入込む手段は。

實內　あなたは此松ケ枝を傳はつて塀を乘越え、

股五　シテ其方は。

實內　水門から泉水へ

股五　うまい手つがひ。ソレ。

實內　合點だ。

ト實內は水門の口から忍び込む事、股五郎は松の立木へ登りかけて落ち、腰を打ちし思入。一向に起きられぬこなしにてうなつてゐる。此內實內泉水へ傳はつて出る事。門の外にてうなる聲するゆゑ聞耳立てゝ門を開け、そつと內へ股五郎を入れる。股五郎咽が乾くゆゑ、何ぞ飲みたいとしかたするゆゑ實內囲ひの釜を持つて來る。股五郎杓子にて呑まうとする。實內ハツと心付き、イヤ／＼惡い惡いとしかたする。何故としかたにて股五郎實內に尋ねるゆゑ、實內囁く、股五郎びつくりして、そつと泉水の水を飲むこなし。此內薮疊を押分け茨巻伴作着流し大小頬冠り尻捲げにて、內を窺ひ、

伴作　實內、首尾は。

實內　丁度よい時、コリヤ。

ト實内騒ぐ、伴作うなづき。

伴作　呑込んだ。

ト伴作は奥へそろ〳〵忍び入る。此内實内床下へ忍び、股五郎下手に窺つてゐる。バタ〳〵にて奥より伴作正宗の箱を抱へ出て來り後より、行家押取り刀にて駈け出て來り、

行家　正宗を奪はんとする横道者、覺悟致せ。

ト行家伴作の持ちし箱を引ったくる。

伴作　さいふ汝から。

ト伴作抜いて斬つてかゝる。伴作行家立廻りの内、行家追掛けんとする二重の下より實内行家の足を引くゆゑ、行家ガックリとなる所へ切り付ける。行家倒れながら伴作を切りさうにする。此時後より窺ひゐる股五郎覺えたりと斬りつける。此刀をシャンと握る。始終ごん、凄き合方。

行家　ヤア何奴なれば、騙し討とは卑怯な奴。名を名乘れ。

股五　オヽ聞きたくば言つて聞かさう、世話にしたのを恩に着せ、我面體へ犬と言ふ字を書き、剰へ畚に乘せて、よくも恥辱を與へたなア。

行家　エヽ人畜の股五郎、遺恨に思はゞ何故名乘り合はして勝負せぬ、騙し討とは卑怯至極。

三人　こま事抜かさず、くたばつて仕舞やアがれ。

ト又立廻りの内、股五郎眉間を一太刀切られる。トゞ行家を切倒し、股五郎とゞめを刺し、

股五　犬といふ字の返報は、おのれが面へも。（ト行家の額へ犬といふ字を書き、正宗の箱を其處へ出し、蓋をあけて見て、）ヤア此中に正宗は。

ト中に一通あるを見て、

伴作 實内　ナニ一通とは。（ト開き、股五郎見て）

股五　「正宗の刀仔細あつて私方へ預り申す所實正也、和田行家殿へ、佐々木丹右衛門判。」

伴作 實内　スリヤ正宗は丹右衛門めが。

股五　エヽ無益に骨を曝しやアがつた。

ト手疵を鉢卷にて結える。奥バタ〳〵と音する。

芝垣　狼藉者がはひつた、出會へ〳〵。

皆々　ハヽア。

ト以前の腰元手燭を持つて出るゆゑ、敵役の三人ともに水門藪疊へ影をかくす。花道バタ〳〵にて孫八提灯を點し、丹右衛門息を切つて出て來り、双方一時に舞臺にて落合ひ、丹右衛門行家に躓き、

丹右　ヤア行家殿を、こりや何者が。

孫八
芝垣　ナニ旦那様が。

ト立寄る所を伴作實内觀念と切つてかゝる。立廻りよろしく丹右衛門伴作を切り倒し、孫八は實内を斬り倒し、双方キッとなり、

孫八　敵の相ずり。(ト實内のとゞめを刺しにかゝる。)

丹右　後日の證據、とゞめは控へい。

孫八　ハツ。

ト此内ソロ／＼と股五郎花道へ逃げて行く。是を芝垣すかし見て、

芝垣　アレ、あの人影は、

丹右　慥かに澤井股五郎。

股五　エイ。(ト花道にて手裏劍を打つ。)

丹右　合點だ。

ト小柄をしやんと握るをチョントト木の頭、どん、三重になり、股五郎は揚幕へのがれてはひる。丹右衛門は小柄をすかし見る。孫八は無念のこなし。双方よろしく。

ひやうし幕

三幕目　　圓覺寺の場

役名　呉服屋重兵衛、澤井股五郎、佐々木丹右衛門　澤井城五郎、近藤野守之介、荒川兵部之介、海田一角、矢部孫九郎、圓覺寺の住僧、池添孫八、伴僧、股五郎母鳴海等。

本舞臺三間の間結構なる欄間、金鐵物、金襖。上手床の間大幀物、此前銀地大衝立。左右とも杉戸出はひり。平舞臺一面に高麗縁の薄縁。向う揚幕大形の襖出はひりある事。すべて圓覺寺大廣間の模様誂への通りよろしく、こゝに袴大小の侍四人並びよく居並び、此傍に住僧緋の衣珠數中啓を持ち、此後に伴僧黒衣にて附添ひ居る、好みの通りよろしく、鳴物三味線入りの音樂にて幕あく。

へされば澤井股五郎、行家を討つて立退より直ぐに駈込む圓覺寺、門戸を閉ぢて關近藤、海田荒卷者昵近の若殿輩、上杉より寄せ來るとも、引きは返さじ弓鐵砲、佛の說きし法の庭、平等大會に引替へて、修羅の巷の大評定、方丈狹しと詰めかけたり。

ト始終この淨瑠璃に冠せて、音樂見はからひ、

近藤　われ〳〵が頼みによつて、澤井を隱慝ひ下さる段、誠に貴僧のお心遣ひ。

侍
四人　千萬忝う存ずる。

住僧　これは〳〵お歷々の御禮のお詞、澤井氏にも御不自由にござらう、兎角世俗の譬の通り、木の下蔭に露の宿り、雨を凌ぐと申す分、殊に今日は何や御評定ござるとの事。

海田　アイ、他聞を憚る評議、われ〳〵是にて會合の事。

荒川　御知音の檀家といふとも。

矢部　必ず御沙汰無用に頼み存ずる。

住僧　かくお頼みの澤井氏。何人に申さうや、御用もござらば、是らの者へ仰せ談ぜられ下されい。

近藤　委細後刻、暫時書院を拜借致す。

住僧　お心置なく、然らば後刻。

四人　御意得申さう。

トよろしく會釋して音樂になり、住僧件僧杉戸の内へはひる。

近藤　何は兎もあれ今日の評定、股五郎は申すに及ばず、萬一上杉の威に怖ぢる時は、昵近の我々ま

海田
荒川　でが、生涯瑕瑾の名を殘すも殘念至極。
近藤氏の仰せの通り、身にかゝる大切の評議。

ヘ評議半ばへ股五郎。

ト音樂にて股五郎袴大小のこしらへにて出て、四人に辭儀をして、

股五　物數ならぬ陪臣の拙者、城五郎殿は一家の誼、其緣に連なる御歷々の昵近衆お隱匿ひ下さる段身にとつての面目此上なし、然しながら主人上杉憤り深く、拙者が母を人質に捕へ置き、股五郎を渡さずば母を成敗するとの難題、私ゆゑに一人の母を殺すも不孝、且は誼もなき昵近方、かく騷動に及ぶも氣の毒、やはり拙者を上杉へお渡しなされて下さりませ。

ヘ邪智を隱せし賢人顏、野守之介進み出で。

近藤　其遠慮には及ばぬ事、此度我々が荷擔は、お手前の爲ばかりでない、上杉には此方兩年來の遺恨あり、武將の御先祖尊氏公より、譜代相傳の昵近の武士、元弘建武の古尊氏公に粉骨を盡し、忠義を勵みし我々が家筋、我は顏に高祿を取り、昵近衆を蔑ろに輕しむる日頃の存外、事がなあれと思ふ折節、お手前を隱匿うたは上杉に恥を與へる爲、案の如く上杉此事を憤り、

追付是へ押寄せんと軍評定最中の由、今泰平に納つて茶の湯遊興に日を送り、鎧兜の着やうも知らぬ國大名、何程の事あらん。

海田　オヽサ野守之介殿の仰せの如く、日頃かやうな事を待受け、武藝鍛錬致す我々。

荒川　一捲りに蹴散らして、昵近武士の遺恨を晴らすは今此時、敵方より寄せぬ先此方から逆寄せにして、上杉に泡吹かせん。

矢部　たかの知れたる京侍、イザ御同心仕らう。

〽オヽ尤もと立騒ぐ。（ト此時奥にて）

城五　いづれも暫らく〳〵、お控へなされい。

〽と聲をかけ、しづ〳〵出づる城五郎。

近藤　貴殿は澤井。

四人　城五郎殿。（ト思入あつて）シテお止めなされし御所存はナ。（ト音樂になる。）

城五　イヤ別儀でもござらぬが、某が由縁ある股五郎をお庇ひある何れも、御親切忝う存ずる。さりながら、行家を討つたる事の起りは、此城五郎が頼みし事。

近藤　スリヤ股五郎殿が、一料簡の遺恨でなく。

城五　さればサ、此度武將の公達御任官の御祝儀に付、諸大名より銘劔を獻ぜらるゝ、然るに行家が家に持傳へし正宗の名作あり、主從の事なれば上杉是を取つて獻上すべし、されば愈々上杉が鼻高く威を振はん事心外至極、何卒此刀を奪ひ取つて、某が手より獻上すれば我は勿論、昵近衆の手柄にもなると存じ、股五郎と言合せ行家めを打殺させしは、正宗の刀を奪ふ爲ばかりと思ひの外、此刀は行家めが手にはなく、佐々木丹右衛門が預りをる由、股五郎を受取りたくば老母が命を助け、並びに正宗の刀を此方へ渡せよと、蟇匠の使者を立てたれば、此返事のあるまでは暫く何れもお控へなされい。

〽言ふ間程なく馳せ來る門番歩行の者。（トバタ〳〵にて侍走り出て、）

侍　ハツ申上げます。佐々木丹右衛門より今朝の御返翰。

城五　是へ持て。（ト侍城五郎に狀箱を渡し、下に控へる。）

〽差出す文箱を城五郎、封押切つて一通をすら〳〵と讀み終り。

ホヽオ、城五郎が思ふ壺、股五郎をお渡しあらば、母鳴海が虜を赦し、正宗の刀を遣はすべし、

おッつけ二品とも丹右衛門持参致さんとの文言、後刻お出を相待ちをると、口上を以て返答せよ。

ト侍に状箱を渡す。

〽蓋引締める明き文箱、取るより早く走りゆく。

海田　イヤサ城五郎殿、一旦隠匿つた股五郎、今更のめ〳〵と上杉へ渡して、それで武士が立ちまするか。

近藤　オヽ我々も其意を得ず、貴殿は上杉が恐しいか、イヤサ臆病神が取憑いたか。

荒川　卑怯至極だ城五郎、昵近武士の名の穢れ。

海田　治世の祿をうか〳〵と喰ふ城五郎、弓矢八幡其座は立たせぬ。

矢部　城五郎とて容赦はせぬ、肚胸の性根を。

四人　定めて呉れうか。（ト四人キッとなつて立ちかゝる。）

〽詰めかくるを股五郎押鎮め。

股五　いづれも様にはお鎮り下さりませう。（ト四人思入あつて控へる。）イヤ城五郎殿、拙者が命は惜

みはせねど、武士の意地を立抜く貴殿が今になつて腑甲斐なく、上杉へ渡さうとは、ア、聞えた、行家を打殺したばかりでお頼みの正宗が手に入らぬ御立腹の思召でござらう。イヤサそれゆゑでござらう。

四人　いかさま、左樣でござらう。（ト城五郎思入。始終音樂あしらひ、）

城五　全く左樣な事ではござらぬ、今合戰を取結ぶとも唯世上を騷がすばかり、望みの刀が手に入らねば無益の沙汰、一旦和睦に事を收め、母の鳴海と正宗を受取つた上、お身に繩打ち心よく打渡し、使者の歸りを思掛けなく、多勢を以て引包み奪ひ返す我が工夫。

近藤　スリヤ無難に此場は受取り渡し、

城五　いかにも、此事御合點まゐる上は、必ずともに此座限り。

矢部　何しに他言仕らう。

近藤　然らば各々其の用意。

ト騷ぐを押へて。

城五　血氣にはやるを匹夫の勇、謀は密なるを善とす、拙者が言葉を致すまでいづれもお控へ下さるべし、股五郎が後の災禍免がれさする、屈強の忍び所は九州相良、密に落す用意萬端。ム、

次に控へし呉服屋重兵衛、是へ參れ。

重兵　ハ、ア。

ト音樂になり、下手杉戸より呉服屋重兵衛着流し合羽一本差し商人風にて出て來り、下に住ひ。

〽はつと答へて次の間より、小腰屈めて並みゐる中、おめづ臆せず畏る。

これは〳〵お歴々樣のお膝近う、眞平御免下さりませ、股五郎樣のお身の上、委細とつくと承りました、城五郎樣へは數年來お出入の私、相良へ商ひに毎年下る道案內、見込んで頼むと大切のお供、畏つたは商人冥加、多年の御恩報じなればちつともお心置かれまするな、町人でこそあれ心は金鐵、二人や三人は苦には致さぬ。腕に受合一厘も掛値は決して申さぬ呉服屋、お心强う思召しませ。

〽滅多に引かぬ太織地の、男一疋頼母しゝ、股五郎は片頬に笑み。

股五　扨々氣味のよい男、敵持つ身の供すれば肌に刀は放されぬ、行家めを仕留めた時、これ見よ弓手に二箇所の疵、忽ち治したる此藥は、城五郎殿の家に傳はる南蠻傳來の妙藥、身共を同道の人々へは、いづれも是を懷中さする、お手前もまさかの用意此印籠を預けるが、股五郎が一命

をお頼み申すと言ふ印。枉げて御受納下さるやう。偏に頼み存ずる。

ヘ頼む印と手に渡せば。

重兵　これは〳〵御挨拶。有難う頂戴致します、結構なお藥、お下げ物でござりまする、怪我と病氣は何時知れぬ、道中の肝心は兎角藥が第一でござりまする。

ヘ取納める折こそあれ、又も駈け來る遠見の侍。

ト花道バタ〳〵にて股立の侍走り出て、

侍　申上げます、上杉家の御使者、佐々木丹右衛門殿、網乘物一挺、供は僅かに二三人、唯今當寺門前まで、參られましてござりまする。

城五　ム、よし〳〵、門を開き隨分神妙に取闘らひ、此處へ通しませい。

侍　ハツ。（ト侍引返して揚幕へはひる、）

城五　いづれも裏門より廻つて、最前の御用意々々々。

四人　心得ました。（ト音樂になり、四人の侍奥へはひる。）

ヘはやり雄の武士、我いち急ぐ裏門口。

重兵　ヘイ〳〵、左様なら御發足の日限は。

股五　コレ。

重兵　委細畏りました、何かの事はお直々、詳しく御意をば伺ひませう。

城五　萬事よろしく。

重兵　ナニお氣遣ひ下されまするな。

〽言葉一つに重兵衛は、萬事を悟る男氣の、引連れ奥に入りにける。

ト三味線入りの禪の勤めになり、やはり淨瑠璃に冠せ、

〽琴を調べて敵を避く、窈窕として檻穽の謀やあるらんと、心ゆるさぬ丹右衛門、使者の禮儀の上下も、四角四面に方丈へ、網乘物を舁入れさせ、しづしづと打通れば。

ト網乘物一挺、菖蒲革の侍四人駕を舁き、後より股立の侍二人附添ひ、その後に佐々木丹右衛門上下大小にて出て來る。乘物は下手に控へ、丹右衛門よろしく舞臺へ住ふ。

城五　ホヽオ、聞及ぶ御邊が佐々木丹右衛門殿とな、今日のお使者御大儀千萬、今朝も申送りし通り、

丹右　武士の意氣地爭論に及ぶと雖も、かく靜謐に治りし代に、私の遺恨にて合戰を取結ぶは武將へ
の恐れあり、罪は罪なり股五郎お望みに任せお渡し申さん、此方よりも望みの如く正宗の刀並
びに老母鳴海が事、上杉家より定めて送られつらんずな。

政五　成程々々主人上杉顯定、怒りの因は股五郎、逆賊の刑に行ひ、國の政道を糺すべき存念、股
五郎だにお渡しあらば、外に構つて仔細はなし、則ち是こそお望みの正宗、並びに老母を誘引
致す、イザお改め下されい。

〽箱に納めし持參の刀差出せば、手に取上げ切先物打鍔元篤と改め鞘に納め。

政五　刀の眞僞は存ぜねど、天晴なる此名作、慥かに落手仕る。

〽刀提げ立上る、丹右衞門引留め。

丹右　コハ麁忽なり政五郎殿、股五郎を是へ出し老母と互に取換へざる中は、むさと刀は渡し申さ
ぬ、サア下手人の股五郎、疾打つてお渡し下されい、近頃我慢千萬な。

〽眼を配る勇氣の面色。

政五　オヽ御尤なる御一言、身共が麁忽お許し下されい、然らば刀は暫くお預け申す、追付下手人お

渡し申さう、先づ其方の囚人老母鳴海が變らぬ體を。

ト綴へ思入するを、丹右衞門ちよつと隔てゝ、

丹右　オ、母に科なければ、最早繩に及ばぬ。

〽乘物の綱戸を拂ひ引出す姿縛り繩、子ゆゑに科を老の身に、恥と鳴海が憂き思ひ、是非も繩目をほどき捨て、丹右衞門老母に向ひ。

ト鳴海繩にかゝり乘物の内より出る。

丹右　イヤ老母、子息股五郎を此處にて受取る上は、其許が命を助け城五郎殿へ渡すべきは、今朝殿より仰せの通り、いよ〳〵承知致されよ。

〽聞いて鳴海は顏を上げ。（トこれより本調子木魚入りの合方になる、）

鳴海　誠に忰が不所存ゆゑ、あなたこなたへ御苦勞かけ、憎い奴とは思へども天地の間に親一人子一人の股五郎、未練とも卑怯とも笑ふ人は笑ひもせよ、どうぞ助けてやりたいと、思ふが親の身の因果、御主人へ對しては不忠者の忰なれども、母が命を助けう爲、繩かゝつて出ようといふは、此親に不孝の中のせめての孝行、年寄つた此母が詮ない命生き延びて、我子の刑罰に行は

れるを眺めて何と嬉しかろ、お悖かへつて恨めしい。ヤイ股五郎、此母はどのやうな憂目に逢はうが殺されうが、ちつとも介意はぬ誓ひはせぬ、必ず爰へ出て吳れなよ、ならう事なら此母を代りに殺して股五郎が、命をお助け下さりませ、惡人でも産んだに違ひなければ可憐らしい。

へお慈悲々々と恩愛の、子ゆゑに迷ふ憂き涙、とゞめ兼ねてぞ見えにける。

ア、思へば誰にも恨なし、此科の起りは由ない刀に念をかけ、刑罰に逢ふも名作の劍は我子の敵、此身の仇。

へ言ひつゝ這ひ寄り棒鞘を、すばと抜く手も見せばこそ、吭のくさりを掻切つたり、是はと驅け寄る城五郎、佐々木も仰天乘物へ手負を打込みしつかと押へ、城五郎に目を放さず、底意を探る碇繩、又も大事と見えにける、澤井は態と空とぼけ。

城五　コレサ丹右衛門殿、契約の通り當海を受取り申さうか。

丹右　いかにも科人股五郎を受取り、代りに母が命は助くべしと契約は申したれど、御覧の通り唯今

城五　老母は自害致した、然し此方の手で殺しは致さぬ、我と我が手に相果てた、某は存せぬ事。默れ丹右衛門、隱匿うた股五郎を了簡致して渡すは何故、老母を受取らう爲ばかり、親の命を子に代ゆる大切の鳴海何故殺した、元の如く生けて渡せ、さなくば澤井股五郎も、いつかないつかな渡し申さぬ、サア老母を早く受取らうか。

丹右　サアそれは。

兩人　サア〳〵。

城五　返答が承はりたい。

へ丹右衛門ちつとも動ぜず。

丹右　鳴海が自害は言うて返らず、弟子として師匠を殺す極惡人の股五郎、目の前で親が死にたればとて、悲しむやうな奴でなし、況して緣者の城五郎殿、鳴海が最期をそれ程惜しみめさる要がござらぬ、老母が事はつけたり、正宗の刀がお望みでござらうがな。

城五　サアそれは、

丹右　但しは刀は要らぬとな。

城五　サアそれは。

丹右　老母を生けて返せとあらば、拙者とても詮方なし、約束變替元の白地へ罷歸つて、此趣を主人上杉に言上致し、一家中是へ押寄せ鑓先をもつて股五郎を生捕にする分の事、人非人の澤井が母、死神の憑いたは是天罰、軍の血祭早くたばれ。

〽手負の刀ぐつと引拔き。

正宗の刀の切れ味、お望みならば御相伴召されぬか。

〽寄らば切らんず勢に、肩先拉がれ城五郎。

城五　アヽ、コレサ丹右衞門殿、此方より事は好まぬ、ムヽいかさま思へば自分覺悟の鳴海が最期、全くお身が業でない、刀さへお渡しあらば申出した武士の意地、さつぱりと立つといふもの。

丹右　ムヽ、スリヤ股五郎をお渡しあるか。

城五　渡さいで何と致さう、素より彼は覺悟の上、ヤアヽヽ股五郎、最期の時刻近づいたり、尋常に是へ出ませい。

トキッと言ふ、竹笛入りの合方になり、上の杉戸より股五郎無刀着流し、以前の海田矢部荒川附添ひて出て來り、

股五　疾より支度仕る。

〽返答立派騷がぬ澤井、海田荒川矢部前後を圍ひ、其身は丸腰惡びれず、ゆうゆうと座に直り。

お使者御大儀、傍輩を討つた意趣の因はと言へば外でもない、老ぼれの和田行家、年に免じて立てゝやれば附上り、此股五郎を劍術の弟子などと、師匠顏が聢が惡さ、何の苦もなく討果した、お身達如きに易々と搦め捕るゝ股五郎でなけれども、身共ゆゑに一國の騷ぎとなるが氣の毒さ、命惜しまぬ武士の覺悟、城五郎、イザ御政道に行はれよ。

〽むんずと手を組手を廻す。

城五　天晴々々、其方が命一つで騷動治まる、國家の爲恨みと思ふな、股五郎捕つた。（ト城五郎股五郎に繩をかける。）緣に繫がる身共が潔白、お見屆けあれ丹右衞門殿。

丹右　これで主人が心も滿足、さて此老母の死骸を進上申さうか。

城五　死人は要らぬ持つて行かれい、然らば科人と共刀を、唯今取換え受取り申さう。

丹右　イザ。

城五　イザ。（ト双方股五郎の縄付と正宗の名刀とを受取り合ふ事よろしく、）

　　へ互に渡す目配り氣配り。

兩人　是で双方遺恨もさつぱり。

丹右　老母が死骸は乗物に、やはり此儘屋敷へ急げ、ソレ縄付を引立てい。

侍二人　立たう。

　へおさらばさらばと目禮も、龍の腮を出でゝ行く。

　ト三味線入り禪の勤めになり、丹右衛門股五郎を先に引立てさせ、乗物を先に、後丹右衛門、花道揚幕へはひる。後に城五郎荒川海田矢部後見送り、思入あつて、

三人　城五郎殿。

城五　コリヤ。（ト双方へ囁く、三人共呑込んで、）

海田　スリヤ最前の手筈の如く。

荒川　此裏手なる、場所よき所に待受けて。

矢部　おゝ。

城五　必ず萬事抜からぬやうに、御合點か。

三人　心得ました。

ト城五郎行けとこなし。是にて三人花道揚幕へ逸散にはひる。後城五郎あたりを見廻し、下の方杉戸より弓張のかゝりし弓と矢を持ち出し、思入あつて、につたり笑ふ。始終時の鐘にてキツとこなし。寺鐘打込み。是にて道具

ぶんまはす

本舞臺三間の間向う一面の練塀。上の方大樹の松。此塀の内より、破風の正面を見せたる書院の屋根、其外縮ごゝろに松の釣り枝、鳴物、どん、鍋の鉦にて道具納まる。トやはり右の鳴物にて下手より城五郎を先に近藤矢部侍四人、いづれも着流し大小尻端折り頬冠りにて出て來り、いづれも向うを見て囁き合ひ、思入あつて、此人數上下へ忍ぶ。城五郎は弓矢を持ち、上手の松の立木へ登り、書院の屋根に忍ぶ事よろしくあつて、靜かなる禪の勤め、三味線入りになり、花道より以前の網乗物を先きに縄付の殿五郎を侍引立て、後より丹右衛門供を連れ出て來り、

丹右　思はぬ事に手間取る費、黄昏時の往來に非常を守る大事の縄付、家來共心を附けて警護致せ。

供　畏つてござります。

ト花道際まで來ると忍びし敵役皆々出て、先手の提灯を打落し、丹右衛門に斬つてかゝる。

此の時早めし禪の勤めになる。丹右衞門海田をちよつと當てる。矢部此内に股五郎の繩を解く。是にて股五郎花道へ逃げてはひる。丹右衞門矢部を引据ゑる。ト城五郎松の蔭より矢を放つ。ト丹右衞門の股へ立つ。痛手ながら丹右衞門入亂れにて皆々を追散らし追駈けんとする。上下より矢來る。丹右衞門色々と切拂ふ事。又々四人出て丹右衞門にかゝる。立廻りながら上手へはひる。城五郎此間に松より降りて海田に活を入れる。城五郎海田に囁き包金をやり行けとこなし。海田は下手へ、城五郎は刀を納め上手へ行きかける。太刀音するゆゑ向うへこなし。バタ〳〵と音するゆゑ、城五郎用水の蔭へ小隱れする。

〽遲れ走せなる孫八は、敵に加擔のあぶれもの挑み合うてぞ。

ト早めすゞの合方にて、池添孫八前幕のなり肌脱ぎにて、浪人者二人を相手に立廻りながら出て舞臺へ來る。此内後より城五郎窺ひゐて孫八を突倒し、浪人者を押遣り花道へ遁れてはひる。すべて星明りの仕組よろしく、

〽多勢を相手に丹右衞門、遁しはせじと追ひ來り。

トあり早き鳴物にて、以前の敵役を相手に立廻りながら出て來り、孫八の立廻りとごつちやになり、立廻り入亂れて双方へ追散らし、敵役は切捨てられ、或は逃げて上下へ追散らされ、兩人タヂ〳〵となり行當り、ちよつと立廻り切結び、星明りにて透し見て、

丹右　孫八にてはあらざるか。

孫八　お聲は慥か丹右衛門様。

丹右　其方には怪我はなかつたか。ムウ。

　ト丹右衛門ドウと下にゐる。孫八こなし

孫八　どうやら深傷の此様子。

丹右　不覺を取つて取逃した。

孫八　エヽヽ。ム、ソレ。

　ト急込んで上手へ行くを、丹右衛門こなしあつて、

　〽手負に屈せず引止め。

丹右　コリヤ、血相していづれへ參る。

孫八　ハテ圓覺寺に屯なす股五郎に荷擔の城五郎、浪士の奴原引捕へ探索遂げ、若し運拙くば其場を去らず、切死なして花々しく、

　〽行くを又も引戻し。

丹右　ヤレ待て孫八、股五郎を奪ひ取られたるも、最初より覺悟の前。

孫八　ヤ、何と。〔ト竹笛入り合方になり〕

丹右　股五郎を取逃せしも一つの策、今此處にて彼を討つては天下の罪人、首尾よう討果せた所が、敵討には相成らぬ、それゆゑ態と取逃した、時節を待つて志津馬が手より主人へ差上げ、まつた上杉公より武將へ獻上ある時は御家の譽れ、是を功に敵討の願ひを立てん我が所存、明けて言はれぬ誠の正宗は先達初瀬院内にて僧侶をかたらひ、疵物正宗是なる孫八が手より我れへの内通、武士は相見互和田家の落目、心を碎くも師匠の誼、丹右衞門七尺下りし恩返し。

ヘ始めて心をあかすにぞ、鳴海もはひ出でたえ〲に。

ト鳴海も乘物より這ひ出し、

鳴海　股五郎が親の身で、丹右衞門樣と言合せ城五郎を騙りしは、どうぞ非道な悴めが、命は所詮遁れぬとも殿樣のお手に渡れば、竹鋸磔の御成敗は知れた事、せめて武士らしく志津馬殿と敵討の勝負で死なば、何ぼうか嬉しい親心、此場を見遁し下されと、お頼み申して今日の仕儀。

丹右　オヽ、老母の頼みはなくとも、志津馬に討たさにやならぬ敵、態と敵へ奪ひ取らせ、丹右衞門一人が誤りになつて相果つれば、月日を待つて本望遂げよ、敵の首を先生が位牌の前と身が

墓へも。手向けて哭りやれ賴むぞよ。

〽最期の際まで師弟の義理、我ゆゑ命を捨てらるゝ。

孫八　此大恩はいつの世に返すぐ〵も殘念は、敵股五郎を志津馬樣が助太刀の後立、賴むあなたにお別れ申す、孫八が心の本意なさ、御推量下さりませ。

ト孫八ほろりと思入。丹右衛門キツとなり、

丹右　ア、腑甲斐ない孫八殿、丹右衛門は死すとも、無念の魂は此世を去らず、郡山の政右衛門こそ我に十倍增りし達人、力と賴むは此人ならでよもあるまじ、仁義を守る性得なれば、賴みに違背はよもあるまじ。ア、若しや、敵の壁に耳、ちつとも早く此場を早う。

〽此世のさらば、未來の首途

鳴海　丹右衛門樣。

丹右　鳴海殿。

鳴海　思へば今日の言合せ。

孫八　敵と敵が修羅の道伴れ。

丹右
鳴海　とゞめは互ひに一刀

へ落ちたる刀差添を、よろめきながら取上げて、眼は眩めど胸と胸、刺貫いたる義士貞女、歎く孫八眼も暮れて、足進まねば泣く〳〵も。

ト鳴海たぢろぎ丹右衛門の傍へ寄らうとする。孫八これを介抱する。此時以前の矢部ウヌと孫八に斬つてかゝる。丹右衛門見事にこれを斬倒し、どうと下にゐる

へ家來が肩に敵の圍み、歯を喰ひしばつて立歸る、心の内こそ哀れなり。

ト鳴海と丹右衛門落入る。鳴海は孫八に介抱受け、愁ひのこなしよろしき見得。三重、ごんにて。

幕

四幕目

五右衛門宅の場

役名　宇佐美五右衛門、櫻井林左衛門、鳥羽源之丞、若黨權介、中間文平、櫻

井の下部松助、政右衛門妻お谷。

本舞臺三間の間常足の二重。半分中仕切り杉戸閉切りあり。正面は屋敷唐紙。右二重の半分は式臺の附いたる玄關のかゝり。ずつと通しの軒口欞子窓。すべて家中長屋の體。幕の内より上の方烏羽源之丞嶋上下一本差のこしらへにて立掛りゐる。内に麻の袴一本差の侍取次いでゐる。此仕組張り扇の音。本行太鼓地鳴物にて幕あく。

權介　これは〳〵源之丞様には、折角のお出での處、いまだ主人五右衛門御殿より歸宅致さねば、今暫くお控へ下さりませう。

源之　イヤ拙者事今日は親共の名代として、若宮八幡に於てお能を勤め、則ち滯りなう相濟まし、お屆け旁々殿にも御滿足の體、五右衛門様にお目に懸りお話し申さんと、それゆゑお能の歸りがけ罷り越してござりまする。

權介　やがて歸宅に間もござりますまい。

源之　左様ござらば折角の事、お歸りまで一服致してお待ち申さう。

ト矢張り能囃稽古の音になり、花道より飛脚のこしらへにて杢助旅なり、狀箱を持つて出て來り、門口に佇み。

松介　ハツお頼み申しませう、此方様へ主人櫻井林左衛門見えられましてござりますか。

ト李介權介を見て、

權介　ヤ櫻井様の御家來松介殿か、まだ今日は林左衛門様は一度もお出でなされぬが、何ぞ急な御用でもござつてかな。

松介　イヤ／＼急と申す事でもござらねど、お旦那の御伯父御澤井股五郎様より御状が参りましたゆゑ、お手渡しに差上げねばならぬ、右の御用向、それゆゑお長屋中を尋ねてをるのでござる。

權介　ハア、そんならアノ股五郎の伯父御といふは、アノ林左衛門様か。

松介　左様ださうにごりまする。

權介　伯父甥の仲といふ事は始めて知つた、ハテ意地の悪い所は争はれぬものだ。

松介　左様なら外を尋ねませう。

權介　若しお見えなされたら、早速申上げるでござらう。

松介　それは大きにお世話でござります。ドリヤ一遍お長屋を尋ねませうか。

ト矢張り右の鳴物にて、松介引返して花道へはひる。

源之　唯今櫻井様の仲間衆の話にて拙者も始めて承はつた。股五郎殿とは伯父甥の親しき仲とは、

知らぬ事とて唯今まで、滅多に人の噂は申されぬものでござる。

ト唄になり、花道よりお谷屋敷風の女房、抱え帯淺黄の袱紗に刀を包み、これを抱え出て來たり、花道にて、

お谷　ほんにまあ、縁といふものは盡きぬものとはいひながら、いつ何時どのやうな事があらうやら。女子程果敢ないものはない、若しや夫の心に、其時はまあ何うしたらよからうやら、アヽ思ふまい〳〵。心急くまゝ後や先、それよりは五右衛門様にお目にかゝり何かのお話、少しも早う、さうぢや〳〵。（ト舞臺へ來り、内を覗いて見て、）ハイ、五右衛門様はお宅でござりますかえ。

ト權介はお谷を見て、

權介　ヤ、あなたは五右衛門様の御内室お谷様、ようゐらつしやりました。サア〳〵是へお通りなされませ。

お谷　見ればお客様もある樣子、シテ五右衛門様はえ。

權介　軈てお下りでござりませう。

お谷　チトお目に懸りお話し申さにやならぬ譯あつて、態々まゐりましたが。（ト言ひかねるこなし、

權介　ナンノ御遠慮はござりませぬから、お歸りまで奥でゆるりと。

お谷　お待ち申して何かのお話。

源之　拙者もお歸りをお待ち申してをりませう。

お谷　左樣ならあなた、是にゆるりとお出でなされませ。

ト唄になりお谷こなしあつて、袱紗に包みし大小を抱え奥へはひる。ト床の淨瑠璃になる。

〽お能終つて御供は、指南の棒を振り廻し、鼻高々と入り來るは櫻井林左衞門。

ト調べになり花道より林左衞門羽織袴大小のこしらへ、仲間一人附添ひ出て來る。直に舞臺へ來り。

中間　宇佐美五右衞門樣お宅でござりまするか。（ト權介出て、）

權介　これは櫻井林左衞門樣、いまだ五右衞門は詰所でござりまする。

林左　ム、いつ來ても在宿のないは折惡い、今日罷越したは、先達より殿へ願ひ出せし政右衞門との立合の儀、是まで延引の譯仔細あらうと、其儀を共に承らうと存じ、態々若宮の歸りがけ、立寄つたと申してお呉りやれ。

源之　今日の御能首尾よく相濟み、御苦勞千萬。先づ〳〵これへ。（ト林左衞門上手へ通る、）

林左　今日は最上吉日とは申せど、一入天氣も快晴なれば此上とも殿の御滿足、御祈願の奉納御能相濟み貴殿の親御式部殿の御丹誠届き、嘸悅ばしうござらう。

源之　全〳〵親共病中ゆゑ、父に代つて役目相勤めましたるも、偏に貴公のお執成と、御指南申す家の面目　如何ばかり有難い仕合せに存じまする。

權介　イヤモウ御家中は申すに及ばず、御能滯りなく相濟み、恐悅に存じまする。

林左　それにつき五右衞門殿未だ歸宅延引は如何、仔細でもある事か、何とも合點の行かぬ儀でござる。

源之　先刻より餘程の間、最早御歸宅に間もござりまするまい。

權介　私が一走り御玄關まで。（ト權介立かゝる、）

源之　それは御苦勞、拙者も御能の番組伺うた上、歸宅致さんとお待ち申し罷在れば、何分貴所樣お賴み申しまする。

權介　最早お下りでござりませう、お二方樣お待受の趣を。

林左　少しも早う賴み存ずる。

權介　畏つてござりまする。

ト權介花道へ行きかゝる。唄になり　花道揚幕より五右衞門　老けたるこしらへ、大小羽織にて　出て來る。中間一人附添ひ出て、花道にて權介に行逢ひ、

五右　其方は家來權介、いづれへ參る。
權介　ハツ、御主人のお迎ひ途中まで。
五右　シテ待受けし客來でもあつてか。
權介　林左衞門樣はじめ、外にも御珍客。
五右　それは定めし取込みであらう、サヽ、參れ。（ト權介入替つて五右衞門を先に本舞臺へ來て、內へはひる。）これは〳〵林左衞門殿源之丞殿をはじめようぞや御入來、先刻よりお待受、失禮の段は御用捨下され。
林左　何の〳〵拙者も貴殿に御面談の上。
源之　又御奉納御能の番組承りたき儀でござつて。
林左　御歸宅を相待ち罷りをつた。（五右衞門こなしあつて）
五右　扨々何の風情もなき所へ、先日も御入來の砌折惡しく他行、コリヤ〳〵權介文平、其方達は勝手へ行て、何はなくとも御酒一つ用意しやれ。
權介　畏りました。
文平
文平　此文平が料理の庖丁、まなばしの使ひ方、鹽梅は勿論塩の辛い事は、舌が縮んで物の言はれぬ

所を賞翫、其鹽梅のよい所を上げたい〱。

五右　何を痴けめが。（ト睨みつける。）

文平　ハイ〱。（ト悄げる。）

五右　次へ立て〱。

文平 権介　ハイ〱。

ト文平権介呑み込み奥へはひる。

五右　イヤモウ國許と違うて、此度始めて殿の御入府に付上府仕つて、男暮しと申すものは、なかなか不自由なものでござるテ。、、、、。

源之　先刻より申上げんと存ぜしは、殿様近々若宮八幡へ奉納の御能、春日龍神並びに、外御能番組差上げるやうに仰せつけられておれば、此儀お屆け申さんと、それゆゑお待受け致してござりまする。

五右　これは〱御念の入つた仰せ、早速御家老中へも右の趣申達しまするでござりませう。

林左　時に貴殿に承るは外の儀でもござらぬが、先達、殿様へ御推擧なされし唐木政右衛門殿身共と立合の儀、夙なり上へも願ひ立てられしと申す噂、いまだ延引の趣はその又政右衛門身

共を忘れて立合ひ致さぬのか、さすれば推量なされた貴殿も殿へ對して相濟まぬ譯、これには仔細でもござる事か、其儀が承りたい。

五右　仔細など〻申す儀もござらねど、其儀に就きまして。

林左　ア丶コレ〳〵宇佐美殿、殿へ對して畏れ多い願ひ、要らざる事の取持、身共とても其政右衛門殿と立合ひ致す時節あらうけれど、一旦殿へも願ひ、出した儀、延引の譯は門弟も知らぬ事、拙者が卑怯未練に思はれては、一家中へ對して面目ないと申すもの、そこの道理を辨へて、早々立合の儀お取持下されい。

ト林左衛門猛り立つていふ。五右衛門落着いたるこなし。

〽せり立てられてもさあらぬ體、一言一句も思案の五右衛門。

ト五右衛門ゆう〳〵煙草を喫んでゐる。

源之　誠に拙者などは遊藝を持つ身として、武術劍術のお話、及ばぬ席に連つて申上げるも如何なれど、林左衛門様とのお立合御延引との事、こりや政右衛門様のお心の内が何とやら思はれまする。

林左　五右衞門樣のお世話ぢやによつて劍術を申立て、當家へ御奉公に出られた唐木氏、武士は相身互ひ、いつ何時にても相手になつて進ぜませうが、なか〳〵身共などには及ばぬ事、彼の蟷螂が斧とやら。

ト五右衞門外らさぬ體にて、

五右　そりや殿へ御師範なさるゝ貴殿なれば、政右衞門などは及ばぬ事とは存ずれども、一旦願ひ出せし立合の儀ゆゑ。

林左　拙者劍術申立て、大祿を頂戴罷居る此澤井林左衞門、政右衞門と勝負延引に及ばゞ、立合はぬ先から一二を爭ふ劍術が申立てにならうか、此林左衞門が相手には餘り大人氣なけれど、摑み挫くは知れた事、それを通つて推擧召さるゝ貴殿の胸中、こりやお世話なされた政右衞門から、扶持方の分米でも取らつしやるやうに見えまするわ、ハヽヽヽヽ。（ト嘲笑ふ）

〽おのが高慢高らかに、鼻いからして獨り笑ふ、五右衞門は素知らぬ體。

ト五右衞門こなしあつて、

五右　殿へ對して畏れあれど、政右衞門を不鍛錬などゝ、若し陰口でも申す者あらば、左樣な者に御知行を賜つては取次致した此五右衞門、一家中へ相濟み申さぬ、是によつて今朝も御家老職へ

お願ひ申し、政右衛門に立合のお願ひ申上げよと申聞かせど、彼も新参の儀ゆえ辭退仕る、それゆゑ某お願ひ申せど、殿様には遊藝を好ませ給へば武道に心置かれず、只管願ふに殿よりも、立合の儀いよ〳〵仰せ付けられ、拙者が面目此上なし。

林左　スリヤ政右衛門と立合、貴殿が願ひ召されたのか。

五右　オヽサ首尾よく仰せ付けられ、此身の安堵。

〽語るも宇佐美が面目。

ト五右衛門思入ある。源之丞五右衛門に向ひ、

源之　宇佐美様には念願届き嘸御滿足、奉納の御能も伺ひし上は拙者はお暇。（ト立上りこなし。）

林左　身共へ向ひ政右衛門が立合などゝは及ばぬ事、然し殿へも願うた儀なれば、不便と存じ稽古の爲立合つては遣はすが、心得違ひのないやうに、よく言つて聞かせるがようござらう、最早黄昏近ければ、身共途まで御同道。

五右　然らば御兩所。

林左　試合の庭にて。

五右　その節面談。

源之　イザ途中まで。

林左　ドリヤ歸宅致すでござらう。

〽言捨てゝ立かゝる、横にはびこる櫻井が、後に引添ふ源之丞、伴うてこそ歸りける。

ト時の鐘になり、林左衛門を先に源之丞以前の仲間附いて花道へはひる、五右衛門後見送り思入。

五右　ア、思へば憎き林左衛門め、高慢の鼻挫いで吳れるはまたゝく中、政右衛門立合連引の譯知らず、急込んで來たは彼奴が卑怯未練より起りし事、腰抜武士の祿盗、やがておのれにしらさんや。

〽忠義一途の金鐵も、國侍の世風なり、折しも一間の內よりも、若黨出でゝ手を仕へ、

ト奥より以前の權介出で下手へ手をつかへる。

權介　ハツ先刻より申上げんと存ぜし所、お客人御入來にて差控へ居りましたが、政右衛門樣御內室お谷樣、お歸りをお待ちなされてござりまする。

五右　ナニ政右衛門の內室が來られしとや、定めし樣子仔細があらう、早うこれへ。

權介　畏りました。（ト權介奥へはひる。）

五右　ハテ氣遣はしいお谷が入來、何とも合點が。

ト思案のこなし。合方になり、奥よりお谷以前の袱紗包みの大小を持ち出て來り、

お谷　これは〳〵五右衛門樣、先刻お歸りの樣子、奥にて承りましてござりまする、私あなた樣にお話し申し上げたい事につきまして、お歸りを待ち申してをりました。

五右　何か仔細は存ぜねど、某へ話とは定めて家内の譯合でがなあらう、早速ながら國許の騷動、嘸かし其方の愁傷察し入る、かゝる時節の其中へ。

お谷　お話し申さぬ其内に、何事も御推量なされて下さりませ。

ト此時五右衛門お谷が顏をよく〳〵見て、

五右　ヤ見ればそなたの顏色といひ、面體荒れし素振から、樣子ありげな此場の仕儀。（とこなし）

へ氣遣はしやと尋ねれば、お谷は淚押拭ひ。

トお谷こなしあつて、五右衛門が傍へ寄り、

お谷　何をお隱し申しませう、今日あなたへ參りました譯といふは、政右衛門殿國許から歸られてよ

り夫の心底變り、出るにも入るにも以前とは事替り、不機嫌のその顔付、此刀を差出して仔細は言はず、是を持つて五右衞門方へ行けと言うたばかりにて、物をも言はぬ心の內、何如いふ譯やら合點行かずと、問返さんにも日頃の氣質、お前に逢うて樣子を言はうと、其儘立つてお長屋へ來事は來ても先刻からお客の樣子、一間の內に忍んで今までお待ち申したわいなア。

〽刀取り出し差俯向き、少時言葉もなかりけり。

ト お谷刀を取り出しこなし。五右衞門思入あつて、

〽宇佐美はつく〲打詠め。（ト五右衞門刀を見て）

五右　ハテ心得ぬ、オヽソレ〲こりや是我が秘藏せし長舟の一腰、其方が親代なしたる印に、政右衞門方へ遣はせしに、持たせ越したは、ハテ合點の行かぬ。

〽引拔き見れば物打に、卷添へし一通、コハ〲如何にと解きほどき、見るよりびつくり。

ト 五右衞門袱紗包みを取り見る。中より刀に卷添へし去り狀出る。是を見て五右衞門びつくり思入。

こりやこれ此方へ政右衞門より暇の一通、サヽ定めて是には樣子があらう、どうぢや〲。

〽言葉にお谷も仰天し。

トお谷びつくりこなしあつて、

お谷　アノ私への去り狀とは。

トお谷去り狀を取つて見る。

五右　サヽ定めし是には深い仔細があらう、隱さずとも言うて聞かせい、どうぢや〳〵。

ト急き込んで言ふ。

お谷　イエ〳〵去らるゝ覺えは微塵もござりませぬ、エヽ聞えぬぞや政右衛門殿、ようまあ科もない身を酷たらしう、去るといふ事誰が始めた、お腹には十月宿したお前の胤、普通でもない身を情ない、何故そのやうな胴慾な氣にはなつて下さんした、科があるならあるやうに、言うて聞かせて呉れもせで、餘り酷い、去つたとは胴慾でござんすわいなア〳〵。

〽情なやとかつぱと伏して泣きゐたる。

トお谷いろ〳〵泣伏してこなし。五右衛門思入あつて、

五右　エヽ此方も武士の娘でないか、魂の腐つた政右衛門、後を慕ふ事はない、エヽ口惜しい、わ

が目の見えぬが誤り、天晴器量のある奴と睨んだ眼が腐つたか、何卒出世をさせんと思ひ、今出頭顔する林左衛門と一勝負立合はさせ、武藝の器量を顯はし一家中の手本とせん、さすれば殿にも遊藝をお捨てなされ、武道の道にお心を寄せ給はゞお家の爲と思ひしゆゑ、林左衛門と立合を勸むれども、辭退するは臆病風にひかされた大腰拔けめが、此儘止めになりし時は、一家中の物笑ひ、嘲ひを上げし御前の手前も言譯なし、エ、腑甲斐ない心にはなりをつたなア。

〽腑甲斐なやとばかりにて、どうと座を組みゐたりける、お谷も共に泣口說き。

お谷　コレ申し、何卒心のなほるやう、卑怯者と言はれぬやう、あなたの御思案はござりませぬかいなア。

五右　オヽ、さう思やるも尤ぢや〳〵、最前も林左衛門めが某に向ひ、彼を相手に立合ふは大人氣なしと、人もなげなる雜言過言聞かぬ顏は何故ぞ、お家のお爲一つには、又おのれを出世させんものと思ひし事も恩を仇、但しは國許の騷動を聞いて一家の緣を切る所存か、おのれゆゑには勘當受けし此お谷に、某が親となり女房に持たせしに、科なき者まで疵をつけ、追出して寄越すのみか、親となつた印に遣つたる此刀に添へて寄越した暇の狀、差付けし心は我を欺く憎

い仕方、心魂にこたへて了簡ならぬ、武士の意地を立抜く宇佐美五右衛門、瘦腕なれど鋭き刃の切味を見せて呉れん。

ト五右衛門身構ひして立ちかゝる

〽一途に凝つたる國侍、お谷は取付き。

トお谷五右衛門に取付いてこなし。

お谷　マア〳〵お待ちなされて下さりませ。

五右　ヤア〳〵愚か〳〵、一先づこなたは屋敷へ歸り。コリヤ。（トお谷に囁く）

お谷　そんなら私は。

五右　何氣なく持ちなされよ、我は後より用意して、政右衛門が宅へ押掛けて。

お谷　事によらば夫が命。

五右　コレ。先手を取つて切りかけん、其時此方も此刀で。

トお谷へ件の刀を渡してし。

お谷　豫て覺悟の。（トこなし。）

五右　尋常に自害せよ。
お谷　言ふにや及ぶ、此世のお暇。（ト行きかゝるを呼戻し、）
五右　未練な心残されな。
　ヘ言葉立派に言ひ放す、夫の心善悪を、小褄凛々しく帯引締め。
　ト お谷身ごしらへして花道へ行きかゝる。
お谷　合點でござんす。少しも早う。
　ヘ勇まぬ心取直し勇み進んで行く足も、躓く石に心急き、思案に胸も解けかぬる思ひ直して出でゝ行く。
　ト 此文句にてお谷足早に花道へはひる。五右衞門後を見送り思入あつて、
五右　勇ましき彼が心底、某も直様用意。權介々々。
　ト 呼ぶ。奥より以前の權介出て來り、
權介　御用でござりまするか。

五右　コリヤ其方は着替の衣服上下持で

權介　ハツ。（ト二重の上より、廣蓋に衣服大小上下を載せて持つて來る。）

五右　コリヤ〳〵まだ外に申付ける用向。

ト五右衞門急いたる心にて、後や先のセリフあつて、衣服上下を着る事よろしく、此内奥より以前の文平鉢の中に刺身を作り、是を持つて出て來り、

文平　先刻仰せ付けられたるお肴、唯今やう〳〵。

五右　モシ手に餘るその時は、ム、。

ト獨り言を言つて考へ〳〵上下を着る事よろしくあつて、刀の目釘をしめして、勇ましく行かうとする。

文平　モシ〳〵お旦那、手際の刺身、庖丁を御覽に入れたう。

ト五右衞門が目先へ鉢を出す。五右衞門見て、

五右　何を痴けめ、そこ所ではない。（ト思はず鉢を叩き落す。文平が頭へ刺身かゝる。文平これはと寄るを、）エヽ面倒な。其所退け。

ト文平を突退け花道の方へ行きかゝる。舞臺の權介文平の兩人はハアと倒れる。

〽心得まかせと身繕ひ、心も空に慕ひ行く。

ト三重の送りになり、五右衛門よろしくあつて逸散に花道へはひる。

幕

ト引付けると、鳴物、中の舞にて引返す。

五幕目　政右衛門屋敷の場

役名　唐木政右衛門、宇佐美五右衛門、若徒柘榴武介。政右衛門女房お谷、行家妻柴垣、行家娘おのち、乳母おもと腰元楓、同小萩等。

本舞臺三間の間二重。見付中形屋敷襖。上手一間の折廻し障子屋體、いつもの所に門口。是に唐木政右衛門と記せし表札を懸け、こゝに若黨のこしらへにて柘榴武介、俎板庖丁にて肴を料理してゐる。鳴物鐵輪の謠の切れにて幕あく。

へ昔は山の跡なれや、今も名のみは郡山、家中屋敷も繕はず、直な唐木の柾目

ある、家の柱はのき去りに、奥樣役の留守預り、石留武介は忠義者、常の奉公の裏表、內證賄ひ忙しき。

ト矢張鳴物のあしらひ、武介脊掛へあつて、

武介　お隣屋敷の亂舞の稽古はありや鐵輪、後妻うつ折も折時も時と、お旦那政右衞門樣には譯のある奥樣を追出し、今更俄かに嫁入支度、日頃のお氣に似合はぬ事ながら、祝言に女きれがないゆゑ、隣りの御老女樣へお願ひ申したら、よいやうに御承知ぢやが、ハテ打つたり舞つたり、一人ではいけぬわえ。

ヘ臺所より腰元共が、ばら／＼と立出でゝ。

ト此より腰元小萩、腰元大勢のなりにて出て來り、

小萩　モシ武介とやら、今夜はお內方に嫁御樣がお出で遊ばすげな、お手傳ひに御祝言のお振舞。

腰元　私共もあやかるやうに、お手傳ひに參りました。

武介　イヤこれは御苦勞々々、御存じの通り小身の旦那、仲間一人下女一人、若黨の此武介が料理人やら御家臣やら、あんまり人手がなさに、待女郎にもお酌にもお前方をお頼み申す。

楓　イエ同じお給仕でも、御祝言と聞けば氣がしよぎ〳〵。

小萩　イヤモシお噂を聞きますれば、合點の行かぬ事はお谷樣といふ御新造樣、お里歸りなされてから去られたげな、まだ温まりも冷めぬ內、新しい嫁御をお入れ遊ばすとは餘りな手廻し。

楓　さればいなア、今度の御新造樣は何處からお出でなさるのぢやえ。

武介　イヤモウ我等もかツふつ存ぜぬ、何だか知らぬが旦那が一人呑込んで、今夜嫁を呼ぶほどに、祝言の拵へせいと吩咐けてをられたから、俄に料理拵へ、少しばかり聞きはづゝた海老の舟盛、おき鯉おき鳥などゝいふしちむづかしい事は取置き、鮒の吸物腹合せは新枕の心ぢやげな、肝心な嶋臺を忘れて、正月の御杯を組替へて間に合はす、おれ程の者がいかぬは、銚子くはへの折方、お前方知つてなら、是ばかり折つて貰ひたい。

小萩　ナンノマア其やうに儀式せいでも大事でござりますまい、お話の樣子では、お仲人さへない嫁入、今迄何處ぞでこつそりと、圍つてあつた女中であらう。

楓　ほんにまあ政右衛門樣も、お顏に似合はぬ色事師、先の御新造樣はお腹が立たう、馴染の御新造を暇取らして、後へ來る嫁づらは、どんなお顏ぢや見てやりたい。

小萩　さうぢやわいなア。

〽さがない女子の日々に、うたて浮世の高話、憂き事の思ひの種を身にもつて、我家ながら心置く、夫の留守を竊ひ足。

トこの内お谷前幕のなりにて出て來り、直ぐに門口へ來り内を窺ふ。武介は見付けて、

武介　ヤアお谷様。

お谷　武介々々。（ト門口にて手招きする。）

〽腰元は目早く。（ト腰元兩人此體を見て、）

小萩　お谷様と仰言るは先の御新造。

楓
小萩　ようお出でなされました、まあ〳〵これへ。

〽と言ふに武介も押下り。（ト皆々よろしく、お谷上手へ通る。）

武介　お谷様、ようお出でなされました、幸ひ唯今日那のお留守、お歸りならばお知らせ申しませう。
マヽごゆるりとなされませ。

〽あしらふ程いとゞ重なる憂き辛さ。

お谷　イヤナウ武介、共白髪までと言交はした人の心も變れば變る、我家へよう來たといはれるやうになつたわいなう、身に覺えはなけれども假親の五右衛門様、どのやうな誤をしたぞ、假の印の此一腰、譯が立たねば受取らぬとそれは〳〵お腹立、お屋敷へも置かれねば、立寄る方もない身の上。

武介　御尤もでござります、譯のあるあなた、何の仕落がござりませう、私めもさつぱり合點が參らぬながら、又致しやうもござりませう程に、必ずお心遣ひなされまするな。

お谷　心遣ひはさる事ながら、見ればいから賑かたが、お振舞でもあるのかや。

　　問はれてそれを言ひかねる、後先見ずの女中達。

小萩　お谷様、今宵は此お屋敷へ。

楓萩　お嫁入がござりまする。

お谷　ヤア嫁入とは誰が嫁、コレ武介、よもやさうではあるまいと思へども、若しや旦那殿に嫁御が來るのぢやないかや。

武介　イエ共儀は。

小萩　ニ、武介殿、隠してもどうでも知れる事、政右衛門様の御新造でござりまする、下地からどうでも訳のある事かして、今夜俄の御祝言。私共はお隣の奥家老様よりのお頼みで、お給仕に傭はれて参りました。

楓　お前様は其の御新造様、てつきりお姿に見替へられなされたに相違はござりませぬ。

楓小萩　ぐつと御悋気なされませ。

〽身にもかゝらぬ法界悋氣、焚付けられていとゞ重なる口惜しさ、包みかぬれば見て取る武介。

武介　ア、コレお女中方、役にも立たぬ事言はずと、お臺所に人がない。爐の炭でもついで貰ひませう。

小萩　アイ〳〵合點ぢや〳〵、旦那様のお歸り、待女郎。

楓　此方も嫁御の相伴で、よい夢見よう、サアござんせ。

〽打連れて立つて行く間を待ちかねて。ト貝元兩人奥へはひる。

お谷　エ、政右衛門殿情ない、一方ならぬ訳ある侍を引裂いて、直ぐに今宵嫁入とは、そりや餘りぢ

や胴慾ぢやわいなア。

〽かつぱと伏して泣きゐたる。（トお谷泣き落す、合方。）

武介　オヽお道理でございます、御尤もぢや〳〵、したがお谷様、必ず御悋氣なされまするな。

お谷　アノ云やる事わいなア、悋氣とは一と通りの事、非業な死をなされた父様、弟志津馬が敵討の力と頼むはたつた一人、其夫政右衛門殿と縁切れば、誰を頼みに大敵の股五郎、何時本望が遂げられう、力も綱も切れ果てしと思へば胸が張り裂けるわいなう。

〽歎けば共に泣じやくり。

武介　お氣遣ひなされまするな、假令旦那がどう仰言つても、拙者めが命に代へて此御縁は切らしませぬ、悋氣なされなとはそこの事、お前様のお肚には政右衛門様のお世繼がございますぞえ、去り状お取りなされても、後連がはひらうが、其若様さへ御平産なさるれば切つても切れぬ血筋の御縁、政右衛門様敵討の助太刀も頼みの種と人參子、御臨月に氣を揉んで、過ちあらば如何なさる、追付お旦那がお歸りあらば、悋氣がましい顔をなされず、兎角此御當家を動かぬやうになされませ、御合點がまゐりましたか、とは言ふものゝ義理あるお前を去つて嫁入の祝言のと

は、旦那はどうしたお心ぢややら、拙者も一切合點が行かぬ、ほんに此蝶花形を私は折りやう
を存じませぬ、お前樣、お頼み申しまする。
〽言はれて手には取りながら。
ト お谷紙を取り折る事よろしくあつて、
お谷 見す〳〵夫を寢取らるゝ、あた憎てらしい蝶花形。
〽骨折つて隼の鷹の餌になる春の雛、外に夫の聲聞え。
ト お谷折形を仕舞ひ、武介門口より向うを見て、
武介 アレ〳〵向うへ旦那のお歸り、暫く忍んで何かの樣子。
お谷 何事もよいやうに、武介頼むぞや。
〽家來が情を力草、逢ひたい夫に隱るゝも、疵持つ心唐紙を、押明け忍び入り
にけり。
ト お谷息入あつて奥へはひる。
〽心掛けある侍は地を匍ふ虫も氣をゆるさぬ、唐木政右衛門、伊達を好まぬ

刀の柄、人に勝れし袴の幅、上屋敷より歸り足、武介手を突き。

ト此内花道より政右衛門上下衣裳にて出て來り、直に内へはひる。武介出迎へよろしくあつて、

武介　お旦那唯今お下り、殊の外のお暇入り、御用の趣は如何體の儀でござりまするな。

政右　されば〳〵、此間から辭退申上げる櫻井林左衛門と武藝の試み、明朝正六つ御前に於て立合致せと、押つけての御家老の言渡し、今晩妻を迎へまする婚禮あるゆゑ、一兩日お延ばし下されと願うてもいつかなお聞入れなく、妻を招ぶは私事明日は延ばされぬと、さりとは心ない家老殿。此方は内へ氣が急く、もゝ尻をしてやう〳〵唯今。シテ祝言の拵へ用意は出來たか。

武介　ハツ、概略拙者が調へましてござりまする。

政右　よし〳〵、ヤレ〳〵知行取りに飽き果てた、嫁の來るまで上下を脱いで休息せう、誰ぞ枕持て、女子共。

お谷　ハイ。

〽と返事も差足に、角を隱せし塗枕、そつと傍に奥樣が、腰元代りの見えがくれ、袴は解けど胸解かず、鋭どい常の侍肩衣折つて疊んで取直す、詫の

種とは見付ける夫。

ト此内奥よりお谷枕を持ち出て來り、そつと差出す。政右衛門上下を脱ぐ。お谷疊む。兩人よろしくあつて、

政右　ヤイ武介、あの女子は何者ぢや。

お谷　エヽ。

武介　イヤあれは、あの、今日御見得に參つた新參の女中で、ナア。

ト双方へ呑込ませこなし。

お谷　ハイ旦那樣、お目掛けられて下さりませ。

政右　フム、スリヤ奉公人ぢやな、見掛けから愚鈍さうな不束な女なれど、使うて見て呉れう、コリヤヤイ女、今夜は身共が妻を呼び迎へるが、祝言の給仕申付けるぞ。

お谷　アノ嫁御とお杯の給仕をせいとは、そりや又あんまり。

政右　どう致したと。

お谷　イヤサ餘り急な御祝言、不調法な私が。

政右　給仕をせずば奉公叶はぬ、立歸れ。

お谷　イエ〳〵申し、何でも御意は背きませぬ、お使ひなされて下さりませ。
　〽下女になつても夫の家、離れかねたる心根を、察して武介が呑込む涙。
武介　さうだ〳〵、御奉公は辛抱が大事、何仰言らうとアイ〳〵と、そこらを程よう鹽梅加減、ドレお杯の用意を仕らう。
　〽料理を機に立つて行く。
　ト武介思入あつて奥へはひる。引違へて下手より仲間一人走り出て、門口へ來り、
仲間　申上げます、宇佐美五右衛門様お出でゞござりまする。
　ト言捨てゝ下手へはひる。
政右　ハヽア又堅藏がわせられた、誰ぞ羽織を持て。
　〽言はれぬ先から心得て、勝手覺えし女房が徳、機轉利かして後から、着せる羽織をひつしよなく。（トお谷手早く奥より羽織を取つて來り、政右衛門の後から着せるを、）
エヽ子供ではないぞ、差し出た女め、次へ立て〳〵。（トお谷から羽織を引奪り着ながら、）きりき

り立て。

〽睨め付けられて是非なくも、立つ間忙しく。

ト お谷ジツとこなしあつて奥へはひる。

〽入り來る五右衞門、彌左衞門裁の上下、硬張りきつてむんずと坐し。

トこの内花道より宇佐美五右衞門上下衣裳にて出て、直に舞臺へ來り門口より

五右 罷り通る、御免下されい。(ト言ひながら内へ入り上手へ住ふ。)

政右 これは〳〵五右衞門殿、ようこそお出で下された。

五右 仰せに及ばず、早速ながら政右衞門殿、承れば今晩其許へ嫁御入來との由御祝儀に參つた、老人の寸志ぞと御覽下されい。

〽一通を差置けば。(ト五右衞門懷中より一通を出し、政右衞門が前へ置く。)

政右 これは〳〵拙者婚禮をお祝し下されし、御發句でがな、先づ以て忝し。

〽押開き見て不思議顏、しばし詞もなかりしが。

フムこりや拙者への果し狀でござるな、ハテ存じ寄らぬ、先づ其意趣の次第。

五右　知れた事、科ない妻めを何故去つた。

政右　是は迷惑、拙者が妻を拙者が去るに、お手前が何故の御立腹。

五右　ア丶言ふまい、尤もお谷は上杉の家中、和田行家が娘なれど、お身と密通して二人連れ、此鎌倉山へ駈込んで浪々の體、元より行家とは武藝の相談の友ゆゑ、早速内々にて申入れたれば、殊ない立腹、なか〱忿々の沙汰に思はれ、不便に思ひ先づお手前に近づき、樣子を窺ひ根性を見込み、殿へ御推擧申上げ、當家へありつかせたはこの五右衛門、それもお谷が縁より起る、其上推擧受けて親許のないお谷、行家方より貰ひ受け身共が娘分にして、改めてお身に呉れたれば、以前は行家が娘にもせよ今は身が娘、少しの見落しあるとても、去られる義理ではないぞよ、一旦の恩を忘れ、外より妻を持替へるは五右衛門を踏付けた仕方堪忍ならぬ、それともお谷に餘儀ない科でもあるか、それ聞かう、返答次第其座は立たせぬ、サ、何と。

へ鍔打叩いて詰めかけたり。

政右　御立腹の段々承り、イヤモ重々御尤千萬、お谷に微塵も科はなし、去つた仔細は別儀でも

ござらぬが、飽きました女房といふものは、飽きてからはもう〳〵片時も置かるゝものではござらぬ。

五右　何と言はるゝ。

政右　サ、マアお聞きなされい、御立腹は御尤ぢやが、今拙者を討果されては、御主君へ不忠になりますぞ。

五右　何と。

政右　今日上より御意あつて、明朝御前に於て澤井林左衛門と劍術の勝負を致す此政右衛門、是まで拙者を推擧なされ、明日も勝負檢分の役目を仰せ付けられた其許が其立合も致さぬ内に、拙者をザツプリ斬つてお仕舞ひなされたら、御自分樣の意の趣きは立たうが、何と殿へは言譯ござるか。

五右　サ、それは。

政右　是非憤り晴れぬとあらば、何と致さう武士の因果、明日御前の試合を勤め、其後にてお望みにまかせお手に掛りませう程に、今暫く御宥免下さるやうに願はしう存じまする。

ヘ理に詰められてさしもの五右衛門。

五右　フム上を重んじ、下を立てる心は、尤、さりながら期を延ばせしとて鬱憤は止まぬ武士の意地、しかと御前の立合終らば。
政右　言ふに及ばぬ、其時こそは運命を天に任せて。
五右　きつと言葉を番ひ申した。
政右　二言はござらぬ。
五右　約諾の上は遺恨は遺恨御用は御用、明日までは傍輩の役目、仲よし〳〵。
政右　スリヤ御得心下さるゝか。
五右　年は寄つても宇佐美五右衛門、まだ顛倒は仕らぬ。
政右　ア、忝い〳〵、今日参る嫁、イヤ又その容貌の好さ、誠に雪と墨との違ひ、妻のお谷めは不容貌の上に因果と早う身籠りして、正眞の鰒の横飛び、飽きたを無理とは思召し下さるな。
へ愛想づかしを立聞の障子に歯形も入るばかり、差込む癪の折もあれ。
ト此内お谷障子屋體より立聞き、ぢつと思入。奥より以前の腰元小萩楓兩人出て來り、
小萩　申上げます、お嫁御樣早や是へお渡りでござりまする。

ト皆々是を聞いてこなし。

政右　ナニ嫁が、オヽ待兼ねた、早う通せ。（ト腰元兩人引返してはひる。）コリヤ女子共、燭臺に火を點せ、早く〳〵。

小枝
楓　ハイ〳〵。

ト言ひながら燭臺銚子島臺を持ち出て、よき所へ置いてはひる。

政右　五右衛門殿、最早嫁が參つてござる。

五右　これは早急、暦でも見さつしやればよいに。

政右　見ました〳〵、最上吉日でござる。

五右　デモ日が暮れぬに。

政右　善は急げでござる。

五右　ナニ急ぐ程がよくござらう。

政右　これは〳〵御挨拶。

〽急ぐ程縄五右衛門がむかつく顔、玄關より奧座敷、直に手繰りの餅乘り物、

對の簞笥に染め込みの、覆も愛持つ介添女房。

ト此内奥より鋲打乘物一挺、侍手舁きにして出る。是に乳母おもと絹やつし屋敷模樣にて附添ひ出て來りよき所へ直す。後より對の簞笥、子持筋の覆ひの掛りしをよき所へ直す。政右衛門見て、

政右　オヽ大儀々々、イヤ宇佐美公、唯今御覽の如く彼の妻が參つた、お悦び下されい。

五右　アヽ目出たい儀でござる。

政右　御推量下されい、貴公には御退屈、コリヤ〳〵あなたに御酒上げいよ。

五右　イヤ拙者御酒を食べると胸が惡くござる。

政右　それは氣の毒、然らばお菓子々々。

お谷　畏まりました。

ト　お谷高坏に饅頭その他蒸菓子を積み、是を持ち出て五右衛門が前へ置き直し思入。

五右　イヤサお介意ひ御無用。

政右　ハテ堅苦しい、何がな御馳走。ヤイコリヤ新參の女、何をうぢ〳〵まご〳〵と、其不調法では祝言の砌は得せまい、お客の膽入り、ソレお背中でも揉んで上げい。

お谷　ハイ〳〵。（ト立ちかゝる。）

五右　エヽ介意ふな〳〵。

〽言ふ程腹の立波に、音も泣く千鳥四海波。

ト お谷五右衛門思入、政右衛門かまはず、

政右　扨我等今晩の花聟、上下を着る筈なれど、頭から打解けるやうに角菱廢めて此儘の見參、サアサア早う〳〵嫁御のお顏が見たい〳〵。

もと　オヽお心易い聟樣で嫁御樣のお仕合せ、羞かしがつてござらずと、サアお出でなされませ。

〽乘物あくれば綿帽子、綿より上は埋もれて、七つばかりのいとさま御寮、尺にも合はぬ襠ほら〳〵、帶につられて座敷にとんと。

ト女形立掛り乘物の戸をあける。內より行家娘おのち芥子坊主の娘のなり、補襠衣裳にて綿帽子、好みのこしらへにて、乳母おもと介抱して出て來り、よき所へ住ひ。

のち　乳母、是取つて〳〵。（ト綿帽子へ手をかける。）

もと　マア其綿帽子、お杯の濟むまで召してござれ。

政右　アヽイヤうつとしからう、取つてやりやれ、ドレ戀女房の御面相を。

〽帽子取らせば尺長も、しまらぬ芥子の花嫁御、直す三方土器を、乳母が持添へ頂かせ。

ト此内政右衛門おもとおのちの帽子を取らせ、おもと介抱して杯事あり。皆々思入。

もと　ハイ、聟君様へ申上げまする。

ト三方の土器を政右衛門へ差す。

政右　忝い〳〵、女子共皆見て呉れ、何んとちよつこりとして、何處に置いてもマア邪魔ならぬよい女房であらうがな。

小萩　イヤモウ、先御新造様とお見替へなされた花嫁様。

楓　お噂より見てびつくり。

お谷　思ひ違ひも程のある、こりやマアどうした祝言。

五右　神武以來下々では無い圖な婚禮、物好きといふも餘りで、開いた口さへ塞がれ申さぬ。

小萩　そのお口取には、用意のお肴がござんす。

ト いひながら小萩楓兩人思入して奥へはひる。

政右　肴とは出來す〳〵、先づ何よりは嫁御の杯、目出たう一つ。

〽目出たう一つ、次の間より。（ト政右衛門杯を受けてお谷酌する。奥にて、）

柴垣　千秋萬歳の千箱の玉を奉る。

〽と謡聲裲襠の袖に一通乗せ立ち出づる。

ト奥より柴垣裲襠衣裳にて少し肴を持ち出て來る。お谷これを見て、

お谷　ヤアお前は母様柴垣様。

〽驚くお谷に目もやらず、政右衛門に打向ひ。

柴垣　お願ひの通り頑是ない此娘を妻となし下され、此上の本望なし、聟引手の此の目錄は御主人上杉宇内様より、志津馬へ下されし敵討御免の御書、いよ〳〵助太刀なされて下さるお心ちやな。

政右　お尋ねに及ばず、承知致してまかりある。

柴垣　エ、忝い。

〽悦ぶ母に不審の二人、

政右　コリヤ新参の女、よつく聞け、身共には先妻があつたれどナ、親の許さぬ密通、行家殿の勘當の

娘、どれあひ女夫の悲しさは、長立つて聟舅とはいふ事はならぬぞよ、今郡山の扶持を頂く政右衛門が詮もない他人の助太刀がなるべきか、コレ此おのちは世間晴れての行家殿の忘れ形見、志津馬が妹に違ひない、この稚い者と祝言すれば是ぞ誠の聟舅、舅の敵小舅の助太刀仕ると、殿へ願ひ奉らんには、よも不屆とは思召されまじ、彼方此方を思ひ計つて、科もない女房を去つた謂れは此通り、義理といふ色に迷うて、五年の馴染に見替へた心汲みわけて、五右衛門殿御立腹の段々は、眞平御免下さりませ。(ト鹿爪らしくこなし。) イヤ我等もう醉ひました〳〵、何を申したやら他愛々々、偏に御免下されい〳〵。

〽酒に紛らす本性の、言譯聞いて手を合せ、

お谷　エ、有難い政右衛門殿、よう去つて下さんした、其儀をちつとの間も恨んだ、女子の廻り氣を堪忍して下さんせ。

五右　オ、サ委細を聞いて我も角も一時に折れ申した、身共までがよい年をして疑ひの惡口、面目ない、所存の程感じても餘りあり、天晴武士かな政右衛門殿、此祝言は敵討の首途、武士道も立つ家も立つ嫁を迎へられ、扨々門出たい婚禮、我等も共々お取持ち。

〽始めの腹立打替へて、一度に顔の色直し。

政右　お心が解けたれば、いよ〳〵替らぬ政右衛門が後連のおのちや、二世かけた其方の夫、今夜から抱いて寝るぞや、コレ女房共々々。

〽言へどおのちは欠伸まじり。

のち　乳母、もう去にたうなつたわいなう〳〵。

柴垣　これは何とした事が、嫁入早々去んでなるものぞいなう、三々九度のまだ濟まぬ殿御、御杯頂くものぢや。

のち　イヤお魚は厭ぢや、乳母あれ欲しい。

もと　あれとはム、お饅かえ、さもしいお嫁御様ではあるぞえ、おとなしうお行儀に。

政右　イヤ〳〵道理ぢや〳〵、若い妻に欲しからん、然し一つは過ぎる、半分は身が預かる、是が夫婦の固めぢやぞ。（ト高坏の饅頭を引裂きおのちに遣る。）

〽持たせればほや〳〵饅頭笑窪。

ほんに忘れた、嫁君の御持参、肝心のお道具をドリヤやりませう。

〽簞笥の抽出廣蓋に、取並べたる持遊びの市松人形風車。

ト政右衛門簞笥の抽出より廣蓋に色々の手遊びを並べ取つて、おのちの前へ置き、人形など持つて思入。

柴垣　七つになる子に殿を持たせ濟ました。

柴垣
もと　しやん〳〵。

〽濱松の音はざゞんざ。（ト皆々思入あつて、）

柴垣　ほんになア、座は替らねど我夫、問はれぬお谷の心根を、思ひ遣つてゐるわいなう、そもじとは生さぬ仲、眞の娘の此お後を替へさした、繼母が聟殿に悲い心を勸めたと、恨んでばし下さるなやア。

お谷　勿體ない事仰言りませ、私が緣の切れたるは父様へ不孝の言譯、また政右衛門殿、いつまでもあの子と添うて下さるが家の爲志津馬が爲、わしや死ぬるまで去られてゐるが嬉しうござりまするわいなう。

〽嬉しいわいのとあかし合ひ、親子の貞心三國一、思ひは富士の郡山、解けて

涙を汲交はす酒も理に入りしめ〳〵と、夜も更け渡る稚子が。

のち　乳母、もう寝よう。

〽と乳捜す。（トおのちおもとに取付き思入あり。）

もと　オヽ此子わいなう、七つになるまで乳くはへる子があるものか、殿御の手前もお恥かしなされ。

政右　イヤ大事ない〳〵、是からが新枕、ソレ女子共床をとれ、身共も追つけ寝る、コレお乳母女房共に尿やつて寝さしてやりやれ。

もと　ハイ〳〵、左様なら、サア花嫁様。

〽労り心付き〳〵に、乳母のおもとが抱きかゝへ、寝所へ伴ひ入りにける。

トおもと會釋しておのちを抱き奥へはひる。

〽政右衛門は宇佐美が前へ手を突いて。

政右　改めて五右衛門殿、お頼み申上げたき樣子あり、お聞届け下されうや。

五右　これは又改まつた、斯く奥底なき上は、サヽ役には立たずと宇佐美五右衛門お力になりたい、何

なりとも遠慮なら承らう、どうか〳〵。

政右　ハアテ先以て御親切忝い、申兼ねた事ながら、其許様には明日より暫くの内武士道を捨て、汚名を請けて下されい。

五右　何と仰せらるゝ。

政右　サ、其仔細といふは、明朝六つ時櫻井林左衛門と立合仰せ付けられし、此勝負に見事拙者が負けまする。

五右　ヤ、何故でござる。

政右　サ、知れてある林左衛門が手の内、打つて〳〵打伏せるは覺えあり、勝つては御前の御意に叶ひ、是より一家中の師範にても仰せ付けられ、お暇が出ぬ時は助太刀の望みも叶はず、存念も水の泡、さるによつて御前の仕合、政右衛門は物の見事に負けて、それを越度に知行を差上げ浪人して思ふ儘に小舅の助太刀致す所存、先には拙者が劍術も推擧なされた其許様、負けた拙者が恥よりも、見損なうた御恥辱武士道立たず、目利違ひの汚名取らせまするが人外の致し方、是まで厚う御贔屓下され、樣々御恩に預かりし恩を仇と申さうか、右の心底申出すは五臟の血を吐くより苦しけれども、舅の敵が討ちたさ、志津馬に本望遂げさせたいばつかりに、斯

様の不屆を申上げる、木石とも畜生とも思召され、偏に御免お聞屆け下されい。

ヘ鬼を欺く政右衞門、わつと泣きたる眞實に感じ入りて。

五右　ム、重々尤々、お望みの通り宇佐美五右衞門、一分進上申す、何よりも安い事、さりながら唯殘念なは、林左衞門めに恥面搔かせんと思ひしに、却つて面目を失なひ、少時が内も殿を始め一家中への申譯は、

政右　如何なさるゝな。

五右　そりや拙者が胸にござる、老は先立つ此五右衞門、面目を失うて相果つるは悔しけれど、貴殿が本望遂ぐる時、骸の上で身が恥る其時雪ぐ少時の無念、是も繰言誠ある侍の爲に一分捨てゝ役に立つは、身にとつて大慶々々。

ヘ口で言はねど切腹と、死ぬるを常の武士氣質。

政右　アレ聞いたか、主君の外武士の一分を捨てゝ我々に下さる、有難いと御禮申せ女房共、とは言はれぬ面。

柴垣　親子とも言はぬが孝行、

五右　勝つべき勝を負けるも義心、
お谷　恥辱をとつて下さるも、
政右　侍同志の、
お谷　お情ぢやなア。

へ互ひに禮儀のなか〳〵に、涙催す八つの袖、時計の七つ忙しなく。

ト皆々愁ひのこなし。奥にて七つの時計鳴る事。

五右　アレ早や勝負の刻限近し、身は先へ登城致す、用意あれ政右衛門、貴殿のお暇出づるを合圖に身共が存念、イヤ御邊は直樣鎌倉へ出立、老の思ひ出冥土の出立、はや參らう。
政右　スリヤいよ〳〵武道を。
柴垣　立てるも義ゆゑに。
お谷　あなたのお命。
五右　捨つるは皺腹。
政右　ヤ。

五右　御前で逢ひ申さう。

ト互ひに會釋して五右衛門花道へはひる。いづれも見送り、

〽勇んで御前へ。

ト殘りし三人愁ひのこなし　三重にてよろしく、

ト引付ける。後鳴物調べにてつなぎ。

幕

六幕目　大内記館の場

役名　磐田大内記、唐木政右衛門、宇佐美五右衛門、櫻井林左衛門。大内記奥方久方御前、政右衛門妻お谷、行家妻柴垣、同娘おのち、腰元、小荻、楓等。

本舞臺三間の間常足二重。見付金襖襖欄間。前側半簾。よき所に鈴を釣りかけてあり、すべて上段の

體、こゝに大内記の奥方久方御前裲襠衣裳にて褥を敷き、側に老けたる近習一人。下手に腰元小萩楓控へてゐる。久方御前文を見てゐる。琴唄にて幕あく。

近習　仰せ付けられました女子共、唯今立歸りましてござりまする。

久方　自分が附人根野銀兵衛より隣家政右衛門俄かの婚禮心得ず、幸ひ給仕の女子を賴みの樣子、新參者ゆゑ身元を糺すによい折からと申すにつけて、二人の者を遣はしたが、今宵の樣子は。

小萩　ハツ、銀兵衛殿申されました通り、隣家の女子の心算で參りました所。

楓　政右衛門殿には先妻を離緣致しまして、俄に今宵祝言の嫁御といふは、七つばかりの稚い者でござりまする。

久方　ハテ不行跡の上色香に迷ひ、故なう先妻を追出して祝言かと思ひの外、まだ頑是ない子供を迎へるとは。

小萩　先の內證お谷と申すも、參り合はしてをりましたが、

楓　結納杯も濟みましたゆゑ、私共は。

兩人　ひらきましてござりまする。

久方　一體政右衛門事は武術鍛錬の者ゆゑ、宇佐美五右衛門推擧によつて、師範にお抱へ遊ばされ

しも、家臣共の心は亂舞に耆り遊ばす殿大内記樣、何卒武道へ誘引させまして、行く〳〵は格別にお取立、殿の御師範諸家中もお預けあらんとの評議ゆゑ、身元の樣子も糺さねば、とはいへ銀兵衞よりの此文體、いまだ身元の善惡は。

小萩
楓　左樣ならば今一度。（ト兩人の腰元立ちかゝるを、）

久方　アヽコレ沙汰ばししやるな。密かに〳〵。（ト久方こなし。）

ト唄にてよろしく此道具廻る。

本舞臺三間の間書院懸り高足の二重。見付大紋の襖。上手振よき形の立木。人登る事あり、此下に手桶に水を盛り、二重の上に澤田大内記、殿のこしらへ袴羽織にて褥の上に坐し。小姓三人近習にて刀を持ち控へゐる。平舞臺に政右衞門木太刀、林左衞門稽古槍を持ち、兩人試合の見得。よき所に五右衞門是を見てゐる。上下に侍高股立にて是を固めの見得。鳴物白囃子掛聲にてよろしく道具納まる。ト右鳴物にて兩人試合の立廻り程よく、床の淨瑠璃になる。

〽豫て期したる政右衞門、櫻井が槍先を遇ひかねて手の狂ひ、竹刀からりと卷落され、槍に脾腹をうんとばかり、がばと倒れて打伏に、面目なうこそ見えにけれ、槍掻込んで林左衞門。

ト立廻りよろしく林左衛門政右衛門が竹刀を打落し、其儘脇腹を突く。是にて政右衛門悶絶する。林左衛門立掛りキッとなり、

林左　ナントいづれも御覧じたか、人蔭で高言は誰でも申す、斯様に晴れの勝負になつては、生兵法が役に立つものではない、昨日も態々お断り申したは爰の事、まだ〳〵拙者が用捨致したればこそ斯様なもの、もそつと精を入れると、政右衛門が身體はばら〳〵と粉になつて飛んでしまふ、此やうな拔作をお取持なされた五右衛門殿、第一身分に關はるが、ナント今御覧じて御合點がまゐつたか、イヤハヤ天晴の御目利々〳〵。

〽嘲弄譏りも覺悟の前、御前に向ひ謹んで。

五右　不鍛練の政右衛門を推擧致せし不調法、恐入つたる申譯。

〽言ひも敢へず肩衣撥退け、差添に手をかくれば。

ト五衛右門切腹なさんと刀へ手をかける。大内記思入。

大内　ヤレ待て五右衛門、アレ留めよ。

小姓兩人　御意でござる。お止まりなされ。

〽近習の聲々はつとばかりに、少時控へてひれ伏せば。

大内　櫻井林左衛門、唐木政右衛門、兩人とも是へまゐれ。

林左
政右　ハ、ア。

〽はつと一度に答さへ、肩で風切る櫻井と、唐木は枯れし萎れ枝、見窄らしげに蹲る

ト此内五右衛門政右衛門を引起し心付け、兩人こなしあつて前へ直る。大内記思入あつて、

大内　いかに政右衛門、唯今の勝負、大内記是にて逐一見届けたり、其方が致し方神妙に思ふぞよ。

政右　ハツ。

〽はつとばかり夢見し心地、一座の不審。

大内　イヤサ五右衛門を始め、其方共は今の立合を何と見た。尤も勝負には政右衛門負なれども、始めより熟々見るに身構へ太刀捌きよく鍛へし誠の達人、林左衛門がなか〳〵及ぶ所に非ず、彼が心を察するに、新参の身を以て古参の者に恥辱を與へるは武士の本意に非ずと態と勝を讓りしは、劍術ばかりか心迄奥床し頼母しゝ、然しながら是まで遊藝を樂しみ、武藝に疎き大名

と言はれし大内記、劍術の批判覺束なしともいふべきが、弓馬の家に生れし身が、武藝を知らぬ樣あらんや、然れども弓を袋にし太刀を鞘に納むるは泰平の掟、今足利一統に治まつたる御代、靜謐の世に弦を引き箭尻を研ぎ、鎧よ弓よと犇めくは、上への恐れ家衰微の基、爰を慮つて茶の湯亂舞に日を暮らせども、心に捨てざる劍術武道よく存じてゐる、予が眼相違はあらじ、政右衞門を取持ちし五右衞門、家の爲に天晴忠義、誤りと思ふべからず、又林左衞門は怪我の勝をそれとも存ぜず、いかめしう罵りしは、我藝わが手に見えぬ不鍛錬千萬、知行呉れるは國の冗費、暇を遣はす、勝手に屋敷を立退きをらう。

林左　スリャ打勝ちし拙者めを。

大内　物數申すな、おのれが恥ぢや。

林左　畏つてござる。

〽案の外なる御上意に、林左衞門一句も上らず、鋭き殿の御賢慮に、恐れ入つたる一家中。

小姓
寄人　御前に叶はぬ林左衞門殿。

侍皆々　早や立ち召され。

林左　エ、忌々しい。

へせり立てられて、したゝかなめに大廣間、一人すご〳〵立ちて行く。

ト林左衛門こなしあつて、花道へはひる。

大内　重ねて政右衛門に言ふべきは、新参ながら其方が武藝の鍛錬感じ入り、二百石の加増申付ける、黒書院にて改めて今より一家中の師範となり、いよ〳〵忠義を勵んで呉れよ、後日大儀。

へと懇ろに仰せあり、しづ〳〵御座を御太刀持の、小姓を引連れ入り給ふ。

ト大内記思入あつて小姓兩人附いて奥へはひる　此時侍も上下へ別れ侍立かゝり。

へ近習の銘々さゞめき渡り。

侍○　さりとては政右衛門殿、怪しからぬ御首尾、目出たい〳〵。

侍×　我々もあやかる爲めお杯が頂きたい。

侍△　詰所に相待ちをりまする。

四人　さて〳〵お手柄々々。

ト言ひ捨てゝ、侍四人引續いてはひる。

ヘ挨拶悦び受ける程、ぐわらりと違ふ胸算用、二人は顔を見合すばかり、唯うつとりと手を組んで。

五右　政右衛門殿。

政右　五右衛門殿、是ではお暇は願はれぬ。

五右　さればサ、夜前のお願ひ承知の上は、貴殿のお暇出次第切腹なして、武士道を立てる覺悟の腹がひねになるわ。

こりヤまあ何と仕らう。

ヘこりやまアどうと腰も抜け、一度に溜息次の間の、襖もあらはに妻お谷、肩にかゝりし柴垣が、咽の懐劍突詰めし、母の自害に稚子の、おのちも後におろおろ目許、二人は驚き。

政右　ヤ、こりや女房共、柴垣様。

五右　何故の此生害。

柴垣　イヤナウ是は覺悟の上、唐木殿の頼もしい心底を聞く上は、此世に用のない身體、未來へ參つてお谷が勘當のお詫、今日の樣子を見屆けてと、此大廣間のお次まで、隱れ忍んで委細の譯思ひの外の立身でお殿の出ぬは是非もなし、此上ながら姉も妹も矢張りそなたの妻と思ひ、敵討には行かれずとも心の助太刀を蔭ながら、志津馬が力になつてたべ、皆樣、姉妹、さらば。

〽顏を見上げ見下ろして、盛りの梅と蕾の櫻、後に殘して息絶ゆる。

ト柴垣よろしく思入落入る。お谷おのち取付き、

お谷
おのち　モシ母樣、お心確かに、ヱ、モ事は切れたか。

〽これなうこれと取付いて、泣く聲人や菊の間より、大内記殿奥方久方御前立出で給ひ。

ト奥より久方御前以前の腰元に刀箱を持たせ出て來る。皆々是を見て座を改めこなし。

久方　改めて殿樣よりの御上意。

皆々　ハ、ア。（ト皆々平伏する。）

久方　政右衞門が今日の仕方、定めて樣子あるべしと、御覽ひなされし所心底に望みあり、態と我が

手練を隱し主を騙りし咎、殊に御座の次の間へ女子を引入れ、御殿を穢せし科によつて、お暇を遣はさるゝ、さりながら少時も扶持し置かれし家來、浪人の糧に盡きるも不便なれば、刀一腰下さるゝ、殿樣御祕藏の信國の名作、敵討の餞別とは仰言らねども、賣代なして世渡りの助けにせいとの御意、御慈悲有難う頂戴せい。

〽持たせし一振手づからに。

ト久方御前體心より刀箱を取つて政右衞門にやる。

政右　打あけ申さぬ心の底、しろし召されし御眼力、チエ、有難う頂戴仕る、是につけても相果てし志津馬が母、今少し生き延びてこの御上意を聞くならば、アヽ是非もない。

〽とゞめかねたる有難涙、奧方も御落涙。

久方　父にも母にも遲れたる、その稚子は手づから育つる三世の縁、殊更姉は只ならぬお腹を持ちし大事の身、假の親里五右衞門の屋敷で介抱如才なう、本望遂げて立歸り、元の主從對面を待つてゐるぞや。

〽とつおいつに仰せも重き亡骸は。

五右　宇佐美が屋敷で野邊送りせん。

ト此内下手へ石留武介出て窺ひゐて、

武介　お供に控へし此武介。（ト死骸を片寄せる。）

お谷　此世の名殘。（ト死骸へこなし。）

政右　御殿の名殘。

ヘ始めの妻と後の妻、産れぬ子にも惹かるれど。

返す〲も主君の。

ヘ御前を拜し立ち出づる。

ト政右衛門思入よろしく這入らうとする。此時奥より、

大内　ヤレ待て唐木政右衛門、退參叶はぬ、マ、控へい。

ト大小の合方になり、奥より大内記つまみ股立、大身の槍を持ちツカ〲と出て、二重眞中に立掛り、

五右　ヤ、御前樣。

大内　ヤア憎き政右衛門、おのれ心中に望みあつて、我れを騙ろ不忠の侍、其儘退參さすべきや。

大内記が成敗の槍、覺悟せよ。

ト言ひながら槍の鞘をはづし、政右衛門に突掛ける。政右衛門是非なく扇子を持つてあしらひ、ちつと留める。誂への合方になり、身體を固め扇子にて槍先を塞ぐ。是にて大内記隙なく槍を繰出されぬ思入。兩人椽へを取り、よき見得。

政右　是が一身無明の固め。（ト立廻りほぐす。）

大内　心得た。

ト槍を引いて手早く繰出すと、政右衛門扇子にて槍を平身に留める、大内記しごくに引かれぬ思入。

政右　神影の卽信。

大内　天晴。

ト又ほぐして大内記手重く突出す。政右衛門扇子を捨て平手に槍先をきつと留め、兩人氣味合よろしく。

政右　是が眞刀三箇の大事。（ト思入あつて、）神影の奥儀秘事口傳（ト槍を撥ねのけ。）篤と御傳授あられませう。

トすさつて思入。大内記槍を引きそばめ。

大内　ホヽウ流石は政右衛門、言はず語らず心の望み、それと察して傳授せし大内記が身の悦び、恩をあがなふ師へ賜物。

ト立文を抛る。五右衛門取つて政右衛門に渡す。政右衛門手早く開き見る、お谷も心ならず立寄つて見るこなし。

政右　こりや仇討の、

三人　御添翰。

大内　こりや。

ト押へるをチョンと木の頭。皆々窺ふ。

政右　有難うござりまする。

ト押頂く。双方よろしき仕組キザミにて、

ひやうし　幕

七幕目

三島宿棒鼻の場
沼津平作住家の場
千本松原の場

役名　呉服屋重兵衛、雲助平作、池添孫八、古着屋嘉助、道具屋市兵衛、下男安兵衛、平作娘およね。

本舞臺三間の間眞中に一里塚の大榎。上の方高札場、後ろ淺黄幕、すべて東海道三島宿棒鼻の體。こゝに馬士駕籠舁旅人を呼掛けてゐる。驛路入り馬士唄にて幕あく。と東西の花道より仕出し旅人の體にて二三人にて出て來り、

茶屋　これは皆さん、大分お早うございりまする。
旅〇　どうぞ茶を一つ下されし。
茶屋　ヘイ畏りました。
旅〇　ナント是から原泊りぢやア早からうぢやアねえか、吉原までやりませう。
旅×　どうしてさうは歩けぬわ、峠を越した足だから、原泊りでよい仕事。

旅△　なんでも家の綺麗な、たぼのある所へ泊りますべえ。

両人　大きにそれサ。

旅○　モシお茶屋の、原の宿ぢやア何家がよからうね。

茶屋　左様でござります、あの宿では幸手屋が一番でござります。

旅×　たぼはよいのがあるかえ。

茶屋　大ありでござります、しかも江戸者のよいのがをりまする。

旅△　其奴ア奇妙だ。

駕　モシ駕籠をやりませうかね。

馬士　馬はどうだね。

旅○　足を見て物を言ひねえ、又下りにしようよ。

駕　さう言はずと乗つてお呉んなせえ。

馬士　立場なしに安くやんべえ。

旅×　サア／＼そろ／＼出掛けよう。

旅△　ハイお喧しうござります。

茶屋　有難うございます、又お下りにお願ひ申します。」

皆々　サア行きませう。

ト旅人の後へ附きて駕籠屋馬士捨ゼリフにて上手へはひる。仕出し引違へはひる。

〽浮世渡りは様々に、草の種かや人目には、荷物もしやんと供廻り、泊りを急ぐ二人連れ。

ト床の浄瑠璃、驛路をかぶせ、花道より呉服屋重兵衛旅のなり、町人にて一本差菅笠を持ち、後より下男安兵衛供のなりにて柳行李油紙包みの雨　を擔ぎ附添ひ出て來り、重兵衛花道にて思入あつて、

重兵　是はしたり、大事の事を忘れて來た。コレ安兵衛、お主は大儀ながら俺が今寄つた所までちよつと一と走り行つて來て呉れ、エ、麁忽な事をした。」（ト言ひながら矢立を出し鼻紙へ手紙を書いて。）コレ急ぎの用だから早く行つてくれ。

安兵　ハイ〳〵畏りました。

重兵　ドレその荷は此方へ寄越しな。（ト安兵衛に手紙を渡し荷物を取り。）

安兵　モシお前さんが是を。

重兵　よし〳〵そろ〳〵と先へ行くから、早く行つて來て下つし、何處でも印に此笠を置くぜ。

安兵　畏りました。

重兵　エヽ餘計な事をしたな。

安兵　ドレ行つて參りませう。

〽足早にこそ急ぎ行く、稻叢蔭より。

ト安兵衛は引返してはひる。重兵衛は件の荷を擔ぎ、舞臺へ來る。此以前より稻叢の蔭に雲助平作息杖を持ち、頬冠りして屈みゐて此時前へ出て、

平作　モシ旦那樣、お泊りまで參りませう。

重兵　ナニ是ばかりの荷だ。

平作　どうぞ持たしてやつて下さりませ、今朝からまだ一文も錢の顏を見ませぬ、どうぞお慈悲にお持たせなされて下さりませ。

重兵　サア、さうでもあらうが、わしは今夜は夜に入つても吉原まで。

平作　サ、そこが慈悲でござりまする、一日儲けませねば其日が行きかねる貧乏な雲助ぢや、モシ旦那樣どうぞ持たして下さりませ。

〽頼みかけられ是非もなく。

重兵　サアそんなら吉原まで幾何で行くえ。

平作　エ、お前さんもまア、わしが方から頼んで持たして貰ふ荷物、なんぼなとよい程に下さりませ。

重兵　サア〳〵そんならやつて貰ひませう。

平作　ア、そんなら持たして下さりまするか、そりや有難うございます。ハイ〳〵、ヤツトまかせとナ。（ト平作荷を受取り、重さうに擔ぎ、）サアお出なされませ。

ト床の合方になり、重兵衛先に立ち思入。

重兵　エ、年寄りの廢しにすればよい事に。

平作　イエ〳〵空身より荷を持ちますと歩きようございます、ヤツトまかせとナ。

〽やつとまかせは聲ばかり、一足行つては立留り。（ト東の花道へかゝり。）

ア、今日は結構なお天氣でございまするな。

重兵　さうさナ、然しあの雲が惡いテ。

平作　左樣でございまする、ヤツトまかせとナ。

重兵　飛んだ噂話だ。

　　へ二足行つては息を吐き。

平作　モシ旦那様、向うの立場に泥鰌の名物がござりまする、上りませぬか。

重兵　ム、、泥鰌は隨分わしも好きだが、道中はどうも酒が惡いので困るテノ。

平作　左樣なら中汲はどうでござりまする、ハ、、、、。ヤツトまかせとナ。

　　へ旅する度の追從口、深田におりし白鷺の、餌食みをするに異らず、見るに氣の毒。

重兵　コレ親父殿、ちつと持つてやりませうか。

平作　イエ〳〵、ナンノお前樣に。

重兵　それでもどうか足許が。

平作　ナンノこりや私が足の癖でござります、ヤレ〳〵マア今日は旦那様のお蔭で內入がようござります。

重兵　さうして親父殿は幾歳になんなさるえ。

平作　ハイ七十に手が屆いてをりまする。（ト言ひながら、平作よろめく。）

重兵　ア、それ〳〵胡散な足取だぞえ。

平作　イエ〳〵お案じなされまするな、ナンの是しきの荷物、モシ、から見えても若い時には小角力の一番も取りました親父でござりまする、ヤツトまかせとナ。

〽いふ下道の爪先上り、木の根に躓きひよろ〳〵。

ト是迄の內間の歩みへかゝり、本花道へ來る。舞臺の道具は知らせなしに有體の遠見に廻る。文句の通り、花道にて平作躓き轉ぶ。重兵衞立寄り、

アイタヽヽヽ。

重兵　それ見た事か、それだによつて替つて遣らうといふのだ。（ト平作を介抱する。）

平作　イエ〳〵ちつとばかりでござります。

重兵　ナンノこれがちつとばかり。親指の爪をけかいたわ。オヽ强い事の。（ト平作病むこなし。重兵衞鼻紙を出し。）よい〳〵。わしが直ぐに治してやりませう、マア此紙で其處を押へるがよい。

ト紙を遣り、腰より印籠を出し藥をつけて紙にて卷いて、

〽用意の藥取り出だし、つけるとその儘。

平作　飛んでもねえ事したナ。サア〳〵これで直に治る。

重兵　イヤモ有難うござります、モウ私が致しまするでござりませう。

平作　ハテ扨遠慮はいらぬ事。（ト介抱してやる。）

重兵　ハイ〳〵、これはお慮外様でござりまする、有難うござりまする。

平作　ナントもう痛みは止つたであらうがの。ト言はれて平作心付き。）

重兵　ハイとんと物を言はれぬ程の痛みが、今のお藥を付けると其儘、痛みはさつぱり止りました、結構なお藥でござりまするナ。

平作　ナント奇妙であらう、もうそれで何ともない、イヤ危い事〳〵。

重兵　ハイ〳〵、もう千人力でござりまする、サア〳〵お出なされて。

平作　イヤ〳〵荷はわしが持つてやりませう。

重兵　何の滅相な、勿體ない、私が擔いで參りまする。

平作　イヤサ氣遣ひさつしやるな、駄賃は進ぜる、もう〳〵此方の足許が危くて〳〵、荷を持つ方がずつと氣樂な、サア〳〵話ながら行きませう。（ト荷を擔ぐ。）

重兵　デモ結構なお藥をお貰ひ申したさへあるに、お荷物まであなたに。

重兵　ハテ大事ない、サア〳〵行きませう。

平作　これはまあ冥加ない、モシ、杖を上げませうか。

重兵　これで大分よくなつた。サア行きませう。

〽平作は千鳥足、しんどが利になるこんにやくの、砂になるかと悲しさに、小腰屈めて。

モシ旦那、一肩やりませうかい。

重兵　イヤ〳〵これで大分歩きよいて。

平作　旦那はお達者でござりまするナ。（ト歩きながら、）

重兵　此方の足取を狂言師にでも見せたなら、亂れとか何とか名を附けて、傳授事になりさうな事だ。

兩人　ハ、、、、。

〽道の伽する笑ひ草、草踏分けて來る道も。

ト舞臺へ來る。段々に道具廻る。

〽菊の折枝持添へて、見合はす顔は。

ト下手より平作娘およね、世話なりの娘にて、菊の花を持ち出て來り、門口にて行逢ひ、

よね　父さんかいな。

平作　オヽおよね、何處へ行た。

よね　アイ、今宵のお逮夜に佛樣へ上げようと思うて、彼處まで行た序、お母さんの墓に咲いた此花貰うて來たわいな。

平作　オヽそりやよかつた、イヤ佛樣の序に、今日は結構な旦那樣のお供して、荷は持たずに、大抵お世話になつた事ぢやない、ようお禮申して呉れ。

よね　アイ／＼。そりやまああなた、有難うござりますゑ、幸ひ彼處が私の家、見苦しくともお茶一つお上りなされませ。

重兵　アイ／＼。（トおよねを見る事あつて）親父殿の娘御かえ。

平作　ハイ、家內はあれと私ばかりでござります、穢い家ではござりまするが、大事なくばお寄りなされて、休んでお出なされませ。

重兵　いかさま後から供の來る間、足を休めて行きませう。

平作　左樣なさりませ、サア／＼娘、先へ行け。

よね　お靜かにお出なされませ。

　　〽とつかはとして急ぎ行く。（トこれより捨ぜリフあつて）

重兵　差向ひの。

平作　左樣でござります。

重兵　〆た、先へ行くぜ。

　　ト重兵衞荷を擔ぎ逸散に上手へはひる。平作殘り四邊を見てびつくり、扨はと思入あつて、

平作　客さん、お早いおみ足なア。

　　〽伴ひ入るや西日影。

　　ト送りになり、麥搗唄。鼻をかむ思入よろしく上へ行く、送りになり道具廻る。

　　本舞臺三間の間常足の貧家、上の方反故張障子。下手に竈場。釜をかけ、正面鼠壁臺所道具の書起し。古き野良疊。いつもの所門口誂への通りに道具納まる。ト下手より重兵衞を先に平作附いて出て來り、重兵衞はかまはず花道へ行くを呼びかけ、

平作　モシ〳〵爰が家でござります。

重兵　何だ戀か、おらア納屋かと思つた。
よね　あなたようまア、サア／＼お草鞋をお取りなされませ。
重兵　笠は何處にしよう。
　へ門の柱に印の笠。（トいろ／＼セリフあつて、）
　へ親父が馳走娘が愛、前垂の藍薄くとも。
よね　マアお茶一つ。
　へと差出す。（ト麥搗唄。）
重兵　アイ／＼。
よね　折惡う湯が沸かず、水でなとおみ足を。
平作　オヽさうせい／＼。
　ト重兵衛此内およねへ見惚れるこなし。
重兵　イヤ／＼構はつしやるな／＼、後の宿で草鞋を替へたばかりだから、足は汚れやしませぬ。
よね　それはようござりまする。

重兵　扨親父殿、お前の娘御はいゝ縹緻だの、不躾ながら此家に置くのは深山の櫻、何處ぞの庭へ植ゑて見たいわい。（トおよね羞かしきこなし、）

平作　ハイ何方も左樣に仰言つてゞございます、自慢で作つて置きましたれども、近頃は手入が惡さに、いかう田地が荒れました、何が身たりにも介意はず賃仕事、婆めは去年の冬死にまして、親一人子一人、何が貧乏を苦にもせず、それは孝行にして呉れまする、それで私が年寄つての雲助も、せめて三文なと肩休めと、餘りあれが可憐らしさでございまする。

よね　コレ父さん、始めてのお方にそのやうな事までを。

平作　ほんにさうぢやな。

三人　ハヽヽヽヽ。

重兵　イヤとんと隱しがのない親父殿。

平作　時におよね、今日は大きな怪我をしてナ、これ〳〵見やれ、爪が離れてあるぞや。

ト平作足の怪我を見せる。およね見て、

よね　ほんにまあ、こりや大抵な事ぢやござんせぬ、嘸かし痛いでござんせう。

平作　サア〳〵世には希代な藥もあればあるものぢや。あなた樣に頂いた妙藥で、附けると其儘痛い

のが忘れたやうに治つた。

よね　ソリヤあなたのお藥で。

平作　モシあなた、そのまアお印籠のお藥は何といふ妙藥でござりまする。

重兵　サアこれはチト大事の藥で、先づ第一が金瘡は其場で治る妙藥ゆゑ、武家方で尋ねられるが、さる方の秘法ゆゑ、なか〳〵金銀づくでは手に入らぬ大切な妙藥なれど、差掛つたのが此方の難儀ゆゑ、イヤモおれが連立つてゐたのが親父殿の仕合。

平作　イヤモ仕合どころぢやござりませぬ、あのやうに覿面に治るものぢやござりませぬ。

ト　およね此話を聞いて思入あつて、

よね　そんならあなたの、アノお印籠のお藥で。

平作　さいなア。（トおよね氣をかへ）

よね　モシ〳〵、そりやお前仕合ぐらゐの事ぢやござんせぬ、あなたがお出なさつたので、父さんの爲には命の親、これが一日や二日でお禮が言ひ盡される事ぢやないぞえ、モシあなた、有難う存じまする、ならう事なら今宵は爰に、穢苦しうはござりますれど、どうか御逗留なされて。

平作　ア、何言ふぞい、こんな家に泊めまして、肴といや干物一枚ありはせず、虱より馳走はない

重兵　不自由な所へまア。（ト重兵衞思入あつて、）

平作　イヤ不自由はしつけてゐるゆゑ、そんな事は介意はぬが、娘御の愛想のよさに、禮を言はれる心はないが、今日は箱根を越したので、足も痛むやうな。大事なくばいつそ泊めて貰はうかい。

重兵　イエおみ足の痛みまするに、我慢してお歩きなさるは惡うございます、このやうな所にお泊りなさるも、亦話の種でございませうか。

よね　そんなら泊めて下さるか。

重兵　お枕を上げませうか。

平作　其奴ア有難い。

〽目鞘の抜けし商人も、上手な娘の饗應に、ころりとなればお枕と、油氣のない親身の馳走、これも一樹の笠宿り。

トこの内重兵衞手枕して寢轉ぶ、およね枕を出してあてがふ。平作思入。てんつゝになる。花道より以前の下男安兵衞足早に出て來り、門口の笠を見て、

安兵　オヽあるわ〳〵、何でもあの笠が印に違ひない。（ト門口へ來て、）オヽ旦那、爰にお出でござり

ましたか、遠目にちらと此笠が見えましたから、慥かにそれと急いで參りました、サア參りませう、お立ちなされませ。

ト重兵衞起上り、

重兵　オヽ安兵衞か、御苦勞々々、とんだ早かつた、コレおれに介意はず、お主はその荷物を持つて吉原の鍵屋へ行つて宿を取らつし。

安兵　ハイ、さうしてあなたは。

重兵　おれはちつと足が痛むから、無理に爰へ泊めて貰つた。

安兵　モシ、こんな穢い家へ。

重兵　コレサ〳〵何を言ふのだ。（ト安兵衞心付き、氣の毒な思入。）

安兵　モシおみ足が痛いのなら、駕籠でも召しまして。

重兵　ハテ役にも立たねえ事を差圖する男だ、駕籠に乘るをお主に敎はるものか。

安兵　デモ今夜の天氣は知れませぬぜ、ちつとも早く先へお出なされて。

重兵　それをお主に言はれるものか、よく此男は要らざる事を。

安兵　ハイ〳〵、左樣ならお先へ參りませうか、私は其方がよからうと存じまして。

重兵　エ、まだ何か言つてゐるのか、早く行かツしと言ふに。

安兵　ハイ〳〵、そんなら明朝鍵屋でお待ち申しまする、何だか薩張りわからねえ。（ト荷を出す。）

よね　マアお茶でも上つてお出なされませ。

安兵　イヤもう直に參りませう。

平作　そりや御苦勞でござりまする。

　　ト　やはりてんつゝになり、安兵衞荷を擔ぎ、

安兵　なんぼ所が東海道でも、島田を金谷で金轡、今夜泊つて朝興津で、てんてこ舞坂やらかしても彼方は吉田で四日市、此方は先へ白須賀佛、心も關の泣く子と地藏、アヽ困つたものぢやなア。

　　〽雨具の用意は吉原の、鍵屋を指して急ぎ行く。

　　ト　いろ〳〵捨ゼリフにて花道へはひる。平作思入あつて、

平作　エヽ御家來樣も泊めませうものを、何を言ふにも家が廣いので、ハヽヽヽ。

　　ト　此内重兵衞錢を三百文出して、

重兵　サア親父殿、これは今日のお骨折よ。（ト平作へやる。）

平作　滅相な、宿賃は要りませぬ。

重兵　ハテサ宿賃よりは今日の駄賃を。

平作　デモ荷も持たいで此樣に、マア〳〵左樣なら何や彼や二三十頂きませうか。

ト錢を緡より拔き取る。重兵衛留めて、

重兵　そんな事を言はずとも、マア〳〵取つて置きなさいナ。

平作　それぢやとてお錢をお貰ひ申したり、又其上に。

重兵　ハテマア寸志だ、取つて置かつしやい。

平作　ハイ〳〵左樣なら、頂きますでござりませう。

よね　モシ父さん、あなたに何ぞ拵へて御膳をおあげ申さうかいナ。

平作　オヽさうせい、然し此方が喰ふ麥飯はあげられまい、米の飯を炊いて菜のおしたし物でナ。

重兵　コレ〳〵、そんな世話をさつしやるな、その麥飯が珍しくてよからう。

平作　アノ麥飯を上りますか、そんなら芋汁でも暖めて、コレおよね　お椀を綺麗にして膳立せいや。

トいひながら、平作鍋の下へ松葉を燻べて焚付ける。

よね　アイ〳〵、デモあんまりお粗末ぢやによつて、何ぞおかずを。

平作　ハテ、そりやほんの無いもの食ふぢや、マ、そんな事言はずと膳立せい、モウ汁は煖まつたか、御膳を上げませう。

よね　アイ〳〵。（トよろしく日光膳へ茶碗汁碗など並べ、）誠にお恥しい品なれども、たんとお上りなされて下さりませ。

重兵　アイ〳〵。（ト膳を引寄せ箸を取り思入あつて、）ハヽア、汁は玉味噌だの。

ト顔を横にする。

よね　チトあなた方には。

重兵　イヤ玉味噌大好きサ。

平作　それでは旦那様も麥飯をあがるとようでござります、全體折々は麥飯を上りなさりますがお藥でござりまする、アハヽヽヽ。およね、精出して替へてお上げ申せ。

重兵　すんでの事、麥飯と心中しようとした。

ト重兵衞飯を喰ふ事、およね平作色々捨ゼリフにて給仕をする。よき程にてんつゝになり、花道より古着屋嘉助、足早に出て來り、

嘉助　平作殿は家にかな、古着屋の嘉助が來ました。（ト内へはひる。）

平作　ほんに古手屋の嘉助様、ようござりました。

嘉助　イヤ餘りよくも來ません、コレ平作殿、お娘が着てゐたあの着物、一〆寄越して後は明日の明後日のと。

よね　アヽモシ〳〵、お客もお出でござりますれば、どうぞ靜かに仰言つて。

嘉助　イヤ靜かに言ひますまい、さうべん〳〵と釣られては此方の顋が干上ります、干上りますわいの。（ト喚く、此内平作およね重兵衛へ氣の毒のこなし。）

平作　サア〳〵御尤でござります、あなたには段々の義理もござりますれば、假令家財を賣つてなりと御損は掛けませぬ程に。

嘉助　サア〳〵そんなら今賣つて寄越さつしやれ。

平作
よね　そこをどうぞ今少々。

トいろ〳〵詫びる。重兵衛此内氣の毒なる思入。飯をまづさうに喰つてゐる。てんつゝになり、花道より道具屋市兵衛出て來り、

市兵　平作殿はお家か。

平作　ホヽオ、これは市兵衛さん、御苦勞にようこそ〳〵。

市兵　それは此方も商賣づく、昨日此方の言はつしやるには、急な事で錢三貫、道具、諸式を踏みまして、取つて呉れいと言はれたが、マア代物を見てからと手附にその時三百進ぜて、殘りの錢を爰へ持つて來たのだ、駄賃を出しては合はぬ仕事、價が出來たらこなさん擔ぎ込んで下さるか。

平作　そりやつい、私が運びますするのでござりませう。

嘉助　コレ〳〵、そんなら家財を賣つてといふ、其諸道具は市兵衞さんに。

市兵　コ、コリヤ古着屋の嘉助さん、御免なさい、時に道具といふはから見渡した通りの、こりやア聞いたとは違い違ひ、マア第一に放しにくいと言はしやつたゆゑ、見込に思つた佛壇は、こりやア三百ばかりがものしかない。

嘉助　コレ〳〵、まだしもと思ふ諸道具を市兵衞さんに渡して、おれが方はどうして片を着ける心だ。

平作　ハイ、あなたへも内入を上げたし、何や彼やでござりまする。

三人　始り〳〵。

市兵　マア〳〵それで些と一つ置いて見よう。（ト懐中より十露盤を出して、）土竈に鍋釜かけて先づ二百五十文と入れて、古疊六疊で三百よ、鼠入らずの膳棚が百五十文流しは腐つて役に立たず、破れ障子二枚で二十八文、縁のとれた角行燈が八文、先づ概略こんなものかいの、家ぐるみ壞し

て取つた所が一貫足らず、といつて手附の三百は、飛んでしまつてもうあるまい。

平作　左樣でござります。

市兵　とんだ口へ引掛つた、仕方がない、三百の踏みだ、疊でも持つていかう。コレ若いお人、少し退いて下さい。

ト重兵衞のゐる疊を上げにかゝる。重兵衞膺をつぶし、膳を持つて立ちかゝる。およね見かねて留める。

よね　モシマア待つて下さりませ。父さん、お前のお錢を此お方へちやつと上げてしまはんせいなア。（ト平作心付き、）

平作　モシ市兵衞さん、錢が出來ずば是非がござりませぬ。三百の手附お返し申します程に、歸らしやつて下さりませ。（ト最前の錢を出す。）

嘉助　ドツコイ此錢はおれが内入サ、後の四百六十文はどうして吳れる。

ト作の錢を嘉助取つて懷へ入れる。市兵衞思入あつて、

市兵　手早い人だぞ、これ平作殿、今の錢はあの通りだ、サアおれが方の三百はどうして吳れる。

ト平作思入あつて、

嘉助　後の出來るまで賣つて、わんぼう引剝がうか。

平作　サ、お二人とも、さう仰言るは御尤。お道理でござりまするが、どうぞ今夜の所をば。

市兵　イヤならぬわ〳〵、此方は疊で算用するわ。

嘉助　サア〳〵お娘、脫いで貰ひませう〳〵。

へ着物脫がせる疊をばた〳〵。

ト嘉助疊をあげにかゝる。重に衞膳を持つて此方へ來る。市兵衞およねの着物を脫がせる。ト平作是を押へて、

平作　マア〳〵待つて下さりませ、お慈悲でござりまする、お情でござりまする。

よね　どうぞ今宵は聞分けて。

平作 よね　翌の朝まで。

市兵 嘉助　ならぬ〳〵。（ト此時家主來り、）

家主　コレ平作殿、此間から度々呼びに寄越しても、ついぞ一度來もせいで、コレ聞かつしやれ、何ケ月家賃が滯つてゐると思はつしやる、モウ勘辨がならぬ、とつとゝあけて立たつしやれ。

平作　コレ大家様、御覧の通りの此仕末、どうぞ偏に。

家主　イヤならぬ〳〵、とつとゝあけねば此大家の役目が立たぬわ。

〽親子が詫びる氣の毒より、ひよんな所へ掛合ひ。

ト重兵衛見かねて中へはひり、

重兵　コレ〳〵三人の衆、わしは今夜爰へ泊つた者ぢやが、悪い所へ來合はせて、まあ煤拂ひに茶屋へ行つたと同じ事、どうせ埃はかゝりうちだ、手附も何も返しませう、疊は其儘、古着屋殿もサアこれを取らつしやい。（ト二朱銀を出して渡す、）

平作
よね　ア、モシ、それでは。

重兵　ハテ、よいわいの。（ト嘉助金を受取り家主に渡す。）

家主　これではお釣がまゐります。

重兵　ナニ釣には及ばぬ、取つて置くがいゝやなア。

嘉助　モシ大家さん、折角だからお貰ひ申して置きなさいナ。

市兵　御用が濟んだら、歸りに何處ぞで一口やりませうナ。

嘉助　よく飲みたがる人だなア。

家主　サア〳〵皆さん、お暇と致しませう。
嘉助　これはお客様。
三人　有難うござります。

ト三人出かけるを重兵衛こなしあつて、

重兵　ア、申し〳〵、此様に道具を出し散らされては後が困る、元の通り片附けて行つて貰ひたいものだ。
家主　成程これはあやまりました。そんなら二人の衆、今のお釣を駄賃にして。
嘉助
市兵　サア〳〵掃除の始まり〳〵。（トしころの合方になり、掃除する事あつて。）
三人　これでよろしうござりますか。
重兵　大きに御苦労々々。
市兵　コレ平作殿、貧乏神のゐないやう、掃除をしましたぞ。
家主　爰の家の疊のやうに。
嘉助　藁の出ぬ内。
三人　お暇致しませう。（ト捨ゼリフあつて、三人花道揚幕へはひる。）

ヘ親子一度に手を合せ。

ト平作およねこなしあつて、

よね　ほんにまあ、ひよんな所へお泊りなされて、恥しい事お聞かせ申し。

平作　其上に有難いやら面目ないやら、嬉しいと術ない涙がごつちやになつて、お禮の申しやうもござりませぬ。

よね　有難う存じまする。

ヘお禮の詞も出ませぬと、破れ疊に食ひつけば。

重兵　これはどうだ、埒もない、今のはあれは今夜の宿賃、ナンノそれをそのやうに、高の知れたあの物まで、賣代なさうとは、よく／＼何ぞ差詰つた難儀な事でごんせう。

よね　サア是にはどうも申されませぬ譯ある事で、それ故に。

平作　イヤモウ一生あなたの御恩は忘れは致しませぬ、有難う存じまする。

重兵　親父殿、ちつと話があるが、ナント聞いては下さるまいか。

平作　そりやモウあなたの仰言る事、何なりと承りまするでござりませう。

重兵　外でもない此娘御の事サ。（トおよねへ思入。）

平作　ヘエ、、およねめがどうぞ致しましたかな。

重兵　サアナント物は相談、わしが所へ下さらぬか。

よね　エ。（ト不思議なる思入。佛壇の花立を持ち、流しの方へ來る。）

平作　そりや奉公にでも上げますのでござりますかナ。

重兵　イヤ／＼まだわしは獨身者、丁度幸ひ悧口な娘御、商人の女房には極上々の羽二重地、得心して下さる氣なら仕拵へは此方から、爰に少々持合せ是を置いて行きまする、何も緣づく、ナント女房には下されぬかの。

ト此内およね持つて來た菊の花を花立へ挿してゐる。

よね　モシ父さん、あの方早う去なして下さんせいな、貧しう暮せばとて、あたなめ過ぎた阿呆らしい人さんぢやわいなア。

〽うつて變りし腹立顏。

平作　サア／＼よいわい、何をそのやうに腹立てる事があつて。ハ、、、、イヤモシ旦那樣、見る影もない雲助の娘に、そのやうに仰言つて下さりまするは有難うござりまするが、何が扨此よ

ねも人様の女房というてはどうも上げられませぬ、ちと譯がござりまして。

重兵　そりやどう言ふ譯で。

平作　ハイ定まつた男がござりまする、然も歴々、様子あつて今は御流浪、そのお人から預かつてをりますれば、主のあるあれが身體、それ故にどうも女房というては上げられませぬ。其譯はハイ此通りでござりまする。

重兵　ハ丶アそんな事とはつい知らずに。コレ〳〵今のはほんの座興。ア丶氣の毒な、眞平々々〳〵、コレ娘御、腹が立つたら了簡して下さい〳〵。

ト　およね思入あつて、

平作　ナンノお前様、娘が何で腹を立てまするもので、アハ丶丶丶。丶イヤ何事も私が證人、マアそんな事御言らずと、お横におなりなされませ、お布團を敷いて上げませい、コリヤヤイ、何を俯向いてゐる、今あなたの御言つた事は御座興に、汝を嬲らしやつたのぢやわい。

よね　そんなら今のは。へ丶丶丶丶、ほんに在所者をお嬲りなさるを、さうとは知らず、誠の事ぢやとホ丶丶丶丶、モシあなた御免なされて下さりませ。

平作　ハ丶丶丶丶。

よね　ホヽヽヽ。

重兵　へヽヽヽ。

　　と笑ひに心打解ける。

重兵　安兵衛にあゝは言つてやつたが、今夜爰へ泊つては、明日の都合が。イヤモシわしは直ぐに立ちませう。

平作　アヽモシ〳〵お前様も泊らうと仰言つて、さうしてまあ日暮れて餘程になります、夜道は危うございます、よしになされませ〳〵。

重兵　何サ、外と違うて東海道は何時歩いたとて。

平作　ハテ扨なんぼ東海道でも、夜に入つては物騒でございます、是非今夜はお泊りなされて。

重兵　サアさうだが、そんな事を言出して、今では泊ると此方さん方が。

平作　イエ〳〵その爲に親の私が附いてをります、あなたに麁相のないやう、サ、布團敷いてあげます。

よね　あなたのお裾へお前のどんざを。

　　ト上の方へ色紙の當りし布團を敷き、上にどんざを置いて、

平作　話に紛れてすつぽりと日の暮れてあろに氣が付かなんだ、お月夜で行燈は要らず、御燈を伽にして辻堂の雨宿り、お客様もうお休み、足延ばすと壁に支へろ奥座敷、ゆるり緒かまつて御寢なりませ、私は此臺所、コリヤ娘、其方へ寢いよ、旦那様はお堅いけれど、時の機では主のある池へ踏込みなそりよも知れぬ、用心には網を張れぢや、今夜はおれが股引を穿いて寢や、穢けれどあなたには。

〽わしがどんさを裾になと追風持て來る鐘の聲、いとしん〳〵と聞え來る。

ト此間重兵衛平作およねよろしく寢る事あつて、

〽お米は一人物思ひ、心にかゝる夫の病氣、我手で介抱する事も、浮世の義理に隔てられ、秋の螢の消え殘る、佛壇の灯も細々と嵐にふつと氣の付く娘。

よね　奇妙に治つた父さんのあの疵。今でも敵の手懸りが知れてからあの病氣では思ひも寄らず。ムム。（トいろ〳〵思入ある。是にて差金の螢飛び來て、行燈の灯を消す。）

〽灯の消えたるは天の與へ。

ム、。

〽夫の爲と拔足差足探り寄り、印籠取上げ立退く足、躓く音に目覺ます重兵衞、思はず高聲何者と、裾を捉へて引留めれば、わつと泣入る娘の聲、平作もびつくりし、起上つても眞暗がり。

平作　およね〳〵。

〽言ひつゝ捜す竈の埋み火。（ト平作行燈へ灯を點す事あつて）

〽附木に移し顏見合せ。（トおよねの顏を見て。）

重兵　ヤ、お主は。

よね　とゝさん。（ト重兵衞もおよねの顏を見てびつくり。）

平作　旦那さま。

重兵　親父どん。

平作　モシ旦那樣、何も紛失物はござりませぬか。

重兵　何も紛失はないが、印籠が見えませぬ。

平作　ナニ印籠がござりませぬ。サア持つてゐるなら爰へ出せ〳〵。（トおよねの持つてゐる印籠を取つて、）あなたの仰言るは、是でござりますか。

ト重兵衛に印籠を出す。重兵衛取つて見て、

重兵　オヽ是ぢや〳〵。

平作　アノそれでござりますか。（ト思入あつて平作およねを引据ゑ、）マアおのれはなア。（ト合方。）何故に此有様、エヽ何の因果でこのやうな情ない氣になりをつたぞやい、コリヤヤイ、此親はナ、其日暮しの者ぢやけれど、人様の物をきなか盗まうといふ氣は出さぬわやい、エヽ親の顔迄汚しをつたなア。

〽わつとばかりに泣きゐたる、重兵衛は氣の毒顔。

重兵　金銀を取つたといふ譯ではなし、是には何ぞ譯があらう、其樣子はマアどうでござる。

〽問はれておよねは顔を上げ。

よね　恥しながらお聞きなされて下さりませ、私も元は流れの身、樣子あつて言交はせし夫の名は申されませぬが、故ゆゑに騒動起り、其場へ立合ひ手疵を負ひ。

〽一旦本復あつたれど、此頃は頻りに痛みいろ〳〵介抱盡せども驗なく、立寄る方も旅の空。

此近所で養生、長しい間に路銀も盡き、其貢ぎに身の廻り。

〽櫛笄まで賣拂ひ、悲しい銀の才覺も、男の病が治したさ。

先程のお話に、金銀づくではないとの噂、燈火の消えしより。

〽あの妙藥をどうがなと、思ひ付きしが身の因果、どうぞお慈悲にコレ申し。

今宵の事は此場限り。

〽お年寄られしお前まで、苦勞をかけし不孝の罪。

今日や死なうか。

〽明日の夜は、我が身の瀬川に身を投げてと、思ひし事は幾度か。

死んだ後でもお前の歎きと、一日暮しに日を送る、はかなき私が心の內、不便なりと思召し、どうぞお慈悲に御了簡を。

〽東育ちの張も抜け、戀の意氣地に身を碎く、心ぞ思ひやられけり、歎きの端

々つく／＼と聞取る重兵衛。

重兵　コレ姉御、こなさんは江戸の吉原で、松葉屋の瀬川とは言はなんだか。

よね　ハイ、デモよう御存じでござりますな。

重兵　アノ瀬川殿、そなたの夫の手疵を治す薬欲しいは尤、進ぜたいものなれども、是は人の預り物、此薬の事は思切らしやれ。時に親父どん、此娘御より外にもう子供はないかの。

平作　ハイこのよねが上に男の子が一人あつたけれど、二歳の年に養子にやりましたが、又其親の手を離れ、今は鎌倉の御屋敷へお出入、よい商人になつてゐるとの噂、それを聞いてとんと思切りました。

重兵　そりや又何故に。

平作　ハテ、一旦人に遣つたれば捨てたも同然、わが子ながらも義理あるもの、今その悴が身上がよいとて、尋ねて行て箸片し貰うては人間の道が済みませぬ、今出逢うても赤の他人、子といふは此娘ばかりでござりまする。

重兵　ム、それも尤、シテ其兄貴は今何歳ぐらゐぢやの。

平作　ハイ、エ、かうツ、丁度今年廿八、鎌倉八幡宮の氏地に産れ、母の名はとよと書附け、守り袋

に入れてやりましたが、其後此およねを産んで母も相果て、則ち今日が命日で、孝行な娘が水手向花の立方、御覧じやつて下さりませ。

〽何心なき話の合紋、一々胸にこたゆる重兵衛、思ひ合せば覺えある、扨は産みの親父様、血を分けた我妹が貧苦の有様、有合せた路用の金、なま中親子と名乗つては受けぬ氣質を何とがな金の遣りたい屈托に胸を痛めて。

ト此内重兵衛思入あつて、

重兵　そんなら母者は疾に死なれたのかえ。

平作　ハイ左様でござります。

重兵　便り少ない事ぢやなう。

平作　御推量なされて下さりませ。

重兵　オヽもう寢られもしまい、そろ〳〵と出掛けませう。見かけて此方さんに頼みがある、石塔一つ寄進がしたい。

平作　ハイ〳〵心易い事でござります、マアよろしいではござりませぬか。

よね　詰らぬ事をお聞かせ申し。

重兵　笠を取つて下され、提灯と草鞋はそこらにないかの。

ト色々平作およねに用を頼む内、金を出し、硯の蓋を出し、書附を書く事。印籠を布團の下へ入れる。

トセリフの内およね笠を持ち、平作提灯を點けて出す事。重兵衛支度をして提灯と笠とを受取つて、

重兵　コレ親父どん、わしが行つた其後で、あの布團をよう拂つて、そして叉火の用心をようさつしやれや。

平作　ハイ畏まりましてござりまする。

重兵　もう夜明けにも間もあるまい。隨分無事で親父どん、娘御いかい苦勞を、さらば。

〽とばかりに、心に一物荷物は先へ、道を早めて急ぎ行く。

トかすめし時の鐘にて重兵衛提灯を持ち花道へはひる。

平作　お靜かにお出なされませえ。

〽跡に親子は顔見合せ。

よね　父さん、今鳴るのは七つでござんせう、ちつとお休みなさんせいなア。

平作　いかさま、とろ〳〵とやらうわい、布團を此方へ敷直して、わが身から寢や〳〵。

よね　アイ〳〵。

ト布團を此方へ遣らうとする。下より印籠と打がへ出る。

平作　此印籠は今の旦那の、こりや忘れてござつたか。（ト印籠を取上げる。）

よね　爰にも打がへ。（トおよね取上げる。）

平作　ドレ。（ト印籠を下に置き、打がへを取つて思入、およね印籠を見て思入あつて、）

よね　此印籠は、どうやら覺えの。

〽それかこれかとよく〳〵詠め。

こりや澤井股五郎が常に持ちし覺えの印籠。

平作　金包みに。何ぢや、金子三十兩石塔料、此書附は、ム、。

〽はて不思議なと、平作もよく見れば。

鎌倉八幡宮の氏地の産れ、母の名は豐。（ト思入あつて、）こりや我子に付けて送つた書附。

よね　そんなら最前からの親切は。

平作　それとは言はいで、此金を、貢いで呉れた石塔代。
よね　そんなら今のお方は、私が爲には兄さんかいなア。
平作　オ、我子の平三であつたかいやい。
よね　父さん。
平作　娘。

　へ不思議の縁と親と子は、少時呆れてゐたりしが、お米は印籠手に持つて、裾端折つて駈け出す。

よね　さうぢや。
平作　コリヤ待て、何處へ行くぞ。
よね　何處へとは此印籠を持つてゐる兄さんの後追駈けて、股五郎の在所を尋ね、志津馬樣へ。
平作　サ、尤ぢや、が、そりやわれでは行かぬ、年は寄つてもおれが行く、親の効驗で言はして見せう。
よね　スリヤ父さんが。

平作　汝も續いて後から來い、敵の在所聞くまでは大事の所、木蔭に忍んで立聞せい、ぢやがどのやうな事があつても必ず出るなよ。

よね　アイ〳〵。（ト平作印籠と打がへを持つて、）

平作　本街道は廻り道、三枚橋の濱づたひ、勝手覺えし拔道を。

よね　怪我せぬやう。

平作　なんのすぞい。

〽走り行く、後にお米は身拵へ、續いて出んとする所へ。

トおよね帶を締め直し、行かうとする所へ、禪の勤めにて、下手より池添孫八、尻搦げ一本差にて走り出て來り、門口にて行逢ひ。

孫八　瀨川樣か。

よね　オヽ、孫八殿、よい所へござんした、今夜泊つた客人で敵の手筋が知れさうな、詮議の爲に吉原まで父さんが行かしやんした。

孫八　チエヽ、忝い。

よね　吉原まではよも行くまい。

孫八　何かの事は道にて聞かん。

よね　孫八殿。

孫八　瀬川様、サ、ござりませ。

〽瀬川につゞく池添も、足にまかせて。

ト三重になり、両人花道揚幕へはひると、寺鐘になり、此道具

ぶんまはす

本舞臺一面の松並木、所々に稲叢。後ろ黒幕。すべて千本松原の體。向う黒幕。時の鐘にて道具納る。

〽慕ひ行く、實に人ごゝろ様々に、町人なれど重兵衛は、武士も及ばぬ丈夫の魂、千本松に差かゝる。

ト時の鐘風の音合方にて重兵衛出て來る。後より、

平作　オ、イ〳〵。

〽おゝい〳〵と聲を限り、杖を力に息すた〳〵。

ト呼びながら平作走り出て來り、

申し〳〵旦那樣、お早いお足でござります。（ト重兵衛見返り、立留り、）

重兵　ム、、今呼んだのは此方か、さうしてまア消魂しい。何の用で。

平作　イヤ外の事でもござりませぬ、今のお金を戻しに參りました。

重兵　ヤ。

平作　サ、態と忘れてござりました大枚の金と印籠、その日暮しの雲助に下さるも譯があらう、又受けまするにも譯があるぢや、けれども此金をお前から受けましては、さる人が立たぬ義理がござりまする、それでこりやお返し申しに參りました。（ト作の金と印籠とを其處へ出し、）

重兵　サア此方にもちと譯があつて、忘れて置いた金と印籠、それを其方が。

平作　イエ〳〵、なか〳〵無には致しませぬ、印籠は頂戴致しまするが、此金子はお返し申します、その代りに、チトあなたにお賴みがござりまする、お聞きなされて下されませ。

重兵　賴まれまいものでもないが。

〽と夕闇の夜の聲しるべ、後に窺ふ池添瀨川。

トド手よりおよね篠八出て來り、思入あつて稻叢の蔭に窺ふ。重兵衛提灯を松の枝に引懸けて、

親父殿、シテ賴みの其樣子は、

平作　ハイ仰言つて下さりませ。

重兵　そりや何を。（ト平作印籠を重兵衛に見せて、）

平作　此印籠の持主の所在をば。

重兵　エ。（ト思入あつて、）

平作　承りたうござります。（ト雨車、合方、）サ、是を知りたいばつかりに、樣々流浪致すお人、それ故娘も廓を出ての憂き艱難、是が知れると本望成就、娘につれて私まで、もう此上の悦びはござりませぬ、二十か三十のはした錢で露命をつなぐ此親父が、死ぬるまで安樂に暮せる程の三十兩、その金銀に替へてのお頼み、七十になつて雲助が、肩に叶はぬ重荷を持つ。（ト雨車、）

〽それはまだ休みもする、子の可愛といふ重荷は。

寢た。

〽間も休まぬ。

一生の苦痛を助ける藥の名、お前樣の親御樣があらば、子ゆゑには愚痴になるものぢやと。

〽思召しやられて。

此願ひをどうぞ叶へて下さりませ。コレ申し旦那樣。

〽血筋と義理の道分石、分けて血の緒の三界に、踏迷ふこそ道理なれ、親の心を察しやり。

ト重兵衛思入あつてほろりとして、

重兵　ム、さうあらう、心底至極尤ぢやが、是ばつかりはどうも言はれぬ、といふ譯は、しがねえわしは商人だが上下僅か六七人、其暮らしをば安樂に世過ぎの出來るもお出入りの、お屋敷方の皆お蔭、其恩のあるお方から頼まれた男づく、此印籠も其筋からわしが貰つた品なれど、そこが切ない恩と義理、其方も人が大切なら、此方も亦大切、よしんば假令又在所を聞いても、命がなうては本望は遂げられまい、其方の家に落してあつた主のない印籠の、その妙藥で疳養生、ナ。（ト思入あつて、）サ達者になつた其上では、望みの叶ふ時節もあらう、親父殿、ナントさうではあるまいか。

およね孫八も是を聞き思入。

〽心の掛籠、一重あけぬ重兵衛が情の詞。

平作　サヽそれ程お慈悲のあるお方、とても事なら薬の持主。

重兵　イヤサ、コレ悪い合點だ、此薬の持主は其方の病人とは大敵薬、卅両のその金も敵の恩を受けまい爲、それ戻したではごんせぬか、此持主の名を言へば敵の薬で症本復、恩を受けては眞逆の時の切先が鈍らうも知れぬぞや、やつぱり拾つた薬にして心置なう養生さしたがよさゝうなものだぞえ。

〽聞いて平作感じ入り。

ト平作思入。およね孫八もムヽと思入。

平作　ア、扨も／＼お前様は恐しい程發明なお人様ぢやなう、さう聞きましてはもう／＼申さう様もございませぬ、左様なら私は歸りまするでござりませう。（ト思入あつて、）是が此世の旦那様、おさらばでござりまする。

〽言ひつゝ探つて重兵衛が脇差抜取り、腹へぐつと突立て。

ト平作重兵衛の脇差抜取り、手早くわが腹へ突立て、わつと苦しむ　重兵衛驚き、

重兵　ヤ、どうしたのぢや／＼。（ト探り見て、）オ、こりや腹切つてか、何故に。

ト およね孫八も驚く。

平作　コレ、おりや此方の手にかゝり、死ぬるのぢやわい〱。
重兵　勿體ない〱。（ト平作を介抱する、）
〽誰を恨んで勿體なやと、うろ〱涙驚く娘、聲に手當てる池添が、泣聲止むる轡蟲、草に喰付き泣くばかり。
ト文句の通り双方よろしく竹笛入りになり。
平作　サア此方とおれは敵同志、志津馬殿に緣ある此親父、此方の此脇差をかう突込んだれば、頼まれた先樣へ、一つの義理は立たうがの。
重兵　ム、。
平作　これ〱此上の情には此親父が未來の土産に、敵の在所を聞かして下され、外に聞く者は誰もない、今死ぬるものに遠慮はあるまい。
〽不思議に始めて逢うた人、どうした緣やら我子のやうに思ふもの。
何の此方に退け取らす樣な事、親が、サ此親父が致しませう、これが一生の別れ一生の頼み、聞かずに死んでは迷ひますわいの〱、コレ拜みます〱旦那殿。

〽子故の闇も二道に、分けて命を塵芥、須彌大海にも優つたる、誠の親に始めて逢ひ、名乗りもならぬ浮世の義理、孝行の爲納め。（ト重兵衛思入あつて、）

重兵　親父樣、ではない旅のお人、（ト思入、）何處に誰が聞いてゐまいものでもないが、此重兵衛から言ふは、死んで行くこなさんへの餞別、臨終の耳によく聞かつしやれや。

ト あたりへ思入あつて、聞けといふこなし、およね袖を當て泣きゐる。孫八と思入。

コレ、其股五郎が落ち行く先は九州相良、道中筋は三州の、吉田で逢ひしと人の噂々々々。

（ト思入あつて。）もう堪忍して下さりませ。

ト泣き落す。此以前松ケ枝の提灯消える仕掛け。

平作　エ、忝い〳〵、あれ聞いたか。（ト思入あつて。）イヤ〳〵誰もない〳〵、外に聞く人誰もない。（ト思入あつて。）聞いたは死んで行く此親父一人、それで成佛しますわいの〳〵。名僧知識の引導より我子の口から今の一言、嬉しうござる、エ、コレ顏見合せて名乘り合ひ、此世の暇を告げたいに。

重兵　逢ひ初めの。

〽逢ひをさめ。

親父様。

平作　兄。（ト重兵衛に取縋つて、）顔が見たい〳〵。顔が見たいわいやい。

重兵　南無阿弥陀仏〳〵〳〵〳〵。

ト此時孫八思入あつて、小石を拾ひ刀と打合せ、パツ〳〵と火を打つ。此明りにて平作重兵衛相見合せる。此時およねも走り来る。是にて重兵衛ちやつと顔背く。平作苦しむ

よね　モシ。

ト重兵衛を引留め平作へこなし。孫八支へる。重兵衛ツカ〳〵と下手へ来り、後先廻り手を合す。是を木の頭。平作落入る。およね介抱する。重兵衛涙をかくし此方へ振ち向く。刀方よろしく。

ひやうし　幕

八幕目　藤川新関の場

役名　唐木政右衛門、和田志津馬、城五郎下部助平、蛇の目眼八、星合團四郎、

幸兵衛娘お袖、捕手等。

本舞臺三間の間上手柳矢來。すべて關所の大門。下手出茶屋床几など並べある。下手關所前に遠眼鏡を臺に載せ飾りある。すべて東海道藤川新關の體。幕の内よりこゝにお袖襷袖衣裳にて茶を汲んでゐる。仕出し大勢床几にかけてゐる。川越し唄にて幕あく。

○　これは／＼毎度お世話樣になりまする、もうお暇申しまする。

お袖　左樣なら、ようお出なされました。

ト皆々捨ゼリフ言ひながら、

×　雪の降らぬ内急いで歸りませう。（トお袖茶碗など拭き／＼思入あつて。）

〽後や先、まだ内證は白歯の娘、雪氣いとはぬ寒空に、みな／＼打連れ歸りける。

〽父の教へも守らざる其罪科の降り積る、雪氣の空もいとひなく、姿を窶す和田志津馬、敵の行衛知れざれば、空しく過ぎる光陰の、彌猛に心關所前、

ト此淨瑠璃の内、花道より志津馬旅なりにて出て來り、直に舞臺へ來る。

志津　コレ〳〵茶店の女中、最前より此茶店で待合す體の人は見えなんだか。

お袖　ハイ。（ト志津馬に見惚れたるこなし。）

志津　但しは是へ見えましたか。

お袖　ハイ、イ、エ、左樣なお方はお見受け申しませぬ。

志津　然らば暫く爰を借用申す。

お袖　サア〳〵お掛けなされませ。

ト志津馬は床几にかける、お袖茶煙草盆など出して、始終捨ゼリフあつて志津馬に見惚れたる思入。

志津馬遠眼鏡を見付け、

志津　見れば是に遠眼鏡がござるが、こりや定めて往來の慰みであらうがな。

お袖　イエ〳〵そりや慰みぢやござんせぬ、私が父さんは此お關所の下役人、若し切手なしに拔道を通る人もあらうかと吟味するとやら、その爲にあの遠眼鏡でござんす。

〽と聞いて志津馬が心の當惑、差當つたる切手の用意。

志津　ムウ。

〽はてどうがなと思案顏、お袖は一心志津馬が顏、テモよい男と思ひ染め、いとしい事も娘氣の、口へ出かねる茶の花香、茶碗ばかりを手を持つて。

ト此内お袖志津馬に思入あつて茶を汲んで、

お袖　ハイお茶をお上りなされませ。

〽差出す心の思惑は、汲んで知れかし目遣ひに。

志津　コレ〳〵强い御馳走、（ト茶碗を取つて見て茶がなきゆゑ、）イヤ兎角の事にほんまのお茶が貰ひたい。

〽思はぬお茶の捨言葉。

お袖　ほんにこりや麁相な、ドレほんまのお茶を上げませう。

〽と顏を上氣の初紅葉、男の生粹一森に、戀の出花と見えにけり、志津馬は扨はと心付き、われに心を懸けしこそ、幸ひ切手の手掛りと、心でうなづき摺寄つて。

ト志津馬はお袖に寄添うて、

志津　コレ／＼女中、チト頼みたい無心があるが、ナント聞いては呉れまいか。
　〽思うた壺へ柔かに、言掛けられて返答の、詞に詰まるが女子の情。
お袖　私もお前にお頼みが。
志津　サどのやうな事なりと、頼みとあれば退きはせぬ。
お袖　エヽ有難い、私もお前ゆゑならば、どのやうなお頼みでも厭ひはせぬわいなア。
　〽厭はぬわいのと寄添へば。
志津　それを聞いて先づは安堵、頼みといふは何を隠さう我が身の上、今夜中に此關を通らねば、わが一命に關はる事、こなたの覺えし抜道を何卒敎へて貰ひたい、其代りには命に懸け、死んでも忘れぬ、コレ女中、何卒敎へて下されいの。
　〽色で仕掛けるわが身の大事、ぢつと締むれば締め返し、差しいやら嬉しいやら抱付いては締め交はす、袖は人目の關のかど。
お袖　暮六つから通路のならぬ此新關、それまでには私が働きで、お前をお通し申しませう。
志津　そりやアノほんまの事かいの。

お袖　ナンノ嘘を申しませう、したが若し間違つたら、私がお供して立退きませう、必ず〳〵氣遣ひ遊ばすなえ。

〽思ひ合うたる他生の縁、二人が望みは二道の、一筋道を急ぎの道中。

ト お袖志津馬よろしく思入。韋駄天になり、花道より助平飛脚のこしらへにて出て來り、

助平　エツサツサ〳〵〳〵。

ト 直に舞臺へ來り、お袖に思入。

お袖　申し飛脚樣、お休みなされませぬか。

〽言へば奴が立止り。（助平お袖を見て、）

助平　へ、、、、、、イヤから呼掛けられて、姐御に恥も掻かされまい、まだ六つには間もあれば、一服やらかさうかい。

お袖　サア〳〵お掛けなされませ。

助平　ヤレ〳〵草臥れた〳〵。（ト床几へ掛け、志津馬へ思入あつて、）申しお侍御免なされい。

〽よんやまかしよと腰打掛け。

志津　見ますれば急ぎのお飛脚には、何れから何れへお出でござる。

助平　イヤ拙者は鎌倉扇ケ谷の四つ辻切通しより參るもの、夜前濱松で泊りました、イヤ日が短くて、やう／＼爰まで參つたのでござる。

〽聞くより志津馬は心當り、騙して問はんと傍に寄り。

志津　それは／＼お早い事。私共は何として／＼、エ、お羨しい、お達者な儀でござりまする。

助平　イヤ是は御挨拶でござりまする。（トお袖茶を汲んで助平に出す、）

お袖　ハイ、お茶をお上りなされませ。

助平　どう／＼忝い／＼。

トお袖の顔を見る事あつて、

〽一目見るより餘念なく、お袖が傍にぐにやとなり。

イヤ何時見ても／＼あでやかなよい縹緻ぢやな、白歯娘の煮花の初を、その薄茶より身共が戀茶、一目見るより惚茶が因果、茶化すのぢやないコレお娘、どうぞそさまのおちやこを、二度とは言はぬ、唯た一盛り一杯飲ませてござりかわ茶、色よい煎じ茶はどうぢや／＼。

〽どうぢや〳〵としなだれ付く。（トよろしく思入。）

お柚　エヽモてんごうなさんすな。

助平　イヤてんごうとはどうぢやい、お主をちよつぽり見染めたは、今やちやつとの事ぢやアない、上り下りの足休め、此茶店で茶を飲んだり、きさまの顔を見る茶が楽しみ、あい茶さ見茶さに飛び茶つぼかり、茶がひの心が解け合うたれば、満更厭でもあるまいし、おらが身體が太つ茶故、いやでもあらうが得心して、いちや〳〵言はずとわつちやりと、ムヽと言うて呉れ、コレ茶のむ茶のむ。

〽と寄添へば。（ト助平よろしく思入。）

志津　オヽ、お飛驒には、お顔に似合はぬ〳〵。

助平　イヤ此は不調法た、憚りながら色事するは顔ぢやない、爰ばかりぢや〳〵。（ト助平胸を叩く）先づ色一通りはこつちやの得手者、後家尼人の女房から段々の口説きやう、これを得心さするは四つ目屋の長命丸、まだ今流行のゐもりの黒焼なんどをば、ばつ〳〵と振掛けると、どんな堅いのでも、ついずる〳〵と身共に靡く今業平とは、身共が事でござるテヤ、ヘヽヽヽヽ。

お袖　申し今言はしやつた其ゐもりの黒焼とやら言ふものは、女子の方から殿御に振掛けても利くものでござんすかえ。

助平　オヽサ、乙な物を聞きたがるもの、それを聞いて何にする。

お袖　サア其薬がちつと欲しいものでござんす。私やちつと入用がござんすわいなア。

助平　乙な物を欲しがるの、よいわ、さう言ふ事なら今度の下りに持つて來てやらうが、コリヤお娘、それよりはまだ妙な薬があるわえ。

お袖　妙な薬とは何でござんすえ。

ト助平懐より薬袋を出し。

助平　コリヤ和蘭秘法の笑ひ薬といつて、此薬を一振りパツと振掛けるが最後、どんなこはい閻魔樣がせんぶりを甜めたやうな顔の人でも、ついげゝら〳〵〳〵〳〵と正體失うて、笑ひ入るといふ妙な薬よ。

お袖　其妙なお薬を、何の爲に持つてござんした。

助平　こりや斯う言ふ譯ぢや、此度の道中は急ぎのお飛脚、しかも密事のお使ゆゑ、若しひよつと先の間者に聞付けられでもする時に此薬振掛けて正體を失はして置いて、其場を駈抜けるといふ

謀の爲に持つて來た此笑ひ藥ぢやわいやい。

お袖　それはまあよいお藥でござりますな。

助平　イヤよいお藥よりよい御縹緻ぢやナ、そもじの顏へ此藥をかけて笑顏が見たいわいなう。

トしなだれる。

お袖　アレそんな事せうよりは、モシ、こんな面白い物見る氣はござんせぬか、吉田の茶屋の女子さん方が見えるわいなア。

〽眼鏡の傍へ突遣れば、助平は差覗き。

ト　お袖思入あつて、助平を眼鏡の傍へつれ行き、助平眼鏡を覗き、思入あつて。

助平　イヤこりやなか／＼面白い、何だ、山があつて川がある、ハヽア吉田の川ぢやナ、何だ、女が一人川緣に立つてをる、身でも投げるのではないか、こりや危いぞ／＼、何だ、オヽ後から野郞が辨當を背負つて、其後からおさんどんが來る、ハヽア此奴主從三人連れで不動樣へ參詣と見えるわえ、ハヽア何だ、娘が裙をば捲つたな／＼、ハヽア川を渡るか、こりや危いぞ／＼、オヽ捲つた／＼、四邊に人がゐないと思うて、あのまア捲つた事わい、白い足なア、定めてあゝ捲つた所は川水へ映るであらうな、川水になりたいわい、アヽ後から來るおさんどんの足は

太い足ぢやなア、しつかい大道臼へ練馬の大根を縛り付けたやうぢや、又あの野郎は意氣地のない奴ぢやなア、それ手拭が川へ流れるわい、それ〳〵ア、手拭かと思うたりや、彼奴が褌の前をおつ解いて川水に流してをるわい、褌半分の洗濯と來てゐるな、ハ、、、、ヤア到頭是で三人は川を渡つたな、ヤレ安堵した。（ト思入あつて。）ヤ、此方へ見えるは、ハ、ア、茶屋の二階ぢやナ、豪勢騷ぎをるぜ、そんなに騷いで錢はあるかえ、ハ、ア眞中にゐる太つたのが客だなア、肴は何だ、生貝の味煮に鰕の具足煮か、刺身は何だ松魚かどうか、松魚の色鹽梅が惡いぜ、一口喰つたら頭へ輪の入りさうな色鹽梅だぜ、オ、ナニ拳を打つか、どう〳〵、チエ〳〵かい〳〵、エ、かいあつた〳〵、彼奴がいゝ所へ手が屆かぬ、ヤ、あの女はどこか見たやうな女だが、オ、さうだ〳〵、こりや矢張さうだ〳〵。

へ一目見るより血相かへ。

アイコリヤ、汝やおきのぢやないか、コレおのれなア、おれに起請までおこして置いて、其態は何だ〳〵、コリヤ、おのれ何と言うた、コレ助平さんえ、お前と私と夫婦になつて、骨がなけりやア、一つになりたいと言うたぢやアないか、それぢやによつてお頭へ願うて、正月には一分遣り、二月には二分遣り、三月には三分遣り、四月には四分遣り、五月には五分遣り、祿

な物も喰ひもせず、給金から扶持米まで遣つたぢや、それにおのれそんな事をして濟むかいやい〳〵〳〵、ツ、おのれ、刺身の喰ひかけを喰ひをつたな、コリヤ了簡が。コリヤ澤井の家來助平というては色男の開山だい。

〽駈出せしが。

ト駈出してキヨロ〳〵する、お袖こなし。

お袖　ア、ありや吉田の茶屋の二階、爰からは一里もある所、もうよい加減になされませ。

助平　ほんにさうぢや、爰から悋氣をするは、川へ投げ金、壺に耳ツとうをするやうなもの、しかしながら悔しいわい。

〽又產覗き現になれば、扨は澤井の家來よなと、一通奪取り素知らぬ顏。

ト志津馬思入あつて、蔟狀箱を解き密書を出し、素知らぬ顏にてゐる、助平是を知らず夢中になり。

ア、コレ〳〵口を嘗ふかい〳〵。ア、アレ〳〵手を入れて、おのれコリヤ。（ト思入あつて。）指人形をやらかすな〳〵。（ト助平尻を振る。）ア、アレ、あんな事をするわ〳〵。

ト助平お袖を提へ引寄せる。お袖振放して、吹竹を渡す　助平吹竹を眼鏡と心得て、覗き見て一向見

えぬゆゑ、キヨロ〳〵してトど眼鏡の傍へ行き、

ア、〳〵〳〵布團を敷いたな〳〵、コリヤおのれ晝取をやらかすな〳〵、ア、〳〵〳〵、こりやもうどうも堪へられぬわい。

ト助平いろ〳〵あつて、トどウンと悶絶する。此時關所の切手を落す。

〽枯木の如く鯱張り返り、登り詰めたる奴凧、糸目の切れし如くなり、〽傍に落ちたる關所の切手、見るにお袖は飛立つ思ひ。

トお袖切手を志津馬に渡す。

お袖　結ぶの紙の此切手、モシ。

〽志津馬に渡せば懐中し。

志津　我身の難儀は遁れても、かうして置かれぬ奴殿、コリヤ顚癎と見える、コレ顏へその水吹掛けた〳〵。

〽といふにお袖は狼狽へて沸返つたる茶釜の湯、頭へざつぷり打掛ければ、びつくり氣の付く助平が、四邊見廻し起上り、さも苦しげに聲顫はし。

ト此淨瑠璃の內、お袖釜の湯を助平の頭へかける。是にて助平起上りよろしく思入。

助平　何方樣かは存じませぬが、有難う存じまする、イヤモウ痺れついた忰めが早耳、今のお水で助かりました、有難う存じまする。

〽話せば二人は顏見合せ、可笑しさ隱すばかりなり。

ト此時關所の內にて七つの拍子木鳴る。

〽時も違へず關所にて、打つ拍子木に助平が、一つ二つと指折って。

ト助平指折り數へびつくりして、

ヤア〳〵アリヤ七つの時替り、大切な此狀箱、一時も早くお屆け申さん、關所の切手は慥か此內に。

〽紙入の內を搜せど。

ハテ面妖な、ム、南無三寶、後の茶屋で落したか、ハテ面妖な、こりやかうしてはゐられぬわい。

〽どりや一走りと立出づれば、水氣とられし河太郎奴、ふなら〳〵と池水の、

塵埃にあうたる如くにて、元來し道へ引返す。

ト助平よろしく花道へはひる。お袖思入。

へお袖は後を見送りて。

お袖　サ、此間に早うお關所を。

志津　何から何までいかい世話。

お袖　ナンノお禮に及びませう、どうぞ此末お見捨てなう。

志津　ナンノ忘れてよいものか。

お袖　エヽ嬉しうござんす。

へと顔詠め見飽かぬ眼鏡の戀男、志津馬は一心敵の手掛り、白歯娘の手を引いて、岡崎指して。

ト お袖志津馬よろしく關所の内へはひる。

へ歸りける。鎌倉の奥女中、お里歸りの道中と、人目に見せる鋲乘物、關所の前へ舁き据ゑる。

ト驛路入り川越唄になり、花道より鋲乘物、侍二人中間挾箱を持ち、後より星合團四郎深編笠大小のなり。後より蛇の目眼八馬士のなりにて出來り、直に本舞臺へ來る。

團四　コレ〳〵いづれも、股五郎殿の乘物は直樣關所を打越し召されい、拙者は後より。サ、早う〳〵。

ト是にて皆々關所の内へはひる。團四郎眼八殘り思入。

イヤ蛇の目の眼八とやら、大儀々々。

眼八　シテ私へのお頼みと御言るは。

團四　外の事でもない、某は星合團四郎と申して櫻井林左衞門とは一家なれば、今附添ひしアレあの女乘物こそ、人目を忍ぶ股五郎殿、手にも足らぬ奴なれども、敵と覘ふ和田唐木、其方を男と見込み頼むは兩人、彼奴等と見るなら合點か。

眼八　イヤモウそんなお頼みなら、此街道の人喰ひ馬、そこが蛇の目の眼八だア、見遁す事ぢやアございませぬ、お氣遣ひなされますするな。

團四　馬士に似合はぬ大丈夫。ト懷中より金を取出し、當座の褒美、取つて置きやれ。

眼八　ハイ〳〵當座の御褒美。こりや忝い。（ト眼八金を改めて、）ヨウ〳〵久振りの此お金、馬士に

千疋とは、此奴アまんが直つて來たわえ。（ト時の鐘鳴る。）ア、申し旦那、鐘が鳴ります、少しも早くお出なされませ。

團四　いかさま左樣致さう、必ず拔かるな。

眼八　合點でござります。

團四　サヽ來やれ〳〵。（ト兩人關所へはひる。）

〽門内指して入相の、鐘諸共に關の内。

トやはり時の鐘。關所の内にて、

番人　締まります。

〽門、發止としめる音。

ト是にて關所を締める拍子木鳴る。

〽宙を走つて政右衞門、關所の前に立寄れば、門戸閂めて出入もならず。

ト此時ばた〳〵になり、花道より政右衞門走り出て來り、直に舞臺へ來り、いろ〳〵思入あつて、

政右　暮時でしかと分らねど、最前通りしは慥かに澤井股五郎、今一人は眞合闘四郎に極まつたわ

え。エ、コレ附狙ふ敵を取逃せしか、チエ、口惜しいわえ。」

〽無念涙に暮れゐたる。（トよろしく思入。）

オ、それよ、志津馬と爰で出會ふ約束、但しは先へ入込みしか。何にもせよ、出會ふ所は一筋道、今夜中に此關所を越さねば、最早敵は手に入らぬ。

〽行きつ戻りつ思案を定め。（トよろしく政右衛門思入。）

ム、豫て聞居る拔道は確かに竹の林の中、押分け行かば山づたひ、オ、さうだ。

〽探り廻りし眞暗がり、うろ〳〵眼に助平が、これも窺ふ拔道を、すかし見れば雲突くやうな大男、びつくり驚き身を忍ぶ、探り當りし政右衛門、竹藪押分け忍び行く、とくと見屆け助平が狀箱腰に括りつけ、うまい〳〵と拔道の、後を慕うて。

ト此淨瑠璃の内、政右衛門思入あつて、正面の藪を押分けてはひる。ト花道より助平出て來り、よろしく思入あつて藪へはひる。雪おろし、どんの送りにて此道具よろしく。

ぶんまはす

本舞臺一面竹藪。松の立木、同じく釣枝。所々に雪繁く降りゐる。後ちは黒幕。雪おろしにて納まる。トどん〳〵になり。

〽急ぎ行く、不敵なるかな政右衛門、天に一命擲つて目指すも知らぬ眞の闇、降り來る雪の道踏付け、裏道づたひ一町ばかり、行くよと見えしが關所の内に聲高く。

番人　ヤア忍びの鳴子の音するは、裏道を越える曲者あり、それ、組子共々々々。

大勢　ハ、ア。

〽豫て用意の高提灯、人數を配つて取卷きしは、危うかりける次第なり。

トどん〳〵になり、下手藪より六尺棒十手など持ち、皆々よろしく出て、此内政右衛門正面の藪を押分け舞臺へ出る。皆々政右衛門を捕へ、あちこち引張る。政右衛門是を蹴倒し〳〵する。此時助平同じく藪を押分け出て、此中へはひる。是にて政右衛門すりぬけて東の花道へかゝる。皆々助平を政右衛門と心得よろしく思入。政右衛門は舞臺の方を拜んで東の揚幕へはひる。

〽詞には似ぬ組子共、後をはづして逃げ散つたり、逃げるを追はず政右衛門、

道の案内は此提灯と、勝手覺えし杣道の、足許しるべに慕ひ行く。

助平を皆々引摺つて、上手の籔へはひる。始終どん〳〵にて、助平眞中の藪を押分け　裸身へ鉢卷して鼻紙袋を胸へかけて出る。捕手六人ウヌとかゝるを見事に投げて、又藪を出て見得。誂への太鼓入りの合方になり、助平思入あつて鼻紙袋にある笑ひ藥を取出し、嬉しき思入にて、是より六人を相手に笑ひ藥の立廻り、をかし味よろしくあつて、トゞ捕手案山子の蓑を着せる。是にて皆々尋ねる思入。是にて助平花道へかゝる。

捕手　ウヌ。

ト十手を振上げるを、笑ひ藥を袋の儘かぶせよろしく、幕一ぱいに助平そつと立つを木の頭。

助平　ムヽヘヽヽヽ。

ト笑ふをよろしくきざみ、花道へはひる。

ひやうし幕

九幕目　岡崎の場

役名　唐木政右衛門、山田幸兵衛、和田志津馬、蛇の目の眼八、夜番時介、宿歩き市介、組頭、捕手。政右衛門女房お谷、幸兵衛女房おつや、幸兵衛娘お袖等。

本舞臺三間の間綺麗なる世話場。眞中に暖簾口。上の方一間の障子屋體。茶壁。下のよき所に明荷二つ積重ね、平舞臺に圍爐裏。傍に柴、束ね藁あり。いつもの所に門口。此外に藪。藁葺の軒に雪を積らせ、門口より花道へかけ、雪板雪布を揚幕まで敷詰める。すべて岡崎宿郷士の家の體。こゝに世話なりの母おつや丸行燈を置き糸車を取りゐる。時の鐘、雪おろしにてよろしく幕あく。ト直に淨瑠璃。

〽愛しい殿御を三河の澤よ、戀のかけ橋文杜若、受けて忍ばゞ夜は八つ橋の、水も洩らさぬお手枕、鄙も都も小娘の誰教へねど戀草を、見染め馴染め打つけに、雪の夜道の氣散じは互ひに手先持添ゆる、傘の志津馬にもつれあひ、じやらくら話何時の間に。

ト此淨瑠璃の内、花道より前幕の茶屋娘お袖志津馬相合傘にて出て來り、口舌模樣よろしく、門口へ來り。

お袖 オ、辛氣、何時もは遠う覺えたに、意地惡う今夜の短さ、モシまだ話が殘つた程に、後へ戻つて下さんせぬかえ。

志津 ハテ譯もない事を、日は暮れる草臥足、後へも先へも雪の段、鉢の木の焚火より、暖かなそもじの身で暖めて貰ふが御馳走。さうお宿が御無心申したいの。

へぢやれた詞にどう言うて、よいか惡いか白歯の娘。

お袖 どうであなたに嬲られると、知りつゝ嬉しい今宵のお宿。

志津 ナンノそもじを嬲らうぞい。（ト相合傘の手をしめる。）

お袖 アレまだ矢張り。（ト此方へ引くはずみに傘門口へ來る。）

つや 誰れぢや／＼。（ト是にて兩人びつくり思入して。）

お袖 アイ／＼母さん、私でござんす。（ト門口をあける。）

つや オ、お袖とした事が、この寒いのに何してゐやつた、戻りが遲さに待兼ねました、サ、早うはひりやいなう。

〽母の詞を機に内に入り。（ト志津馬に思入あつてお袖ばかり内へ入り）

お袖　サア店を片附けるが遅うなつて、夜には入る、可恐かつたが、幸ひと道伴れのお方があつて、送つてお貰ひ申したわいなア。

つや　ム、道伴れのお方とは、定めし近所の。

お袖　イエ／＼行き暮らした旅のお方、それは／＼御難儀、それでアノ今宵一夜さ、この家に泊めて上げて下さんせいなア。モシ、苦しうはござりませぬ、此方へおはひりなされませ。

〽呼ばれて志津馬おづ／＼と、小腰かゞめて。

ト志津馬捨ゼリフいひながら内へはひる。

志津　お許しなされませ、一人旅の浪人者、日は暮れる足は損ふ、詮方盡きてお宿の御無心、近頃わりない事ながら、今宵一夜をお頼み申す。

〽いふも心に荷物の葛籠。（トお袖葛籠を見付けて。）

お袖　母さん、父さんの旅葛籠、彼處に戻つて下さんすは。

つや　オ、父様も今日暮れ前に歸らしやつたわいの。（トお袖思入。）今旅草臥れで寢てぢやわいの。

お袖　エヽナンノ遅うても大事ないに、お歸りなさんしたなア。

ト志津馬と顏見合せ思入。母親は此體を見て取り、

つや　日頃から兩親がちよつと出てさへ、戻りを案じる孝行なそなたが、父樣が歸てぢやと聞いてどうやら不興な顏付は、堅い父御の氣質ゆゑ、折角貸しませうとお連れ申した道件れ樣へ、若し約束が違ふかと案じての事であらうが、假令父御は得心でも、アノ此婆は不得心、何故と言や、今でこそ茶店の娘、去年までは鎌倉のお屋敷で腰元奉公、御主人樣のお差圖で、さる武家方へ末々は緣に着けうと堅い約束、其婚約の夫を嫌ひ無理暇貰うて家へ戻り、間もなう猥らな事があつては、以前のお主へばかりぢやない、誰は知らねど約束した聟殿へ言譯が。サア、かうは言ふものゝ其方に限り、さうした事はあるまいけれど、時分の來た若い娘のある家へ、若い男を泊めましては、戸の立てられぬ人の口、其上父御は國主よりのお眼識で、關の下役を勤めさつしやりや侍同然、物事正しうするのも役柄、コレ必ず惡う聞かしやんなや。

へ言はれて暫し返事さへ、お袖が異見の相伴に、志津馬も手持無沙汰を、見る氣の毒さ母親も。

ト此異見の內、お袖もぢ〳〵志津馬も座を捻つてゐる。母は兩人を見て、

このやうに異見するも、轉ばぬ先の杖とやら、イヤナウ御浪人樣、お心に障へて下さりますな。泊めまする事はならずとも、せめてお茶を、ドレ入れ花して上げませうか。

〽一つ上げうと尻輕に、勝手へ行く間待兼ねて、娘はおづ〳〵志津馬が傍。

ト お袖奥口を見ながら志津馬の傍へより、

お袖　サヽ、モシ、誰も來ぬ間に言殘した話の殘りを、あの納戶で。

〽手を取れば振放し。

志津　見る影もない旅の者に關所での情をいひ、途すがらもあた嬉しい詞を誠と思ひの外、許婚があるからは、主ある花に落花狼藉、もし見付けられたら間男などゝ重ねて置いて、イヤモウ四つに間もござるまい、夜の更けぬ內宿取つて。

〽立上る袂に縋り。

トついと立つて行かうとするを、お袖ちやつと引留めて、

お袖　アヽ、モシ、あつて過ぎたる緣定め、今更兎や斯う母さんが、言はしやんしたがお心に障つて、

私へ當言を、無理とはさら〳〵思はねど。

∧恥しながら今日までも、殿御に惚れたといふ事は、知らぬあどない不束な在所育ちの此身でも、結ぶの神の御利生で、お顔見るから思ひ染め、どうぞ女夫になりたいと、胸はしがらむ白河の、關は越えても越えかねる、戀の峠の新枕、交はさぬ仲を胴慾な、つれない事をいふ手間で、つい可愛と一口に。

ト此兩人さはりよろしくあつて、

∧言はれぬかいなと縋り寄り、しども涙のかこち言、かゝる折から門口へ、息急き來る蛇の目の眼八。（ト花道の揚幕にて、）

眼八　喧しいわえ、ほ[illegible]つはらめ。

ト此聲にてお袖門口より覗いて見て、志津馬に囁き、無理に障子屋體の内へ志津馬を入れて思入。後馬士唄になり、花道より馬方眼八出て來り、直に門口へ來り、内を覗いて、

ヤア、うまいぞ〳〵。毛虫の親父やお袋もゐず、お娘一人は有難い。

∧はひるや否や後から、帶際むんづと引抱かへ。

ト　お袖一人思案の處へ眼八はひり、お袖の後ろより抱締める。

お袖　ア、モシ惡い事を。

　ト　お袖眼八を振拂ひ厭がる。

眼八　シツ〳〵ナンノ惡い事、常から目顔で知らせても、ぴんしやん〳〵跳廻る、馬よりおれが太鼓の撥、立場で噂見付けたやうに、コレさんばいしかねてゐるわえ、否應なしにちよこ〳〵と、ナアお袖さん。

お袖　ア、モシ穢い、マア爰を。

　ト　お袖眼八を突退けるを、眼八又引止めて、をかし味の合方。

眼八　サア議でも始めては嘸や〳〵と口ぢやア言ふが、酒と色事の味を覺えると、止められる物ぢやアない、それとも厭ならおれも意地だ、今夜藤川の關所を破つて、忍び道を通つた奴、召捕るやうと關崎中は上を下へと詮議のどう中、胡散な奴との相合傘、仲間の奴等を繋いで置いた此眼八が、蛇の目を灰汁で洗つた詮議、引摺り出してほへ面搔かすが、それでも厭か。

お袖　サアそれは。

眼八　但し聞いて吳れるか。

お袖　サア。

兩人　サア〱〱。

眼八　エヽ面倒な。

ト眼八障子屋體へかゝるをお袖引留める。

〽駈入る向うへ立塞がる、お袖を突退け閉切りし、障子引あけ見てびつくり。

ト立廻つて障子の内へはひる。

アイタヽヽヽ。

〽利腕捻上げ立出づる。主人の幸兵衛。

ト幸兵衛着流し老けたるこしらへにて、眼八の手を捻上げて出て來り、

お袖　ヤ、お前は父さん。〽トお袖合點のゆかぬ思入。

幸兵　百姓なれども代官の下役をも勤むる身共が居間へ、泥濘切込む狼籍奴、了簡ならぬ所なれども、所存あるゆゑ赦して呉れる、此以後きつと嗜みをらう。

〽投付けらるゝと思ひの外、突放したる手强さに、底氣味惡くうぢ〱もぢも

ぢ、見るにお袖が嬉しさと、いとしいお人の納まりを、案じいや増す思ひなり。

ト是にて眼八思入あり、幸兵衛ドッサリとあぐらをかき、

眼八　コレ役目々々と言はつしやるが、其大切な關所を拔けた科人を吟味するに、爰の娘が連れて戻つた旅の侍、引込んで置きながら、詮議する此眼八を何故手籠にして縮上げた、イヤサ何故手籠にしたのだい。

幸兵　ム、、娘が連立ち歸つたとは、其侍は何處にをる。

眼八　ヤア先刻慥かに爰の家へ。

幸兵　默りをらう、汝お袖におつ惚れて最前より法外の有條、承引せぬゆゑ無法の當推、よし又其侍とやら此家へ來たにもせよ、鎌倉通行の東海道、數限りもなき旅人の往來、是ぞと言ふべき證據もなく、侍とさへ言や悉く引捕へ、關破りと言ふべきか、勿論おのれは當所の馬追ひ、誰が許して詮議する。

眼八　サアそりやア。

幸兵　ナ、何とぢや。（ト幸兵衛キッと言ふ。）

〽なんと〳〵と定付けられ。（ト眼八首を縮めて、）

眼八　ア、モシ〳〵〳〵お氣の短い、商賣が馬方だけ、口から起つた紛糾で、親父樣の寢所まで踏み馬、御免でござりまする。（ト眼八しよげてこなし。）

幸兵　ハ、、、、、スリヤ謝つたと申すのか、よいわ〳〵、今日の所は許して呉れる、此以後きつと愼みをらうぞ。

眼八　ハイ〳〵きつと愼しみをります。ヤレ〳〵すんでの事に飛んだ目に。しかしこれ、彈み切つた太鼓の撥、一寸聖天神田丸、大間に一番はやさせて。

ト お袖へこなし。

お袖　ア、モウ執拗い。ちやつと歸らしやんせいな。

眼八　なんぼ歸れと言つたとて、是が此儘。（トお袖にかゝる。）

幸兵　ヤアまだ歸らずば擲し上げうか。

眼八　イエモウ、それには及びませぬテ、ヘ、、、、。

〽後をも見ずして立歸る。

ト木魚入りの合方にて眼八花道まで行掛け、又引返して思入。門口外の藪疊へ忍び込む、

〽後見送りて落着く娘、忍ぶ志津馬も一間を立出で。

ト志津馬障子の内より出て來り、下へ來り、幸兵衛に手を突きこなしあつて、

志津　覺えなき身に關破りとの疑ひ受け、今の危難を免がれしは、御亭主の御厚志ゆゑ、忝う存じまする。

幸兵　イヤこれは〳〵痛み入る、先づお手を上げられい、サヽ平に〳〵、シテ承れば御浪人とな、定めて仕官のお望みにて、上方への御旅行かな。

志津　アイヤ〳〵拙者めは、樣子あつて世を忍ぶ獨り旅、則ち當所岡崎にて、山田幸兵衛殿方へ密にまゐる浪人でござる。

お袖　ヘエ、そんならアノお前さんは。

ト此内幸兵衛志津馬に思入あつて、

幸兵　アヽこりや〳〵。ムヽ、山田幸兵衛は即ち身共でござるが、シテ其許は何方から。

志津　ナニ、スリヤ貴殿が幸兵衛殿とナ、これは〳〵、拙者は鎌倉武士にて、澤井城五郎殿に縁ある者。委細の事は此書面に。

幸兵　ナニ御状とナ。（ト志津馬前幕の手紙を出し、）

志津　御覽下され。

〽委細は是にと藤川にて、手に入る一通手渡せば、封押切つて老眼に、つぶ〳〵讀むも口の内、樣子知らねば氣遣ふお袖、幸兵衞とく〳〵讀み終り。

幸兵　こりや某が性根を見込み、和田行家を討つて立退く澤井股五郎が力となつて呉れよとある、お頼みの書面の趣、先達て鎌倉の樣子承りし砌より、待ちに待つたるお頼み、慥に承知仕つた、遼遠の所御太儀々々。シテ此使を勤めらるゝ其許は城五郎殿への御家來衆かナ。

志津　ヘツ、幸兵衞殿の御懇親承はる上からは、何をかお隱し申さん、刀の遺恨止む事を得ず、和田行家を手にかけし澤井股五郎と申す者。

〽尋ぬる詞に敵の手筋、これ幸ひと氣色を正し。

お袖　エヽ。（ト志津馬を見て思入し）

幸兵　ナニ御自分が、ノ股五郎。（ト思入あつて、）殿か。

志津　いかにも左樣でござる、鎌倉出立致せし折は附人數多ござつたれど、人目立も如何かと存じ、別れ〳〵に罷り登る、城五郎殿には前以て御懇意の幸兵衞殿、何卒御助力下さらば、此上も

なき拙者が悦び、偏に頼み存じまする。」

ト幸兵衛此内思入あつて、

幸兵　ム、、さすれば貴殿が股五郎殿か、イヤこれは〳〵存じ寄らぬ、是まで互に御意得ねば、双方共に知らぬ同志、コリヤ〳〵娘、許婚の婿殿ぢやわい。

ト志津馬へ思入。お袖いそ〳〵して、

お袖　サア今のお話承はつてをりました、そんなら私が鎌倉へ御奉公の其中に。

幸兵　オ、サ城五郎殿のお勧めゆゑに、其方を遣はさうと、面談には及ばねど、約束した花婿殿。

ト志津馬を見る。

志津　へ、、、、。(ト苦笑ひする。)

幸兵　ようこそ尋ねて下されたなア。

へ悦ぶ聲の洩れ聞え、母も立出で。(ト奥よりおつや出て來る。)

つや　ヤレ〳〵マア思掛けない、此方様が聟殿であつたかいの、知らぬ事とて先刻には。したが氣には障へて下されな、許婚はありながら、股五郎といふ名を嫌うて、是まで娘の不得心、それゆゑ疎遠に打過ぎましたが、聞いたと違うてテモ好い男、此やうな聟殿でも、娘、そなたは矢張

り厭かいなう。

お袖　オヽ勿體ない事仰言りませ、許嫁の殿御ぢやと知らいでさへ、添ひたうて〳〵ならぬもの、縁は切れてもお主のお差圖、父さんや母さんのお許しの出た股五郎さん、どうして私が嫌ふもの。もう〳〵二世も三世も變らぬ女夫、是からは何方へもやります事ぢやござんせぬ、何時までも傍にゐて可愛がつて下さんせえ。

〽心に思ふあり丈は、言はで思ひを押包む、お袖は嬉しさ兩親も、共にほたほた悦び顔。

ト志津馬思入あつて、

志津　いかさま、さう仰言れば上杉に仕官の内、城五郎殿のお差圖あつて、顔は知らねど許嫁のお袖殿であつたよナ。然る上は一方ならぬ緣者の果、一世の大事に及ぶ時節、お助力下さらば、生々世々の御厚恩と、有難う存じまする。

トわざとへり下つて辭儀をする。

幸兵　イヤモ何が扨々獵人すら、懷に逃入る鳥は助ける習ひ、まして聟殿の、お頼みないとて逆背

は致さぬ、年こそ寄つたれ幸兵衛が命にかけて隠匿ふからは、志津馬輩が附狙ふとも、何程の事かあらん、然し爰は端近、幸ひ奥に別家もあれば心置なく打寛いで、コレ二人ともに稀の珍客、何はなくとも杯の用意しやれ。

志津　アイヤ〳〵、其お心遣ひ却つて迷惑、御無用になされませ。

つや　ハテ聟殿の他人がましい、舅入りやら婿入りやら、祝言もごつちや煮の在所料理、むしり肴の船盛りより、外に馳走は手入らずの、娘のお袖が初物一種で。

お袖　アレ母さんの。

つや お袖　ホヽヽヽ。

幸兵　いかさま母の言やる通り、敵持の聟殿に、七十五日生延びるとは、これも吉左右、目出たい日出たい、ドレ〳〵案内致さうか。

つや　サア〳〵娘、聟殿も一緒に。

志津　御同道致しませう。

お袖　モウ〳〵こんな。（ト悦ぶ。）

幸兵　ハテ嬉しがる事わいやい。ハヽヽヽ。

ト唄になり、幸兵衛を先におつや志津馬にお袖附添ひ、志津馬思入あつて、みな〲奥へはひる。後
時計の音。九つの鐘鳴る。

〽はや九つのかねてより、内の案内は知つたる眼八。

ト以前忍びし眼八藪より出て内へはひり窺ひゐる。

〽思はず躓く明殻の駄荷の葛籠を幸ひと、鼻息もせず窺ひゐる。

ト眼八あけ荷をあけ、此中へはひりわが手に蓋をして忍ぶ。

〽斯くとは人も白雪の、道も厭はぬ政右衛門、心も關の忍び道。

トはげしく雪おろし、日覆より雪降る。バタ〲になり、花道より政右衛門前幕のなりにて走り出
て、前後へ思入あつて、

〽急ぐ後より數多の捕人が見え隠れ、慕ふ足許機轉の唐木、兩腰そつと道端の、
雪掻き集め押隠す。

ト政右衛門花道の雪板の蔭へ大小を取つて隠し、此上へあたりの雪を集め見えぬやうに隠し思入。矢
張り雪おろしにて花道より、前幕の捕人八人後より捕人頭附添ひ、ひそ〲と出て來り、捕人頭、ソ
レと聲をかける。皆々來り政右衛門を取卷く。

捕人　縄かゝれ。(ト政右衛門思入あつて、)

政右　ヤア仔細も言はず理不盡に、縄かゝる覺えはないぞ。

頭　ヤア覺えないとは野太い奴、關破りの科人、サア速かに。

捕人　腕まはせ。

ヘト捕つたと掛るを引ぱづし、苦もなく首筋一掴みに、一振り振つて右左、弱腰蹴据ゑて〆のころ投げ、隙間を得たりと二番手が、腕搦みを振りほどき、ほぐれを取つて眞逆樣、ずでん胴骨中道に、打付けられて叶はじと、入替つたる三番手、打込む十手かい潜り、脾腹を丁と眞の當て、烈しき手練にさしもの組子、左右なくも寄付かず、後退りするばかりなり。

ト此立廻りの内、物音を聞いて奥より幸兵衛手燭を持ち出て來り、戸口より是を窺ひ見て、

頭　ヤア御諚によつて向ひし我々。手向ひなすは關破りの浪人者に相違はない、サア尋常に。

捕手　腕まはせ。

政右　ヤレ怱忽なり御役人、急用あつて此如く、夜道を急ぐ旅の者、丸腰の某を關所破りし浪人と

は身にとつて覺えぬ御難題、外を御詮議なされませ。

〽ちつとも恐れぬ丈夫の政右衞門。

頭　イヤ其言譯は役所で致せ、爭はずとも、

捕手　繩かゝれ。ト十手を振上げ取卷く。此時幸兵衞ツカ〳〵と出て、

幸兵　アヽイヤ憚りながらお役人へ申上げまする、關破りの御詮議半ば深夜に一人歩行の旅人、お疑ひは御尤、しかし此者は鎌倉行脚、仔細あつて此幸兵衞よく存じ申す、あの者の慮外の段は御用捨あつて、無難にお通し下さらば、私においても有難し。

ト此内政右衞門も思入あつて、

政右　ムヽ、シテさう言ふ此方樣は。

幸兵　アヽイヤ、サ、ソリヤ身に覺えないにせよ、御役人へ慮外の手向ひ不屆至極、控へてゐようぞ。

ト叱りながら、政右衞門へ思入あつて、倒れゐる役人の傍へ寄り、引起し活を入れる。是にて氣絶したる捕人八人とも銘々介抱する、捕人心付きキツとこなし。幸兵衞思入。

いづれもお心慥かにござるか。御役目御苦勞に存じまする。

〽苦い挨拶氣のつく捕人、幸兵衞猶も威儀を正し。

組頭　承れば關所を破りし科人は帶刀の浪人者、彼は町人人違へ、かやうな儀に暇取る內、彼の曲者を取逃さば詮なき事、早や〳〵お手當なされたがよろしからうと存じまする。
幸兵　ム、、スリヤお手前が存ぜし者と申すからは相違もあるまい、何さま是より山手へかゝり、彼曲者を召取らん。
組頭　それが肝要。
捕人　者共續け。
ハッ。
〽元來し道へ引返す、後見送りて政右衞門。
ト政右衞門埋めし大小を取出し、腰にぼつ込み、幸兵衞に向ひ、
政右　誠に危き場所を遁れし事、全く貴公の御厚志ゆゑ、お禮は重ねて申し述べん、心も急けば失禮ながらお暇申す。
〽と立上れば。
幸兵　アイヤ心急きは御尤、チトお尋ね申す仔細もあれば、見苦しけれど身共が宅へ、

政右　スリヤ拙者にナ。

幸兵　お暇は取らさぬ、暫時の内。

政右　ム、。（ト思入あつて、）然らば御免下されい。

〽然らば御免と打通れば、門の戸引立て主人の幸兵衞、傍近く差寄つて。

ト兩人よろしく内へ入り住ふ。

幸兵　早速に申さうは、多勢を相手に今の働き、感心の餘り役人を欺き、難儀を救ふは聊かな志、それにつき詳しきは貴殿の柔術、正しく拙者が流儀に同じき神影の極意、手練せられし旅人はナ。

政右　ハテ我が柔術の神影の極意手練と、見極められし御老人の御眼力。

〽はて心悋しと双方が、ためつすがめつ見合はす顏。

ム、、お別れ申して十餘年、相格は變れども生國は勢州山田にて、武術の御指南下されし、要樣ではござりませぬか。

幸兵　オ、其詞で思ひ出せしが、われ勢州にありし節、幼少より育て上げし庄太郞であらうがナ。

政右　成程左樣でござる、然らばあなたが。

幸兵　其方が。

兩人　イヤ〱これは〱。

　ヘこれは〱と手を打つて、盡きぬ師弟の遠州行燈、搔立て〱打詠め。

幸兵　オヽ稚な顔に見覺えある庄太郎に相違ない、ハテ扨健かにまあ生立ちしな。

政右　ハツ、誠に〱久々にて、先づ先生にも御健勝で。

幸兵　オヽサ〱、無事の對面互ひに滿足、さりながらアヽ思ひ廻せば過ぎ行く月日、其方は山田の神職荒木田宮内が忰なれども、幼少の砌り父母に離れ、孤兒となつたる不便さに、引取つて育てる所、稚な立より武藝を好むは末頼母しと思ふより、門弟共へ稽古の次第、一手二手と敎ゆる内、一を聞いて十を知る頓智といひ器用といひ、十五以下にて槍術劍術鎖鎌居合術柔術に至るまで、諸歷々の弟子を追ひ抜き、神影の奥儀を極むる無双の達人、何卒大家へ仕官させ、親の氏を襲がせんと心頼みに思ふ中、未熟の師匠と見限りしか、家出致して十五年、便なければ折りにふれ此庄太郎は如何なりしと、雨につけ風につけ思ひ出さぬ事もなく、夫婦打寄り其方が噂。シテ唯今の住所は何處、まだ相應のあり付もないか、どうぢや〱。

〽師匠の慈愛に政右衛門、思はずはつと手を仕へ。

政右　左程までに思召さるゝ親にも優る大恩の、師匠を見限り家出せしと、お疑ひはさる事なれど、常々武術の御講釈、小耳に覚えし其中に、一派に心凝らさんより、諸派に渉り修行するこそ此道の心掛けと御教訓ありし事、心魂にしみ渡り、十五歳にて国を出で普く諸国を遍歴致し、武芸を磨く武者修行、天運叶ひ一度は然るべき主取り致せしかど、産れ付いたる好色酒に、其主人の機嫌を損じ、唯今は元の浪人、便るべき方もなければ若し上方にありつきもと、志して参る所、思掛けなく先生に、かゝる仕儀にてお目にかゝり、面目次第もござりませぬ。

〽迂闊にそれと身の上を、言はぬ底意は白髪の母、様子聞きてや一間を立出で。

トおつやいそ〳〵として奥より出て来り、

つや　ヤレ〳〵マア庄太郎、テモ成人しやつたなう、委細はあれから聞きました、連合の眼識違はず武芸の上達、サアそれについて其器量を見込み、早速ながら頼みたい事があるが、ナント聞いて下さるか。

政右　これは〳〵お世話になりし其住にて、久し振のあなたのお頼み、身に叶ひました事ならば。

つや　そりや忝い、頼みは其方の家出した時、漸く三つ子の娘のお袖、コレもう十七になるわいの。縁あつて許婚の其婿殿を親の敵と附狙ふ者があるによつて、眞逆の時は後立、其力になつて下さらば、餘の人千人萬人より勝つて嬉しう思ひまする。

幸兵　オヽいかにもさうぢや、庄太郎と知らぬ先、難儀を救ひ恩をかけしも、此儀を頼まん下心。

ト政右衞門思入。

政右　ムヽ、シテ拙者めを後立と。（ト思入あつて、）シテ其附狙ふ敵の假名は。

ト言ひながら幸兵衞に摺り寄つてこなし。

幸兵　サア婿といふは上杉の家來、澤井股五郎といふ侍、附狙ふは和田志津馬と聞いたばかり、面體は知らねども、高が知れたる若輩者、片腕にも足らぬ相手なれども、爰に一つの難儀といふは、彼奴が姉婿唐木政右衞門と言ふ奴、音に聞えし武術の達人、假令五十人百人加勢ありとても、政右衞門には何として。最前の手練を見るに、まだしも唐木に立合はんは其方ならで外にはない、何卒婿に力を添へて助太刀頼む庄太郎。

政右　何が扨、其儀ならば先生に内縁ある股五郎殿に力を添へれば、少しは師恩を報ずる理、いかにも助太刀仕らう、サヽ此上は澤井殿の其隱れ家へ御案内。（ト身繕ひする。）

〽急き立つ唐木忍びの眼八、蓋押あけて差覗く、影をちらりと見付ける幸兵衛。

ト文句の通りあつて、幸兵衛思入。

つや　ヤレ〳〵嬉しや、庄太郎の今の詞を聞いたからは、もう案じる事はない、千人力ぢや、ドレ婿殿に。(ト立上る。)

幸兵　ハテ扠入らざる女の差出、股五郎殿の行衛は知らぬ。

つや　エ。(ト不思議なこなし。政右衛門思入あつて、)

幸兵　ハテ扠壁に耳ある世の譬、それと慥かに知らねども、言聞かす折があらう、ナ。

ト幸兵衛母へこなし。

サ、迂闊にそれをあかさぬ話の蓋は取らぬが秘密、ナウ庄太郎、さうではないか。

ト態とそらす。

政右　ヘエイ。

〽何処やら一物歩行の小助。

ト花道より小助足早に出て来り、門口へ来り、

小助　モシ〳〵、庄屋殿から急な御用、ちよつとお出なされませ〳〵。」

幸兵　エヽ又鬪傚りの事であらう、厭と言はれぬ役目の不承、ソレ羽織〳〵。

つや　オイ〳〵。（ト羽織を取つて幸兵衛に着せる。此内淨瑠璃。）

〽嗜む太刀差こなし、葛籠の上に片しの葛籠しつかと乘せて。

ト此内政右衛門おつや捨ゼリフにて足駄を直し傘を出す。

幸兵　コリヤ女房、今も言うた話の蓋戻つて來るまであけぬやう、心に下ろした此錠前、ナ、合點か、庄太郎、往て來て逢はう。

政右　お早うお歸りなされませ。

幸兵　サヽ先へ行きやれ。

〽雪道厭はぬ高足駄、差す傘の骨組も、人に勝れし嚴丈作り、心を殘して出で丶行く。

ト小助先に弓張提灯を持ち案内して、幸兵衛花道へはひる。政右衛門後見送り、

政右　エヽ昔に變らぬお達者な事ではある、イヤモシあなたはお休みなされませぬか。

つや　イヤ〳〵主人の留守に寢られもせまい、仕掛けた糸を紡ぎながら話しませう。

政右　ハテあなたも御上根な、マア火にお當りなされませ、私もこれから下男同然にお使ひなされて下さりませ。

つや　ナンノイナウ、此方様は大事のお客、マア寢轉んで煙草でも喫ふたがよい。

ト言ひながら糸車をわが前へ出す。

政右　イヤ〱勿體ない師匠の家、イヤ煙草と言へば此煙草は。

ト軒に束ねてある煙草にこなし。

つや　そりや主人が旅戻りに貰つてござつた上方煙草ぢや。

政右　ヘエ、それなれば大方服部か國府か、此天氣にからうして置いたら濕りませう、幸ひ爰に切臺もあり、留守にやつて見ませうか。

つや　ア、ナンノ、翌日の事がよからうぞい。

政右　デモ手をつかねてゐようより、ドレ刻んで見ようか。

ト[illegible]道具を出し、煙草の葉を卸し、小箒にて葉の砂を掃いて、葉取りにかゝる。

〽庭に劍の葉搭へ、敵を聞出す煙草の小口、葉卷手早くきり〱と、大きな身體を小廻りの奉公振りも哀れなり。

ト雪おろし順禮唄になり　花道よりお谷綿物そぼろの着付にて、抱子を懐へ入れて、此上へ糸立を纏ひ着て、菅笠をかざし杖を突き、癪の起りし思入にて、雪を凌ぎたど／＼出て來る。

〽外は音せで降る雪に、無慘や肌も郡山の、國に殘りし女房の思ひの種の生れ子を、抱いてはる／＼海山を。

ト此内お谷タド／＼花道よき所まで來り思入あつて、

お谷　思へば浮世の人の身ほど定めないものはない、父さんの横死より夫婦兄弟別れ／＼、敵の行衞白雪の、降るにも何處と當所さへ、非人に劣りし今の境涯、もう何時であらうか知らん、何處ぞ爰らに陰を求めて、アイタヽヽヽ、折惡い此癪わいの。

〽辿り／＼て岡崎の、宿より先に日は暮れて、何處を宿と定めなく、がばとこければわつと泣く、子を賺す手も冷え凍る。

トお谷轉ぶ事。赤子泣く事などあつて、藪の傍へ來り、

〽雪の蒲團に添乳の枕、いんのこ／＼に、友誘ふ犬の聲々に夜廻りの、番が見付ける小提灯。

ト お谷此内糸立を敷き、其上にて子をいぶりつけてゐる。よき程に花道より夜廻り、ばつちよう笠を冠り、割竹と岡崎宿と記せし提灯を提げ出て來る。内には政右衛門葉巻をして煙草を刻みにかゝる。おつやは糸を取つてゐる。此内始終犬の啼聲あつて、雪おろしをあしらふ。日覆より雪を所々へ降らす事。夜廻りは出て來り。

夜廻 火の廻り／＼＼／＼。(ト夜廻り舞臺へ來り、お谷を見付け、) ヤイ／＼、何故其處に寢るのだ、置く事はならない、キリ／＼と行け／＼。

ト割竹を打散らしキツト叱りつける。お谷思入あつて。

お谷 ハイ／＼／＼私は秩父坂東を廻る順禮でござりまする、癪でお腹を痛めました、ちやつとの間、どうぞ爰を。

夜廻 イヤ／＼／＼、順禮でも幽靈でも在の内に寢かす事はならぬ／＼。

お谷 左樣でござりませうが、どうぞ後生でござりまする。

夜廻 ウヌ性の剛い女郎だ、キリ／＼／＼失せぬと割竹だぞ。

〽提灯突付けよく／＼見て、爪はづれの尋常さ、睨んだ眼うつとりと、細目にあける戸の隙間、内から覗く夫婦の縁、思掛けなき女房お谷。

ト此内政右衛門夜廻りの聲に、何事かと戸を少しあけお谷を見て、

〽はつとびつくり顏見合せ、包むわが名の顯はれ口、惡い所へ切りかけた煙草の刃金、胸を刻むと人知らず。

ト政右衛門夜廻りの方を見て思入あつて門口を締切り、切臺にかゝつて煙草を刻む。此内夜廻りお谷に思入あつて、

夜廻　から見た所が、小盜みもするやうな風體とも見えぬ、此雪に乳呑兒抱へて、ア、難儀な事であらうナ、どこぞ後生氣な所を頼んで泊めて貰はつしやれ、ほんに見れば見るほど好い標緻な女順禮、獨り寢かすは惜しいものぢや、此方も此節むすこが病氣で、精進日に魚貰うたやうで、可惜もののぢやが喰はれぬわい。

〽呟き歸る頼みなき、人の詞も切めての頼み、灯影を力に戸口に匍ひ寄り。

ト此内夜番火の用心といひながら花道へはひる。お谷は癪を押へながら門口へ匍ひ寄つて、

お谷　幼い者を連れました順禮でござりまする、お侍に今宵一夜さ、どうぞお庭の端になと。

〽お庭の端にとばかりにて、癪に苦しむ息切れの、聲に主は涙脆く。

ト内にて母おつやこれを聞いて、

つや　アレ、女の聲で順禮とやら、さうして愛しや癪持さうな、此雪に門口に寢てはたまるまい、ドレ／＼泊めて進ぜませう。

ト立つて行きかけるを、政右衛門南無三寶と止めて、

政右　ア、モシ／＼、これは又どうしたもの、此お觸れの嚴しいのに、殊にはお役柄の此家へ、何處の者やら知れもせぬに、滅多無性に引入れて、モシ何ぞあつた時にはどうなされます、アア止しになされませ／＼。

つや　デモ女子の事なら氣遣ひも。

政右　イヤサ其女の癖に夜々中一人歩くやうな奴、碌な者ぢやござりませぬ、戸をあけずと、其儘追遣つたがようござります。

つや　いかさまなう、幸兵衛殿の留守の用心が肝心ぢやの。

政右　左様でござりまする。（ト母戸の傍へ來り内より、）

つや　コレ／＼順禮殿、いとしけれども、一人旅を泊めるは强い御法度、迚も城下の内は軒下にも寢る事はなるまい程に、そろ／＼と此野端れの森の内へ寢さつしやれや、ア、ほんに可哀想に。

〽口柔かに言うて引出す糸車

ト又母糸車にかゝる事。

〽來いと言たとて行かれる道か、道は四十五里波の上

ト政右衞門は表へ聞耳立てゝ思入、お谷も此内思入あつて、

お谷　ハヽア何處へ行つても一人旅は泊めて奥れうやうもなし、遙々の海山も此子の顏を旦那殿に見せたいと思ふ精力で産み落すから此巳之介、やう〳〵忌日もあくやあかず、國を出てからつい一夜さ、家の内で寢た事がなけりや身は習はしと、山寺の鐘が鳴れば寢る事にして、星の光りを燈火と思うて寢入れど今夜の寒さ、氷のやうな此肌で、寢苦しいは道理ぢやわいの、其上寢で乳は張らず、雪に凍え雨に打たるゝ辛さは骨身にこたゆれど、旦那殿や弟が敵を尋ぬる辛勞は、まだ〳〵こんな事ではあるまいと、その艱難に較べては、雪は愚か劍の上にも、寢るのが切めて女房の役と、氣は張詰めても此癪の重るにつけ二人の身に若し勞れの病は出はせぬか、ひよつと悲しい便やなど聞いたら何と思ひませうぞいなう、身も世もあられぬ遣瀨なさ、お頼み申すは觀音樣や、夫や弟の武運長久、我子の命息災にあらう事なら私も、此子を夫へ無事に渡すまで、どうぞ死にたうござりませぬ、生きて夫や弟に。（ト思入あつて、）とい

ふ内も此瘠で、アヽ死にともない〳〵。

ト お谷瘠に苦しむこなしよろしく。

へ傍に夫のあるぞとも、知らぬ不便さ喰ひしばる、喉に熱湯内外に水火の責苦、雪霙、子を濡らさじと抱締め〳〵、天道哀れを白雪の、積り重なる瘠疲れ、瘠と寒氣に閉ぢられて

ト お谷苦しむ事いろ〳〵あつて、アッと倒れる。赤子泣く。

へあつと一聲氣を失ひ、どうと倒るゝ物音に、耳にこたへて。

ト 政右衛門是に一涙を催しゐて、此音にハッと思入。

へ南無阿彌陀佛〳〵〳〵〳〵〳〵と口の内。

ト 目を閉ぢてこなし。おつやこの内思入あつて、

つや ハテ、今の音は何であらうぞ。(ト共儘立つて戸をあける。)

へ戸を引あくれば、ばつたりと、身は濡れ鷺の目はどゝふたり。

ト 戸に倒れかゝりしお谷ばつたりと戸の内へ倒れる。おつや驚き、

オヽコリヤ眩暈が來たのぢやないか、エヽ可憐しい。コレ庄太郎、どうせう〳〵。

トおつやうろたへ介抱する。政右衛門ぢつと怺へる。

オヽ幸ひ氣付が。

トとつかは文庫より氣付を出し、政右衛門思入。

政右　アヽモシ〳〵、そりや御無用になされませ〳〵。

つや　何故々々、こりや主が道中で持たしやつた結構な氣付ぢや。

政右　サア其結構な氣付を非人同然の者に服まして、それでも氣の付かぬ時は掛り合になりまするぞ。

つや　ヤ。（ト赤子しきりに泣く。）

政右　サ、それぢやによつて此儘にして、表へ抛し出すがようござりまする。

つや　ぢやというてどう見捨てゝ、アレ可愛や乳を搜して泣くわいの、オヽそれならせめて子なりとも殺さぬやうに、奥の炬燵で温めてやりませう。

政右　そりや大事もござりますまい。

つや　そんならドレ〳〵、ヤレ〳〵可愛や。

〽風に當てじと寢卷の襦袢、あかの他人は慈悲深く、比翼と交はす女房を、むごう引出す戸を引立て。

ト此内おつや抱子を取上げ、いぶり付けながら奥へはひる。政右衛門お谷むごく表へ引出して戸を締める。此内おつやは奥へはひるを見て思入。かすめて時の鐘。

〽奥口見廻し差足し、勝手は見置く釜の前、附木の明り見咎めて、人に付こかい、柴を、そつと隠して門の口、伏したる妻に氣を付ける、柴の焚火の煙が身に、嚙みしめる齒を押割つて、雪に潤す氣付の一滴、耳に口寄せ聲微か。

ト此内政右衛門いろ〳〵あつて、柴に火を移し、お谷を抱き上げて藥を呑ませる。

政右　お谷やーい。（ト思入し）

〽といふも憚りて、心の中で呼活ける、夫の誠通じてや。

トお谷ウンと心付きしこなし。

コリヤ氣が付いたか女房共。（トお谷政右衛門を見て。）

お谷　ヤア政右衛門殿かいなア。

政右　コリヤ。（ト政右衛門お谷の口に手を當て思入。）何にも言ふな、敵の在所手掛りに取付いたぞ。

お谷　スリヤ、アノ敵が。

政右　コリヤ、此家の內へ身共が名を氣ぶりにでも、知らされぬ大事の所、其方がゐては大望の妨げ、苦しくとも爰を怺へて一町南の辻堂まで、どうなりとして行つて呉れ、コレ、吉左右を知らすまで、氣をしつかりと張詰めて、必ず死ぬるな。

お谷　アイ、アイ。

政右　サヽ早く行け〳〵。

〽夫の詞は千人力、

お谷　觀音様のお引合せ、お前に逢うたは人參熊の膽、もう死ぬ事ぢやござんせぬ、エ、有難い、有難いが、坊は何處へ。（トお谷あたりを尋ねる。）

政右　氣遣ひするな、坊主は奥へ寢さして置いた。アレ〳〵、向うへ來る提灯に見付けられるわ、早く〳〵。

〽早う〳〵とせり立つれど、此年月の悲しさと、嬉しさこうじて足立たず、杖

を力に立ちかぬる。

トお谷いろ／＼ある。政右衛門焦つて杖など持たせ引立てると、お谷又倒れる事。此内花道より幸兵衛提灯を提げ出て来る。政右衛門思入。

〽兎や詮側にぬぎ捨てし、菰に積りし雪の儘、着せて人目も闇の夜を、ぼかし／＼戻る達者親父。

ト政右衛門有合ふ以前の糸立をお谷に打掛け心遣ひ、此内に幸兵衛直に舞臺へ来り、政右衛門と顔見合せる。

政右　オヽお歸りでござりまするか。

幸兵　ホヽオ庄太郎か、寒いに門に何してゐる。

政右　アイヤお歸りが遅いゆゑ、お迎ひに参る所。

トお谷の身體を見えぬやうにしてこなし。

幸兵　ナンノ迎ひに及ぶものぞ、ムヽ、こりや門口に柴の餘燼、又非人共が柴であらう、アヽ無用心な。

〽と見廻す提灯。

政右　イエ私が。(ト政右衞門提灯を取るはずみに、態と提灯を取落し消す。)これは粗相を。

幸兵　大事ないく、今も風ですんでの事、道で取られうとした所、まだよい所で火が消えたわい。

〽言ふもこたへる疵持つ足、天氣も大方上り口、庭から足拭く下駄直す、師匠思ひの機嫌顏。

ト此内幸兵衞二重へ住ふ。

イヤ世に馴染ほど結構なものはない、久しく逢はぬことなれど、ちつとも心に變りはない、是からゆるりと夜と共話さう、シテいよく最前頼んだ事違變はないな。

政右　これはお師匠とも覺えぬ諄いお尋ね、一旦頼まれし拙者が性根、覺束なうも思召さば、なまくらでない魂をば唯今金打。

ト政右衞門刀に手をかけるを幸兵衞ちやつと止め、

幸兵　ア、コレ、ナンノそれに及ぶ事。

政右　イヤ及ばぬと仰言つても、お恨みなさる本人の股五郎殿の在所をば、御存じないと仰言るは、師匠の詞に鞘があると存じられ、頼まれるに力がない、ナント左樣ぢやござりませぬか。

〽探る心の奥より女房。

ト おつや抱子をかゝえ走り出て、

つや　コレ〳〵親父殿、最前爰へ行倒れの女順禮が抱いてゐた此乳呑兒、可哀想と炬燵に溫め、今肌をあけて見れば守りの內に此の書附。「和州郡山唐木政右衞門悴巳之介。」と書いてあるわい。

ト 政右衞門ぎつくり、

幸兵　ヤア。(ト立寄りてよく〳〵見て。) シヤアよいものが手に入つたぞ、敵の種の此小悴、人質に取つて置けば此方に六分の強み、敵に八分の弱みあり、ソレ股五郎殿の運の強さ、其儘鬼隨分大事にかけ、乳母を取つて育てるが計略の奥の手、それすり粉でもちやつと〳〵。

ト おつやを追立てるやうに言ふ。政右衞門此時ツカ〳〵と行つて抱子を引取り、直に小柄にて抱子の吭笛をグツと刺通す。幸兵衞おつやもオ、と驚き、

幸兵　コリヤ庄太郎、大事の人質。

つや　何故殺した。(ト兩人キツと思入。)

政右　ハ、、、、、、此悴を留置いて、敵の鉾先挫かうと思召す先生の御思案、チトお手加減が戻りました。

幸兵　ム、。（ト幸兵衛政右衛門へ思入。）
政右　武士と武士との晴れ業に人質取つて勝負する、臆病卑怯と後々まで、人の嘲り笑ひ草、少分ながら股五郎殿のお力になる此庄太郎、人質便りに仕らぬ、目指す相手の政右衛門とやら言ふ奴、其片割れの此小悴、まツ此如く血祭りに刺し殺したが、頼まれし拙者が金打、へ、、、先生御覧下されしナ。
　へ死骸を庭に投げ捨てたり。（ト幸兵衛手を打つて。）
幸兵　ハ、ア尤、其大丈夫な魂を見屆けたれば、何を隱さう、股五郎は先刻より奥へ來てゐるわえ。
政右　ヤ。
幸兵　コレ婆も聟殿起して、股五郎の片腕になる頼母しい人が來たというて、ちやつと爰へ同道せい。
つや　合點ぢや、聟殿呼んで來う。（ト上手屋體へはひる。政右衛門思入あつて。）
政右　スリヤ股五郎殿は此家に、ム、、シテ伴れの衆でも。
幸兵　イヤ〳〵供もなく唯た一人、奥底なう話すがよい。
政右　ヘエ、イ。

〽打あけ語るは思ふ壺、何條知れたる股五郎、手取りにするは易かりなんと、手ぐすね引いて待つ大膽、志津馬は女房が案内に、股五郎が片腕とは何奴なりとも唯一討と、鯉口寛げ居合腰。

ト此内上手屋體の障子を引きあける。おつや捨ゼリフ、志津馬は刀の目釘をしめし身構へしてこなし。

〽氣配り目配り互ひにきつと。

ト政右衛門志津馬互ひにキツとこなし。顏見合はせ。

志津　ヤ、そちは。

政右　此方は。

志津　ホウ。

〽一度に仰天、幸兵衛むんずと居直り。

ト幸兵衛はどつかと眞中に坐して、

幸兵　唐木政右衛門和田志津馬、不思議の對面、滿足であらうがナ。

〽先かけられし二人より、思掛けなき女房が心どきまぎ不審顏。

ト思入。此のうち外のお谷は心付き思入。

トおつやヤアと驚く。政右衞門志津馬思入。

ナント老人の目利、よもや違ひはせまいがナ。（ト思入あつて。）今宵澤井股五郎と名告つて來る年輩恰好、聞及びしとは拔群の相違、扨は却つて附狙ふ志津馬か、但し餘類の者か、肌ゆるさせて詮議せんと、態と一杯喰うた顏三寸俎板で見拔いたれど、我が弟子の庄太郎が政右衞門といふ事を知つたるは漸く唯た今、骨柄といひ手練といひ、天晴股五郎が片腕にせんものと、賴めば早速承知しながら、股五郎が在所を根を挿して聞きたがるは、シヤ心得ずと思ひしが、子を一抉りに刺し殺し、立派に言放した目の内に、一滴浮む涙の色、隱しても隱されぬ肉親の恩愛に、始めてそれと悟りしぞよ、澤井にさせる恩はなけれど、娘お袖を城五郎方へ奉公に遣つた時、筋目ある人の娘、末々は我が一家股五郎と妻せん、オ、いかにもお賴み申すとつい言つた一言が、今更引かれぬ因果の緣、其後娘は奉公退いて歸りしかど、今落目になつた股五郎、見放されぬは侍の義理、隱匿ふ幸兵衞狙ふは我が弟子、惡人に與して吳れと賴むに退かず、現在我子を一思ひに殺したは、劍術無双の政右衞門手ほどきの此師匠への言譯、さりとては過分ならずや、其志に感じ入り敵の肩持片意地も、最早是限り唯の百姓、町人も侍も、變らぬものは子の可愛さ。

ト おつやは是を見て、

つや　サア此方は男の諦めもあらうが、思ひ合はすはチラリと見た、順禮の母親の心が察しやらるゝわい。

〽悔めば門に堪へかねて、わつと泣く聲内よりも、あける戸直ぐに轉び入り、
敢なき死骸を抱き上げ、

ト 椽へゐたりしお谷、此時走り入り、死骸を抱取り、

お谷　コレ巳の介、物言うてたも、母ぢやわいの〱、昨夜までも今朝までも、憂い辛い其中に、もつちやうしたり、這盡し、父御に似た顔見せて、自慢せうと樂しんだもの、逢ふと其儘刺殺す酷たらしい父さんを、恨むにも恨まれぬ、前世にどんな罪をして、侍の子には生れしぞ、こんな事なら先刻の時、わしが死んだら此悲しみは見まいもの、佛のお慈悲あるならば、今一度生かへつて乳呑んでたもひなう。

〽庭に轉びつ這ひ廻り、抱締めたる我が身も、雪と消ゆべき風情なり。

政右　ヤア忰が死んだ故にこそ、實父の敵の行衞もそれと。

志津　いかさま。(ト思入あつて、)察しの通り某こそ和田志津馬、迚もの事に敵の在所を。

幸兵　何が扨此方に隱しはせぬ、有りやうは此幸兵衞、最前庄屋へ呼ばれた時、股五郎に逢うて來た。

志津　スリヤ敵は庄屋方に、ソレ。

ト志津馬刀を押取り、其儘駈け出す。

政右　ヤレ待て志津馬愚か〳〵、我々爰にありと聞き暫時も此地に足を留めうか、はや五六里行過ぎてモウ此邊りに敵はゐぬ、猶行先も用心して街道筋はよも行くまい、道をかへて落ちたと見える。(ト思入あつて、)親父樣ナント左樣でござらうな。

幸兵　シタリ黑星其通り、迚も非道の股五郎、天道の御罸にてどうで討たるゝものなれども、此岡崎にて勝負さすれば肩持たねばならぬ幸兵衞、藥師堂の山越えに中仙道へ落したは、城五郎殿の緣も是まで、思はぬ手立が緣になり、志津馬殿と言交はした娘が身の果、ナウお婆。

つや　サア悅んでした祝言が、ひよんな事やら不便やら、(ト此時奥にて、)

お袖　其色直しの晴れ小袖、似合うたか見て下さんせ。

ト合方になり、奥よりお袖、切髮白き振袖の肌を脫ぎかけ、袈裟をかけ、水晶の珠數を持つて出て來る。

志津　ヤ、その姿は。

幸兵　オヽ出來した〳〵、惡人の股五郎に假にも女房と名の付いた、其間違ひが其方が不運。

つや　可愛や盛りの黑髮を、ようマア思ひ。

お袖　アヽモシ、もう何にも申しませぬ、顏は見ねども許婚の男持つのがうるさゝに、屋敷を戻つて其時から、尼になる氣で袈裟衣、今日一日に氣が變り、染違うたる鐵漿つきも、元の白齒と墨染に、染直しても剃しても、思染めたる煩惱の心がとけぬ佛樣、お許しなされて下さりませ。

へお許されてと身を背け、泣かぬ氣を泣く親心。

ト幸兵衛もおつやも思入。此内政右衛門も愁ひのこなし。

政右　股五郎にも志津馬にも緣を離れよお袖道心、袖振り合ふも他生の緣。

ト お袖へこなし、

お谷　ほんに丁度子に別れた、此順禮に菩提の道伴れ。

幸兵　それは〳〵幸ひ關役人のわが娘、關所々々も切手いらず、中仙道への案内者。

志津　イザ此上は直樣に。

政右　オヽサ、後よりぼつ付き敵討。

お谷　サア道の案内を。

お袖　父さん母さん。（ト共々に立上り、）
つや　ヤレ一度は迷ひし色の道。
幸兵　未來の契り鉦撞木。
　〽涙で渡す父母の、惠みも深き觀世音。
　　ト幸兵衛鉦撞木をお袖に渡す。おつや抱子の死骸を抱き上げ、皆々愁ひのこなし。
皆々　南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。
　〽わが子は冥土の道しるべ。
　　トお袖先にお谷志津馬門口へ出かける。
政右　然らば先生。（ト辭儀して續いて出ようとする。）
幸兵　イヤ師弟は內證。
志津　敵同志。
幸兵　此儘歸るは卑怯者。
　〽返せと一聲斬付けるを、丁と受けたる半蓋の、下荷ほぐれて飛出す眼八。

ト政右衛門有合ふ明荷にて受止める。其間に下の明荷より以前の眼八出て、

眼八　政右衛門志津馬此通りを。

ト引出すを隙さず政右衛門引捉へる。又斬つて來る幸兵衛に突付ける。幸兵衛眼八を袈裟に斬る。お袖是を見て、

お袖　ヤアこりやアノ眼八を。

幸兵　まツ此通りに。（ト顎にて向うへこなし。）

志津
お谷
お袖　股五郎を。

政右　ア丶コレ。

ト制すはずみに手を離す。眼八バツタリ。是と一時に政右衛門下にゐるをチョンと木の頭。

まだお手の内は、狂ひませぬわえ。

ト幸兵衛へ思入。幸兵衛につたり思入。皆々も思入よろしく。

ひやうし　幕

大詰　敵討の場

役名　唐木政右衛門、和田志津馬、澤井股五郎、櫻井林左衛門、柘榴武介、海田一角、白子の勘六、池添孫八、仕出し等。

本舞臺三間の間一面の松並木、上下藪畳。松の釣枝。すべて伊賀の上野街道の體。時の鐘、鶏笛、馬士唄にてよろしく幕あく。トやはり右の鳴物にて花道と下座より口々より、旅人の仕出し、思ひ思ひ大勢出て、入れ違ひはひる。花道より雲介二人莫蓙包みの長持を擔ぎ、後より雲介一人、糸立包みの槍を大分擔ぎ、其後より又一人雨掛け荷物を擔ぎ、いづれも荷物に「相良荷物」と記せし荷札を打付けある。是に二人待にて中間二人皆々捨ゼリフにて舞臺へ來り、いづれも息杖を入れて立休む事あつて。

雲○　ナント皆んなや、昨夜伏見の白木屋へお泊りの此荷物の旦那衆は、强い大持てだノ。

雲×　ソレ〳〵、あのやうに錢を費つて道中したら面白からう。

雲△　しかし合點が行かぬは、九州の相良へござるに、此伊賀越へかゝらつしやるは。

侍　それはかうぢや。本當は大阪へかゝるが順道なれど、差合があるゆゑ、志州鳥羽からお船ぢやテ。

雲□　それはひどい船廻しだノ。

侍　物言はずと急げ〳〵。

皆々　合點だ〳〵。

ト右の鳴物にて此人數上手へはひる。矢張り右の鳴物にて、唐木政右衛門野袴ぶつさき大小のこしらへ、志津馬も同じこしらへにて、此後より武介孫八下郎のこしらへ一本差にて、いづれも旅なりにて出て、直に舞臺へ來り、

政右　唯今の先供は敵の荷物、大阪へ出られては手廣にして難儀ゆゑ、某聊か計略を廻し見る所、案の如く昨夜伏見泊りより鳥羽へ赴かんと、此伊賀驛へかゝる上は、最早手に入る袋の鼠。

志津　多年の本懐達するは今此時、假令股五郎天地に隱るゝ術ありとも。

武介　數ならねども拓榴武介。

孫八　池添孫八、我々が太刀と命のつゞかんだけ。

武介　豫て期したる今日唯今。

孫八　斬つて斬死、御用意々々々。」

政右　ヤア仰々しい、豫て股五郎には數多附人あれば、孫八武介は我々に介意はず、志津馬に附添ひ、邪魔する奴等を切拂ひ、股五郎と心よく勝負せよ、目指す敵は唯一人、假令助太刀何百何千ありとても、何程の事あらん、安堵おしやれ。

ト此時揚幕にて長持唄聞える。皆々是を聞いて、

武介
孫八　ヤヽ、あの同勢は。

志津　正しく敵の。

ト三人キツとなる。

政右　ヤレ早まるな、心靜かに用意々々々。」

三人　心得ました。

ト政右衞門制して四人とも下手へはひる。馬士唄風の音になり、花道より櫻井林左衞門、野袴ぶつさき羽織大小、旅なりにて、つゞら馬に乗り是を馬士口を取り、後より股五郎馬乗り、同じきこしらへ。白子の勘ぞぼろのなり、槍持奴旅なりにて二人、若黨四人旅なりにて、いづれも出て來り、花道にて、

股五　林左衛門殿は格別、諸士の方々、永の道中お見送りの段、忝う存じまする。

林左　豫ては昨夜の伏見泊りより大阪へ出るが順道なれど、彼の奴等が網を張つてゐるであらう故、恐れはなけれど七面倒さ、引違へて鳥羽より乘船致せば、政右衛門に泡吹かせるが一興ならん。

一角　何さ〳〵、其心遣ひをさせまい爲、同列衆と言合はせ、此海田一角見送りの爲附添へば、チト政右衛門志津馬めに出會うて見たい。

勘六　殿樣、物言ひが糾紛なら、どの街道でも通りものゝ馬士だ、大丈夫に思つて乘つて行かつしやい。

馬○　旦那方の肩を持つて働きを見せたうござんす。

馬×　下さまと姿を窶して我々も。

馬△　一流を極めし途中の警固。

侍四人　お氣遣ひはござりませぬ。

股五　いかさま賴母しき御方々、是も偏へに海田のお蔭。

一角　お禮は相良で、サヽ急ぎませう〳〵。

ト右の鳴物にて皆々本舞臺へ來る、下座より以前の志津馬政右衞門武介孫八、いづれも敵討のこしらへになり出て、立塞がり、

志津　ヤア、是へ來るは澤井股五郎と見るは僻目か、先年汝が手にかけし和田行家が一子志津馬。

孫八　同じく家來拓榴武介。

武介　池添孫八。

志津　先刻より待受けたり、サア尋常に。

三人　勝負致せ。

股五　ヤ、、、大阪と思ひし汝等が。

林左　スリヤ騙られたか。

兩人　口惜しい。

ト附添ふ敵方の皆々キツトとなし。

政右　ホ、オ久しや櫻井林左衞門、此處へおびき出したは某が計略、郡山にて僞りの勝を讓りしも、誠の勝負を今日に決するの胸中、サア覺悟致せ。

股五　かくなる上は是非に及ばぬ。

林左　警固のいづれも。

皆々　心得ました。

志津
武介
孫八　何を小癪な。

ト股五郎林左衛門馬より飛下り、直にどん〳〵になり奴が持ちし槍を取つて突掛ける。皆々入亂れに戰ひになる。志津馬は股五郎と立廻りながら下手へはひる。政右衛門大勢を下手へ立廻りながら追込む。武介は馬士方雲助などを相手にして立廻りちよつとあつて、此人數を花道へ追込みはひる。トド孫八は若黨中間、大太鼓入りの鳴物にて好みの立廻りあるべし、トヾ此人數を双方へ切散らし行きかける。後より勘八打つてかゝるを、孫八心得て早き立廻りにて勘八を切倒し、孫八此上へ馬乘りにてとゞめを刺す。孫八上手へはひる、ドン〳〵ーにて松の木を上下へ引いて取り、黒幕を切つて落す。

本舞臺三間の間上野の入口。喰違ひの土手。誂への通り後ろ黒幕。松の立木。釣枝。此道具よろしく、ここに政右衛門、以前の四人の侍槍襖にて取卷きゐる。上の方に林左衛門身ごしらへして詰めかけてゐる見得。どん〳〵にて道具納まる。

林左　政右衛門一人討取れば、後の奴らは氣遣ひない、倒け〳〵。

政右　何を小癪な。

ト槍をはねる。又突きかけるを政右衛門始終無刀のあしらひ、どつこいと好みの鳴物になり、四人傷を負ひ倒れる。林左衛門隙さず槍にて突きかけるを政右衛門槍を奪ひ取り捨てる。林左衛門刀を抜いて斬付けるをちよつと立廻り、此刀を取つて林左衛門を斬倒す。又四人は起上りてかゝるを政右衛門是を追ひ下手へはひる。どん〳〵のあしらひ、チヨン〳〵と正面の黒幕を切つて落す。

本舞臺一面の打拔城の遠見。上下の前通りは以前の喰違ひ、松並木土手は殘りある。好みの通りどんどんにて納る。ト直に鳴物カケリになり、股五郎志津馬以前の儘立廻りながら揚幕より出て、花道にてちよつと立廻りあつて止まり、

志津　ヤア卑怯なり股五郎、何處へ迯げるとものがさんや。

股五　卑怯とは事可笑しや、返り討だア、觀念なせ。

ト又切結びながら舞臺へ來り、鳴物變つて立廻りあつて、どつこいと留ると、下手より政右衛門を先に孫八武介拔身を提け走り出て來り、

政右　加勢は殘らず討取つたり、殘るは其奴唯一人、心勇んで、

孫八
武介　勝負〳〵。

ト三人詰めかける。是にて股五郎ひるむ。志津馬つけ入り烈しくあつて、トゞ股五郎を一とかせ斬付ける。是にて武介孫八も一とかせづゝ斬付ける。トゞ三人股五郎が腹へ突込みキツと見得。政右衛門詰寄りゐる。

志津　父の敵。

政右　舅の仇。

武介
孫八　主人の恨。

四人　思ひ知つたか。

ト四人して股五郎を斬倒し、のしかゝつてとゞめを刺す事。

政右　今ぞ本望。目出たい〳〵。

ト双方ともよろしき見得。正面より日の出を差出す。一聲風の音。鷄笛にて。

先づ今日はこれ限り。

目出度く打出し

伊賀越道中雙六（終り）

大正十五年七月七日印刷
大正十五年七月十日發行

『時代狂言傑作集』第五卷
定價金參圓

檢印

編集者　河竹繁俊
　　　　濱村米藏
　　　　渥美清太郎

發行者　和田利彦
東京市日本橋區通四丁目五番地

印刷者　瀧澤一郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　株式會社秀英舍
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所　春陽堂
東京市日本橋區通四丁目五番地
（電話大手五一、四二一〇番）
（振替東京一六一一七番）